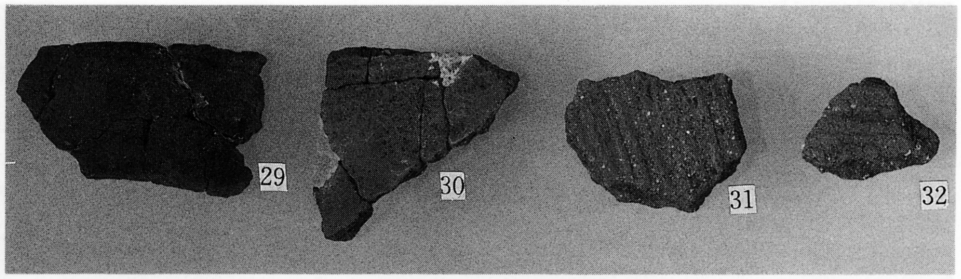
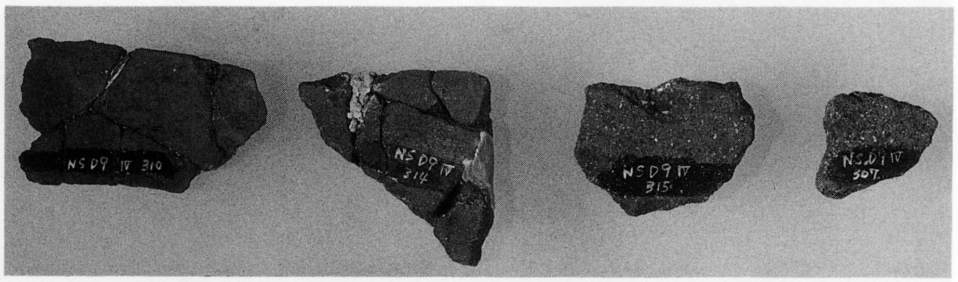
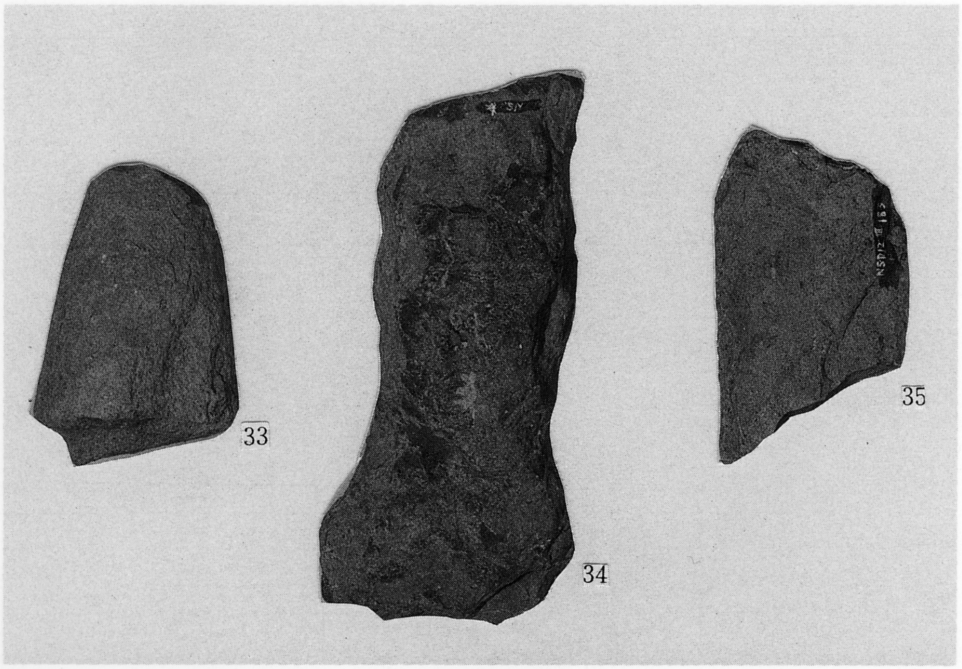




１．縄文土器（Ⅵ層）

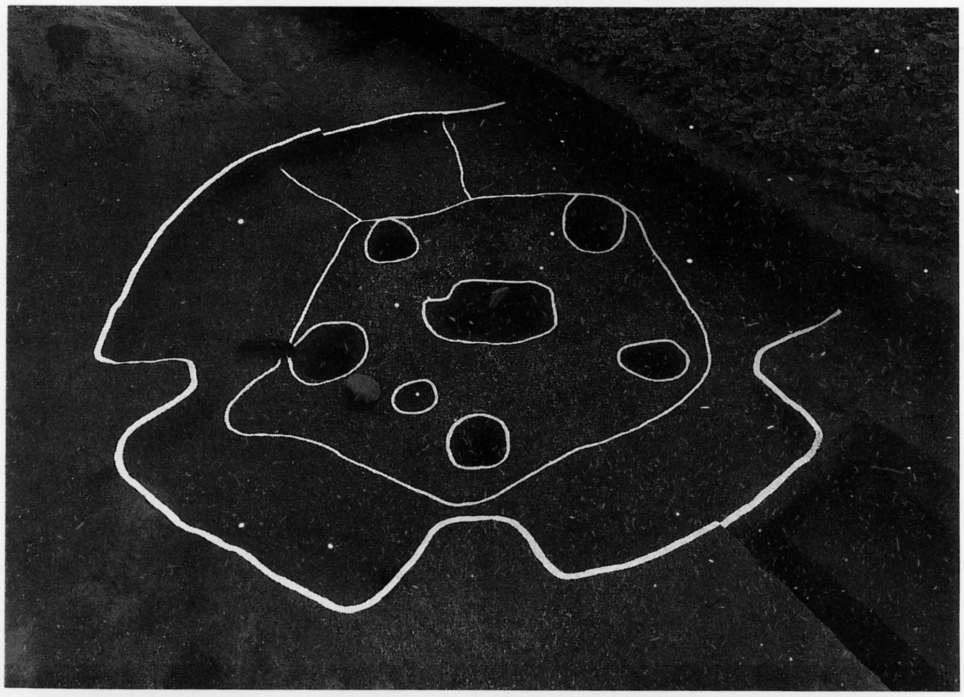


２．石器（Ⅵ層）

図版６

１．１号住居址掘り下げ状況（北西から）

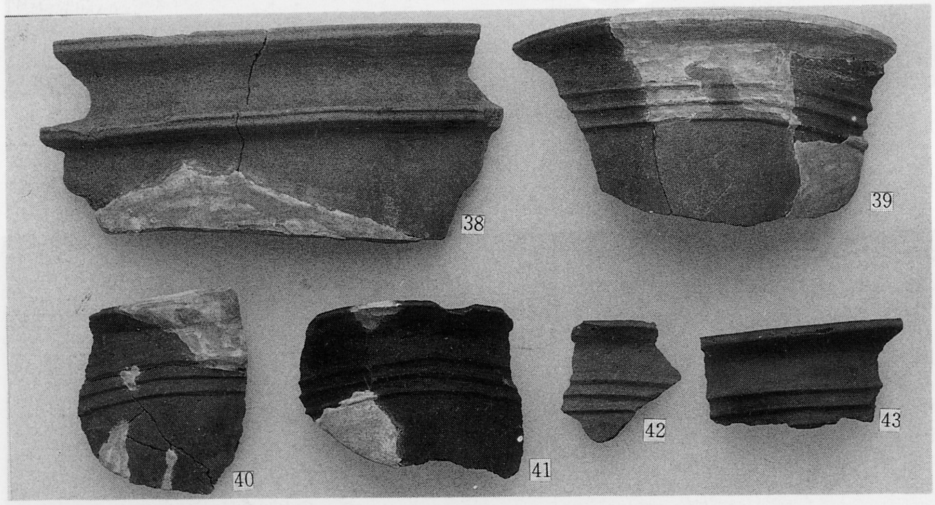
２．１号住居址遺物出土状況（北から）



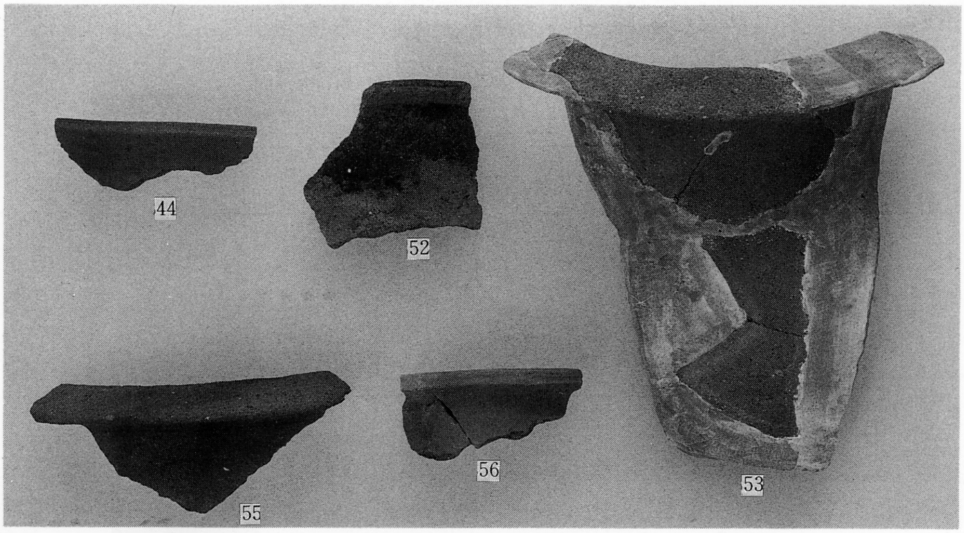
１．１号住居址全景（北から）

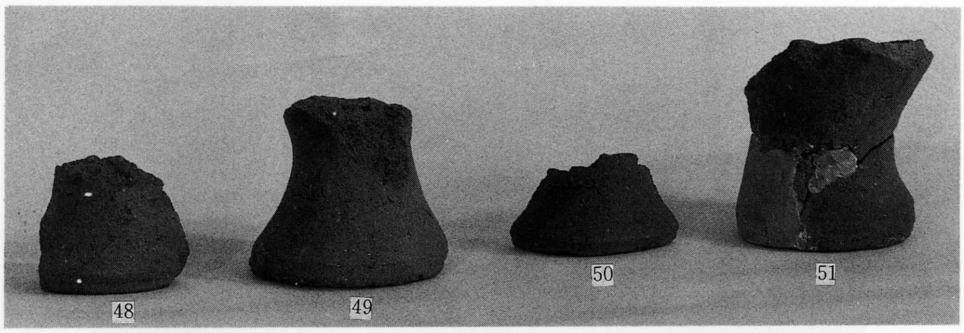
２．１号住居址全景（北から）

図版８



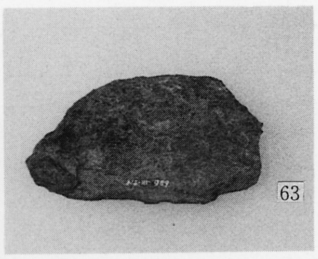
１．１号住居址出土遺物（１）

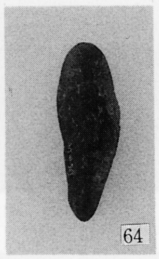


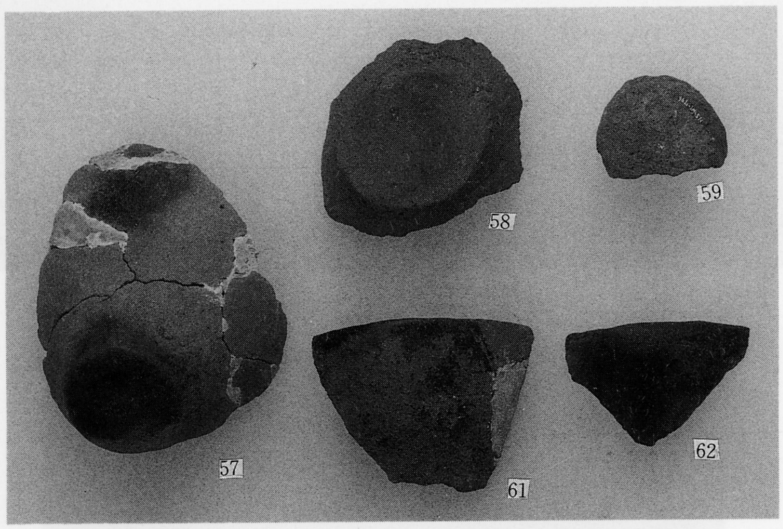


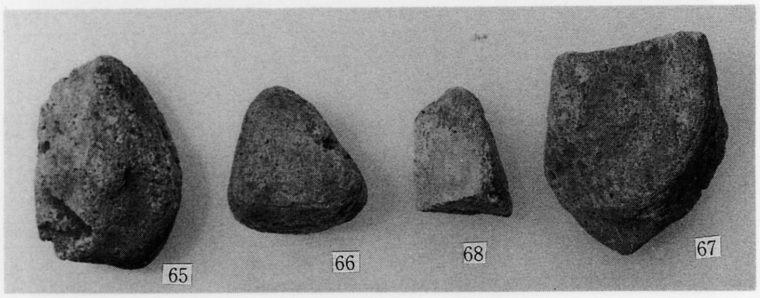
１．１号住居址出土遺物（２）

図版10

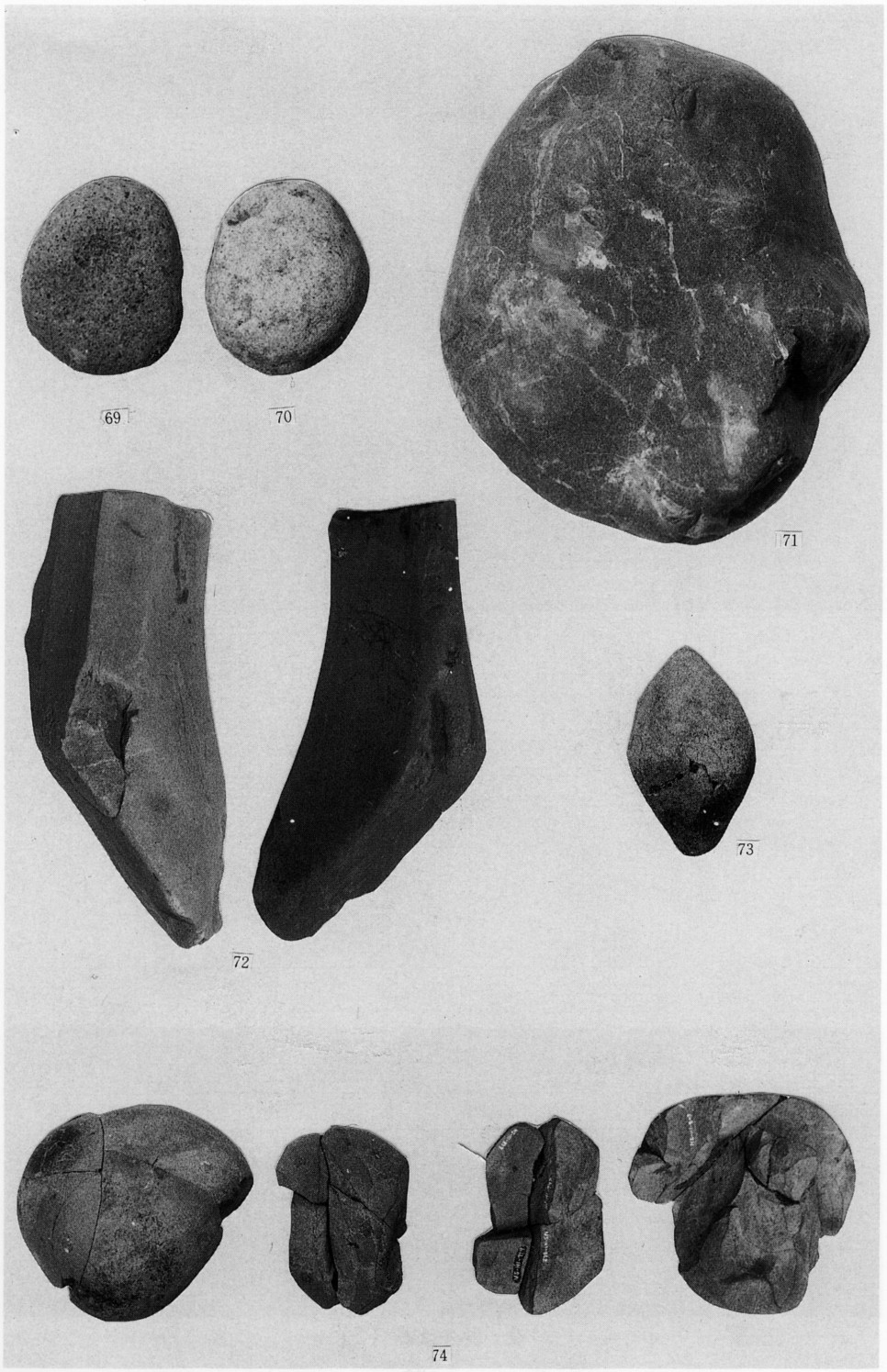




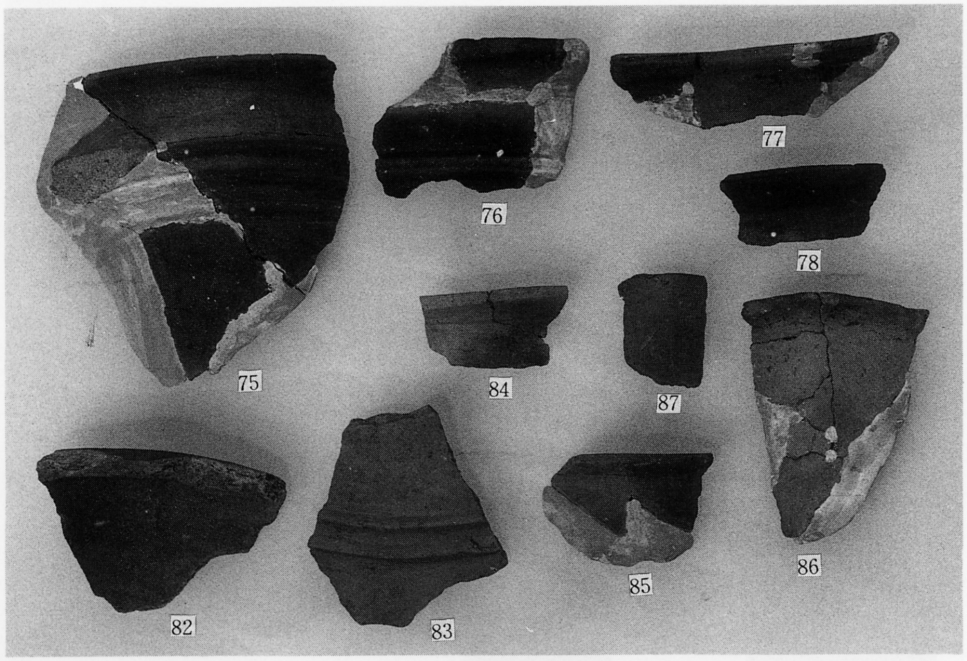




1．1号住居址出土遺物（3）



1．1号住居址出土遺物（4）



1．弥生土器（1）

2．弥生土器（2）

西原掩体壕跡

例　　言

1．　この報告書は、一般国道２２０号鹿屋バイパス建設に伴う大浦・郷之原地区の「西原掩体壕跡」の発掘調査報告書である。

2．　この報告書は、鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（52）の第５分冊である。

3．　西原掩体壕跡は、鹿屋市郷之原町（旧字名中原山野及び前畑）に所在する。

4．　発掘調査は、建設省九州建設局大隅工事事務所からの受託事業として鹿児島県教育委員会が実施した。

5．　発掘調査は、昭和62年６月15日～昭和63年３月９日と昭和63年４月27日～８月31日の間に実施した。整理作業は、平成元年度に実施した。

6．　発振調査に当たっては、鹿屋市教育委員会や大浦町内会の協力・援助を得た。

7．　本書で用いたレベル数値は、すべて海抜高である。

8．　弾薬については、陸上自衛隊第８師団司令部大崎修次郎氏に、名札については熊本県多良木町教育委員会宮ケ野實氏に教示を得た。

9．　現地調査に関する実測及び写真撮影は、調査担当者（新東晃一・前迫亮一）で行った。

10．　出土遺物の実測・製図は知花一正・中村耕治・新東が行ない、本書の執筆は、新東が担当した。

11．　本書の編集は、鹿児島県教育庁文化課で行い、新東がこれを担当した。

本　文　目　次

第Ⅰ章　調査の概要……1

第1節　字図と郷之原の古絵図……1

第Ⅱ章　戦跡遺構……6

第1節　戦跡遺構の概要……6
第2節　掩体壕跡……6
第3節　誘導路跡……10

第Ⅲ章　出土遺跡……14

第1節　戦時品……14
第2節　遺品……16
第3節　生活品……16

第Ⅳ章　発掘調査のまとめ……24

挿　図　目　次

第１図　大浦・郷之浦地区の字地図（昭和63年１月現在　鹿屋市役所）…… 2
第２図　西原掩体壕及び誘導路配置図（昭和18年８月　原田盛雄氏作成）…… 3
第３図　郷之原地区の軍隊配置図（昭和20年１月　原田盛雄氏作成）…… 4
第４図　昭和７年現在郷之原部落図（昭和７年　原田盛雄氏我成）…… 5
第５図　西原掩体壕跡の戦跡遺構配置図…… 7
第６図　掩体壕跡実測図…… 8
第７図　松の樹根跡及び掩体壕の外壕・墓壙跡…… 9
第８図　誘導路跡実測図……11
第９図　竪穴No.１実測図……12
第10図　竪穴No.２実測図……13
第11図　竪穴No.３実測図……13
第12図　弾薬実測図……15
第13図　名札写図……16
第14図　ガイシ実測図……17
第15図　陶磁器実測図（１）……18
第16図　陶磁器実測図（２）……19
第17図　陶磁器実測図（３）……20
第18図　ビン類実測図（１）……22
第19図　ビン類実測図（２）……22
第20図　薬きょうの構造模式図……23

図　版　目　次

図版１　１．掩体壕跡遠景（東から）……27
　　２．掩体壕跡の外壕（北西から）
図版２　１．掩体壕跡の外壕（南西から）……28
　　２．掩体壕跡の外壕の断面（Ｄ15区）
　　３．掩体壕跡の外壕の断面（Ｂ19区）
　　４．掩体壕跡の内壕（東から）
　　５．掩体壕内の旧道跡（南から）
図版３　１．松の樹根跡全景（源氏松）　２．松の樹根跡近景……29
　　３．誘導路跡（２）の水路跡（東から）
　　４．誘導路跡（２）の水路跡（西から）
　　５．誘導路跡（２）の水路跡の断面
図版４　１．誘導路跡（１）の全景（南から）……30
　　２．砕石敷き部分と東側水路（南から）
　　３．砕石敷き部分（南から）
　　４．中原山野遺跡のＤ区別全景（東から）
　　５．中原山野遺跡のＤ区列全景（西から）
図版５　１．旧道跡（中原山野遺跡Ｄ８・９区）……31
　　２．水路跡（中原山野遺跡Ｘ１区）
　　３．水路跡（前畑遺跡Ｕ１区）
　　４．竪穴（１）（中原山野遺跡Ｄ22区・Ｄ23区）
　　５．竪穴（２）（前畑遺跡ＡＢ８区・ＡＢ９区）
図版６　１．源氏松……32
　　２．弾・薬きょう
図版７　１．名札　２．ガイシ　３．甕……33
　　４．白磁大皿　５．染付大皿
図版８　１．染付大皿　２．赤絵染付皿……34
　　３．染付碗・湯呑茶碗　４．急須・祭器
図版９　１．ビン類（１）　２．ビン類（２）……35

第Ⅰ章　調査の概要

第１節　字図と郷之原の古絵図

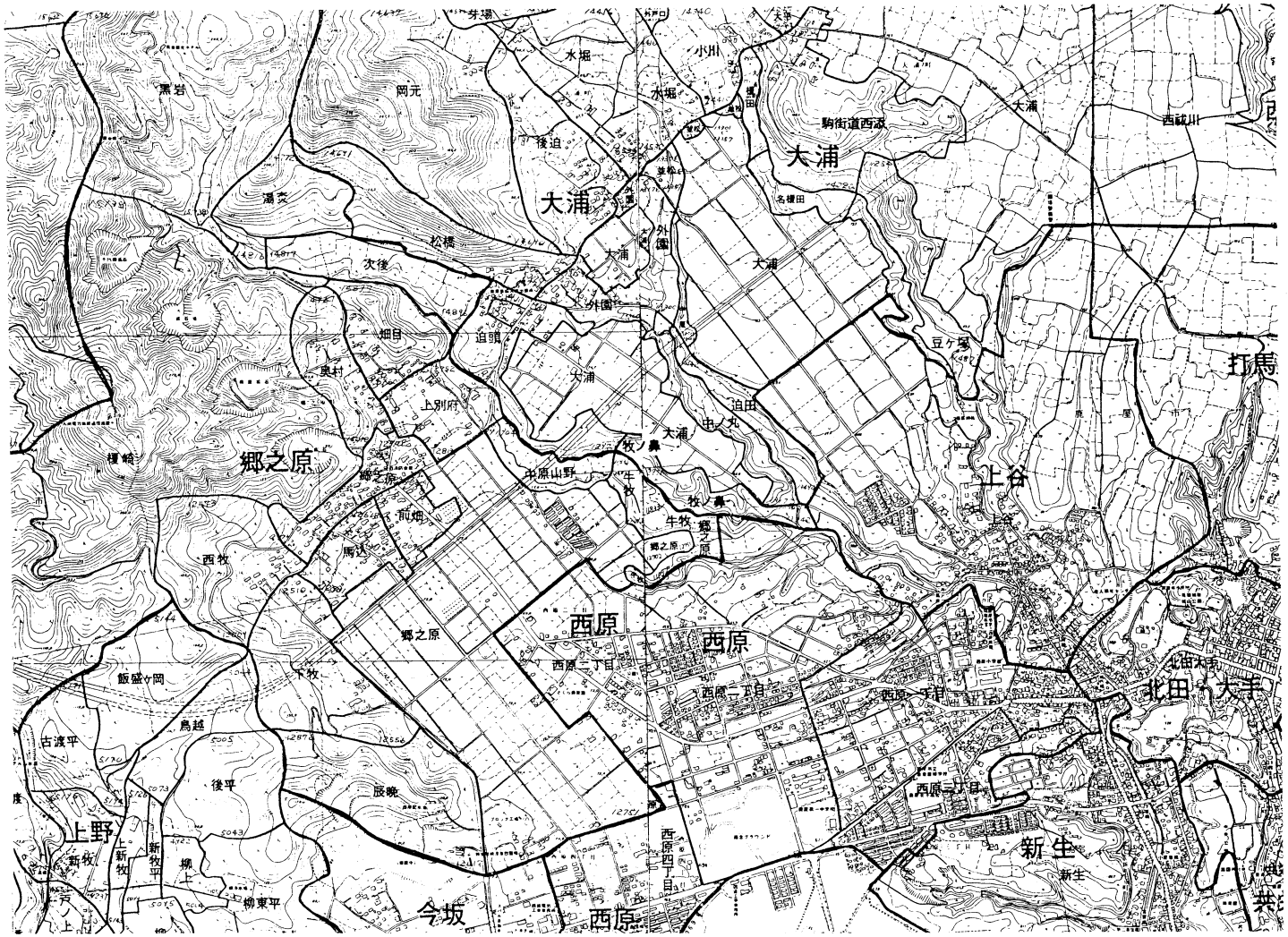
一般国道２２０号鹿屋バイパス建設に伴なう大浦・郷之原地区の分布調査では、７地点の散布地を確認した。確認調査の段階では、この地点名で作業を進めながら対象地点の地名の収集に努めた。結果的には、地主から収集して建設省九州建設局大隅工事事務所に確認をとって現在の遺跡名を付けることになり、昭和60年度からの本調査以来、これらの遺跡名に統一して発掘調査を進めてきた。

第１図は、鹿屋市役所発行（昭和63年１月）の最新の字地図である。この字地図によると、当時の字名とは大きく変更されている。榎田下遺跡は「名榎田」字に入り、中ノ原遺跡は西端の一部に「中ノ原」字が残り台地の大部分は「大浦」字に変更されている。中ノ丸遺跡だけは、ほぼ「中ノ丸」字のままである。川ノ上遺跡の字名はすでに消滅し、「迫頭」字に吸収されている。中原山野遺跡の字名は、台地の東端だけに残り、遺跡の範囲は「郷之原」字に変更されている。前畑遺跡も従来の「前畑」字は北側の宅地部分に限定され、畑地部分は「郷之原」字に変更されている。

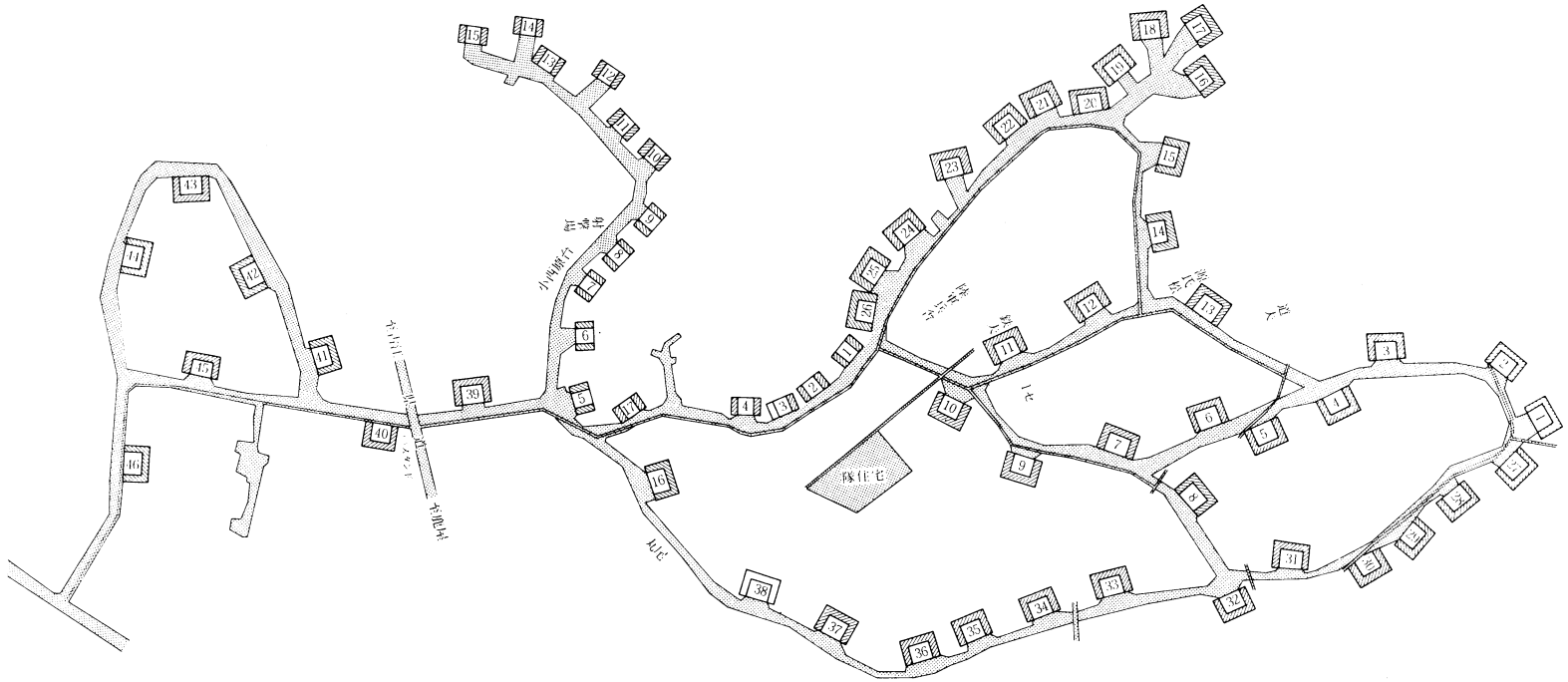
前畑遺跡の発掘調査で、確認調査の資料を基に縄文時代早期の遺跡の予定で調査を進めていると、表土下に壕跡や溝跡が検出された。調査が進むにつれて作業員や地域住民の人々の記憶からこれらの壕や溝は、戦時中の掩体壕跡や誘導路跡であることが判明してきた。調査が進むと掩体壕跡や誘導路跡の一角が姿を現わし、壕内や溝内からは当時の遺品が多量に出土した。掩体壕は、幅10m程度の土塁（高さ７～８ｍ程度といわれている）を「コ」の字に囲むように盛土したもので、その土塁の囲みの中に飛行機を避難させる施設であるが、その規模が今回の発掘調査でほぼ判明してた。第２図は、在住の原田盛雄氏作成（昭和18年８月）の「西原掩体壕及び誘導路」の配置図である。この配置図によると、今回の発掘調査で判明した掩体壕はNo.13にあたる。そしてこの周辺の誘導路が検出されたことになる。さらにこの地の古くからのシンボル的存在であった「源氏松」がこの付近に存在していたことは知られていたが、今回の発掘調査でこの掩体壕の盛土部分に樹根が検出され「源氏松」の位置を確実にした。

第３図は、郷之原町に配置された軍隊の施設の配置絵図である。同じく在住の原田盛雄氏によって昭和20年１月20日に作成された絵図で、今回の発掘調査の場所は絵図の中央付近の「クラブ」を東西に横切る位置になる。

第４図は、昭和初期の郷之原町内の絵図である。同じく在住の原田盛雄氏によって昭和７年に作成されたものである。今回の発掘調査の場所は、絵図の中心付近の「倶楽部」と「源氏松」をかすめる位置にあたる。「源氏松」のところに墓のしるしが記入されているが、発掘調査においてもこの付近に近世墓が１基検出されている。

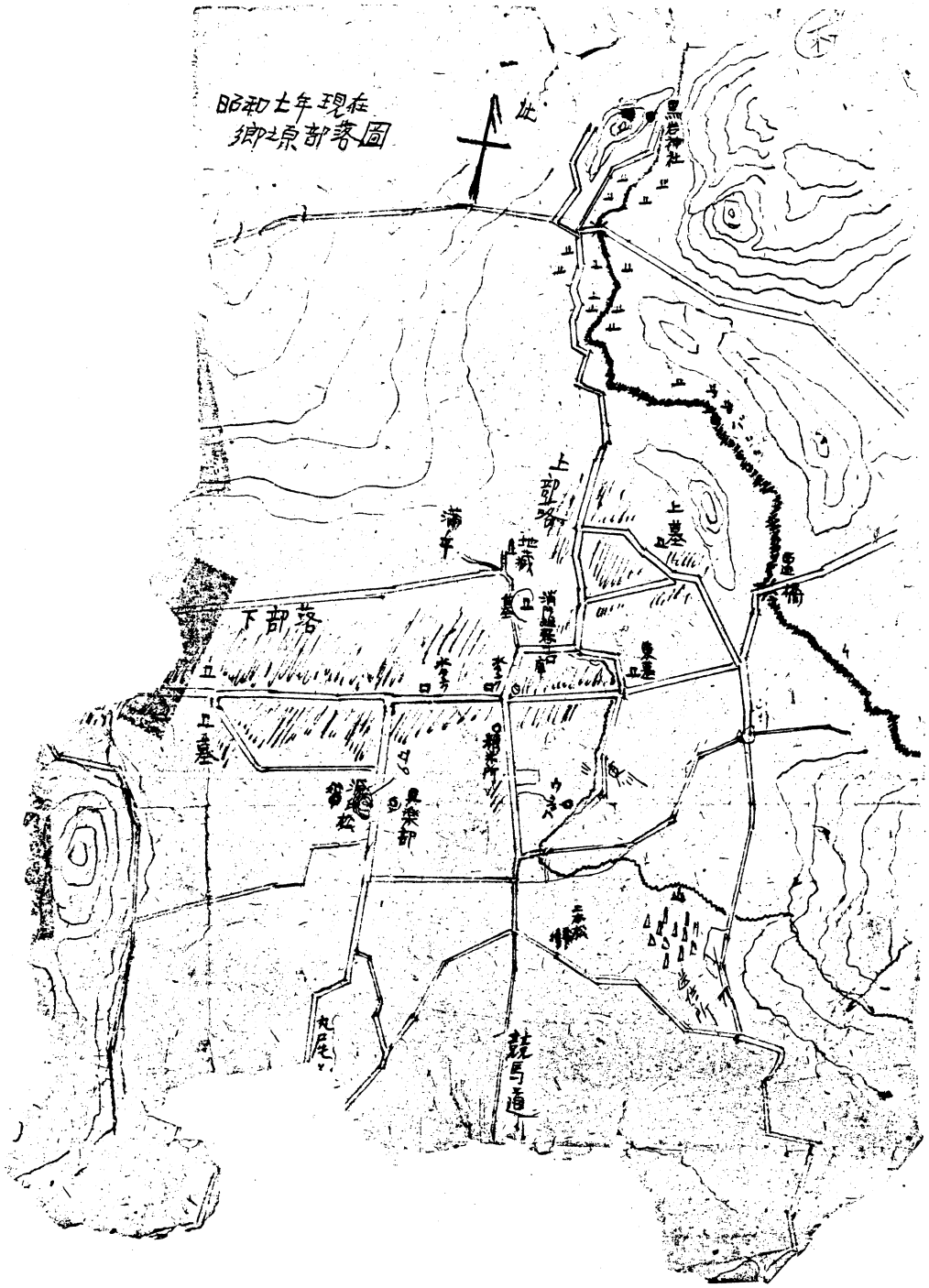


第１図　大浦・郷之原地区の字地図（昭和63年１月現在　鹿屋市役所）



第２図　西原掩体壕及び誘導路配置図（昭和18年８月　原田盛雄氏作成）

第３図　郷之原地区の軍隊配置図（昭和20年１月　原田盛雄氏作成）



第４図　昭和７年現在郷之原部落図（昭和７年　原田盛雄氏作成）

第Ⅱ章　戦跡遺構

第１節　戦跡遺構の概要

中原山野遺跡および前畑遺跡の発掘調査において、表層直下から戦時中のものと考えられる遺構が発見された。古老や年輩の作業員の聞き取り調査でもほぼ同様な結果が得られ、さらには遺構から出土する遺物によっても裏付けられた。

発掘調査の対象地が幅12m と狭い幅員ではあったが、断片的ながら多種の遺構を検出した。これらの遺構は、太平洋戦争中の激戦下に一時的に作られたものであり、これに関しては語り伝えられるのみでもちろん記録もほとんどない。

遺構は、主に掩体壕跡と誘導路跡であり、その他に誘導路の付属施設がある。

第２節　掩体壕跡

１　掩体壕跡　（第６図）

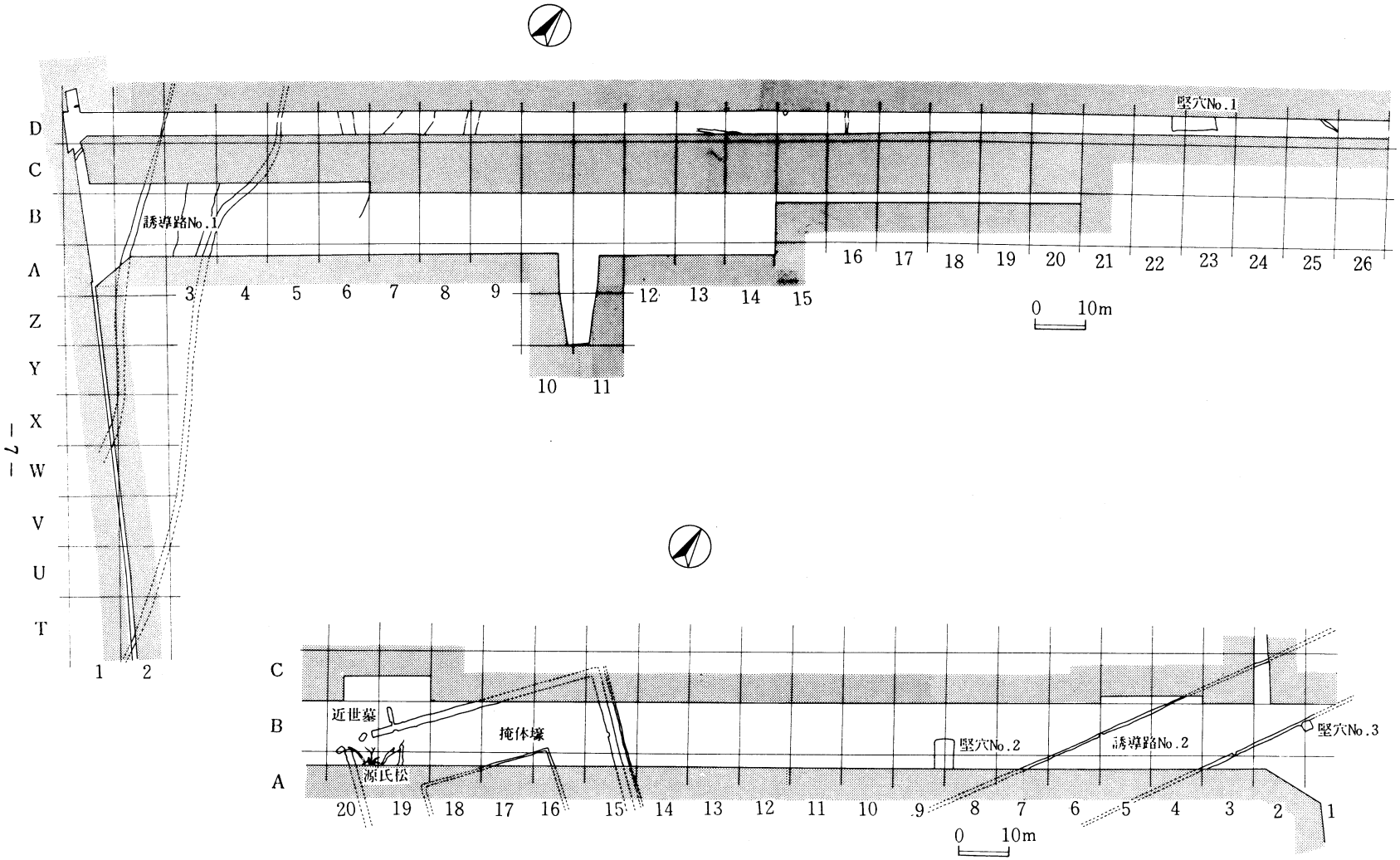
掩体壕跡は、前畑遺跡のＡＢ15区～ＡＢ20区の間に検出された。掩体壕は戦闘機の爆破防堤で、「コ」字に土塁を巡らし戦闘機を防備するための構築物であり、その基部が検出された。さらに、この掩体壕の土塁にあたる付近には、巨大な松の木の樹根跡や墓跡も確認された。そして、墓跡と掩体壕築造の関係でも、興味ある事実も判明している。

(1)　外壕

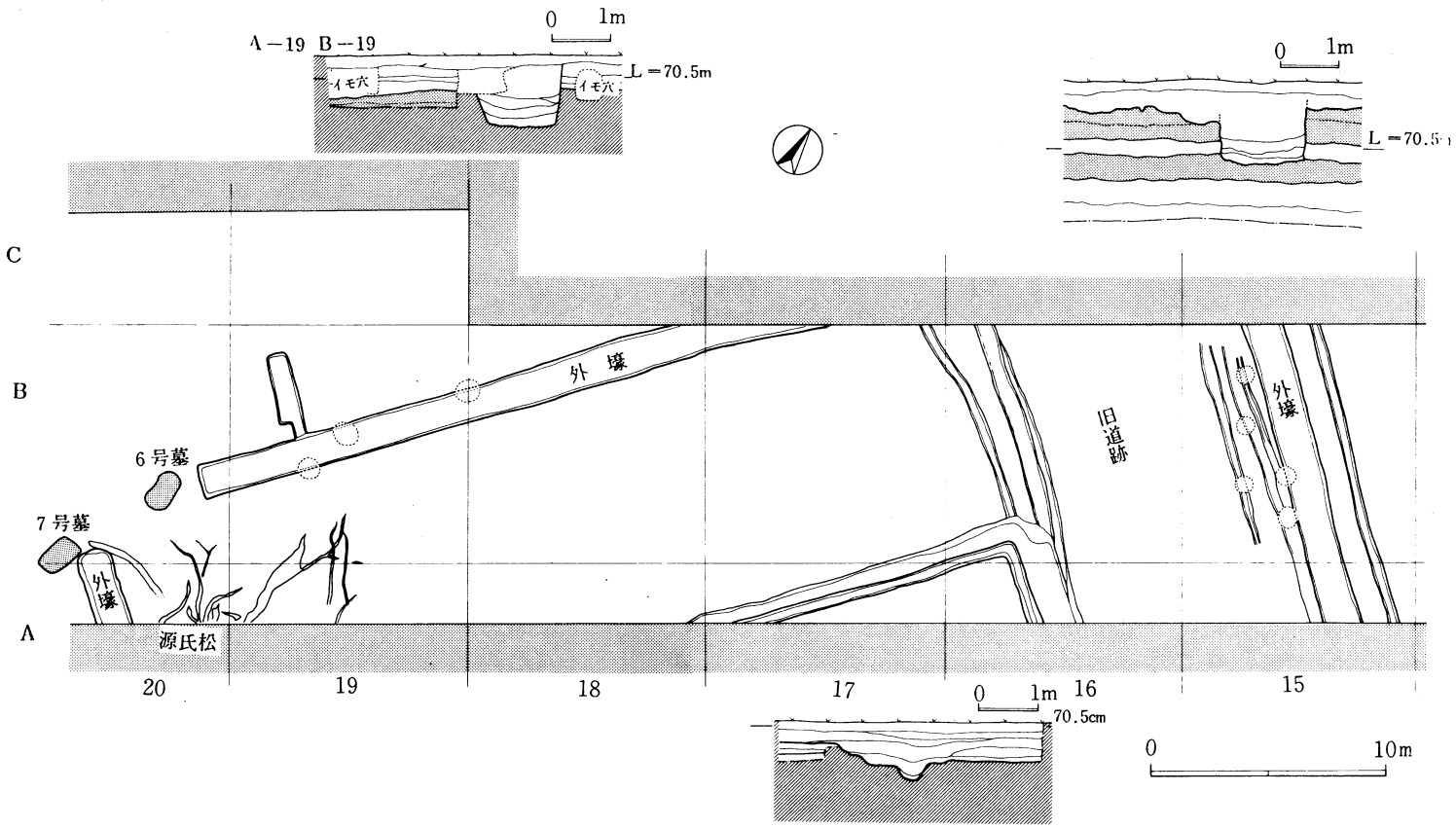
掩体壕跡は、ＡＢ15区～ＡＢ20区に検出された。調査区が幅12m と狭いため、遺構の基部の部分的な検出であったが、検出面や遺構の形態及び出土遺物から、戦時中に築造された「掩体壕」の一部分であることが確認された。さらに、第２図の西原掩体壕及び誘導路図によると『源氏松』の位置から№13の掩体壕に該当することが判明した。

掩体壕跡は、土塁を巡る壕や溝などの基部だけの検出であるが、おおよそその規模は推定できる。まず、Ｂ15区に略北西に走る二本の溝が検出されている。西側の溝は幅 1.5m で深さが１m の大きな規模で、いわゆる壕にあたる。この壕は、掩体壕の外堀にあたり、さらに用地外に抜け、途中で南西方向に直角に曲がり、Ｂ18区・Ｂ19区に検出された壕に続くことが想定される。壕の床面は、Ｂ15区では南の方向に傾斜している。この壕内からは、多量の戦時中の生活用品や遺品が出土している。もう一本の溝は、幅40cmで深さ30cmの小溝であり、壕に並行して走っている。ここの掩体壕の土塁にあたる部分には、旧道の痕跡が確認されている。掩体壕の東側の土塁はこの旧道部分に築造された。このため、旧道はこの東側の土塁の外側に変更されている。

Ｂ18区からＢ19区に検出された壕は、Ｂ20区で止めている。さらに、Ｂ19区には、幅１m で



第５図　西原掩体壕跡の戦跡遺構配置図


A－19 B－19
0 1m
イモ穴
イモ穴
L＝70.5m
0 1m
L＝70.5m
C
B
A
外壕
6号墓
7号墓
外壕
源氏松
旧道跡
外壕
20
19
18
17
16
15
0 1m
70.5cm
0 10m

第6図　掩体壕跡実測図

約４ｍの竪穴が壕の外側に直行して付設されている。直行する竪穴の取り付け部は、片袖状に狭くなる。床面のほぼ中央部分には、焼土が確認される。

Ｂ20区の止まっている壕の約１ｍ南西前方には、墓壙（６号墓）が検出されている。この墓が存在するため外壕は止められた可能性が強い。このことは、次の７号墓とＡ20区に所在するもう一つの壕の関係でもみられる。

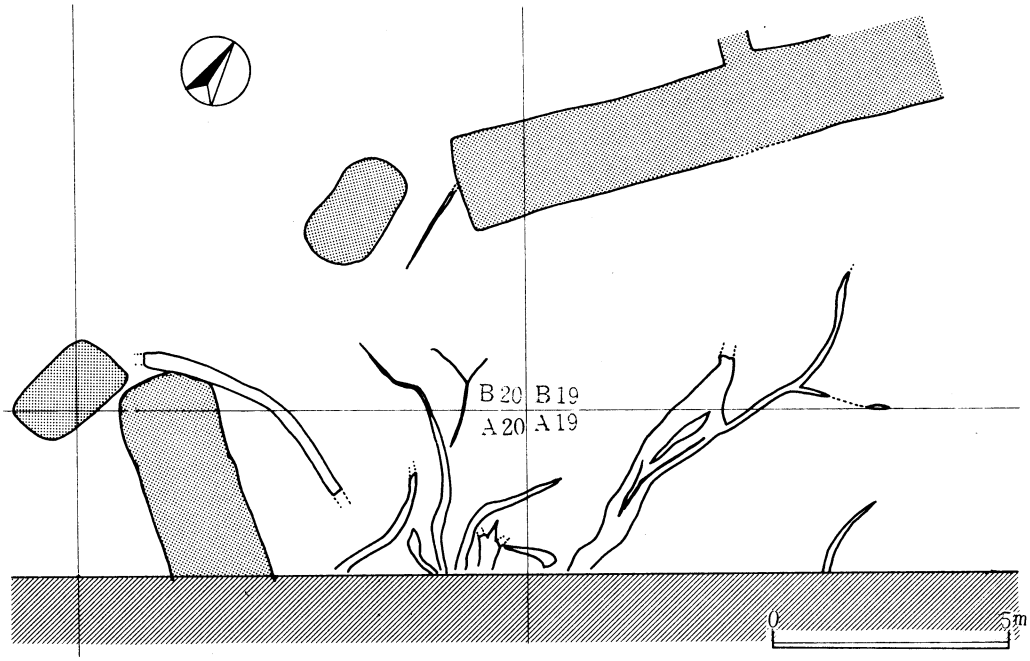
Ａ20区のＢ区寄りに北西で止まって東南方向の用地外に延びるもう一つの壕がある。この壕の走る方向は、ＡＢ15区の壕と並行する。この壕は削平が大きく検出面からの深さは浅いが、その規模はＡＢ15区の並行して走る壕とほぼ同様である。壕が止まっている北西部に隣接して７号墓の墓壙が検出されている。

(2) 内壕

Ａ16区からＡ17区には、直角に曲がる小溝が検出された。この小溝は、対応する外側の壕と並行して掘られている。この直角に曲がるコーナーが確認されたことによって、外壕も直角に曲がることが推定されたのである。小溝の外側の土塁側は、浅い段を作る。つまり土塁は内側に犬走りが築かれたことが考えられる。

2 源氏松跡 （第７図）

Ａ20区の壕の東側の土塁にあたる部分に、松木の樹根が形成する空洞と木の芯が縦横に確認されている。これがこの地区でシンボル化されて『源氏松』と呼称された大木の松の樹根であ



第７図　松の樹根跡及び掩体壕の外壕・墓壙跡

ることが、ほぼ判明した。さらに、『源氏松』の近くには墓石が存在したと云われいるが、7号墓がこれにあたることも推定された。

「源氏松」は、図版6のように、戦前は畑の中に聳える大松であり、戦中は掩体壕築造で土塁に取り込まれ、その中腹から聳える形となる。

3　墓跡　（第7図）

掩体壕の壕に隣接して、2基の墓跡が検出された。一基は、B18区からB19区を北東に走る外壕の止まった西南端から1mの位置に所在し、長さ1.70m×幅0.97mの長方形プランを呈する墓壙である。墓壙内からは、付着した古銭が17枚程度埋納されている。最上部の古銭は「洪武通寶」と判読されたところから、中世墓の可能性が強い。

もう一基はA20区とB20区の境部分に検出されている。北西部分で止まった西側の掩体壕の外壕に隣接して位置する。長さ1.70m×幅0.90mの長方形プランを呈する墓壙である。墓壙内には、比較的大きい鉛玉1個とガラス玉6個が埋納されている。

第3節　誘導路跡

誘導路は、戦闘機を掩体壕に運ぶための道路で、中原山野遺跡と前畑遺跡の両遺跡で調査区を横切る形で検出されている。

1　誘導路跡No.1　（第8図）

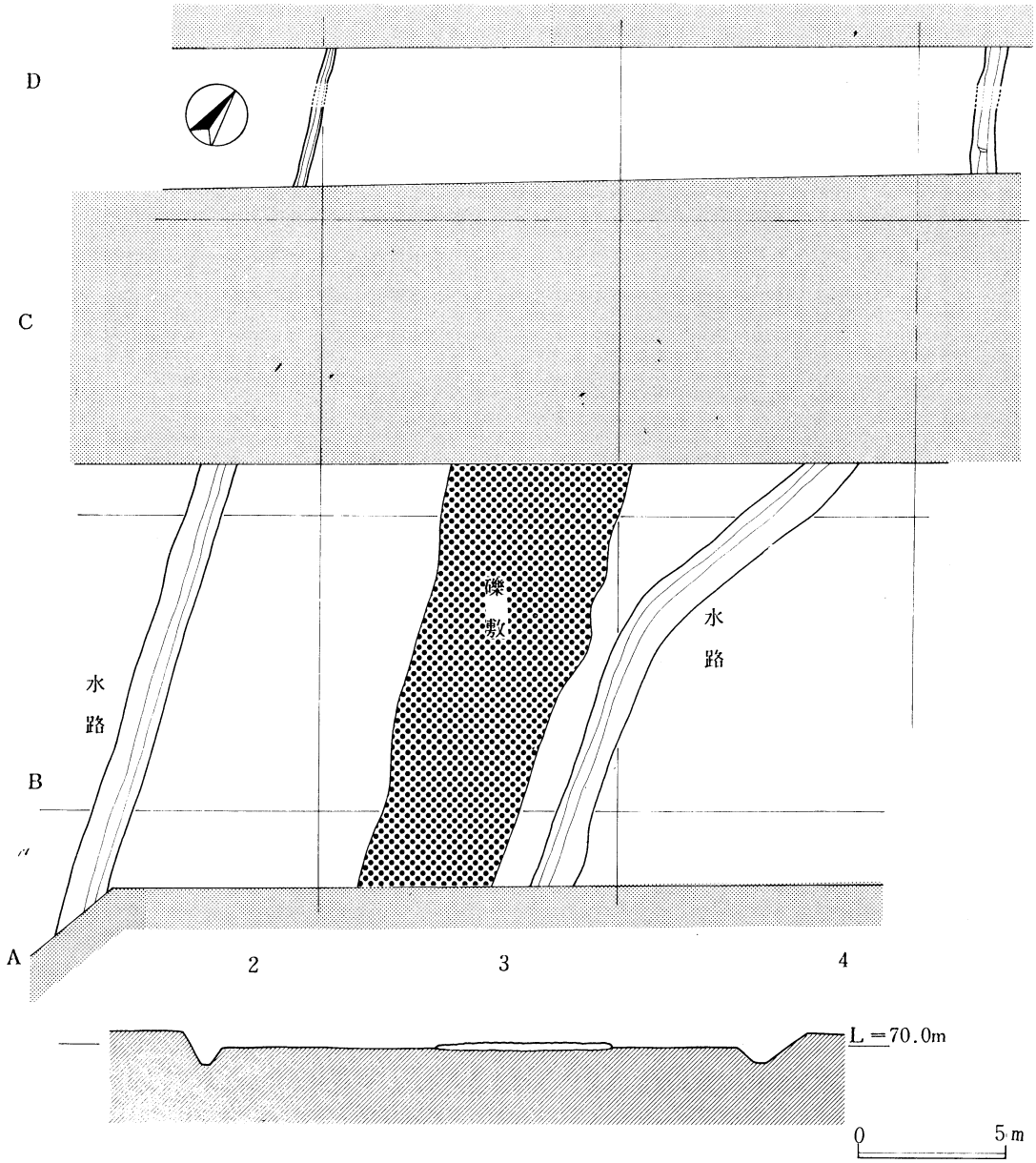
誘導路跡No.1は、中原山野遺跡のA～C2～4区に検出された。両側に水路を備え、一部砕石を敷いた道路である。A～C2～4区ではほぼ北を向いて走るもので、北部のD2区とD5区では削平を受けているが両側の水路だけが検出された。また、水道管埋設工事部分の調査でも水路跡の南側の延長部が確認されている。

第8図のA～C2～4区に検出された部分は保存が良く、誘導路の状態を最も良く知ることができる。両側の水路は、検出面からの深さは約1.2～1.3mを測り、路面からの深さは0.6～0.7mを測る。東側の水路は若干東寄りに曲がって走り、途中で道路が分岐する可能性がある。水路に挟まれた道路面の幅は、約14mを測る。路面の中央から東寄りには、砕石を5～6mの幅で敷いている。砕石は、赤褐色の軟質の特徴あるもので鹿屋市荒平産の岩石を用いている。

2　誘導路跡No.2　（第5図）

誘導路跡No.2は、前畑遺跡のA～C1～7区に検出されている。誘導路跡No.2は大きく削平を受け、両側の水路だけ検出されている。水路は、幅0.5～0.6mで深さ0.4mを測る。削平を受けているが、水路に挟まれた部分が誘導路で、幅14mを測る。誘導路No.1と同規模であり

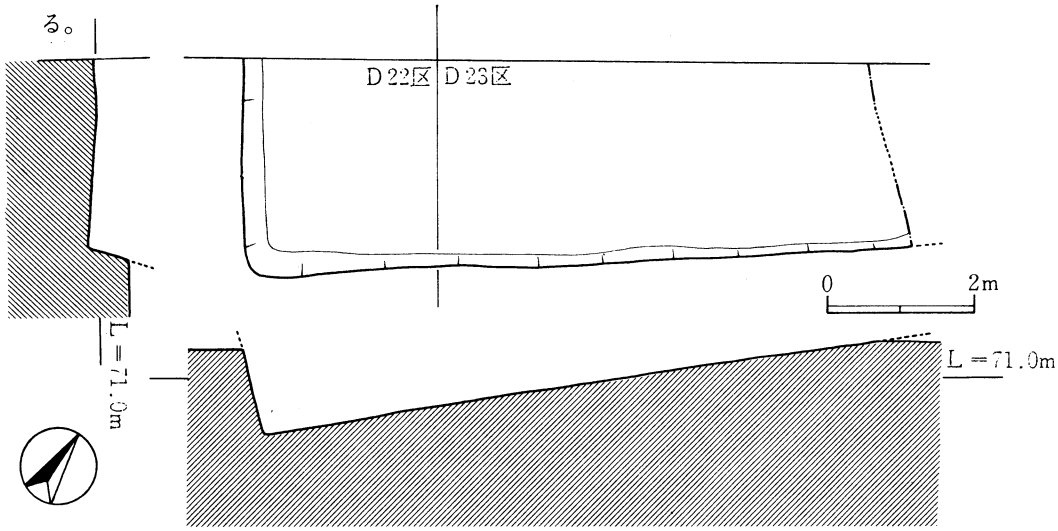
道路幅の規格があったことを窺い知ることができる。この誘導路の南側の水路にはＢ１区で竪穴№３が付属し、ＡＢ８区では竪穴№２が接続する位置にある。さらに、ＡＢ15区～ＡＢ20区の掩体壕跡もこれに接続する位置にある。



第８図　誘導路跡（１）

3　竪穴跡No.1　（第９図）

竪穴No.１は、中原山野遺跡のＤ22区とＤ23区に位置する。長方形の竪穴遺構であるが、床面は傾斜をなす。竪穴No.１は、ほぼ東方向を向いて検出されている。約９ｍの長さで検出されているが、東側は削平を受けており若干延びることが想定される。幅は約３ｍが検出され、北側の用地外に延びる。床面は、最も深い西側隅で検出面から1.20ｍを測り東側で検出面に立ち上がる。このように床面は、約9°の傾斜つくる。Ｄ25区付近に削平を大きく受けた溝状の痕跡が確認されるが、誘導路の水路の可能性が強い。竪穴No.１は、誘導路に付属する施設と考えられる。



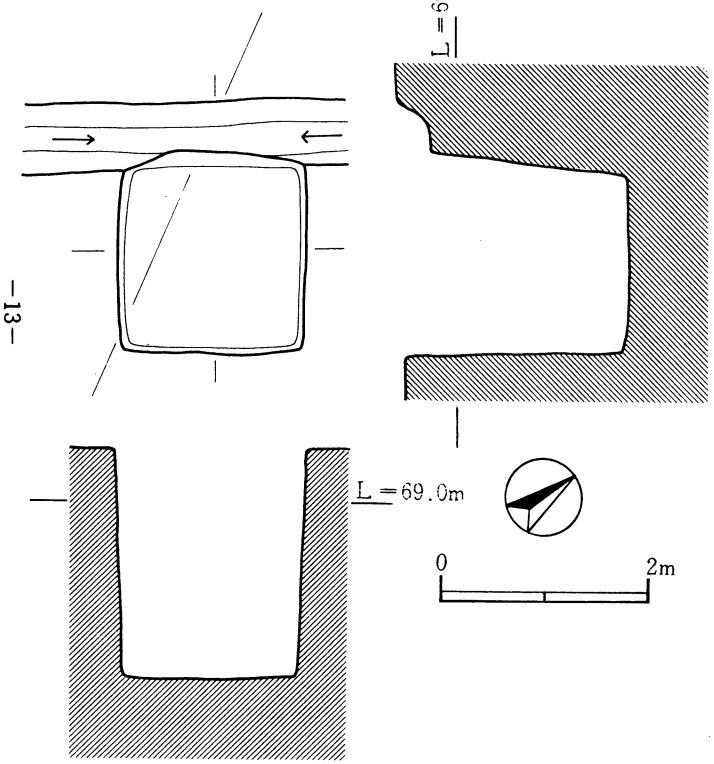
第９図　竪穴No.１実測図

4　竪穴跡No.2　（第10図）

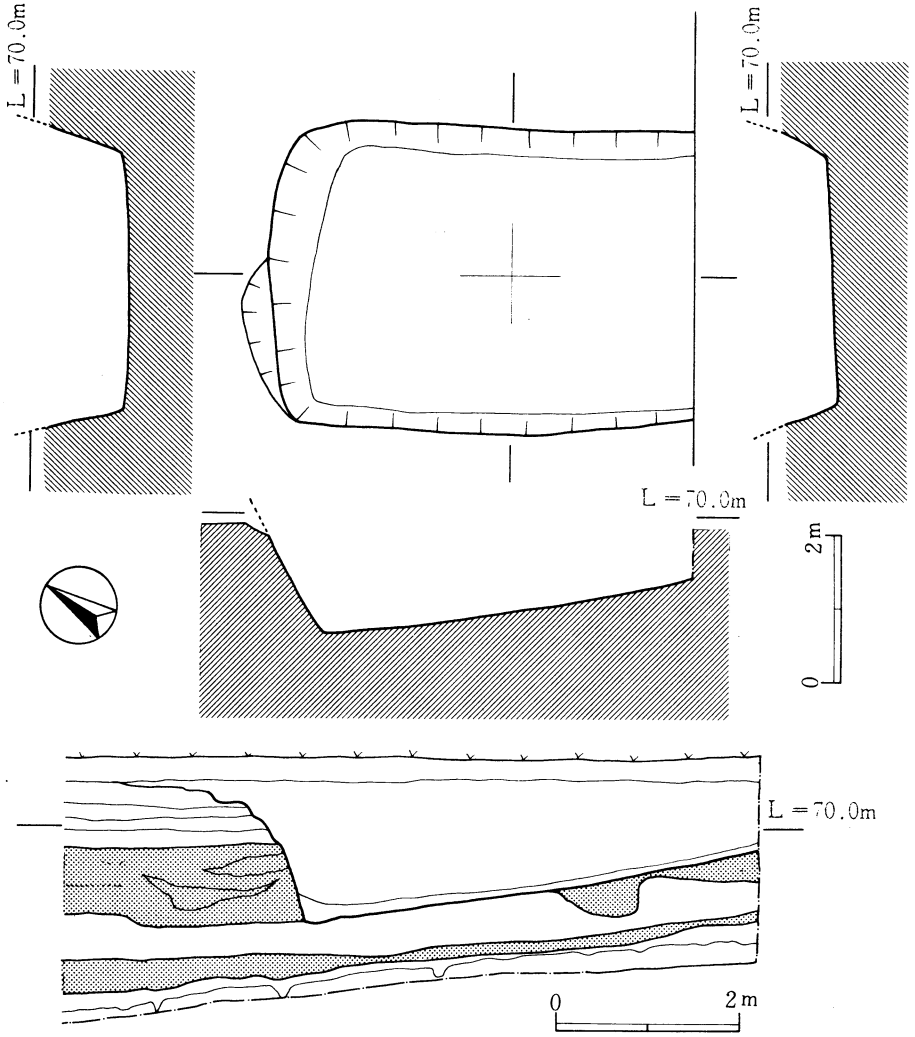
竪穴No.２は、前畑遺跡のＡＢ８区とＡＢ９区に位置する。長方形の竪穴遺構であるが、床面は傾斜をなす。竪穴No.２は、ほぼ南方向を向いて検出されている。約5.80ｍの長さで検出されているが、南側は用地外に延びる。幅は、約4.20ｍを測る。床面は、最も深い北側隅で検出面から約1.50ｍを測り、南端では約0.70ｍを測り、以南は用地外となる。すなわち、約10°の傾斜をもって南側に立ち上がる。竪穴No.２の南側の用地外には誘導路が位置するが、誘導路に付属した施設であることが考えられる。

5　竪穴跡No.3　（第11図）

竪穴No.３は、前畑遺跡のＢ１区とＢ２区の誘導路の水路に付属して検出された。水路の外側に付属した竪穴No.３は、2.00ｍ×1.80ｍの方形の竪穴遺構である。竪穴の深さは、2.20ｍと深い。竪穴No.３が付属した水路は竪穴No.３に向かって東西方向とも低くなり、さらに竪穴No.３の接続する水路の壁は切り取られている。つまり、誘導路の南側水路の流れは、この竪穴No.３に集まる形につくられている。竪穴No.３は、水路の水溜め池あるいは沈砂池の役目を果たすものであろう。



第11図　竪穴No.3実測図



第10図　竪穴No.2実測図

第 Ⅲ 章　出土遺物

戦跡遺構からは、戦時中の物と考えられるかなりの量の出土遺物がみられた。特に、掩体壕の外壕には、一時的に埋められた状態で多量の出土遺物がみられた。弾丸や薬きょうは調査区の至る所に散乱し、激しいものはⅢ層の弥生時代の住居址の埋土中（表土下50cm～70cm）まで貫入しているものもあり、激戦の模様を窺い知ることができる。戦時品(弾薬など)や遺品（名札など)、生活品（日用品）など種々の出土がみられた。

第１節　戦時品

戦時品には、弾丸や薬きょう等の弾薬や照明弾、戦闘機の破片などがある。戦闘機を格納する掩体壕があったためか、弾丸や薬きょうは調査区の至る所から出土した。B20区の掩体壕の外壕内からは、薬きょうが一ケ所に集中して発見された。集めた薬きょうを戦後ここにまとめて捨てた人が出現し、発掘調査中、このような新事実も判明した。

１　弾薬　（第12図）

弾薬は、弾丸と薬きょうに分かれる。弾丸はさほど多くは発見されなかったが、薬きょうの出土は多い。

①　薬きょう　（第12図－１～９・11）

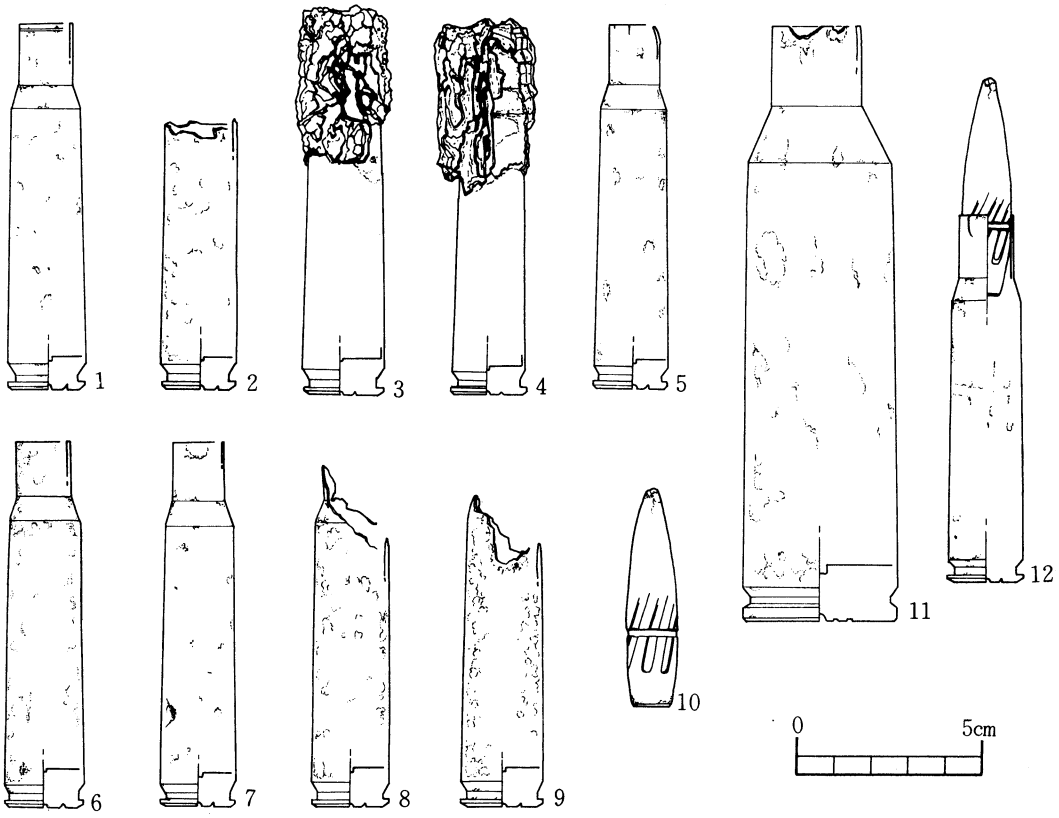
薬きょうは、小型のもの９個と大型のもの１個を図示したが、小型のものの発見が多い。薬きょうの大きさは、小型のもの（１～９）が最大直径２cm、全長10cmを測る。１～９は、ほとんど同寸法である。大型のものは(11)、最大直径4.24cm、全長16.3cmを測る。

薬きょうの底面は平坦で、中央には雷管とその打痕が確認される。雷管の周囲には、U、DM、S、UMや４　２、４、４３、などの記号が付けられている。U、DM、UMなどは、製造所識別符号とのことである。４、４３などは、製造年号を示すものとのことである（43＝1943年)。 底面の上は細くなった抽筒溝があり、次が体部であるが中は空洞である。ここには火薬がつめられる。肩部で若干細くなり、首部は外径 1.4cmを測る。そして、12に図示したように首部には弾丸をはめ込む方式である。

鑑定によれば、製作国と使用国はアメリカ合衆国であり、使用火器は『12.7mm重機関銃』とのことである。

②　弾丸　（第12図－10）

弾丸は、Ａ４区とＡ５区の他、特異な場所としてはC19区の弥生時代の竪穴住居址内の埋土



第12図　弾薬実測図

中から発見された。弾丸はいずれも弥生時代包含層の位置するⅢ層中付近の深い位置から出土している。

図示した10（第12図）は、Ａ５区のⅢ層出土の弾丸である。弾丸は、直径1.30cm、長さ5.80cm、重さ39.6g を測る。先端は鋭く尖り、後ろは少し細くなり平たくおさめる。弾丸の表面の中央よりやや後ろの周囲には、弾丸が発射された時につく施条痕が明確に確認できる。他の二個もほとんど同じタイプである。

2　その他

そのほか、誘導路跡の水路からは照明弾も出土している。照明弾は、直径10cm、長さ41cmの大型の筒状のものである。また、竪穴No.3からは沢山の金属性やジュラルミン性の破片が出土している。これらのなかには戦闘機など飛行機の部品と考えられるものなどが混在している。

第2節　遺　品

1　名札　（第13図）

B15区の掩体壕の外壕から多数の生活品と共に、一枚の姓名の書かれたネームプレートが発見された。ネームプレートは、縦9㎝、横6.25㎝、厚さ1.60㎜を測る。ジュラルミンの板を切りとって作成されたものである。

プレートには、

『熊本懸球磨郡　黒肥地村
　　千六百五六　皆越』

と記載されている。

このネームプレートについては、熊本県球磨郡多良木町教育委員会宮ケ野貴氏の調査、御教示の結果、次のような事実が判明した。

第13図　名札写図

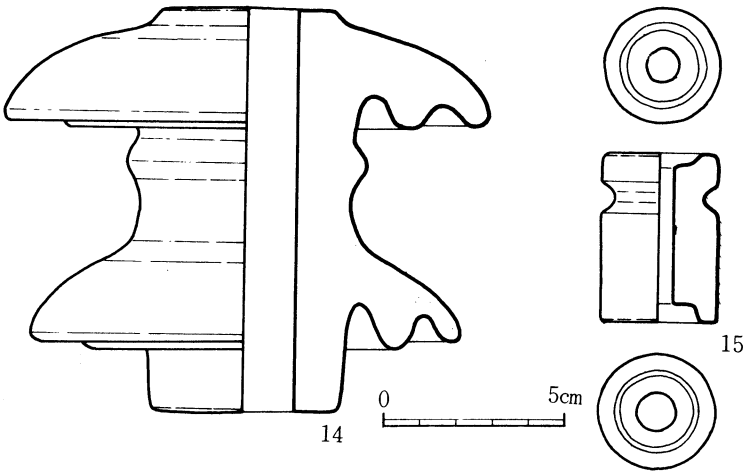
ネームプレート記載の住所は、
　現在、下記に変更されている。
　　熊本県球磨郡多良木町大字黒肥地西4区
　　（昭和30年合併により多良木町となる）

ネームプレートの所有者は、調査の結果、下記の方であった。

氏名＝皆越光喜　　生年月日＝明治41年5月1日
徴兵＝昭和19年6月30日　　鹿屋航空隊黒木隊所属
死亡通知＝昭和20年6月　　沖縄海上にて

第3節　生活品

戦時中の生活品と考えられる出土遺物は、主に掩体壕の外壕と誘導路に付属する竪穴No.3にまとまって出土している。近年、この地区の畑地は、大々的圃場整備が行なわれ、起伏の激しい台地が平坦な畑地に開拓されている。そのため、高台の遺構はほとんどが削平されている。そして、大型機械の導入などによって、畑地の耕作土は入念に耕されている。残存する遺物は戦後、凹地に捨てられたものがかろうじて発見されたものであろう。



第14図　ガイシ実測図

1　電気備品　(第14図)

電気の備品が比較的多く発見されている。電柱に付けられる備品が多い。電柱の上部に取り付けられる鉄骨やガイシの類のものである。

①　特高ガイシ　(第14図—14)

特高ガイシや懸垂ガイシなどと呼ばれる陶器製のものである。一個は笠状の輪が二段の重なったもので、笠の輪は直径が13.2cmで、二段の高さは11.2cmを測る。輪の中央には、直径2.80cmの穴が開けてある。ガイシは白色の陶器であるが、笠の輪には赤色や青色が塗られている。

②　低圧ガイシ　(第14図—15)

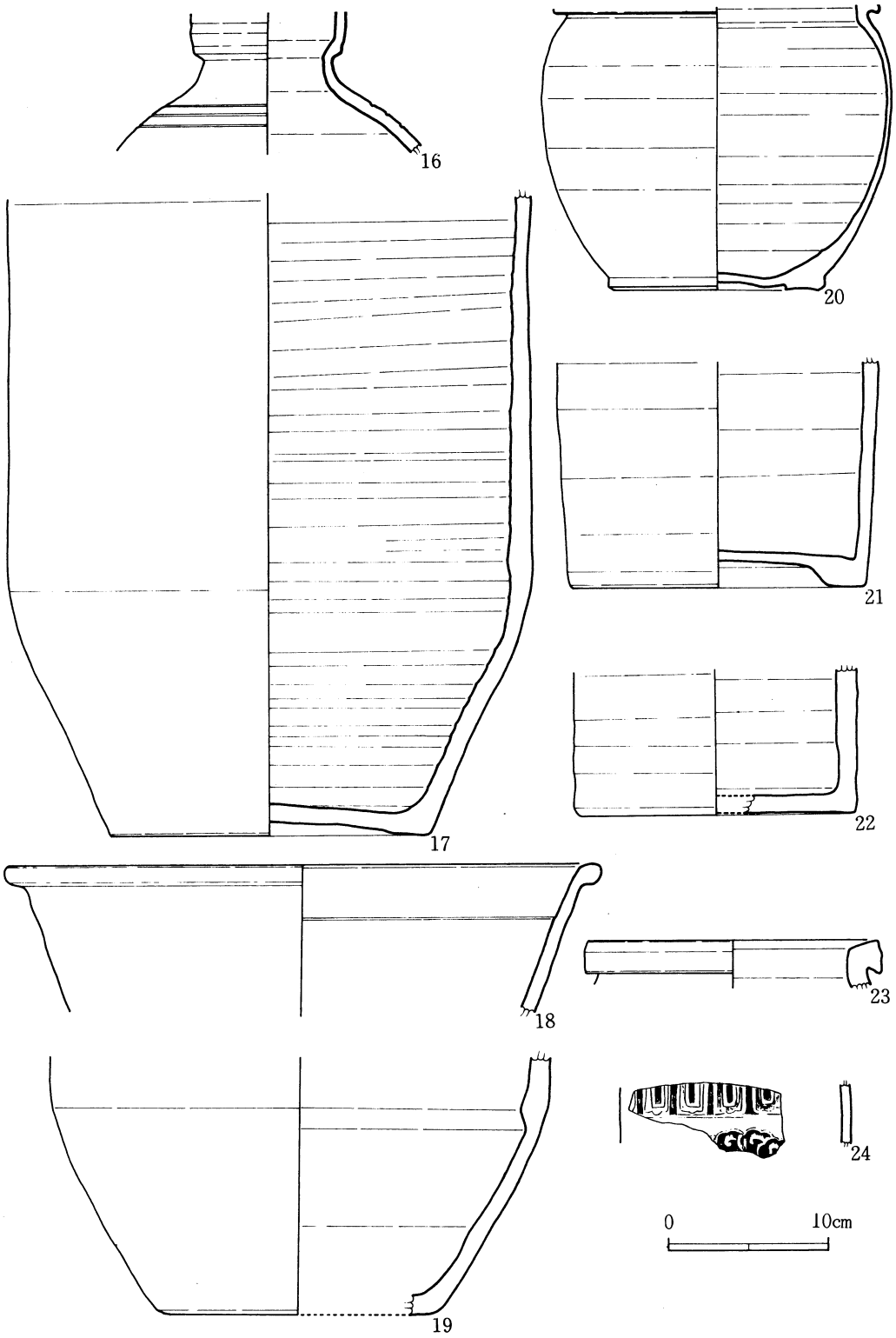
以前、一般的な電柱にみられた家庭用の電線を結ぶガイシで、低圧ガイシと呼ばれるものである。直径3.20cmで高さ4.70cmの円柱形で棒状のもので、上部に溝が巡っている。中央は止め具の穴が開けられている。

2　陶磁器類　(第15図～第17図)

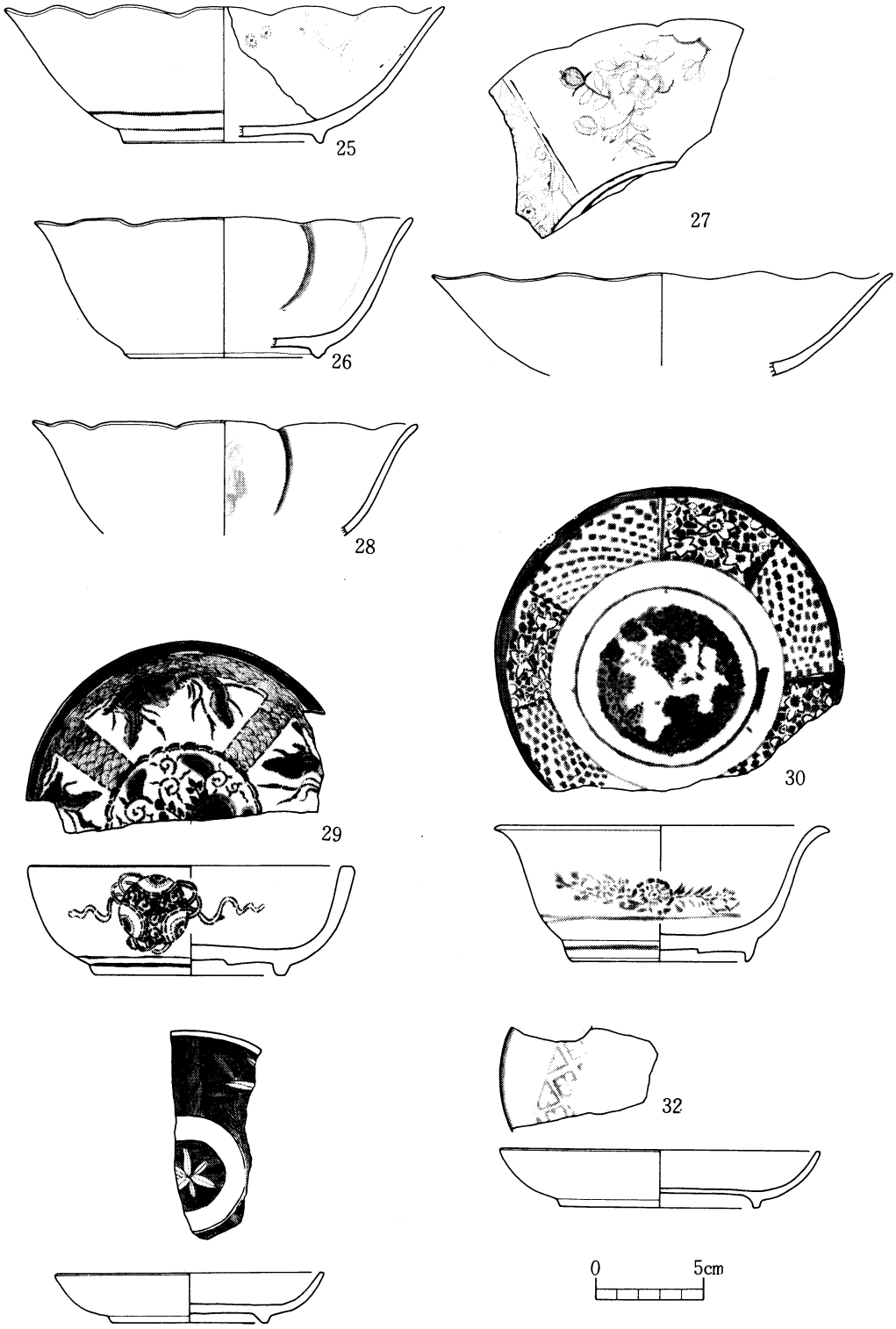
陶磁器類は、陶器と磁器に分かれる。陶器は比較的大型の容器で、磁器は茶碗・皿など小物の類である。

①　陶器類　(第15図—16～24)

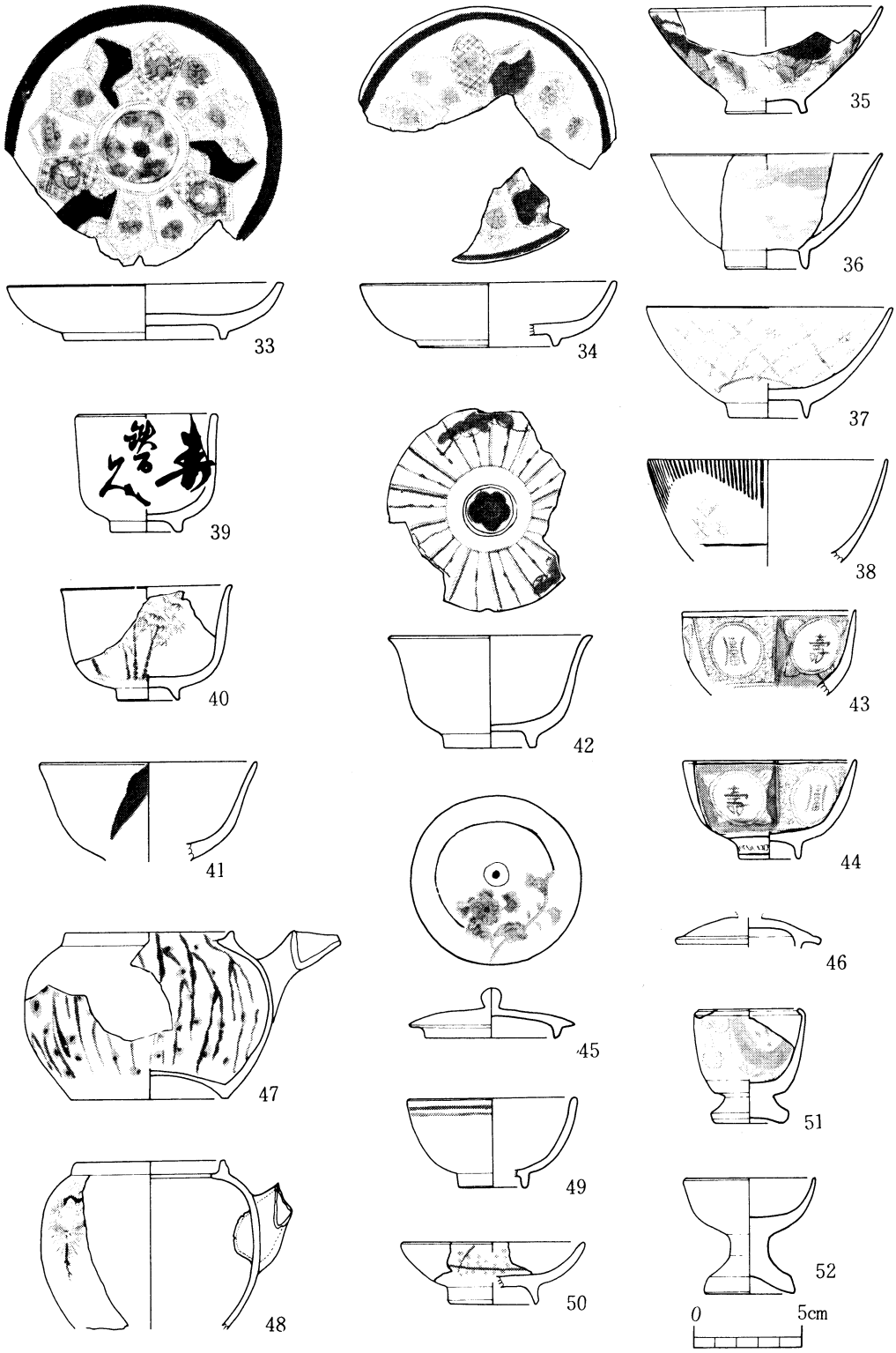
16は、口径 9.8cm の坪状の口縁部である。口縁部は、二重口縁状に膨らみをもち頸部で締まる。肩部には、三本のヘラ状の沈線が巡る。17は、平底を呈する甕の胴部から底部である。器面には、底部を除き全体に褐釉をかける。19もほぼ同様である。18は擂鉢で、口縁内面の沈線



第15図　陶磁器実測図（1）



第16図　陶磁器実測図（2）



第17図　陶磁器実測図（3）

下には摺目が全面に施される。口縁部は、わずかに外反して玉縁状に太くなる。20は、口径20.4cm、高さ18.2cmの中甕である。底部は広く、胴部は球状の膨らみをなす。口縁部は大きく外反して垂れ下がる。底部を除き、器面全体に褐釉を施す。21、22は、底部が平底で胴部はそのまま立ち上がる筒状の器形を呈する。21は上げ底を呈し、22は平坦な平底である。いずれも瓦質で施釉はみられない。筒状の火鉢の底部と考えられる。23は甕の口縁部で、口縁は外側に台形状に拡張して縁をつくる。24は、染付を施した筒状の胴部片である。筒状の火鉢の胴部片と考えられる。

② 磁器類　(第16図・第17図—25～52)

25～28は、白磁の皿である。25はほぼ完形に復元でき、口径20.6cm、器高6.40cmを測る。高台は、シャープな三角形を呈する。いずれも口縁は多弁花状を呈している。27は内面に、色絵で植物を図化している。

29、30は、肉厚の器厚で身が深い皿である。30で、口径15.6cm、器高6.40cmを測る。口縁部は、29はそのまま太く平坦に納め、30は外反して先端を端反に仕上げる。内外面には、草葉文や草花文などを描く。

31～34は身の浅い皿類である。33は、口径12.9cm、器高2.60cmを測る。いずれも内面や見込みには、草葉文や草花文の色絵を描いている。

35～38は、いわゆる碗類である。37で、口径5.75cm、器高5.25cmを測る。器外面に、草葉文や草花文を描いている。

39～44は、いわゆる湯呑み茶碗である。39・43・44は草葉文の他に文字が記銘されている。「寿」「福」などが読み取れる。

45・46は蓋類である。45の表面は草花文で飾る。茶家蓋であろう。

47・48は茶家類である。

49・50は猪口である。49は、口径7.90cm、器高4.15cmで坏部が深い。50は、口径8.60cm、器高2.90cmで坏部が浅い。

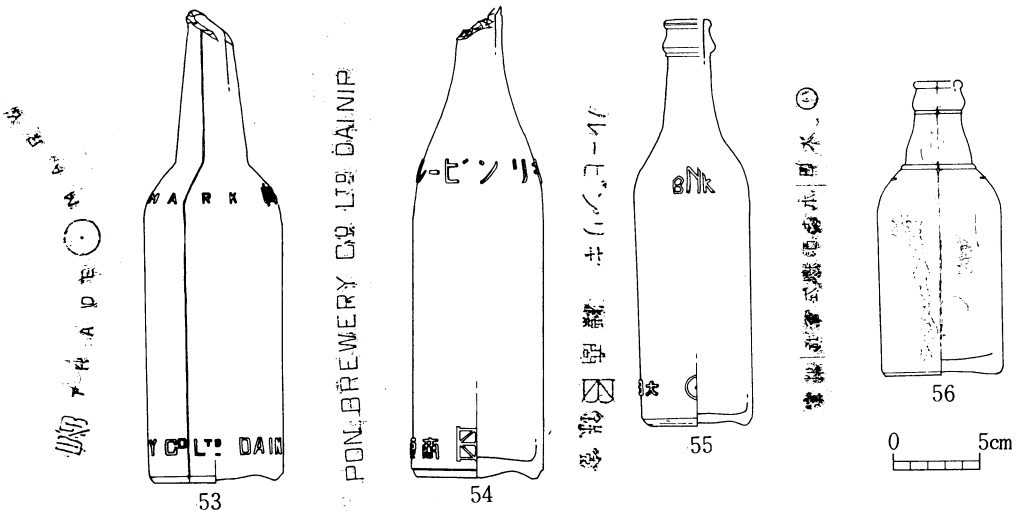
51・52は器台形の猪口であろう。51は、口径4.80cm、器高5.30cmを測る。52は、口径6.10cm、器高5.40cmで脚部が高い。

3　ビン類　(第18図・第19図)

ビン類は、各種みられる。ビールビンや薬用ビンや飲料水ビンなどがある。

① ビールビン　(第18図—53～55)

53～55は、ビールビンである。53は、口部が欠けて高さは不明であるが、胴部の直径は7.40cmである。ビンには文字が浮書きされている。肩部には「D.N.B TRADE ◎ MARK」が巡り、底部側面には「DAINIPPON BREWERY　C° L^TD」の文字が陽刻されている。54も口部を欠



第18図　ビン類実測図（1）

くが、胴部は直径7.40cmである。肩部には「ルービンリキ標商ＫＢ録登」とカタカナで巡り、底部側面には「ルービンリキ標商ＫＢ録登」と陽刻されている。55は、完形で高さ23.5cm、胴部の直径6.30cmを測る。肩部に「ＢＮＫ」底部側面に「造製社会式株酒麦本日大」と陽刻されている。

56は、ビンの器面には文字がみられない。完形で高さ17.2cm、胴部の直径７cmを測る。飲料水のビンであろうか。

② 薬用ビン　(19図－57・58)

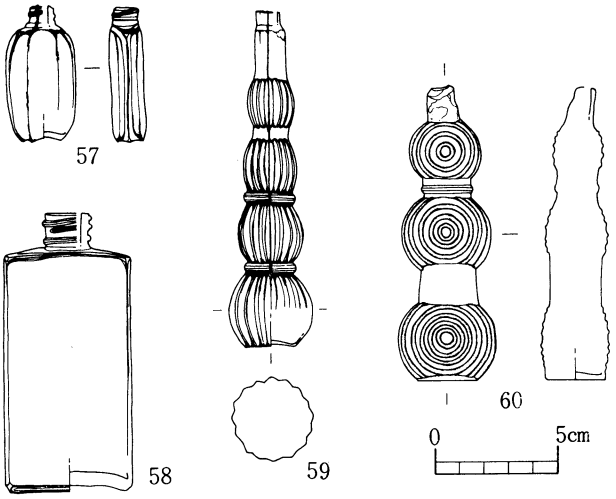
57は、非常に小型のビンである。高さ5.50cm、幅2.90cm、厚さ1.45cmを測る。肩部や底は、独特の丸みをもつ。目薬などの薬用ビンであろうか。

58は、高さ11.4cm、幅5.30cm、厚さ3.53cmを測る。肩部や底は方形に角張る。これも、薬用ビンであろうか。。

③ 飲料水ビン

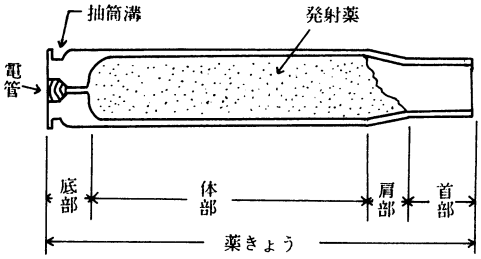
(第19図－19・20)

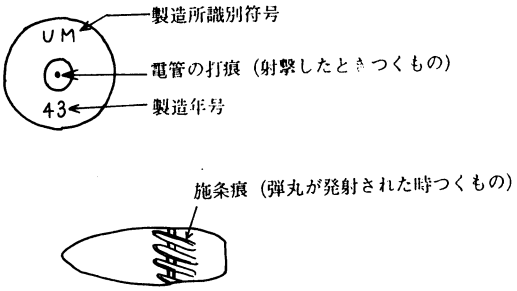
59・60は、装飾ビンでガラス質はもろい。59は、球状の胴部が大きいものから小さいものへ４個連なる形を呈する。最下の大きい球の胴部は直径3.40cmで、



第19図　ビン類実測図（2）

最上の小さい球の胴部は1.90cmを測る。全長の高さは13.8cmである。60は、球形の円盤状の胴部を縦に3個連ねる形を呈する。最下の大きい球の直径は4cmを測り、三段目の小さい球の直径は2.90cmを測る。全長の高さは11.9cmである。このように、二者とも形態状大きく異なるが、容器内に入れるものは同様な感がある。ニッキなどの飲料水であろうか。





第20図　薬きょうの構造模式図

第Ⅳ章　発掘調査のまとめ

第１節　西原掩体壕跡及び誘導路跡

鹿屋市は、海軍航空基地が所在し、日本の重要な軍事基地の一つであった。そのため、昭和20年の沖縄戦線時には、米軍の激しい空襲を受けている。海軍航空基地周辺への空襲は、 268回、延べ 2,092機による空襲を受け、三月以降の空襲日は52日に及んだという。米軍偵察機の航空写真によると、航空基地周辺には、太い白線を引いたような誘導路が縦横に廻り、その誘導路に付設された沢山の掩体壕がみえる。その掩体壕内には、戦闘機が格納されている様子が実写されている。特に、今回発掘調査を実施した郷之原台地（中原山野遺跡及び前畑遺跡）は、基地の北側に拡がる格好の広い台地で掩体壕の設置も多い。

第２図は、「西原掩体壕」と呼称された掩体壕の配置図である。これによると郷之原地区に設置された掩体壕や誘導路の位置が良く判明し、郷之原地区には総数44基程度の掩体壕が設置されていたことになる。幸いに『源氏松』も注記されており、今回の発掘調査に関係する掩体壕や周辺の誘導路を特定することも可能となった。

第２節　戦跡遺構について

幅12m という狭い幅の調査範囲ではあったが、掩体壕跡や誘導路跡及びその付属施設等の戦跡遺構を確認することができた。

掩体壕は、調査の結果、幅約11m の土塁を築き、外側に幅1.5m の壕を廻らせ、土塁の内側にも幅約40cmの小壕を廻らせている。排水を充分考えた壕と推定される。北側の外壕と内壕との幅は約11m 程度で東側は11.5m を測る。これが土塁の基部にあたり、古老によると電柱高さ程度の土盛とのことである。ＡＢ15区の東側外壕とＡ20区の西側外壕の間隔は約49m を測り、掩体壕の規模を知ることができる。また、東側の土塁の幅から推定すると掩体壕内部の広さは約25m 程度が想定できる。つまり、飛行機を格納する掩体壕内部の規模は、25m 程度となる。

続いて、この掩体壕の発見に関連して、次のような事実も判明した。まず、この地のシンボルとされた『源氏松』（図版６）は、その後、掩体壕の土塁に取り込まれたと伝えられていた。発掘調査の結果、掩体壕の土塁に位置するＡ20区を中心にかなり大きな松の樹根が放射状に拡がって検出された。樹根の規模から、これが『源氏松』であることが判明した。さらに、『源氏松』の近くに所在したと伝えられる墓についても、調査の結果、二基の墓壙が検出され、ほぼこれに該当することが判明した。さらに、興味深いことは、掩体壕の外壕は墓壙の直前で止まり、墓壙をを避けるように掘られている。つまり、掩体壕築造においては、墓を保護する意図が充分に考えられたことがわかる。

誘導路は、No.１（中原山野遺跡・ＡＢ２～４区）とNo.２（前畑遺跡・ＡＢ１～７区）の二カ

所でほぼ誘導路の規模が判明した。特に、№1は、両側の水路や路面が使用時の状態で検出され、あまり削平を受けていない。水路は鋭く「V」字状に掘られ、路面も水平で丁寧である。誘導路は、いずれも約14m幅であり、道路作りにおいても規格性がみられる。さらに、中央より東側寄りに幅5～6mの礫敷きがみられ、大規模な工事であったことも窺い知ることができる。

竪穴跡は、いずれも誘導路の付属施設と考えられるが、形状から二種類の性格が考えられる。№3はその位置や形状から水路の水溜め池、或は沈砂池であることが推定される。また、№1、№2については、竪穴の規格は長さ10m×幅4.2m程度を測り、床面は9°～10°の傾きをもって誘導路へ取り付けられる形である。戦車や高射砲車や軍用車などを格納する軍事施設であった可能性も存在するが定かではない。

いずれにせよ、これらの戦跡遺構は、築造された状態の比較的良好な形で検出されており、築造から廃棄までの時間の経過は少なく、急造の仕業であることを窺い知ることができる。

第3節　出土品について

出土遺物は、戦時品から遺品、生活品等の幅広い種類がみられた。戦時品では、弾薬が多く発見されたが、そのなかの弾丸は約60～70cmの深さに及び、弥生時代包含層や竪穴住居址の埋土まで達している。その威力の大きさには不気味ささえ感じた。

遺品の名札は、出土遺物の中では最も心打たれるものであった。几帳面に書かれた名前、追跡調査の結果など、戦争の悲惨さを物語るものである。

生活品については、電気備品、陶磁器類、ビン類等があるが、そのほとんどが当時を偲ばせるものである。例え半世紀前の戦時中とはいえ、モノの変化を知る事は歴史を知る上で大切な事である。出土した生活品については、代表的なものを断片的にしか取り扱えず、図化出来ない物も多分に多い。

以上、弥生時代や縄文時代の調査に先駆けて、戦跡遺構の調査を行なう結果となった。先史時代の調査を行なう過程で避けては通れぬものであったが、しかし、この調査の成果もこの地域の歴史的な流れを知る上の大切な記録となろう。

図　　版

PLATES

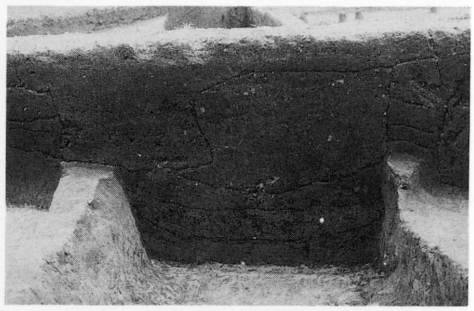
1．掩体壕跡遠景（東から）

2．掩体壕跡の外壕（北西から）

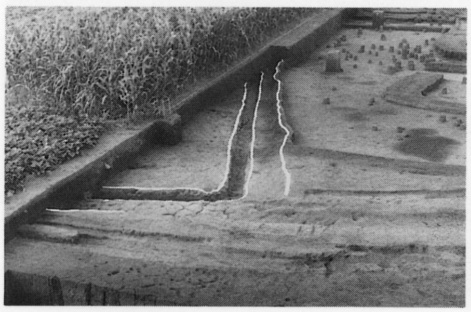
図版２

１．掩体壕跡の外壕（南西から）

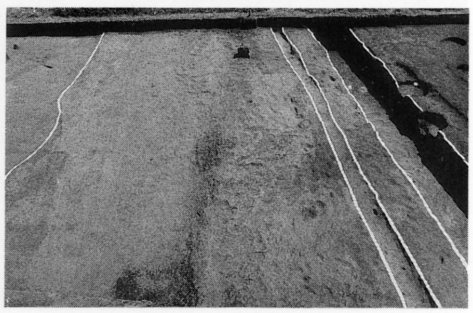
２．掩体壕跡の外壕の断面（D15区）



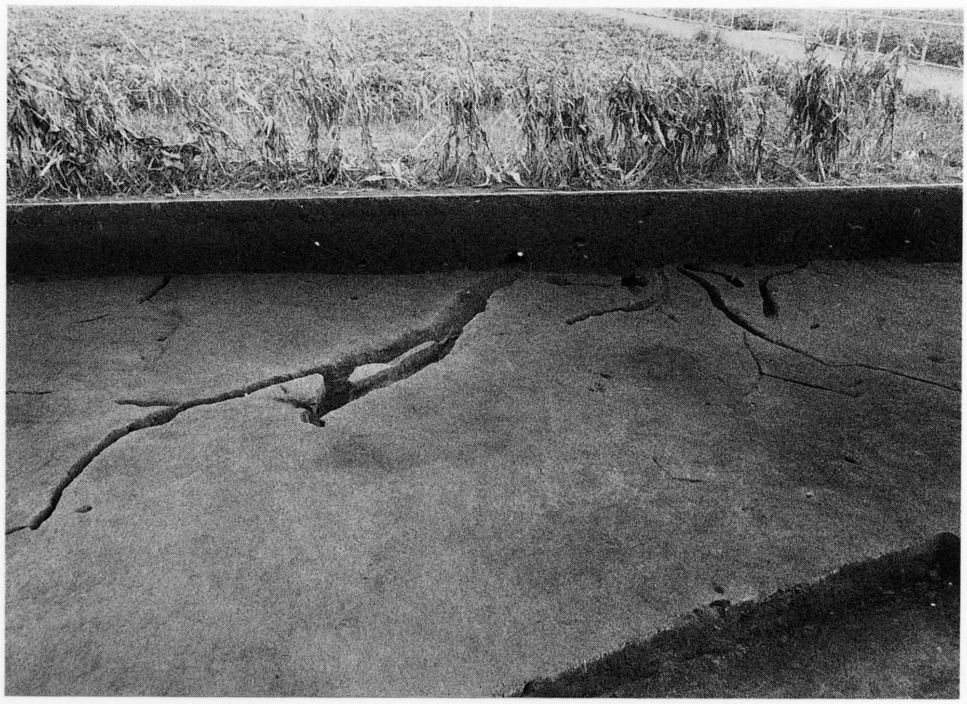
３．掩体壕跡の外壕の断面（B19区）



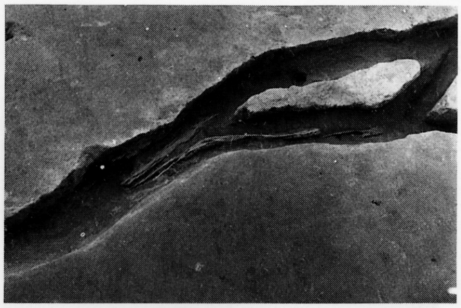
４．掩体壕跡の内壕（東から）



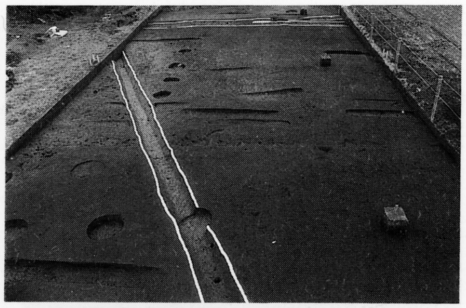
５．掩体壕内の旧道跡（南から）



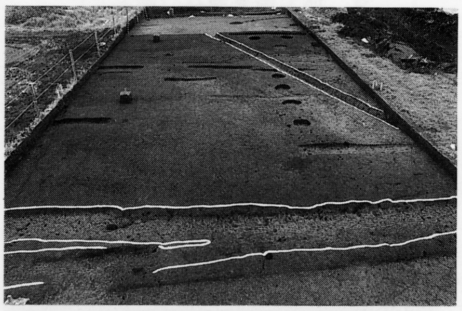
１．松の樹根跡全景（源氏松）



２．松の樹根跡近景



３．誘導路跡（２）の水路跡（東から）



４．誘導路跡（２）の水路跡（西から）

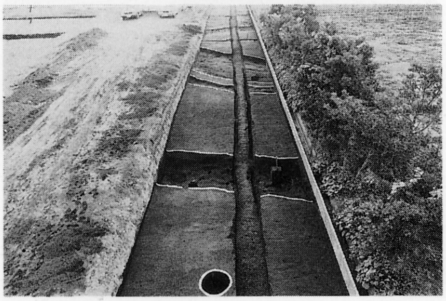
５．誘導路跡（２）の水路跡の断面

図版４

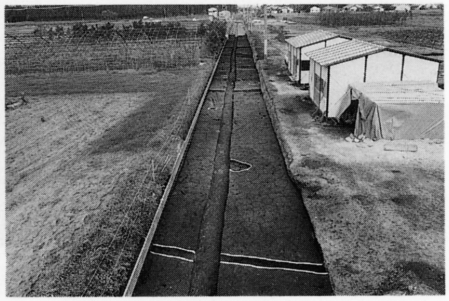
１．誘導路跡（１）の全景（南から）

２．砕石敷き部分と東側水路（南から）

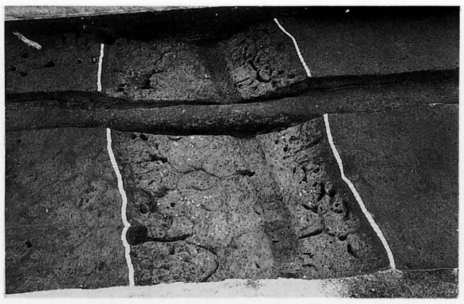
３．砕石敷き部分（南から）



４．中原山野遺跡のＤ区列全景（東から）



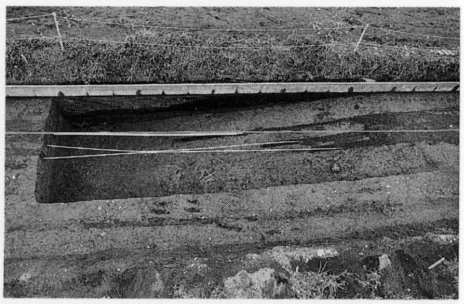
５．中原山野遺跡のＤ区列全景（西から）



１．旧道跡（中原山野遺跡Ｄ8・9区）

２．水路跡（中原山野遺跡Ｘ１区）

３．水路跡（前畑遺跡Ｕ１区）



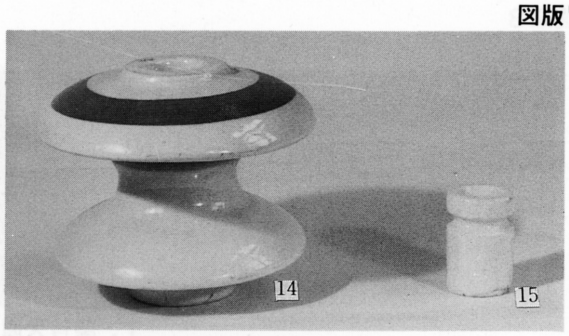
４．竪穴（１）（中原山野遺跡Ｄ22区・Ｄ23区）

５．竪穴（２）（前畑遺跡ＡＢ８区・ＡＢ９区）

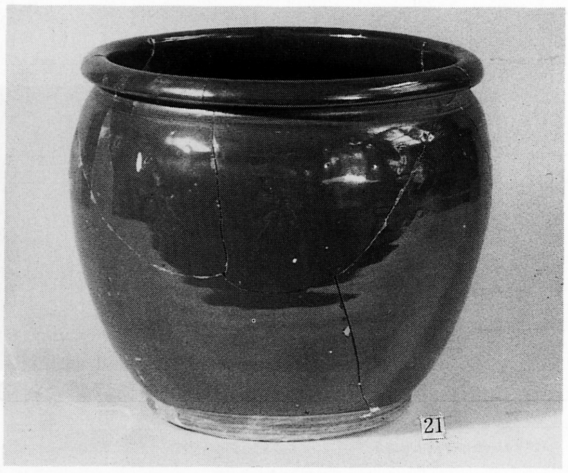
1．源氏松

2．弾・薬きょう

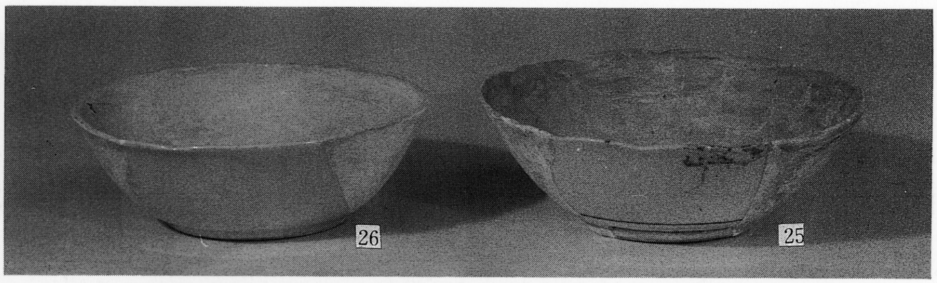
1．名札



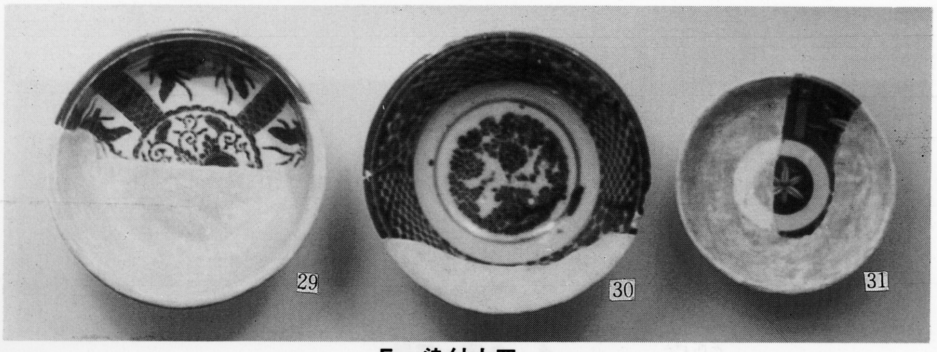
2．ガイシ



3．甕

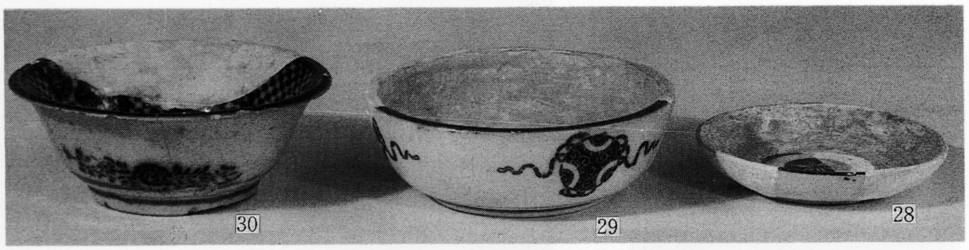


4．白磁大皿

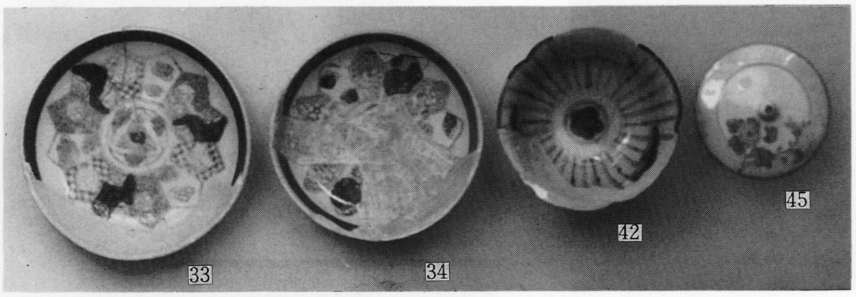


5．染付大皿

図版８

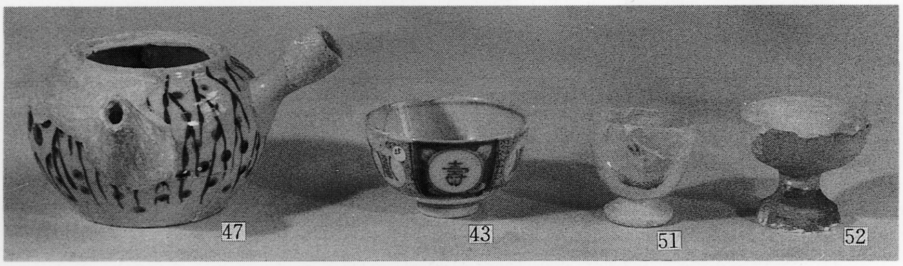


１．染付大皿



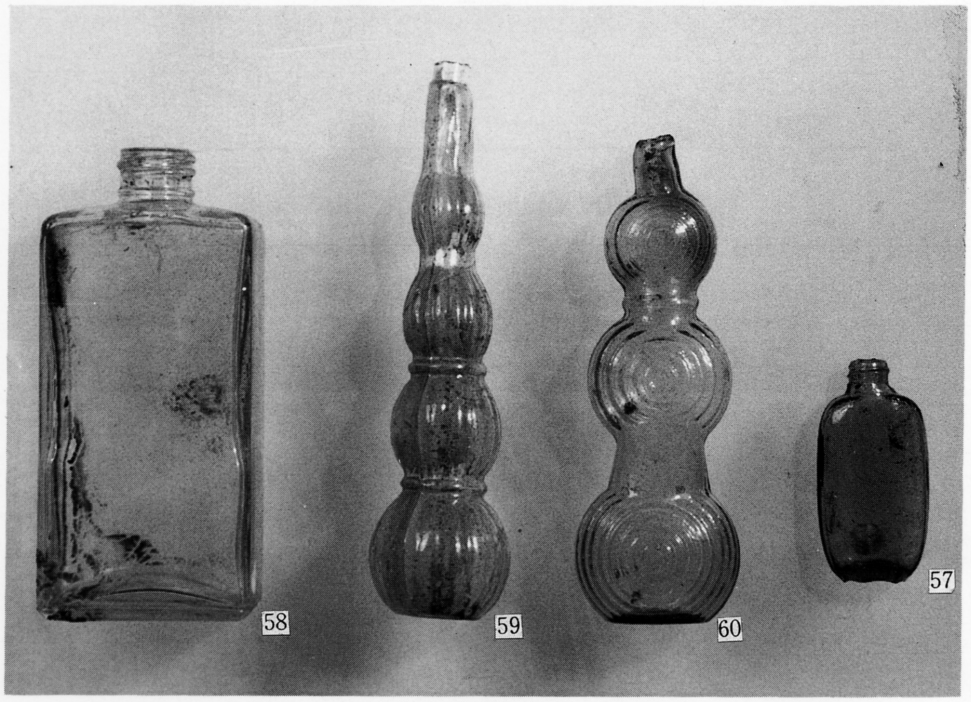
２．赤絵染付皿

３．染付碗・湯呑茶碗



４．急須・祭器

１．ビン類（１）



２．ビン類（２）

鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（52）
一般国道２２０号鹿屋バイパス建設に伴う発掘調査報告書（Ⅲ）

中ノ原遺跡（Ⅱ） 第５分冊

中原山野遺跡

西原掩体壕跡

発行日　平成２年３月
発　行　鹿児島県教育委員会　〒892 鹿児島市山下町14番50号
印刷所　中央印刷株式会社　〒892 鹿児島市春日町12番16号

鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（52）

一般国道２２０号鹿屋バイパス建設に伴う発掘調査報告書（Ⅲ）

前　畑　遺　跡

（第６分冊）

１９９０．３

鹿児島県教育委員会

例　　言

1．この報告書は、一般国道２２０号鹿屋バイパス建設に伴う大浦・郷之原地区の「前畑遺跡」の発掘調査書である。

2．この報告書は、鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（52）の「前畑遺跡」（第６分冊）である。

3．中ノ原遺跡は、鹿屋市郷之原町（旧字名前畑）に所在する。

4．発掘調査は、建設省九州建設局大隅工事事務所からの受託事業として鹿児島県教育委員会が実施した。

5．発掘調査は、昭和62年６月19日～昭和63年３月９日間と昭和63年４月19日～９月２日の間に実施した。整理作業は、昭和63年度と平成元年度に実施した。

6．発掘調査においては、鹿屋市教育委員会や大浦町内会の協力・援助を得た。

7．本書で用いたレベル数値は、すべて海抜高である。

8．現地調査においては、河口貞徳（鹿児島県文化財審議会審議員）・宮本長二郎（奈良国立文化財研究所遺構調査室長）・小片丘彦（鹿児島大学歯学部教授）・成尾英仁（鹿児島玉龍高校教諭）の御指導を得た。報告書作成作業においては、下篠信行（受媛大学法文学部教授）・上村俊雄（鹿児島大学法文学部教授）・武末純一（北九州市立考古博物館副館長）・ 櫻木晋一（九州帝京短期大学経済学部講師）・本田道輝（鹿児島大学法文学部助手）・成尾英仁（鹿児島玉龍高校教諭）の御指導を得た。

9．現地調査に関する実測及び写真撮影は、調査担当者（新東晃一・前迫亮一・梅北浩一・中村和美・八木沢一郎）で行った。出土遺物の実測・製図は雨宮瑞生・関一乏・八木沢・前迫・新東が行なった。

10．本書の執筆は、小片丘彦・峰　和治（第Ⅳ章第３節）、櫻木晋一（第Ⅳ章第４節）に玉稿を頂き、そのほか石器を雨宮（第Ⅱ章第２節２（２））と関（第Ⅱ章第２節２（２）M）と梅北（第Ⅱ章第３節２）が分担し、他を新東が担当した。

11．本書の編集は、鹿児島県教育庁文化課で行い、新東がこれを担当した。

目　　次

第Ⅰ章　調査の概要……1

第1節　調査の経緯……1
第2節　発掘調査の方法と経緯……1
第3節　発掘調査の概要……4
第4節　遺跡の層位……6

第Ⅱ章　縄文時代の調査……8

第1節　調査の概要……8
第2節　Ⅹ層の調査……8
1　Ⅹ層の概要……8
2　遺構……8
3　出土遺物……22
第3節　Ⅴ層の調査……85
1　Ⅴ層の概要……85
2　出土遺物……85

第Ⅲ章　弥生時代の調査……99

第1節　調査の概要……99
第2節　Ⅲ層の調査……99
1　遺構……99
2　出土遺物……136

第Ⅳ章　近世墓の調査……152

第1節　近世墓の概要……152
第2節　鹿屋市前畑遺跡出土の近世人骨　小片丘彦・峰　和治……161
第3節　前畑遺跡の出土銭貨と鹿児島県下の出土六道銭　櫻木晋一……167

第Ⅴ章　発掘調査のまとめ……173

挿　図　目　次

第１図　前畑遺跡の地形とグリッド配置図…… 3
第２図　大浦・郷之原地区の基本的層序と前畑遺跡の層位…… 7
第３図　前畑遺跡の層位図（１）…… 9
第４図　前畑遺跡の層位図（２）…… 11
第５図　集石遺構と礫の分布状況…… 13
第６図　１号集石実測図…… 15
第７図　２号集石実測図…… 16
第８図　３号集石実測図…… 17
第９図　４号集石実測図…… 18
第10図　５号集石実測図…… 19
第11図　６号集石実測図…… 20
第12図　集石遺構の石塊の最大長と重量比…… 21
第13図　Ⅹ層の遺物出土分布図…… 23
第14図　Ⅹ層の土器出土分布図…… 25
第15図　Ⅰ類・Ⅱ類土器実測図…… 27
第16図　Ⅲ類土器実測図…… 28
第17図　Ⅳ類土器出土分布図…… 31
第18図　Ⅳ類土器実測図（１）…… 33
第19図　Ⅳ類土器実測図（２）…… 34
第20図　Ⅳ類土器実測図（３）…… 35
第21図　Ⅳ類土器実測図（４）…… 36
第22図　Ⅳ類土器実測図（５）…… 37
第23図　Ⅳ類土器実測図（６）…… 39
第24図　Ⅳ類土器実測図（７）…… 40
第25図　Ⅳ類土器実測図（８）…… 41
第26図　Ⅳ類土器実測図（９）…… 42
第27図　Ⅳ類土器実測図（10）…… 43
第28図　Ⅳ類土器実測図（11）…… 44
第29図　Ⅳ類土器実測図（12）…… 45
第30図　Ⅳ類土器実測図（13）…… 46
第31図　Ⅳ類土器実測図（14）…… 47
第32図　Ⅳ類土器実測図（15）…… 48
第33図　Ⅳ類土器実測図（16）…… 49

第34図　Ⅳ類土器実測図（17）…… 50
第35図　Ⅳ類土器実測図（18）…… 51
第36図　Ⅳ類土器実測図（19）…… 54
第37図　Ⅳ類土器実測図（20）…… 55
第38図　Ⅳ類土器実測図（21）…… 56
第39図　Ⅳ類土器実測図（22）…… 57
第40図　Ⅳ類土器実測図（23）…… 58
第41図　Ⅴ類土器の分布と他類土器との比較…… 59
第42図　Ⅴ類土器実測図（１）…… 63
第43図　Ⅴ類土器実測図（２）…… 64
第44図　Ⅴ類土器実測図（３）…… 65
第45図　Ⅵ類土器実測図…… 65
第46図　Ⅹ層石器出土分布図…… 67
第47図　石器実測図（１）…… 69
第48図　石器実測図（２）…… 70
第49図　石器実測図（３）…… 71
第50図　石器実測図（４）…… 72
第51図　石器実測図（５）…… 73
第52図　石器実測図（６）…… 74
第53図　石器実測図（７）…… 75
第54図　石器実測図（８）…… 76
第55図　石器実測図（９）…… 77
第56図　石器実測図（10）…… 78
第57図　石器実測図（11）…… 79
第58図　石器実測図（12）…… 80
第59図　石器実測図（13）…… 81
第60図　石器実測図（14）…… 82
第61図　石器実測図（15）…… 83
第62図　Ⅴ層出土遺物分布図…… 85
第63図　Ⅴ層土器出土状況…… 86
第64図　土器実測図…… 87
第65図　石器実測図…… 88
第66図　Ⅲ層遺構配置図……100
第67図　１号住居址遺物分布図……101
第68図　１号住居址遺物出土状況図……102

第 69図　1号住居址実測図 ……103
第 70図　1号住居址出土遺物実測図 ……103
第 71図　2号住居址遺物分布図 ……104
第 72図　2号住居址遺物出土状況図 ……105
第 73図　2号住居址実測図 ……106
第 74図　2号住居址出土遺物実測図（1）……107
第 75図　2号住居址出土遺物実測図（2）……107
第 76図　2号住居址出土遺物実測図（3）……108
第 77図　3号住居址遺物分布図 ……109
第 78図　3号住居址遺物出土状況図 ……110
第 79図　3号住居址実測図 ……111
第 80図　3号住居址出土遺物実測図（1）……112
第 81図　3号住居址出土遺物実測図（2）……113
第 82図　3号住居址出土遺物実測図（3）……114
第 83図　1号掘立柱建物跡遺物出土状況図 ……115
第 84図　1号掘立柱建物跡実測図 ……116
第 85図　1号掘立柱建物跡出土遺物実測図 ……117
第 86図　2号掘立柱建物跡遺物出土状況図 ……120
第 87図　2号掘立柱建物跡実測図 ……121
第 88図　2号掘立柱建物跡出土遺物実測図（1）……123
第 89図　2号掘立柱建物跡出土遺物実測図（2）……124
第 90図　2号掘立柱建物跡出土遺物実測図（3）……125
第 91図　3号掘立柱建物跡実測図 ……126
第 92図　4号掘立柱建物跡実測図 ……128
第 93図　5号掘立柱建物跡実測図 ……129
第 94図　6号掘立柱建物跡実測図 ……130
第 95図　7号掘立柱建物跡実測図 ……131
第 96図　8号掘立柱建物跡実測図 ……133
第 97図　8号掘立柱建物跡出土遺物実測図 ……134
第 98図　円形周溝遺構実測図 ……134
第 99図　円形周溝出土遺物実測図 ……135
第100図　Ⅲ層遺物出土分布図 ……137
第101図　Ⅲ層出土遺物実測図（1）……139
第102図　Ⅲ層出土遺物実測図（2）……140
第103図　Ⅲ層出土遺物実測図（3）……141
第104図　Ⅲ層出土遺物実測図（4）……142

第105図　Ⅲ層出土遺物実測図（5）……143
第106図　Ⅲ層出土遺物実測図（6）……143
第107図　Ⅲ層出土遺物実測図（7）……145
第108図　Ⅲ層出土遺物実測図（8）……146
第109図　Ⅲ層出土遺物実測図（9）……147
第110図　近世墓の配置図 ……152
第111図　墓壙配置図（1）……153
第112図　1号墓実測図 ……154
第113図　1号墓出土古銭 ……154
第114図　2号墓実測図 ……155
第115図　2号墓出土古銭 ……155
第116図　3号墓実測図 ……156
第117図　3号墓出土古銭 ……156
第118図　4号墓・5号墓実測図 ……157
第119図　4号墓・5号墓出土古銭 ……157
第120図　墓壙配置図（2）……158
第121図　6号墓実測図 ……159
第122図　6号墓出土古銭 ……159
第123図　7号墓実測図 ……160
第124図　7号墓出土ガラス玉実測図 ……160

表　目　次

第 1 表　遺跡出土遺物一覧表 …… 89
第 2 表　遺跡出土遺物一覧表 …… 90
第 3 表　遺跡出土遺物一覧表 …… 91
第 4 表　遺跡出土遺物一覧表 …… 92
第 5 表　遺跡出土遺物一覧表 …… 93
第 6 表　遺跡出土遺物一覧表 …… 94
第 7 表　遺跡出土遺物一覧表 …… 95
第 8 表　遺跡出土遺物一覧表 …… 96
第 9 表　出土石器一覧表 …… 96
第 10 表　出土石器一覧表 …… 97
第 11 表　出土石器一覧表 …… 98
第 12 表　1号掘立柱建物跡の一覧表 ……118
第 13 表　2号掘立柱建物跡の一覧表 ……124
第 14 表　3号掘立柱建物跡の一覧表 ……127

第 15 表　4 号掘立柱建物跡の一覧表 ……128
第 16 表　6 号掘立柱建物跡の一覧表 ……129
第 17 表　7 号掘立柱建物跡の一覧表 ……131
第 18 表　8 号掘立柱建物跡の一覧表 ……132
第 19 表　遺跡出土遺物一覧表 ……148
第 20 表　遺跡出土遺物一覧表 ……149
第 21 表　遺跡出土遺物一覧表 ……150
第 22 表　出土石器一覧表 ……151

図　版　目　次

図版 1　1．前畑遺跡・中原山野遺跡遠景（南西から）……179
　　2．前畑遺跡の層位
図版 2　1．集石遺構検出状況（西から）……180
　　2．石斧（306）出土状況
　　3．Ⅹ層検出状況　　4．土器（30）出土状況
図版 3　1．4 号集石と周辺の検出状況……181
　　2．3 号集石　　3．3 号集石断面
　　4．6 号集石　　5．6 号集石断面
図版 4　1．縄文土器（Ⅹ層）（1）……182
図版 5　1．縄文土器（Ⅹ層）（2）……183
図版 6　1．縄文土器（Ⅹ層）（3）……184
図版 7　1．縄文土器（Ⅹ層）（4）……185
図版 8　1．縄文土器（Ⅹ層）（5）……186
図版 9　1．縄文土器（Ⅹ層）（6）……187
図版10　1．縄文土器（Ⅹ層）（7）……188
図版11　1．縄文土器（Ⅹ層）（8）……189
図版12　1．縄文土器（Ⅹ層）（9）……190
図版13　1．縄文土器（Ⅹ層）（10）……191
図版14　1．縄文土器（Ⅹ層）（11）……192
図版15　1．縄文土器（Ⅹ層）（12）……193
図版16　1．縄文土器（Ⅹ層）（13）……194
図版17　1．縄文土器（Ⅹ層）（14）……195
図版18　1．縄文土器（Ⅹ層）（15）……196
図版19　1．石器（Ⅹ層）（1）……197

図版20　1．石器（Ⅹ層）（2）……198
図版21　1．石器（Ⅹ層）（3）……199
図版22　1．石器（Ⅹ層）（4）……200
図版23　1．石器（Ⅹ層）（5）……201
図版24　1．Ⅵ層遺物出土状態（東から）……202
　　2．Ⅵ層土器出土状態（386）
　　3．縄文土器（Ⅵ層）
図版25　1．石器（Ⅵ層）……203
図版26　1．Ⅲ層（弥生時代）全景（東から）……204
　　2．Ⅲ層（弥生時代）全景（北東から）
図版27　1．Ⅲ層（弥生時代）遺構近景（北から）……205
　　2．Ⅲ層（弥生時代）遺構近景（西から）
図版28　1．Ⅲ層遺物出土状況遠景（東から）　2．土器出土状況……206
　　3．土器出土状況　4．土器出土状況
　　5．石器（536）出土状況　6．鉄片出土状況
　　7．石鏃（527）出土状況
図版29　1．1号住居址遠景（東から）　2．1号住居址検出状況……207
　　3．1号住居址掘り下げ状況（北から）　4．1号住居址掘り下げ状況（南から）
　　5．柱炭化木検出状況　6．1号住居址出土遺物
図版30　1．1号住居址全景　2．1号住居址全景……208
図版31　1．2号住居址検出状況　2．住居址掘り下げ状況……209
　　3．炭化木出土状況　4．住居址床面検出状況
　　5．2号住居址遠景（南から）
図版32　1．2号住居址検出状況（南から）……210
　　2．2号住居址全景（南から）
図版33　1．2号住居址出土遺物（1）……211
図版34　1．2号住居址出土遺物（2）……212
図版35　1．3号住居址掘り下げ状況（1）　2．3号住居址掘り下げ状況（2）……213
　　3．3号住居址全景　4．3号住居址遠景
　　5．3号住居址全景
図版36　1．1号掘立柱建物掘り入げ状況（1）……214
　　2．1号掘立柱建物掘り下げ状況（2）
図版37　1．1号掘立柱建物検出状況　2．掘り下げ状況（1）……215
　　3．掘り下げ状況（2）　4．検出状況
　　5．1号掘立柱建物検出状況

図版38　1．柱穴掘り下げ状況　2．溝1断面（1）……216
3．溝1断面（2）　4．建物内路址検出状況
図版39　1．1号掘立柱建物・溝1出土遺物……217
図版40　1．2号掘立柱建物検出状況（北から）……218
2．2号掘立柱建物掘り下げ状況（北から）
図版41　1．溝2遺物出土状況（南から）　2．溝2遺物出土状況（南から）……219
3．2号掘立柱建物検出状況（北から）　4．溝2全景（東から）
5．柱穴掘り下げ状況（北から）　6．2号掘立柱建物遠景（北から）
図版42　1．2号掘立柱建物（溝内）出土遺物……220
図版43　1．4号掘立柱建物掘り下げ状況　2．作業風景……221
3．4号建物と溝3遠景　4．4号掘立柱建物全景
図版44　1．6号・7号建物検出状況（1）　2．6号・7号建物検出状況（2）……222
3．6号・7号建物掘り下げ状況　4．6号・7号・8号建物全景
5．6号・7号掘立柱建物全景
図版45　1．8号建物掘り下げ状況（東から）　2．建物群遠景（西から）……223
3．8号建物柱穴出土遺物　4．柱穴掘り下げ状態
5．8号建物全景（東から）
図版46　1．柱穴検出状態……224
図版47　1．柱穴検出状態……225
図版48　1．Ⅲ層出土土器（1）……226
図版49　Ⅲ層出土土器（2）……227
図版50　Ⅲ層出土土器（3）……228
図版51　1．Ⅲ層出土土器（4）……229
図版52　1．Ⅲ層出土石器……230
図版53　1．中・近世溝状遺構（ＡＢ　区）……231
2．中・近世溝状遺構（ＡＢ　区）
図版54　1．1号墓（北から）　2．1号墓遺物出土状態……232
3．1号墓作業風景　4．2号・3号墓（東から）
5．2～5号墓（北から）　6．2～5号墓（北西から）
図版55　1．3～5号墓（東から）　2．4号墓出土状態……233
3．4号・5号墓（東から）　4．6号墓（北から）
5．7号墓出土遺物　6．7号墓（東から）
図版56　1．古銭（1号～4号墓）　2．ガラス玉（2号墓）……234
3．古銭（6号墓）　4．櫛（4号墓）
5．古銭（6号墓）　6．数珠玉（7号墓）

第Ⅰ章　調査の概要

第1節　調査の経緯

前畑遺跡は、郷之原台地の中央を通る県道西原～郷之原線の西側の平坦地に位置し、中原山野遺跡には隣接している。

昭和59年度の分布調査では、県道から排水路までの遺物の散布がみられたため、これを第4地点とした。

建設省大隅工事事務所と鹿児島県教育委員会との協議に基づき、昭和60年4月確認調査を実施した。確認調査は、ほぼ中央の畑地にトレンチを1本設定した。確認調査の結果、この部分でアカホヤ火山灰の下層に縄文時代早期の包含層を確認した。遺物は密集しており遺跡の中心部と考えられた。

建設省大隅工事事務所と鹿児島県教育委員会との協議の結果、この第5地点は、昭和62年度に再度確認調査を実施することとした。

第2節　発掘調査の方法と経過

前畑遺跡の昭和62年度の発掘調査は、本道部分の確認調査と一部の本調査及び上水道埋設部分等の確認調査及び本調査を実施した。発掘調査は、昭和62年6月19日から昭和63年3月9日に実施したが、工事の関係で中原山野遺跡と並行して実施せざるを得なかった。本道部分は、散布域のＡＢ20区付近までの確認調査を終了した。ＡＢ20区付近の確認調査の結果、ＡＢ20区以西にも遺跡が拡張することが判明した。建設省大隅工事事務所と鹿児島県教育委員会との協議の結果、ＡＢ20区以西に確認調査を追加することになった。

発掘調査は、昭和62年度と昭和63年度の2年度にわたって実施した。

前畑遺跡の昭和62年度の発掘調査は、昭和62年6月19日から昭和63年3月9日の間に実施したが、工事の関係で中原山野遺跡と並行して実施せざるを得なかった。本道部分は、散布域のＡＢ20区付近までの確認調査を昭和62年6月19日から7月15日の1カ月間、中原山野遺跡の確認調査と並行して実施した。遺跡の想定をもとに、工事用センター杭№415と№420を基準に10m×10mのグリッド網を確認調査対象区に被せ実施した。そして、グリッドは、東端から1～10区と南からＡ～Ｃ区として，各グリッドはＡ1区……Ａ10区，Ｂ1区……Ｂ10区などと呼称することにした。そのグリッドの東側に2m×10mの確認調査トレンチを1グリッド毎に設定した。

ＡＢ20区付近の確認調査の結果、ＡＢ20区以西にも遺跡が広がることが判明した。建設省大隅工事事務所と鹿児島県教育委員会との協議の結果、ＡＢ20区以西に確認調査を追加すること

になった。以下、発掘調査の経過は日誌抄をもって説明する。

【昭和62年度の調査】　昭和62年６月19日～昭和63年３月９日

６月は、グリッド設定を行い確認調査に入る。Ｂ７区～Ｂ17区までトレンチを設定。６月は確認調査に終始。表土直下から戦跡遺構、その下には弥生時代と縄文時代晩期が、さらに下層には縄文時代早期の包含層が確認された。

７月は、６月の継続とＢ19区、Ｂ20区の確認トレンチ掘り下げ作業。ほぼ遺物分布範囲のトレンチ設定は完了。すべてのトレンチで包含層を確認する。ＡＢ20区以西の部分にも遺跡の広がりが想定され、建設省大隅工事事務所と協議を行う。ＡＢ20区付近から以東に平面調査を実施する。ＡＢ15区～ＡＢ20区に掩体壕跡を検出。清掃・写真撮影・実測作業を行う。その下層に、ＡＢ17区～ＡＢ20区に弥生時代包含層を検出し掘り下げ開始。７月26日『かごしまの古代探訪』。

８月は、掩体壕の精査と周辺の弥生時代包含層の掘り下げ作業。ＡＢ12区・ＡＢ13区の平面調査で近世墓検出。10日、小片丘彦鹿児島大学教授近世墓調査。11日、建設省よりＡＢ20区以西の確認調査の依頼があり、Ｂ23区～ＡＢ27区にトレンチ設定。その結果、ＡＢ24区付近まで弥生時代包含層が残存することが確認される。ＡＢ17区～ＡＢ20区に住居址や掘立柱建物跡等の弥生時代遺構検出。この区の遺構の配置をほぼ確認する。

９月は、ＡＢ21区～ＡＢ25区の弥生時代の遺構の検出作業。表土剝ぎ作業を行い、表土直下に弥生時代包含層を検出。遺物実測・取り上げ作業の処理を行い遺構検出作業。17日、掘立柱建物跡５基を確認する。この区は、建物跡だけ存在する。遺構の精査と平面実測に入る。並行して18日からは、ＡＢ６区～ＡＢ12区の弥生時代包含層の掘り下げに入る。

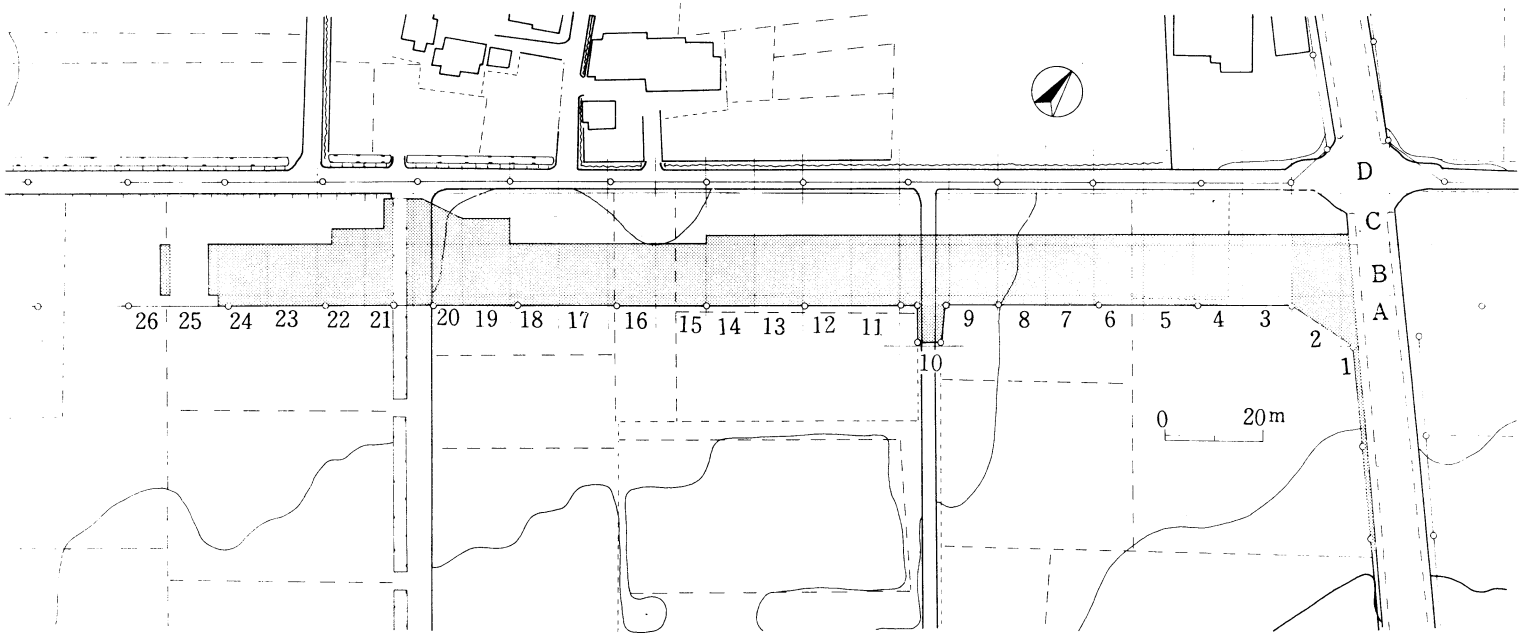
10月は、工事の関係で中原山野遺跡の調査を中心に行う。その間、ＡＢ13区～ＡＢ15区のアカホヤ火山灰上部の清掃とＡＢ11区・ＡＢ12区縄文時代早期包含層の調査を開始。

11月は、中原山野遺跡の調査に主力を置く。一部、Ｃ１区とＤ１区の電話線埋設部分の調査を行う。そしてＡＢ11区・ＡＢ12区縄文時代早期包含層の調査。

12月は、県道西原～郷之原線の前畑遺跡分の上水道埋設部分の調査に入る。戦跡遺構と縄文時代早期包含層を検出。また、20区～21区にかかる排水溝の建設のため、Ｃ19区・Ｃ20区を拡張する。22日からＡＢ13区・ＡＢ14区のアカホヤ火山灰層を排土し、早期包含層の掘り下げ作業を行う。年度末は25日に終了。

１月は、６日調査開始。ＡＢ11区～ＡＢ14区の縄文時代早期包含層の調査から開始する。早期の遺物が多量に出土。継続してＡＢ20区・ＡＢ21区の道路部分の掘り下げ作業を行う。道路下の弥生時代包含層は遺物が多量に出土する。遺物の処理後、遺構検出作業。月末は住居址１号～３号の掘り下げに主力を置く。

２月は、住居址１号～３号の掘り下げ作業及び実測。並行してＡＢ11区～ＡＢ13区の早期包含層の掘り下げ作業継続。続いて建物跡の一段掘りを行い建物跡の配置を確認。10日、河口貞



第１図　前畑遺跡の地形とグリッド配置図

徳県文化財保護審議会委員現地指導。12日、全体写真撮影。排水溝工事のため建物跡２及び建物跡３の柱穴掘り下げ。月末、21区以西の建物跡の調査に主力を置き終了する。宮本長二郎奈良国立文化財研究所遺構調査室長、建物跡調査指導。

３月は、住居址１号～３号及び建物跡１号～３号の実測・写真撮影を行い終了。今年度の工事区間については９日で終了する。

【昭和63年度の調査】　昭和63年４月19日～９月２日

４月は、昨年度の残部のＡＢ４区・ＡＢ５区の表土剝ぎ作業を行い遺構検出。戦跡遺構（誘導路）を検出。さらに、ＡＢ13区・ＡＢ14区は縄文時代早期の遺物の検出及び実測取り上げ作業継続。弥生時代住居址１号・２号の最終面の写真実測。

５月は、ＡＢ11区～ＡＢ14区間の縄文時代早期包含層の掘り下げ検出作業を継続。大量の遺物とともに集石遺構検出。集石は３基検出。写真撮影及び実測作業。

６月は、しばらく先月の継続。ＡＢ11区～ＡＢ14区の早期包含層の掘り下げ作業。13日からＡＢ３区～ＡＢ４区の早期包含層掘り下げに移る。20日からＡＢ５区～ＡＢ６区の早期包含層に移る。ＡＢ３区～ＡＢ４区は下層確認の深掘り作業。ＡＢ７区～ＡＢ９区へ移動。早期包含層はほとんど全域に拡がる。

７月は、ＡＢ７区～ＡＢ９区の早期包含層の掘り下げ及び実測・遺物取り上げ作業。10区へも入る。ＡＢ９区～ＡＢ10区付近が最も遺物が多く難行。

８月は、ＡＢ７区～ＡＢ10区の早期包含層の最終面の調査。Ｃ３区～Ｃ６区の拡張区の早期包含層の掘り下げ作業に入る。Ｃ３区拡張区より縄文時代早期の特殊石斧が出土。ＡＢ７区、ＡＢ９区の下層確認の深掘りトレンチ掘り下げ作業続行。断面実測。集石遺構の実測。集石３号～８号は平面実測から開始。１号・２号は断面実測に移る。月末終了。17日から、Ｃ７区～Ｃ14区の早期包含層の掘り下げ開始。遺物実測。取り上げ作業の継続。掘り下げ作業は８月31日で終了。９月１日～２日、残部の断面実測を終了し、機材等を撤去し運搬。前畑遺跡の全ての発掘調査を完了する。

第３節　発掘調査の概要

昭和62年度の発掘調査は、戦跡遺構と弥生時代の住居址・掘立柱建物跡等の集落跡の調査及び縄文時代早期包含層の一部の調査である。

本発掘調査は、上層から順次行った。その結果、ＡＢ１区～ＡＢ20区にかけては、戦時中の遺構・遺物が多量に出土した。ＡＢ１区～ＡＢ10区には、誘導路と付属施設が検出された。さらに、ＡＢ14区～ＡＢ20区には、飛行機を格納するための掩体壕が検出されている。

その下層には、近世の溝状遺構と墓が検出されている。溝状遺構は、ＡＢ７区～ＡＢ８区、ＡＢ11区～ＡＢ12区、ＡＢ17区～ＡＢ24区にかけて検出されたが用途は不明である。近世墓は

ＡＢ12区～ＡＢ13区、ＡＢ20区にかけて７基発見されている。

ＡＢ16区～ＡＢ25区の間に弥生時代の、遺物包含層・遺構が検出された。遺構は、竪穴住居址３基、掘立柱建物跡８棟、円形周溝１基、溝状遺構３基（但し、建物に付随するものが２基）検出された。時期は、弥生時代中期末～後期初頭の山ノ口式土器に該当するものである。

住居址は、Ｂ７区（１号）、ＢＣ19区（２号）、Ｂ20区（３号）に所在し、いずれも方形の平面プランを呈するものである。１号及び２号住居址は、焼失家屋であり、炭化木が住居址内に多量に出土している。

掘立柱建物跡は、二通りのタイプがみられる。一つのタイプは１号～３号建物で、梁間が３間のものである。３号は現水路で破壊されているため全形は知り得ないが、１号、２号建物は、梁間×桁行間が３間×４間である。１号、２号には、中央付近に炉跡状の変色部分が確認され、さらに北側に溝状の遺構が付設されている。なお、１号建物には、棟持柱状の柱穴が梁間外側に確認された。平地式建物の可能性が大きい。

二つ目のタイプは、梁間が１間のものである。４号建物は、１間×１間のタイプである。５号建物は用地外に延びるが、１間×２間の建物の可能性が強い。６号～８号建物は、１間×２間の同一タイプのものである。外側の４本柱が主柱で掘り方が大きく深い。中柱は小さく浅いため添え柱の可能性が強い。高床倉庫跡の可能性が大きい。

円形周溝は、Ｃ20区に１基発見された。２号建物と３号建物に切られているため、この円形周溝が一番古い段階の構築物であることがわかる。用途は不明である。

溝状遺構は１号・２号は建物跡に付随するものである。建物跡に付随した溝は全国的にも珍しく極めて貴重である。３号溝は直角に曲がる形で検出されたが、削平されて全容は不明である。

特に、竪穴住居址、平地式建物跡、円形周溝遺構、高床式建物跡の遺跡内での配置は、集落構成を知るための貴重な資料となった。

縄文時代晩期の時期は、ＡＢ１区～ＡＢ９区の間に確認された。この区間については、包含層の掘り下げで終了した。遺構は検出されていない。

縄文時代早期の時期は、ＡＢ１区～ＡＢ17区間に確認され一部を終了し、残りについては昭和63年度に継続して実施することになった。早期の時期は、集石遺構等が確認されている。早期該当の時期は、平栫式土器を中心に出土し、石坂式土器・塞ノ神式土器が若干含まれる。

昭和63年度の発掘調査は、ＡＢ４区～ＡＢ５区の未調査（未買収）の部分の調査とＡＢ11区～ＡＢ14区の縄文時代早期包含層の掘り下げ作業を行う。さらに、建設省から２ｍ幅の工事拡張のための調査依頼があり、その部分を追加して調査を行う。

調査は、ほとんど縄文時代早期包含層の掘り下げ作業で集石遺構８基に伴って大量の遺物が出土している。ＡＢ９区～ＡＢ11区付近が微高地状に高くなり、その微高地は南の用地外に広がる。特に縄文時代早期の遺物の中心は、ＡＢ９区～ＡＢ13区付近で用地外は南側に広がることが予想される。

集石遺構は、この微高地の北側の端部に配置されている。調査範囲内で８基の検出であり、用地外を含めると相当な存在が予想される。

微高地上の集石遺構に囲まれた中央に広場状の空間が存在するが、住居址等の遺構は存在しない。

なお、Ｃ３区の拡張区の縄文時代早期包含層中から、敲打仕上げの特殊な石斧が出土し注目されている。

第４節　遺跡の層位

前畑遺跡の層位は、発掘調査対象区域が約250ｍにも及ぶため区によっては大きな変化がみられる。先に記載（第一分冊「概要編」・第Ⅲ章・第１節）した大浦・郷之原地区の基本的層序と比較すると、欠落する層位や若干変容する層位もかなりみられる。そのためここでは、前畑遺跡のうち安定した地層と考えられるＢ10区とＢ11区付近の層位から前畑遺跡の層位的特徴を説明する。

挿図の第３図と第４図は、前畑遺跡の層位断面図である。層位断面図は、発掘調査対象区が道路建設のため12m幅で台地を輪切りにした形で長く延びるため、センター部分つまりＢ区列の北側断面を１本通した。それが、第３図①～第４図⑧である。そのほかに、台地の縦位の地層を知るために20m毎に東側断面を提示した。それが、第３図～第４図である。

前畑遺跡の層位をみると、ほぼ基本的層序に準じている。このなかで前畑遺跡で確認されず欠落することが考えられる層は、Ⅻ層の砂礫層である。この砂礫層は入戸火砕流堆積後の自然現象によるもので、台地端部などに局部的形成が考えられるものであり、台地中央部に位置する前畑遺跡で欠落するのは当然の現象である。

Ⅰ層は、ａ～ｃの３つに分離しているが、前畑遺跡ではほとんどがａ、ｂの２層が確認される。特に、縄文時代早期遺跡が所在するＢ３区からＢ15区付近は高台のためか、削平されて旧地形をとどめていない。ただ、弥生時代の遺構が検出されたＢ19区～Ｂ20区の一部の付近だけはａ～ｃ層やその直下の層が残存しているようである。

Ⅱ層は、純黒色の奇麗な土層である。Ｂ７区付近からＢ11区の途中までとＢ19区の途中からＢ22区の途中までに残存している。いずれも下層が凹地を形成している部分にあたる。確かな遺構・遺物は確認されていないが、実態の不明な溝状遺構がみられるのみである。

Ⅲ層は、黒褐色土層で弥生時代中期～後期初頭の包含層である。弥生時代の遺構をはじめ多くの遺物が出土している。ＡＢ16区～ＡＢ24区付近の範囲である。

Ⅳ層は、黄茶褐色土層を呈する。黄色の微粒子を含み火山灰状を呈している。この層は、中原山野遺跡の調査の結果、中原山野遺跡の黄白色土層に対比されることが判明した。しかもこの層は火山灰層ではなく、下層のⅪ層にあたる薩摩降下軽石火山灰層の二次堆積の可能性が高い。中原山野遺跡では厚い独立層を形成するが、縁辺部の遺跡ではこのように薄い形状の堆積

になる。

Ⅴ層は、茶褐色土層で縄文時代晩期の包含層を形成している。本遺跡では、６～９区に包含層が残存し遺物が出土している。他の地区は、削平されている。

Ⅵ層は、黄褐色土層であり、一般的にはアカホヤ火山灰層の二次堆積層である。下層にⅦ層にあたる池田降下軽石層が浮遊した状態で堆積し、この軽石層より上面がⅥ層にあたる。

Ⅶ層は、池田降下軽石火山灰層に相当するが、この付近では層は形成されていない。

Ⅷ層は、アカホヤ火山灰層に相当する。Ⅷ層はⅧａ層の赤褐色土層が大部分を占めるが、これは幸屋火砕流に比定されるものである。

Ⅸ層は、前畑遺跡ではほとんどみられない。権現山火山灰と呼ばれるものに相当する。

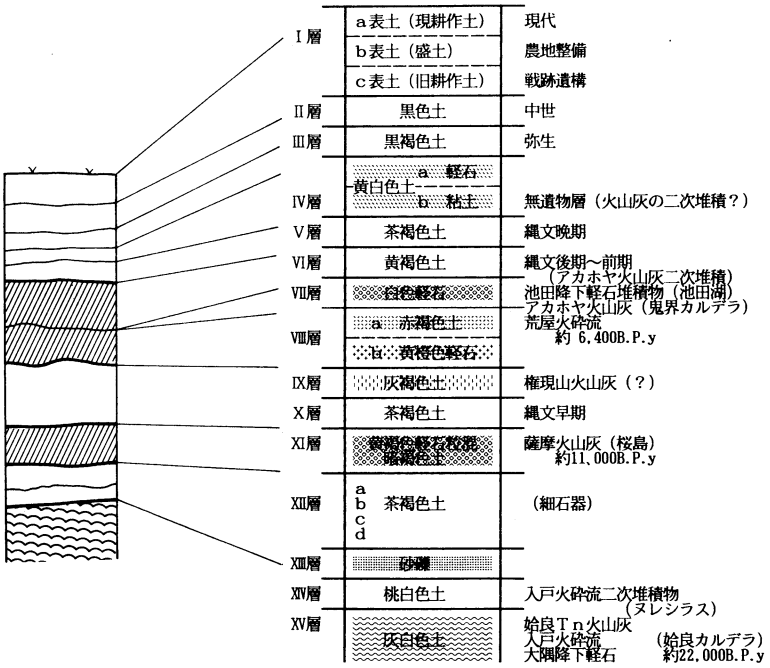
Ⅹ層は、茶褐色土層の粘土層で、一般的に縄文時代早期の包含層を形成する。前畑遺跡ではＡＢ２区付近からＡＢ14区付近まで包含層が形成され、集石遺構や多量の遺物がみられる。

Ⅺ層は、黄褐色軽石粒混暗褐色土層でいわゆる「薩摩火山灰層」と呼ばれる火山灰堆積物から成っている。部分的に止切れる部分もみられるが、ほとんどの地点で層形成がみられる。

Ⅻ層は、茶褐色土層の粘土層である。一般的には細石器文化が包含されるが、本遺跡では層は存在するが細石器文化は確認されていない。

XⅢ層は、桃白色土層で、通称ヌレシラスと呼ばれる入戸火砕流の二次堆積物である。

XⅣ層は、入戸火砕流で通称「シラス」と呼ばれる堆積物である。通常本県では、数ｍ～数十ｍの厚い堆積がみられ、本遺跡では基盤層と成っている。



第２図　大浦・郷之原地区の基本的層序と前畑遺跡の層位

第Ⅱ章　縄文時代の調査

第1節　調査の概要

縄文時代の調査は、確認調査の結果をもとに上層の戦跡遺構、近世遺構及び弥生時代の調査終了後に行なったが、道路建設工事の進行と年度毎の進捗状況によって各区の調査行程は若干異なっている。

前畑遺跡の縄文時代は、Ⅹ層（アカホヤ火山灰下層）中から早期に該当する時期（ＡＢ８区～ＡＢ14区を中心にした範囲）と、Ⅴ層に晩期に該当する時期（ＡＢ６区～ＡＢ８区の範囲）の２時期の包含層が検出された。

調査は、該当層の遺物包含層の掘り下げ作業後、遺物の検出作業、出土状態の写真撮影・実測作業、遺構検出作業の順の行程で進行した。

縄文時代（Ⅹ層・Ⅴ層）の確認調査については、ＡＢ２区～ＡＢ24区までは20m毎に２m×12mの南北トレンチ調査で確認調査を実施した。その結果、Ⅴ層の包含層はＡＢ６区～ＡＢ８区に確認され、Ⅹ層の包含層はＡＢ８区～ＡＢ14区に確認された。そして、Ⅴ層から引き続き全面調査を実施した。

Ⅹ層は、総数約4,500点の遺物のほか集石遺構６基以上が検出されている。Ⅴ層には、総数117点の遺物の出土がみられた。

第2節　Ⅹ層の調査

1　Ⅹ層の概要

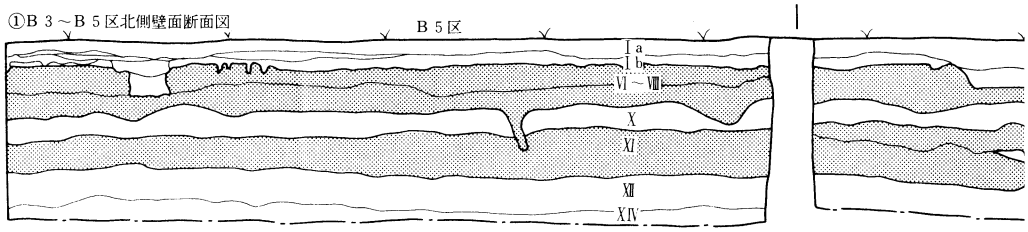
Ⅹ層で早期包含層が確認されたのは、本道建設部分のＡＢ１～14区の区域であるが、その中心はＡＢ８区～ＡＢ14区付近である。

Ⅹ層からは、６基以上の集石遺構が検出されたが、住居址などの他の遺構は確認されなかった。Ⅹ層からの出土遺物は、総数約4,500点を数える。

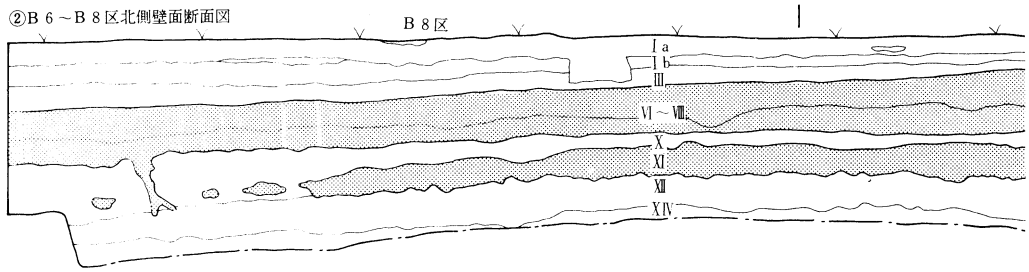
2　遺　構

遺構は、Ⅹ層下面に集石遺構が６基以上が検出された。集石遺構として検出したものは６基であったが、包含層中に検出される礫の分布状況（第５図）をみると、これ以外にも存在したことが考えられる。つまり、包含層の形成時に流失した可能性がある。また、集石は、遺跡の存在する微高地の縁辺部端に構築されている。集石遺構の時期は、共伴する確かな遺物はないが、遺物の層位的な出土傾向から包含層の形成された時期に該当することが考えられる。遺跡は、包含層や遺構の検出状態からその中心は南側の用地外へ広がることが想定される。調査区

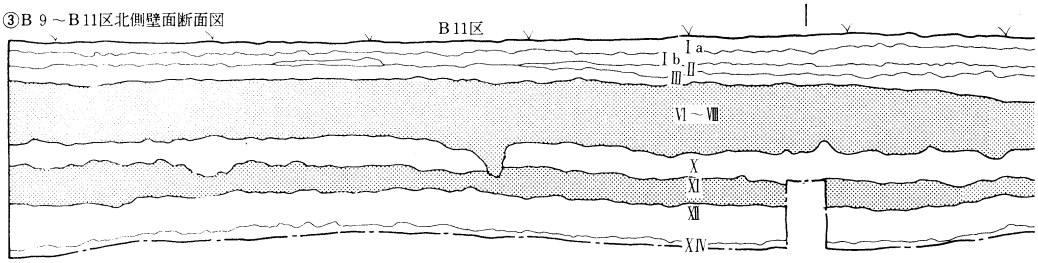
①B 3 ～B 5 区北側壁面断面図



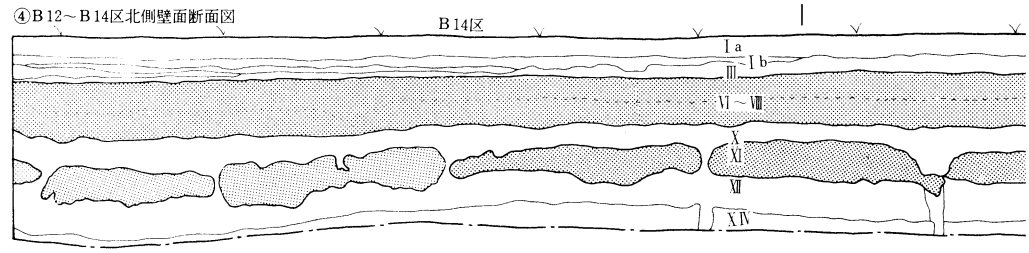
②B 6 ～B 8 区北側壁面断面図



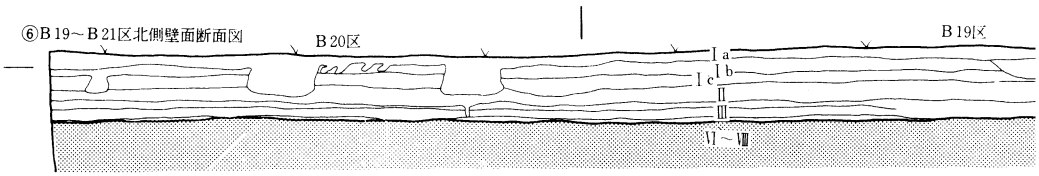
③B 9 ～B 11区北側壁面断面図



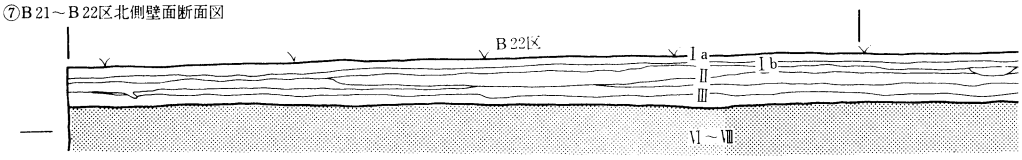
④B 12～B 14区北側壁面断面図

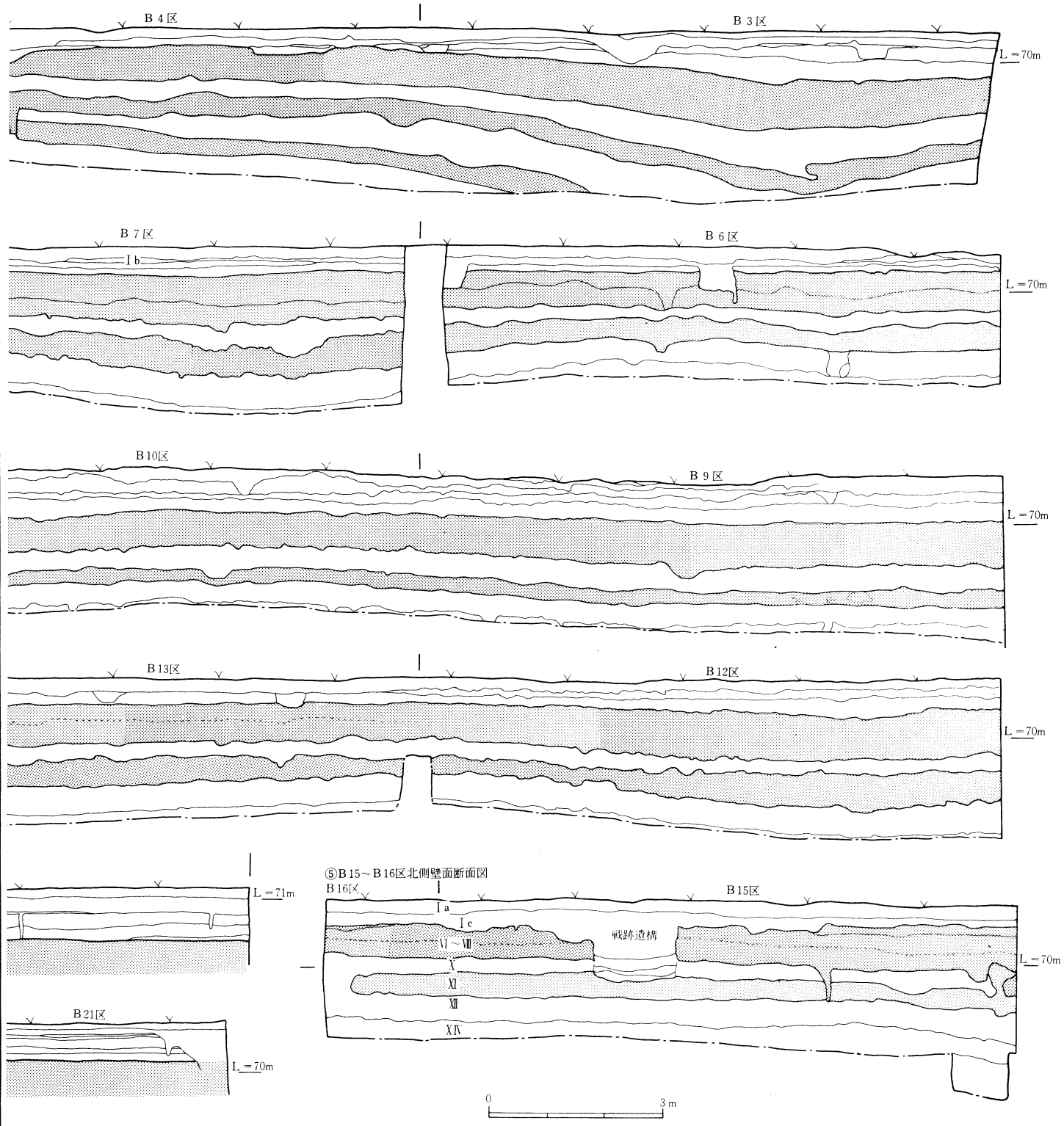


⑥B 19～B 21区北側壁面断面図



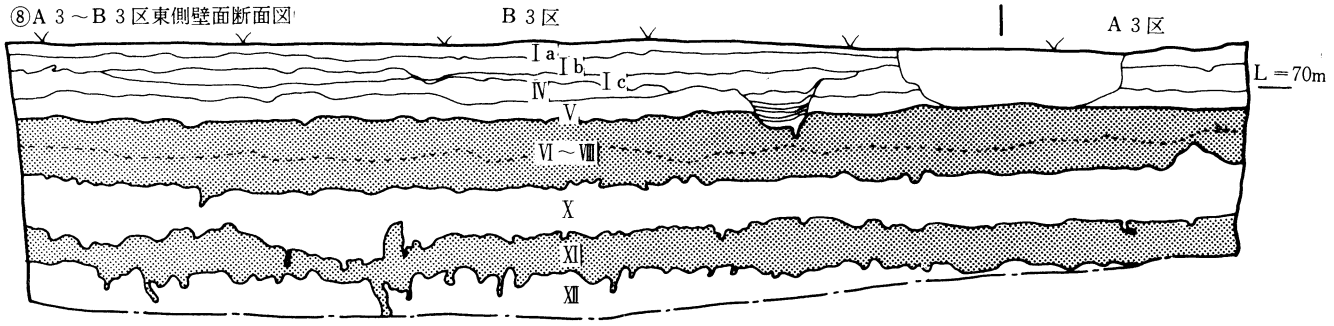
⑦B 21～B 22区北側壁面断面図



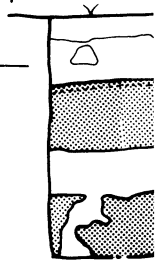


第３図　前畑遺跡の層位図（１）

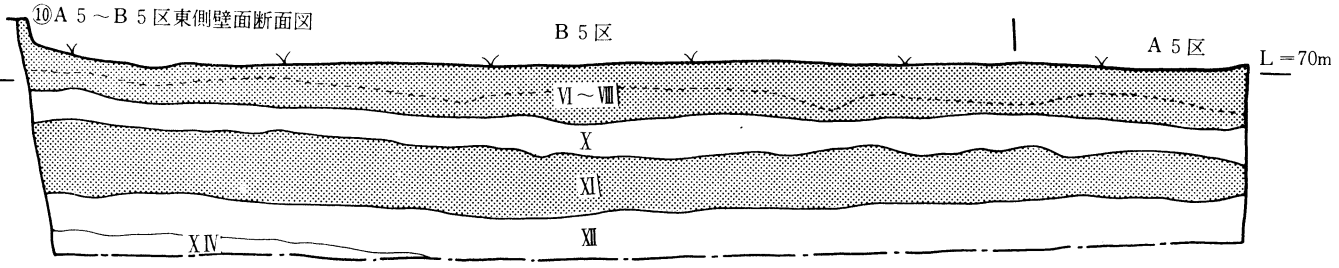
⑧A 3～B 3区東側壁面断面図



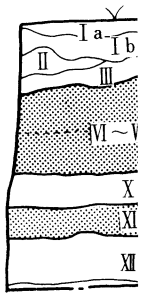
⑨D 2～C 2



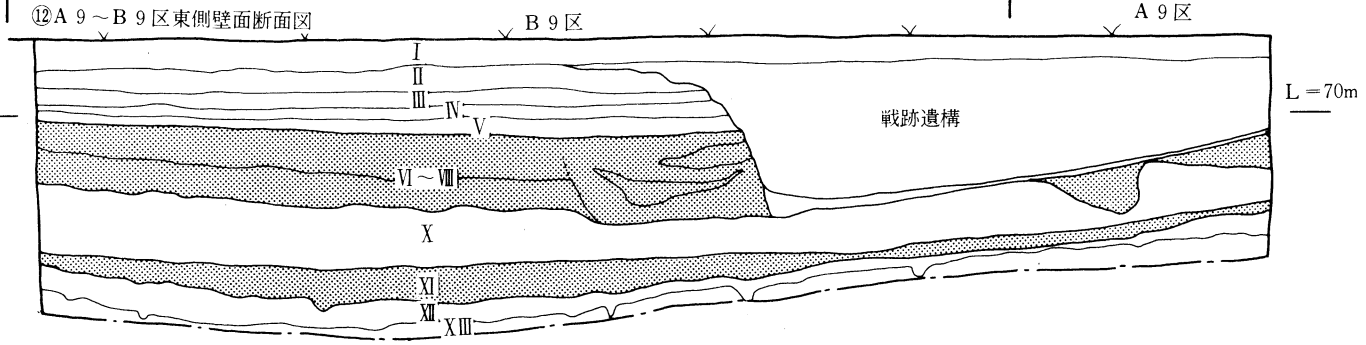
⑩A 5～B 5区東側壁面断面図



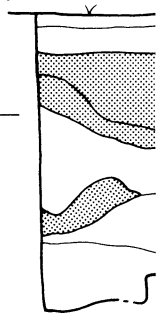
⑪A 11～B 11



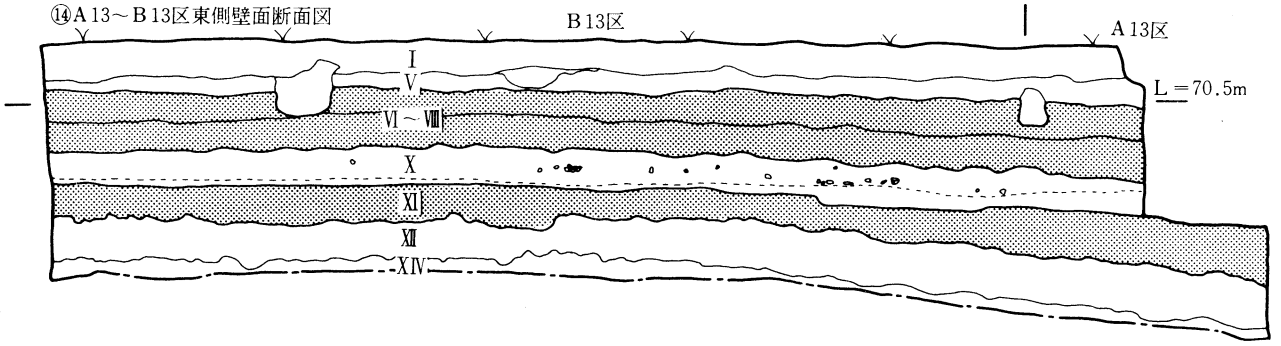
⑫A 9～B 9区東側壁面断面図



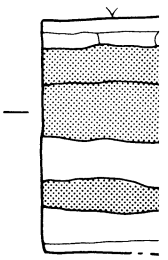
⑬A 15～B 15



⑭A 13～B 13区東側壁面断面図



⑮A 25～B 25



第４図　前畑遺跡の層位図（２）

区西側壁面断面図

C 2区　D 2区

Ⅰa
Ⅰc
Ⅵ～Ⅷ
Ⅹ
Ⅺ
Ⅻ

L＝70m

区東側壁面断面図

B 11区　A 11区

L＝70m

区東側壁面断面図

B 15区　A 15区

Ⅵ～Ⅷ
Ⅹ
Ⅺ
Ⅻ
ⅩⅣ

L＝70m

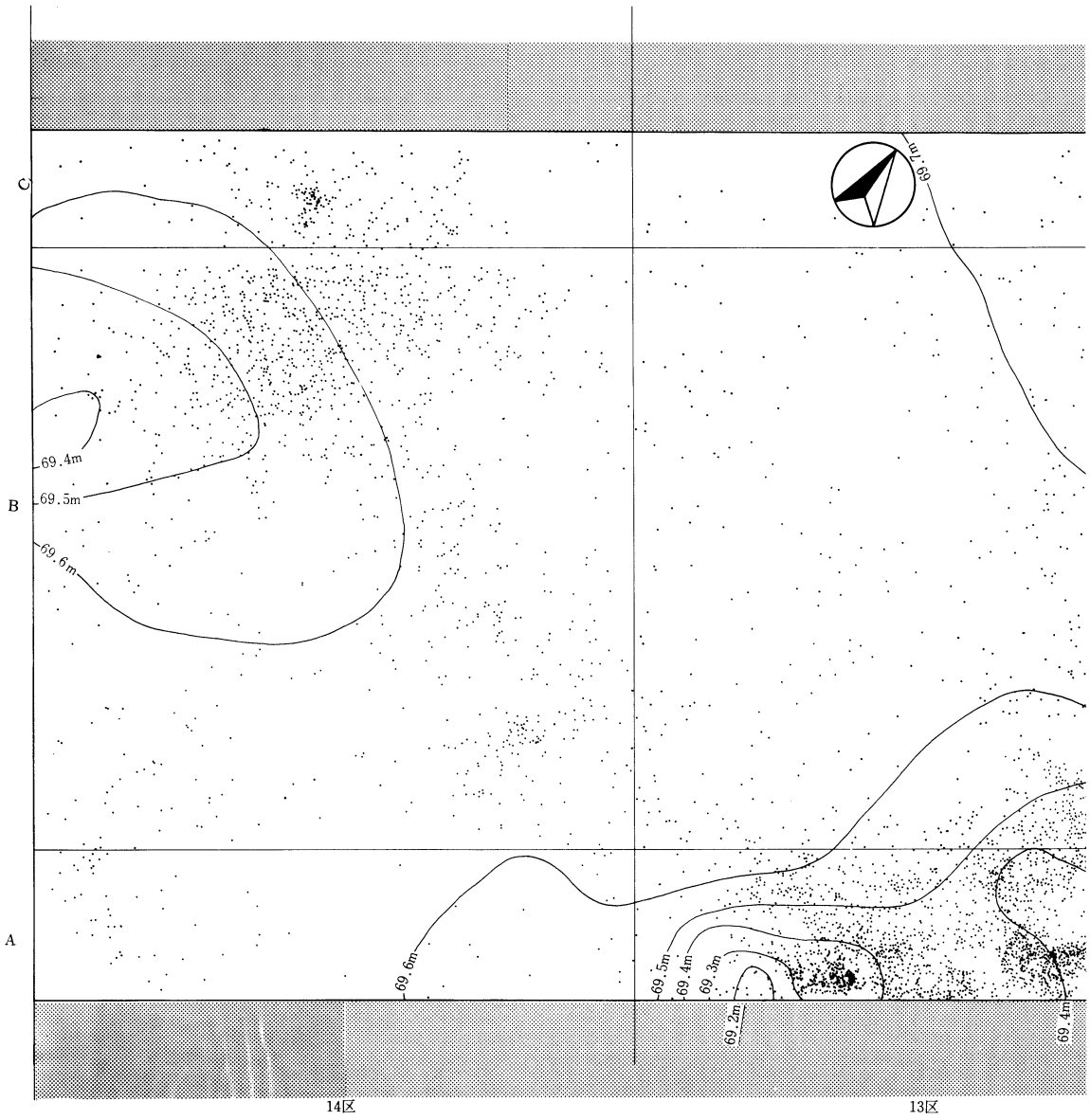
区東側壁面断面図

B 25区　A 25区

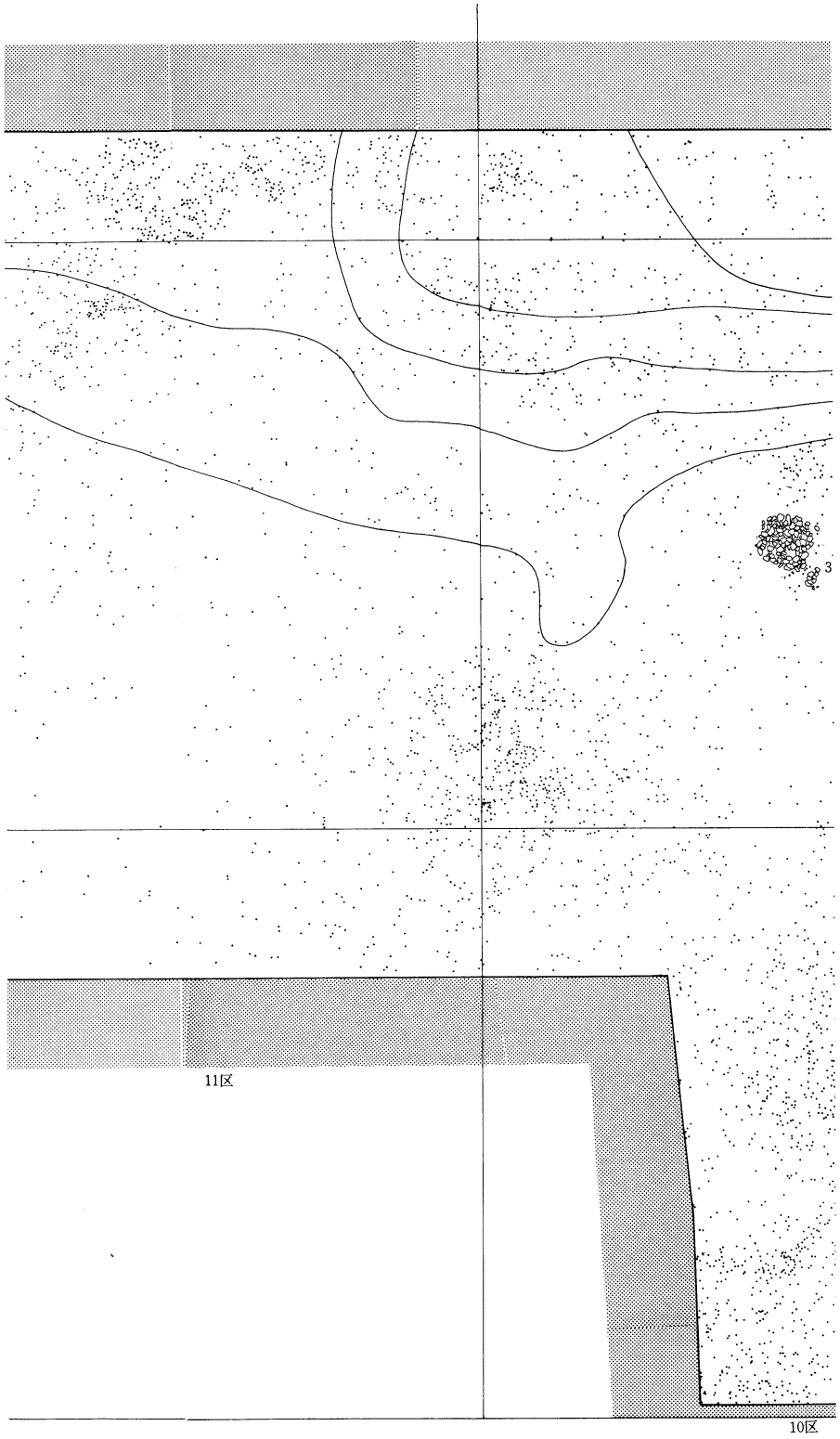
Ⅰa
Ⅰb
Ⅵ～Ⅷ
Ⅹ
Ⅺ
Ⅻ
ⅩⅣ

L＝70m

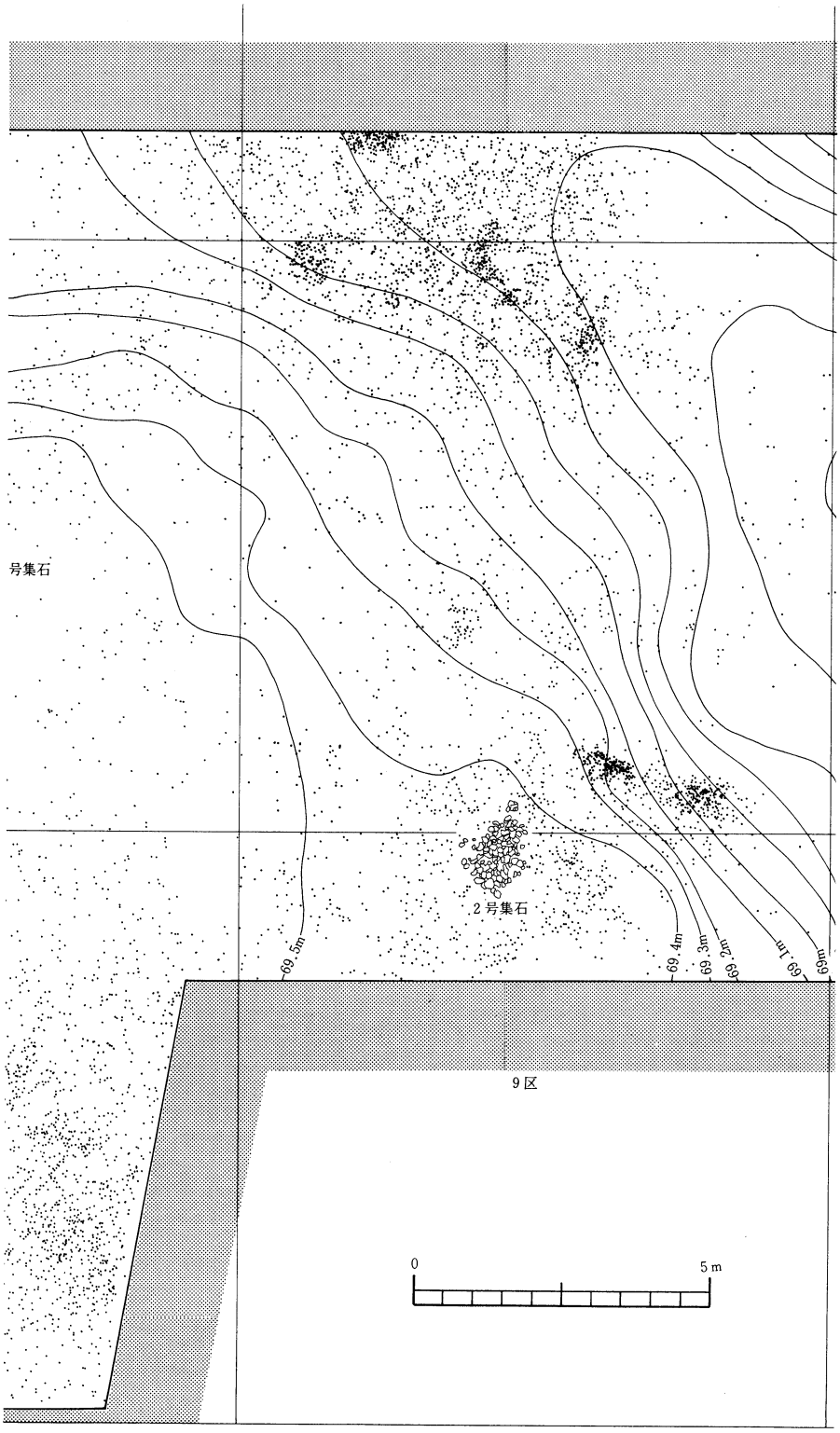
0　3 m

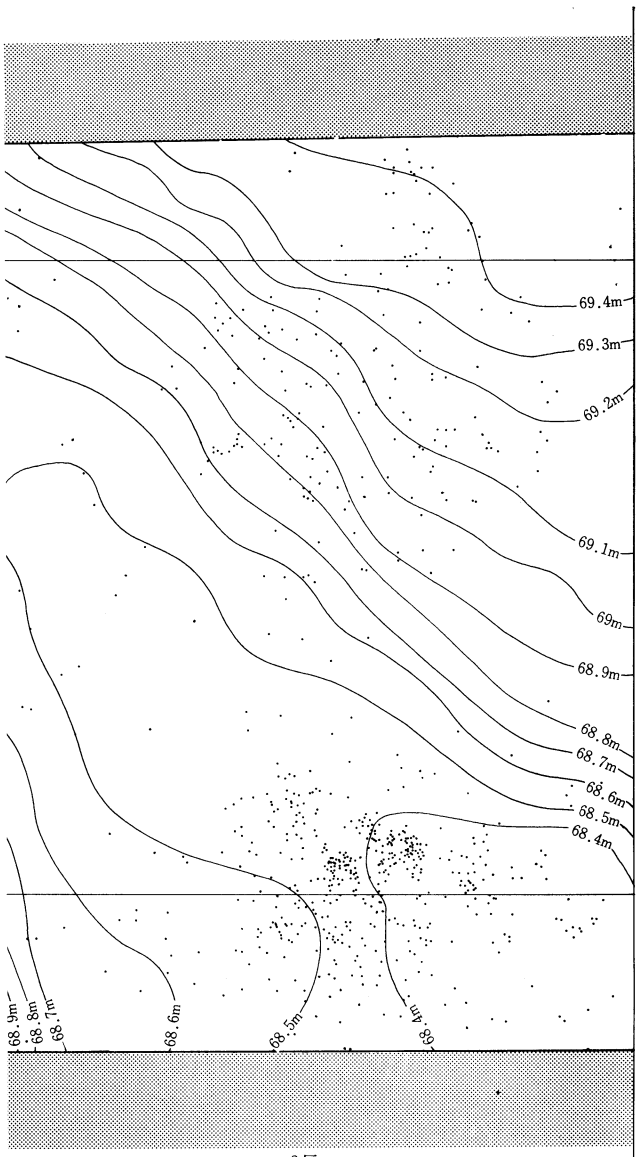

C
B
A
69.4m
69.5m
69.6m
69.6m
69.7m
69.5m
69.4m
69.3m
69.2m
69.4m
14区
13区

12区



第５図　集石遺構と礫の分布状況


号集石
2号集石
69.5m
69.4m
69.3m
69.2m
69.1m
69m
9区
0
5m


69.4m
69.3m
69.2m
69.1m
69m
68.9m
68.8m
68.7m
68.6m
68.5m
68.4m
68.9m
68.8m
68.7m
68.6m
68.5m
68.4m

8図

内においては住居址などの他の遺構は検出されていないが、遺跡の北端の様相を如実に示している。

（1） 集石遺構

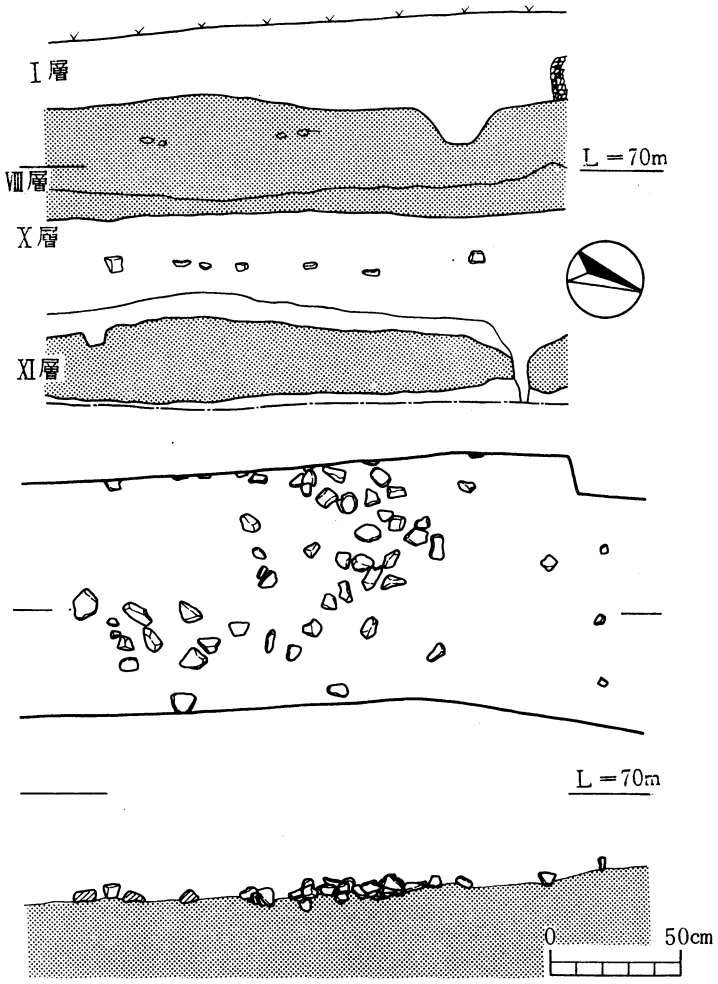
集石遺構は、ＡＢ１区からＡＢ14区間に６基検出されたが、礫の検出状況からこれ以外にも存在したことは確実である。１号のように礫の散乱したものは多数検出されたが、２号～６号のようなまとまりをもつ集石は５基の確認に留まった。集石遺構はほとんどが平坦面状に集積しており、下面が摺り鉢状をなす集石は３号の１基のみである。

集石１号　（第６図）

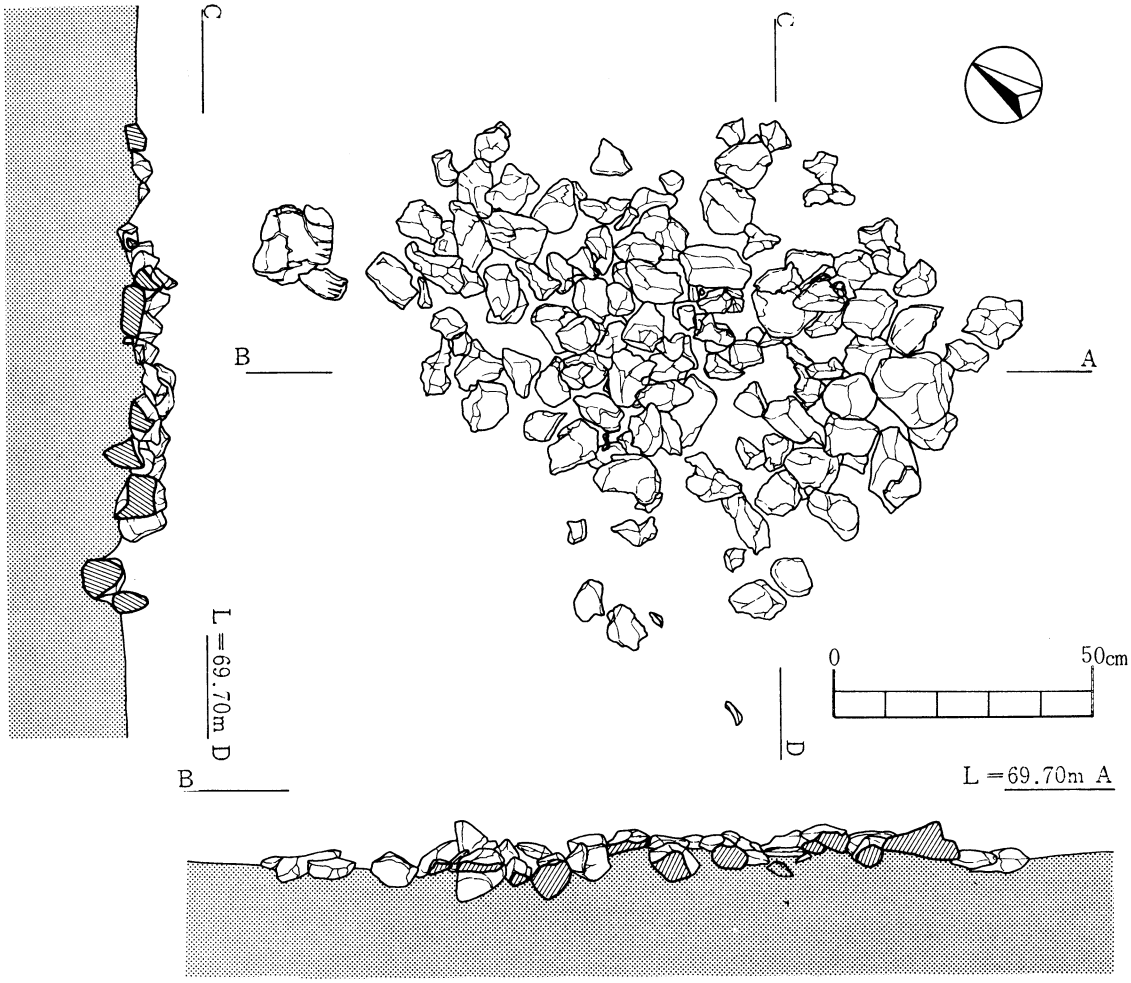
集石遺構１号は、Ｂ１区の用地外に近い位置に検出されている。緑地保存地帯内の水道管埋設溝内の検出である。集石１号は、第５図のように礫が散乱した状態であり、集石遺構とは呼び難いが、周辺には存在する可能性がみられる。集石は、層位的にはⅩ層の中ほどに形成されており、包含層から出土する遺物の時期に対応することが考えられる。

集石２号　（第７図）

集石遺構２号は、Ａ９区の北部に位置し一部Ｂ９区に広がって検出されている。集石の形状は、南北約130cm、東西約100cmの楕円形プランを呈したものである。集石は、掘り込みはみられず平坦



第６図　１号集石実測図

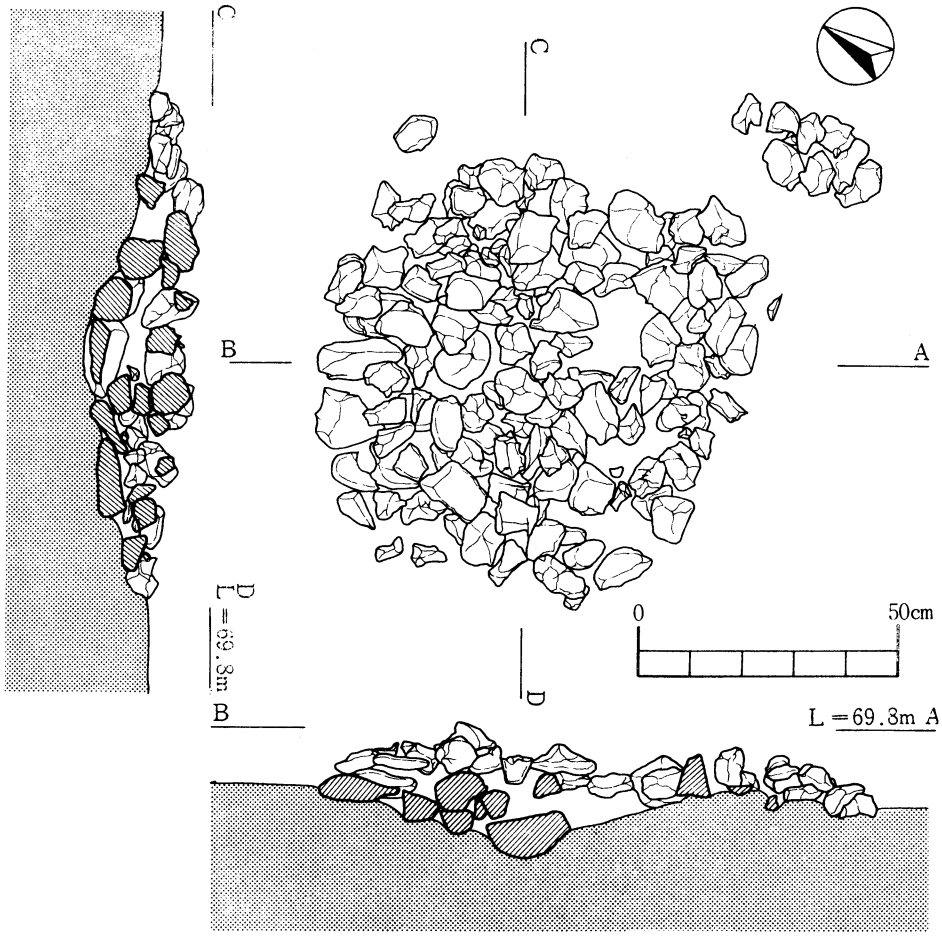


第７図　２号集石実測図

面に集められた状態である。集石の石材はすべて輝緑岩で、総数423個を数えほとんどが破砕された角礫で構成されている。集石に使用された輝緑岩は、遺跡の北方の高隈山系（現在の採石場と同じ岩石）に産する礫岩と考えられる。礫は、火を受けたためか若干赤味を帯びている。石礫の大きさと重さの内訳は、次のようになる。大きさは、５cm未満のものが149個と10cm以上のものが52個で、他の大多数を占める222個は５cmから10cm内に納まる大きさである。重さでみると、１～100g＝199個、101～200g＝67個、201～300g＝48個、301～400g＝27個、401～500g＝25個、501g以上＝57個で、１～500gの重さに集中している。第12図は大きさ・重さの重量比を現わしたグラフであるが、大きさ・重さとも比較的小振りな礫を使用していることになり、縦座標軸の下面に集中する傾向にある。

集石３号　（第８図）

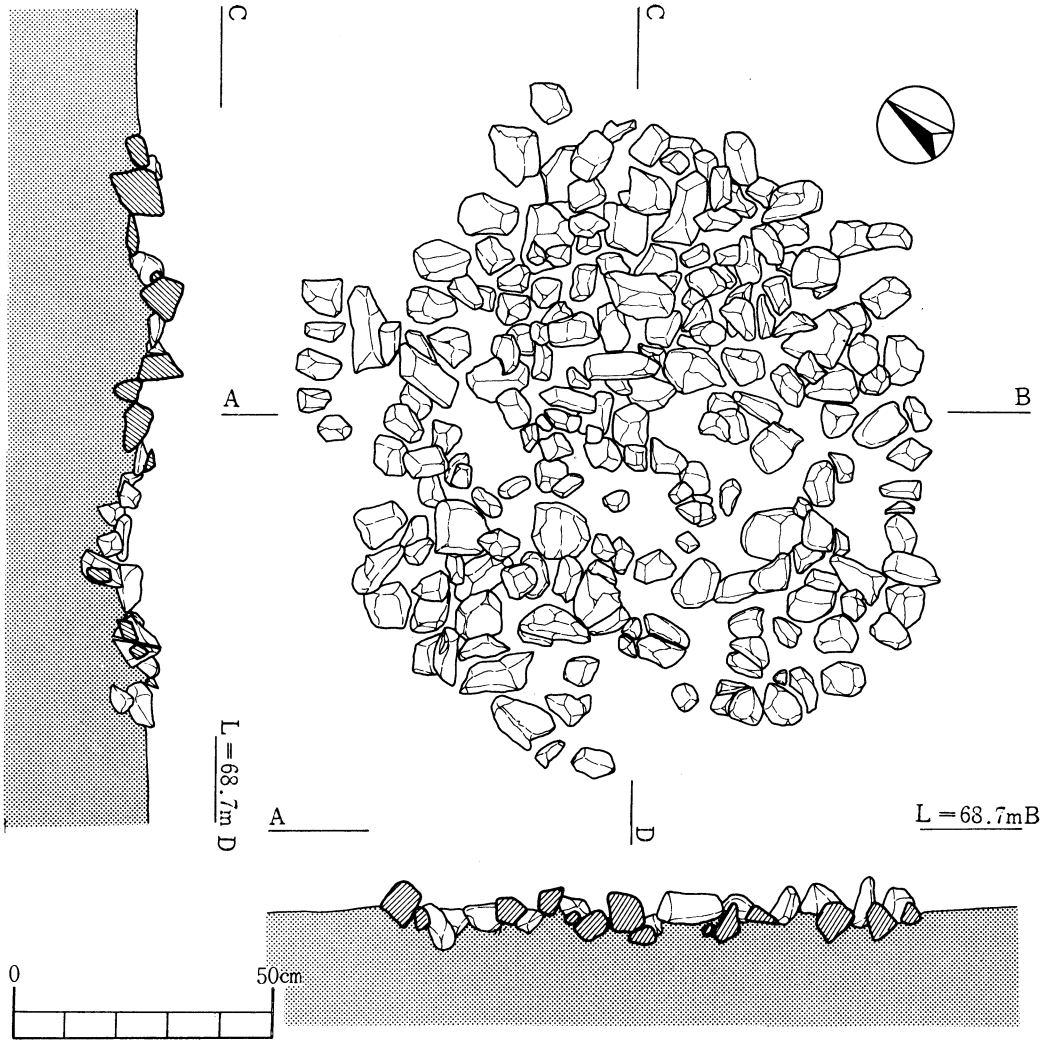
集石遺構３号は、Ｂ10区のほぼ中央に検出されている。集石１号は、径80cmの円形プランを呈した中規模なものである。集石は、掘り込みがみられ、下面に比較的大きな礫が置かれた状態である。集石の石材はすべて輝緑岩で、総数89個でほとんどが角礫で構成されている。集石に使用された輝緑岩は、遺跡の北方の高隈山系（現在の採石場と同じ岩石）に産する礫岩と考えられる。礫は、火を受けたためか若干赤味を帯びている。石礫の大きさと重さの内訳は、次のようになる。大きさは、５cm未満のものが34個と10cm以上のものが13個で、他の大多数を占める42個は５cmから10cm内に納まる大きさである。重さでみると、１～100g＝39個、101～200g＝10個、201～300g＝12個、301～400g＝10個、401～500g＝４個、501g以上は14個で、1～500gの重さに集中している。第12図は大きさ・重さの重量比を現わしたグラフであるが、大きさ・重さとも比較的小振りな礫を使用していることになり、縦座標軸の下面に集中する傾向にある。



第８図　３号集石実測図

集石4号　（第9図）

集石遺構4号は、B12区の北側に検出されている。集石4号は、径110㎝の円形プランを呈した中規模なものである。集石は、掘り込みはみられず平坦面に集められた状態である。集石の石材はすべて輝緑岩で、総数389個を数え、ほとんどが角礫で構成されている。集石に使用された輝緑岩は、遺跡の北方の高隈山系（現在の採石場と同じ岩石）に産する礫岩と考えられる。礫は、火を受けたためか若干赤味を帯びている。石礫の大きさと重さの内訳は、次のようになる。大きさは、5㎝未満のものが129個と10cm以上のものが59個で、他の大多数を占める201個は5㎝から10cm内に納まる大きさである。重さでみると、1～100g＝166個、101～200g＝60個、201～300g＝59個、301～400g＝38個、401～500g＝19個、501g以上＝47個で、1～500gの重さに集中している。第12図は大きさ・重さの重量比を現わしたグラフであるが、大きさ・重

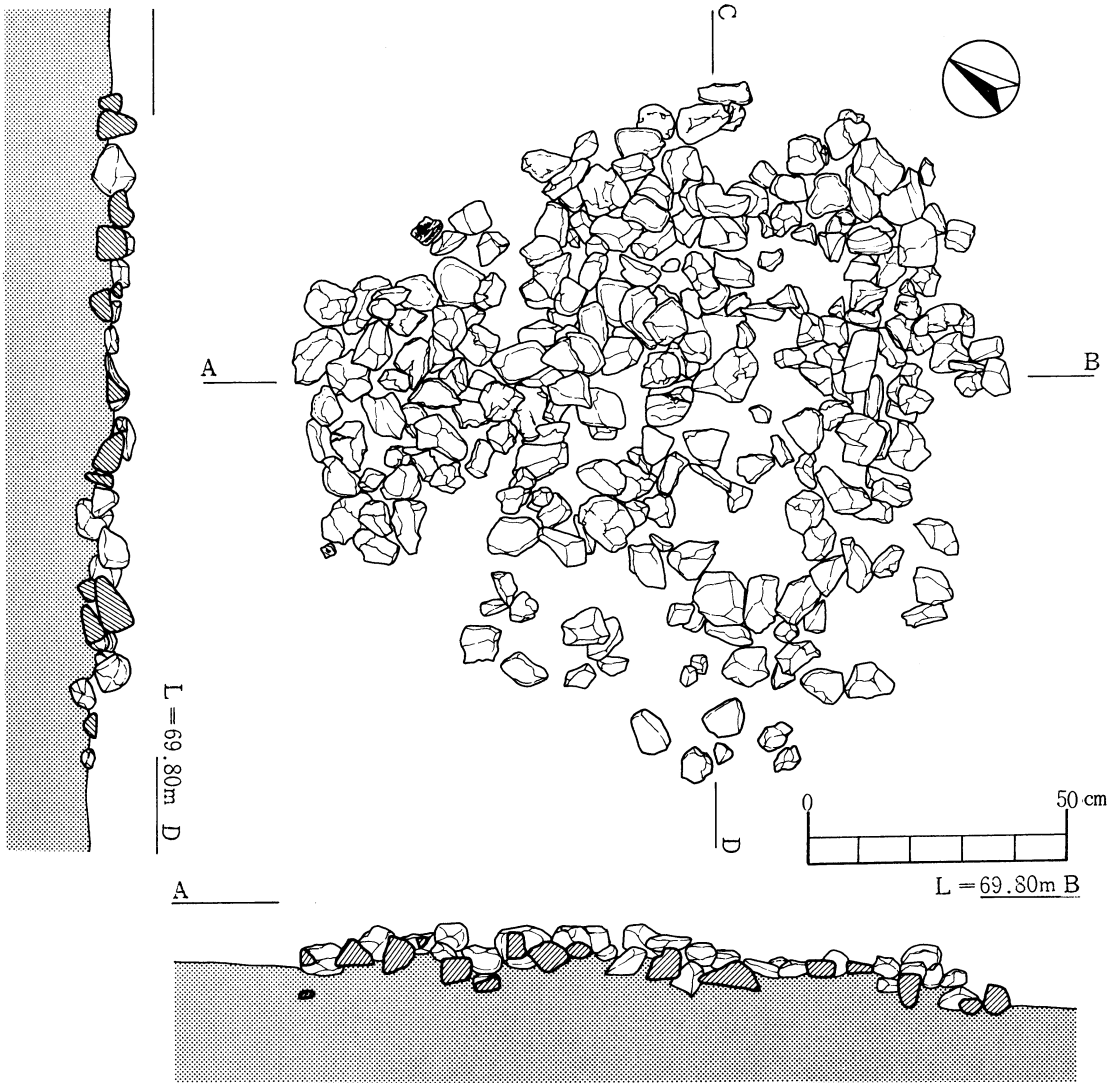


第9図　4号集石実測図

さとも比較的小振りな礫を使用していることになり、縦座標軸の下面に集中する傾向にある。

集石５号　（第10図）

集石遺構５号は、Ｂ12区とＢ13区の南側の境上に検出されている。集石５号は、径130㎝の略円形プランを呈した中規模なものである。集石は、掘り込みはみられず平坦面に集められた状態である。集石の石材はすべて輝緑岩で、総数347個を数え、ほとんどが角礫で構成されている。集石に使用された輝緑岩は、遺跡の北方の高隈山系（現在の採石場と同じ岩石）に産する礫岩と考えられる。礫は、火を受けたためか若干赤味を帯びている。石礫の大きさと重さの

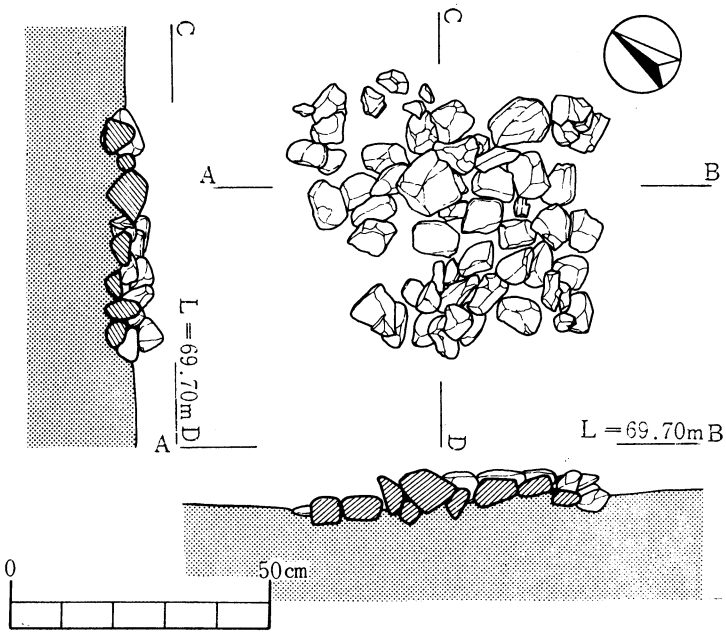


第10図　５号集石実測図

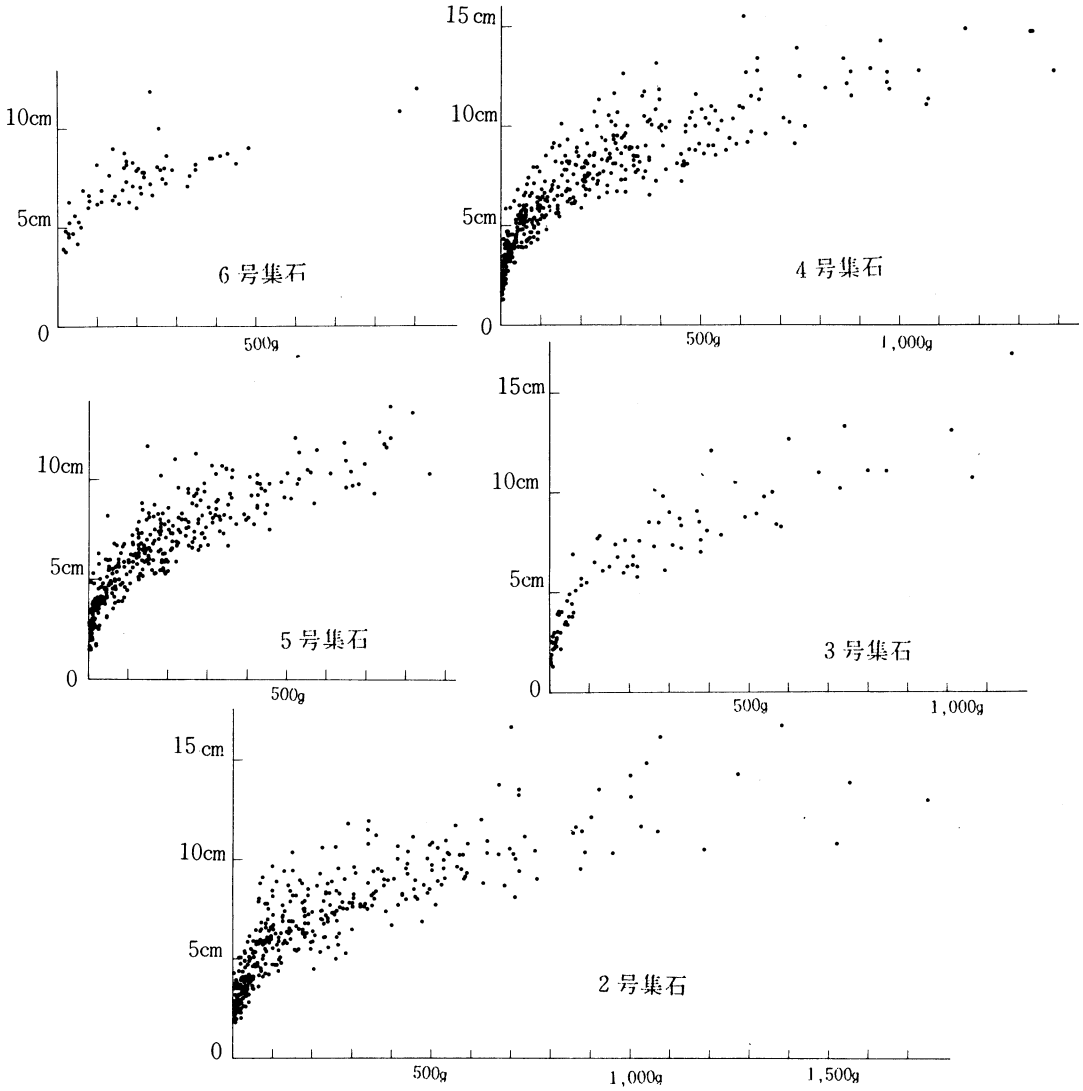
内訳は、次のようになる。大きさは、５cm未満のものが108個と10cm以上のものが29個で、他の大多数を占める210個は5cmから10cm内に納まる大きさである。重さでみると、1～100g＝139個、101～200g＝89個、201～300g＝50個、301～400g＝28個、401～500g＝18個、501g以上＝23個で、１～500gの重さに集中している。第12図は大きさ・重さの重量比を現わしたグラフであるが、大きさ・重さともに比較的小振りな礫を使用していることになり、縦座標軸の下面に集中する傾向にある。

集石６号　（第11図）

集石遺構６号は、A12区のA11区よりの北部に位置して検出されている。集石６号は、径60cmの円形プランを呈した最も小規模なものである。集石は、掘り込みはみられず平坦面に集められた状態である。集石の石材はすべて輝緑岩で、総数67個と最も少なくほとんどが角礫で構成されている。集石に使用された輝緑岩は、遺跡の北方の高隈山系（現在の採石場と同じ岩石）に産する礫岩と考えられる。礫は、火を受けたためか若干赤味を帯びている。石礫の大きさと重さの内訳は、次のようになる。大きさは、５cm未満のものが10個と10cm以上のものが３個で、他の大多数を占める54個は５cmから10cm内に納まる大きさである。重さでみると、1～100g＝20個、101～200g＝18個、201～300g＝17個、301～400g＝６個、401～500g＝４個、501g以上＝２個で、１～500gの重さにほとんど集中している。第12図は大きさ・重さの重量比を現わしたグラフであるが、大きさ・重さとも比較的小振りな礫を使用していることになり、縦座標軸の下面に集中する傾向にある。



第11図　６号集石実測図



第12図　集石遺構の石塊の最大長と重量比

3　出土遺物

（1）土器

Ⅹ層出土の土器は、形態上の特徴からⅠ類～Ⅵ類に大きく６つの類別を試みた。そのうち、今回の調査区においては、Ⅳ類に類別したものが圧倒的に多い。すなわち、本遺跡では、このⅣ類土器が主体を占める遺跡といえよう。Ⅰ類～Ⅲ類及びⅤ類・Ⅵ類は数量的にはわずかな出土で、本遺跡の今回の調査区においては客体としての様相を示している。

１．類別の基準

次のような形態的特徴から、Ⅰ類～Ⅵ類土器に類別した。

①Ⅰ類土器　（第15図－１～８）

円筒形で平底を呈し、口縁部はわずかに外反する。口縁部付近は貝殻刺突文を施文し、胴部は斜位の無造作な条痕文が施されるタイプである。

②Ⅱ類土器　（第15図－９～10）

円筒形土器の胴部破片である。器面には、横位の太めの条痕が施文されるタイプである。

③Ⅲ類土器　（第16図－11）

山形の回転押型文土器である。わずか１点の出土であるが、同包含層出土の他の土器型式と関連して興味深い。

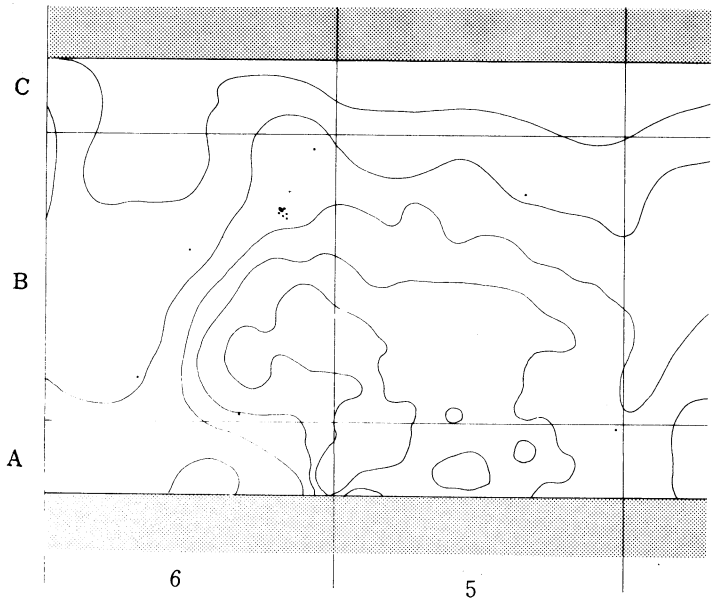
④Ⅳ類土器　（第18図－12～278）

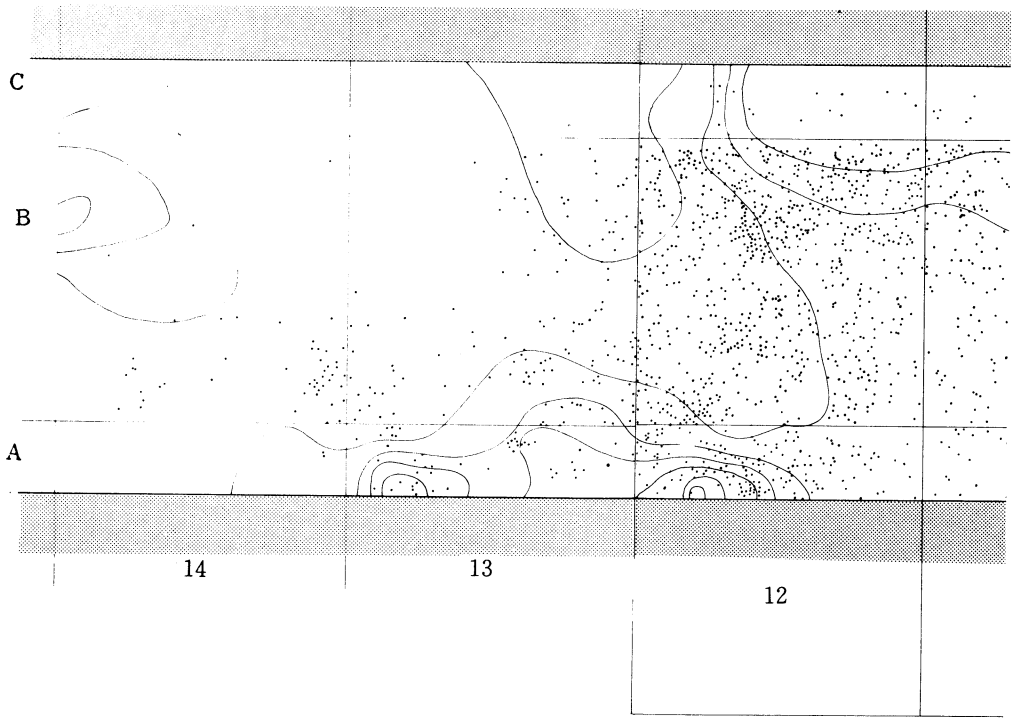
Ⅳ類土器は本遺跡の主体を占める土器で、バリェーションが多彩で、数量も多い。器形上、深鉢形（１）と壺形（２）の二者に分かれる。

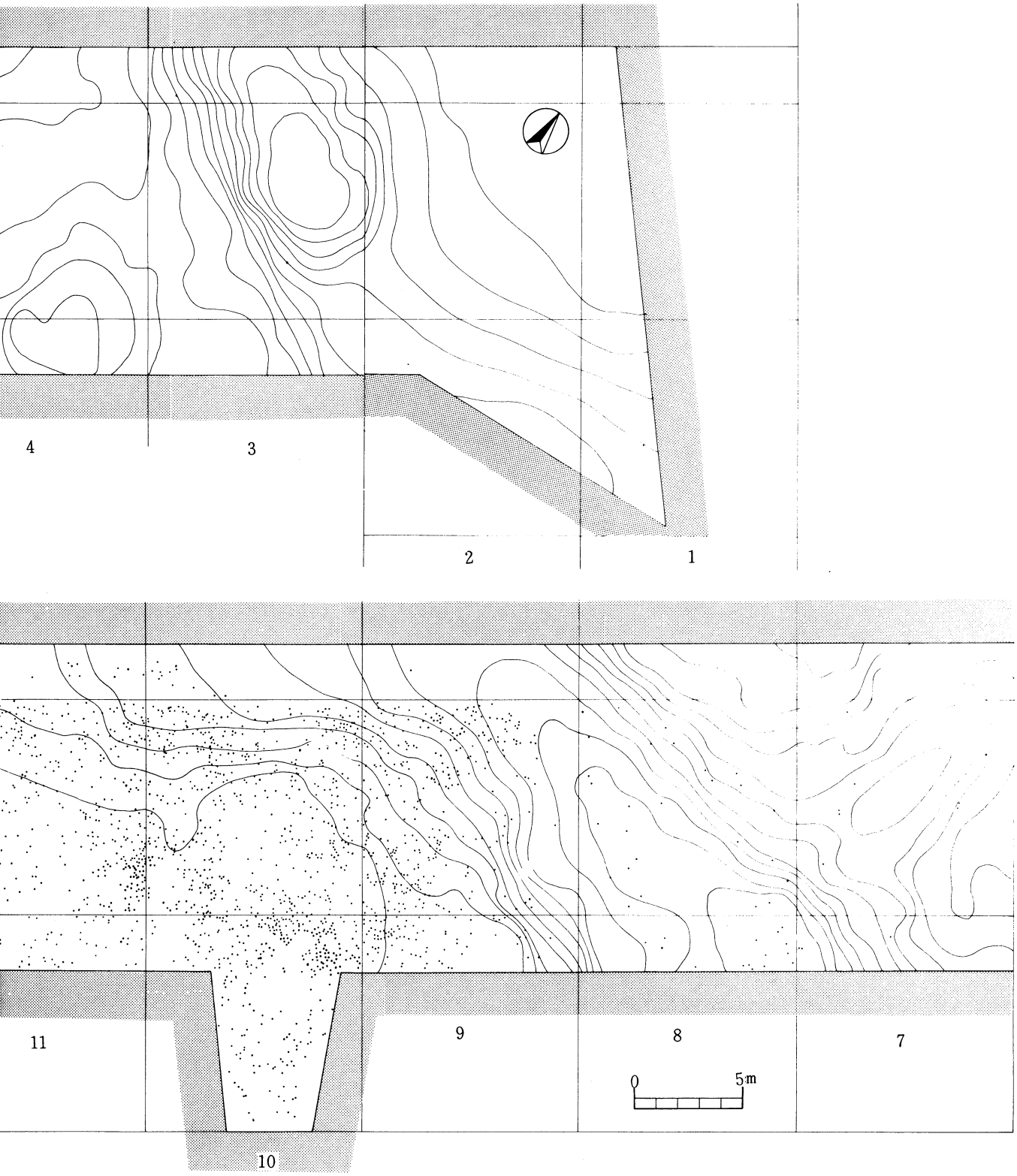
（１）深鉢形＝口縁部に特徴があり、幅広肥厚口縁（イ）と幅狭肥厚口縁（ロ）とその他（ハ）に分けられる。さらに、各々は紋様の特徴からイ類＝ａ～ｇ、ロ類＝ａ～ｃ、ハ類＝ａ・ｂに細別される。

なお、頸部片、胴部片、底部片については、そのほとんどが深鉢に属するため、ここに含め説明する。

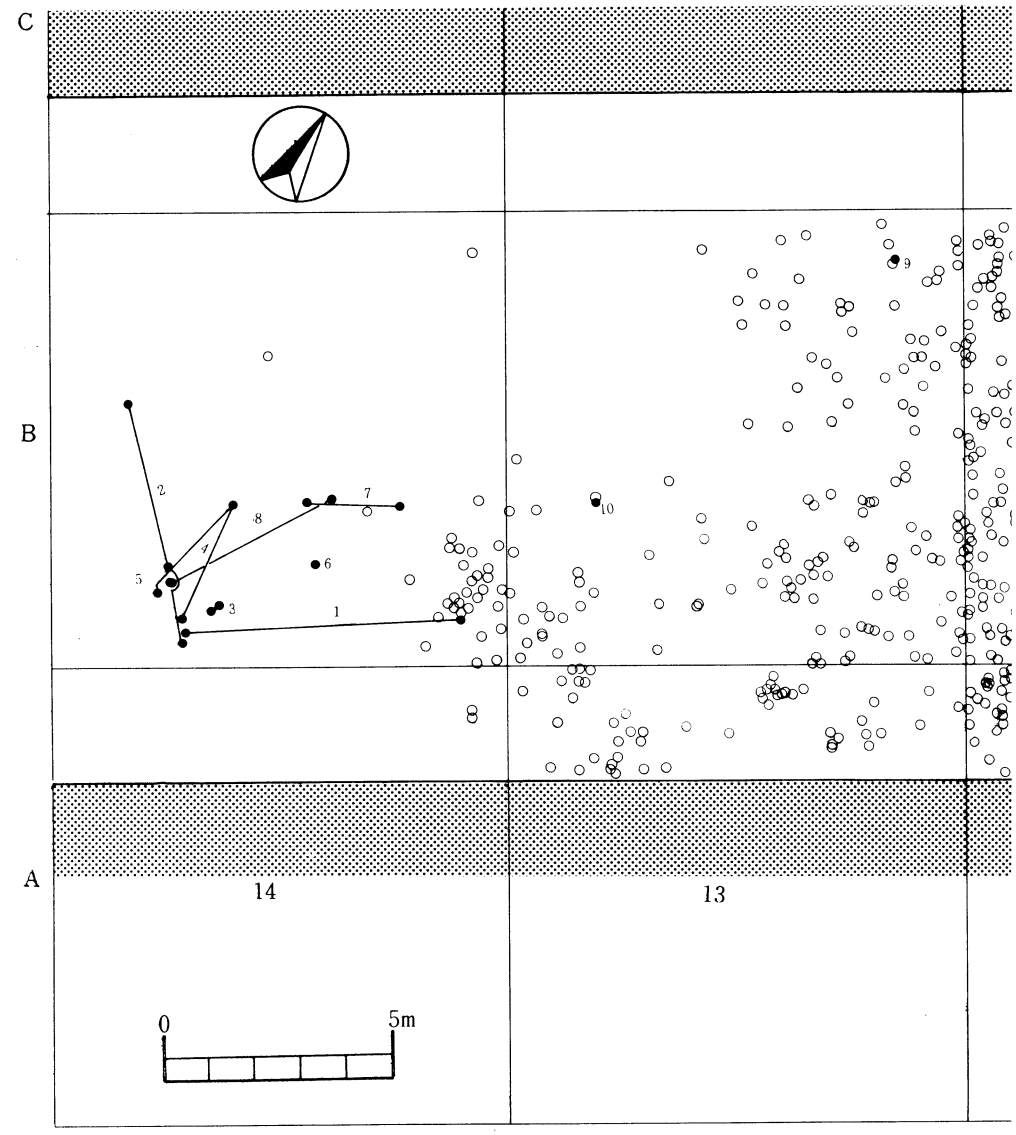
（２）壺　形＝細部には若干のバリェーションがみられるものの壺形として一括して捉え、紋様の有無からａ・ｂに細別して説明する。

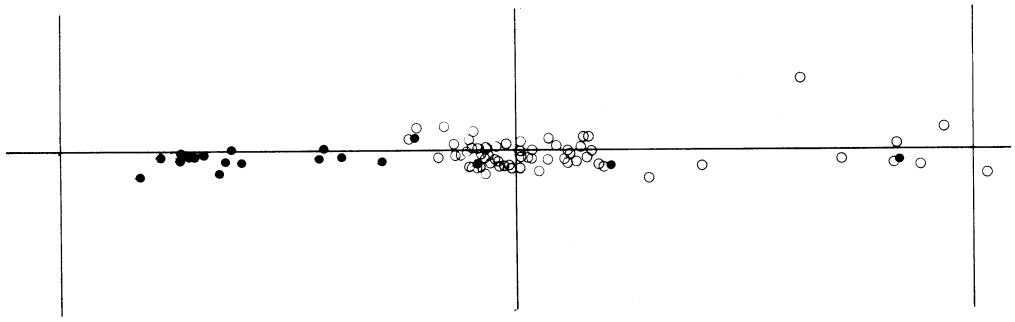

C
B
A
6
5

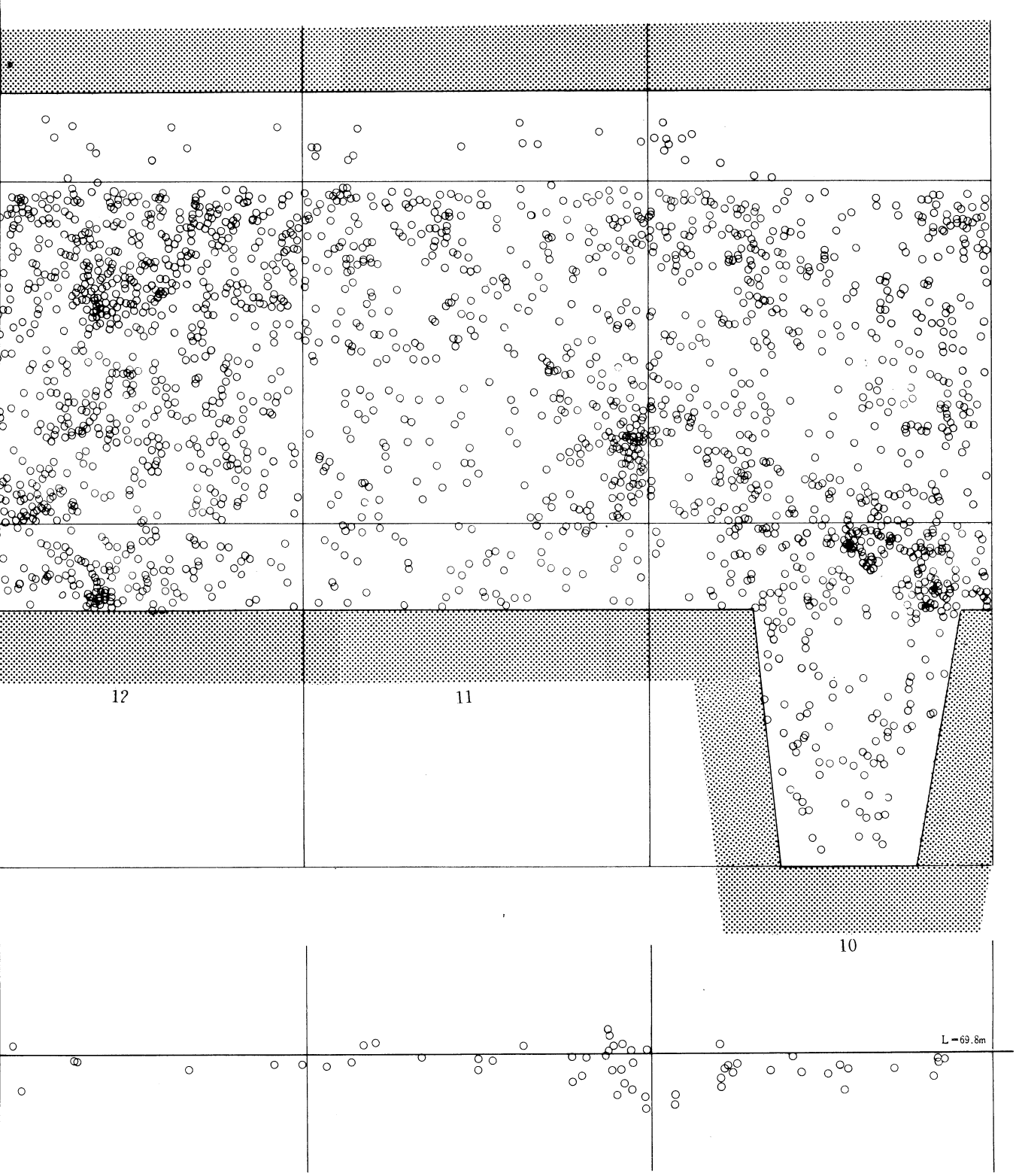

C
B
A
14
13
12



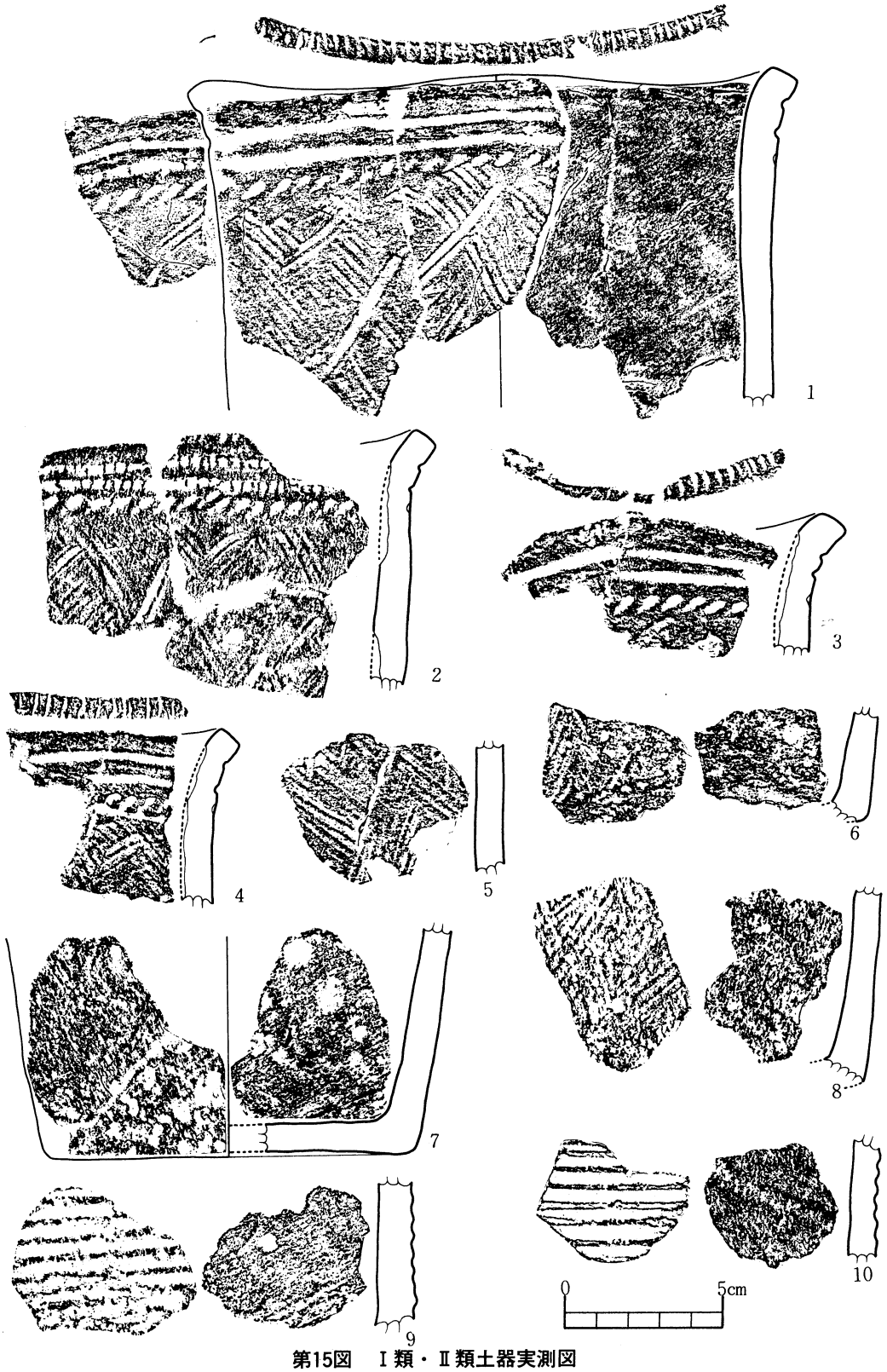
第13図　X層の遺物出土分布図


C
B
A
14
13
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
0
5m





第14図　X層の土器出土分布図



第15図　Ⅰ類・Ⅱ類土器実測図

⑤Ⅴ類土器　（第42図－279～290）

口縁部は、二重口縁状に屈曲して波状口縁を呈し大きく外反する。胴部は円筒状を呈し、底部は平底のタイプである。口縁部の紋様は微隆突帯文と凹線文で飾る。胴部は、格子の撚糸文帯を縦位に施文する。華麗で特徴的なタイプである。

⑥Ⅵ類土器　（第45図－291）

口縁部は大きく外反し、胴部は若干膨らみを持った円筒形を呈するタイプである。紋様は、口縁部は貝殻刺突連続文を施し、胴部は条線文帯で飾る。

以上の類別に従って、Ⅰ類からⅥ類の順に説明する。

2．Ⅰ類土器　（第15図－１～８）

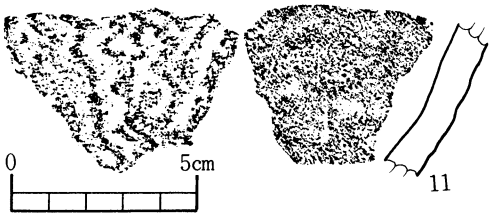
１～８は、すべてB14区からの出土である。１～４は、口縁部片である。１は口径17.8cmを測る。胴部は円筒形を呈し、口縁部はわずかに外反して波状をなす。口唇部は平坦に納め、その上に丁寧な刻目を施す。口縁外面には、櫛歯状（おそらく貝殻腹縁）の刺突文を連続施文した二条の沈線文を巡らす。その下端には同様の施文具で、斜位の刺突連点文を施している。胴部器面には、斜位の粗い条痕が確認される。６～８は底部片で、わずかな上げ底状の平底である。内面の整形は、胴部から口縁部にかけての上半に丁寧なナデ仕上げがみられ、下半はケズり仕上げである。色調は茶褐色を呈し、胎土には長石・石英粒を含み堅緻である。

3．Ⅱ類土器　（第15図－９・10）

円筒形土器の胴部破片である。B13区の出土である。器外面には、丁寧に横位に施されたうねりの多きい条痕が施文される。内面は丁寧なナデ整形が施される。色調は茶褐色を呈し、胎土には長石・石英粒を含み堅緻である。

4．Ⅲ類土器　（第16図－11）

11はA13区出土で、縦位に施文された山形の回転押型文土器である。山形の頂間は1.2cmと比較的大形で彫りも太い。わずか１点の出土であるが、他の土器型式と関連して興味深い。内面は丁寧なナデ整形である。色調は暗茶褐色を呈し、胎土には長石・石英粒のほかに金雲母を含み堅緻である。



第16図　Ⅲ類土器実測図

5．Ⅳ類土器　（第18図－12～278）

Ⅳ類土器は本遺跡の主体を占める土器で、バリェーションが最も多彩で、数量も多い。出土区は、ＡＢ９区～ＡＢ13区の間に出土しているが、37（Ｃ６区）と249（Ｂ３区）が離れた区に出土したものもある。器形上、深鉢形（１）と壺形（２）の二者に分けられる。

（１）深鉢形　（第18～38図－12～265）

①　口縁部

深鉢は、口縁部に著しく特徴がみられ、その形態から（イ）幅広肥厚口縁と（ロ）幅狭肥厚口縁と（ハ）その他に分類される。さらに、各々は、紋様の特徴からイ類はａ～ｇ、ロ類はａ～ｃ、ハ類はａ・ｂに細分されるが、これは個体差の可能性もある。

なお、頸部片、胴部片、底部片（第29～38図－131～265）については、そのほとんどが深鉢に属するため、ここに含め説明する。

（イ）幅広肥厚口縁　（第18～22図－12～58）

外反する口縁部は幅広くカマボコ状に肥厚するタイプである。口縁は四隅が山形を呈し、波状口縁をつくる。（なお、細片のため不明なものは平縁状に実測している）

口唇部は、平坦面をつくるものとわずかに丸くおさめるものがある。さらに、この口唇部には丁寧な刻目を施すのが一般的である。また、肥厚部分の下端にも刻目を施すものが多い。

この肥厚部分の外面に施される紋様によって、ａ～ｇに細別した。なおこの細別は、量的には少ないものであり、個体差を示すだけのものもある。

ａ：凹線文と連続刺突文を組み合わせて紋様を構成するもの（12～29）

凹線文を二本～三本を単位にして半弧状や三角形をつくり、その間に連続竹管文を施文するもので、12～29まではこれに該当する。凹線文と竹管文の組み合わせは、特に波状部分の頂部の位置においては、紋様構成上、複雑な構図が描かれ華麗さを増して表現している。

口唇部には丁寧な刻目が施されている。肥厚部分の直下には、刺突連続文が施文される。刺突連続文は、三日月状に施文される部分もみられるが、これは施文具のあて方によって生ずるもので施文具は半截竹管ではなく丸竹管である。

12は、完形に復元される数少ない土器の一つである。口縁部から頸部・胴部・底部の形態と紋様の把握が可能な資料である。口径21.3cm、器高17.5cmを測る。

器形は、底部は平底で若干上げ底状で凹面をつくる。底部から直線状に立ち上がり、胴部中央は僅かに丸味をもって張り、頸部付近では僅かに内湾する。頸部から口縁部へ大きく屈曲して外反し、口縁部は二重口縁状に大きく屈曲しながら外反する。口縁は、波状を呈する。

肥厚口縁部はａ類の紋様を呈するが、肥厚口縁直下には刺突文を横位に巡らしている。この場

合、施文具は、右から左へ横方向から突いている。さらに、口縁部下端には二列の連続刺突文を巡らせる。上列は、施文具を器面に垂直に突き、正円形文を横位に連続して施文する。下列は、下から上方向に突きながら連続刺突するという違いがある。この刺突文間には、凹線文の波状文が施文される。それ以下は胴部で、器面全体の底部側面まで二個の結節をもつ縄文（RL撚り）を転がして施文している。結節はLの撚りでつくる。

26～28は、三～四本の凹線と二列の連続刺突文線を半弧状に交互に施文し、28のように波頂部では円形文になって紋様を誇張するものもある。

b：連続刺突文と波状文を組み合わせて紋様を構成するもの（30・31）

肥厚口縁の上位と中位と下位にそれぞれ横位の連続刺突文線を巡らせる。連続刺突文は、上位列は下から上に突くタイプで、中位列は器面に垂直に突き、下位列は二条で下から上に突く手法で施文している。そして、この刺突文間に波状凹線文を施文する。肥厚口縁下には上下に波状凹線文を巡らせる。そして、屈曲部の頸部は突帯状に盛り上がり、その上に刻目が施される。胴部の紋様はLRの縄文にRの結節を結ぶ（30）。

c：凹線文で真線文と波状文を交互に施文するもの（32～34）

肥厚口縁の上・中・下位に凹線文の直線を巡らせ、その間に凹線文の波状文を巡らすものである。肥厚口縁の下端には刻目が施される。口縁下部と頸部以下は不明である。

d：凹線文帯で鋸歯文や渦文を描くもの（35・36）

口縁肥厚部に三条程度の凹線文で鋸歯文や渦文を描くもので、肥厚口縁下端には直線や連続刺突文が施される。35の口縁下部には、連続刺突文と波状文がみえる。

e：羽状文や斜線文を描くもの（37～41）

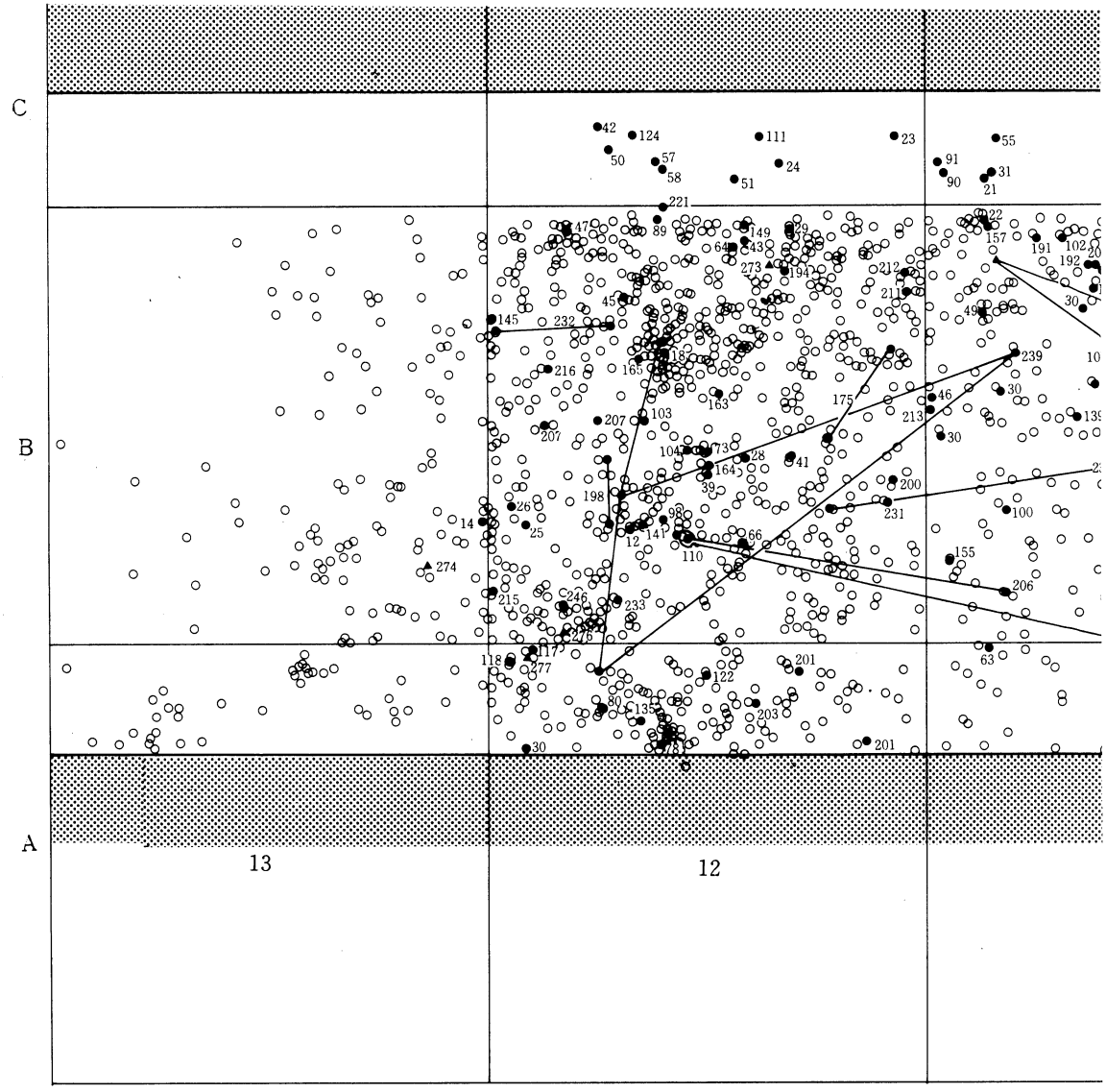
肥厚口縁全体に短線で羽状文や斜線文を描く最も単純な紋様構成であるが、肥厚部は厚く堅固である。口唇部と肥厚口縁下端には刻目が施される。41の肥厚口縁下には突帯文が巡らされ、その上には刻目が施される。

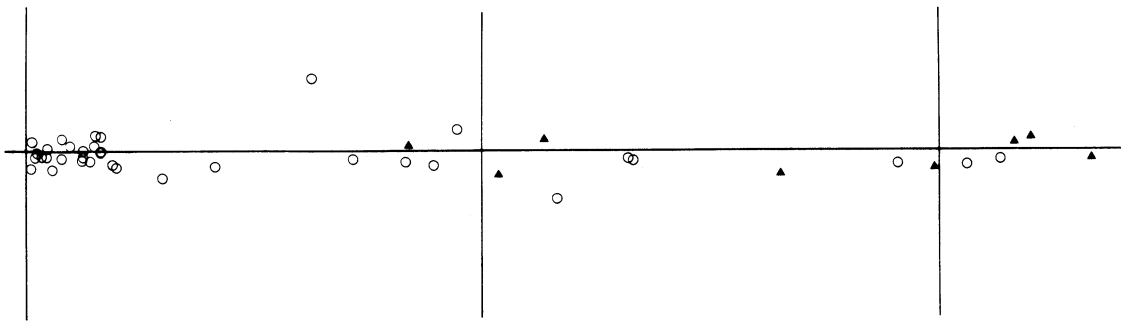
f：縄文が施されるもの（42～55）

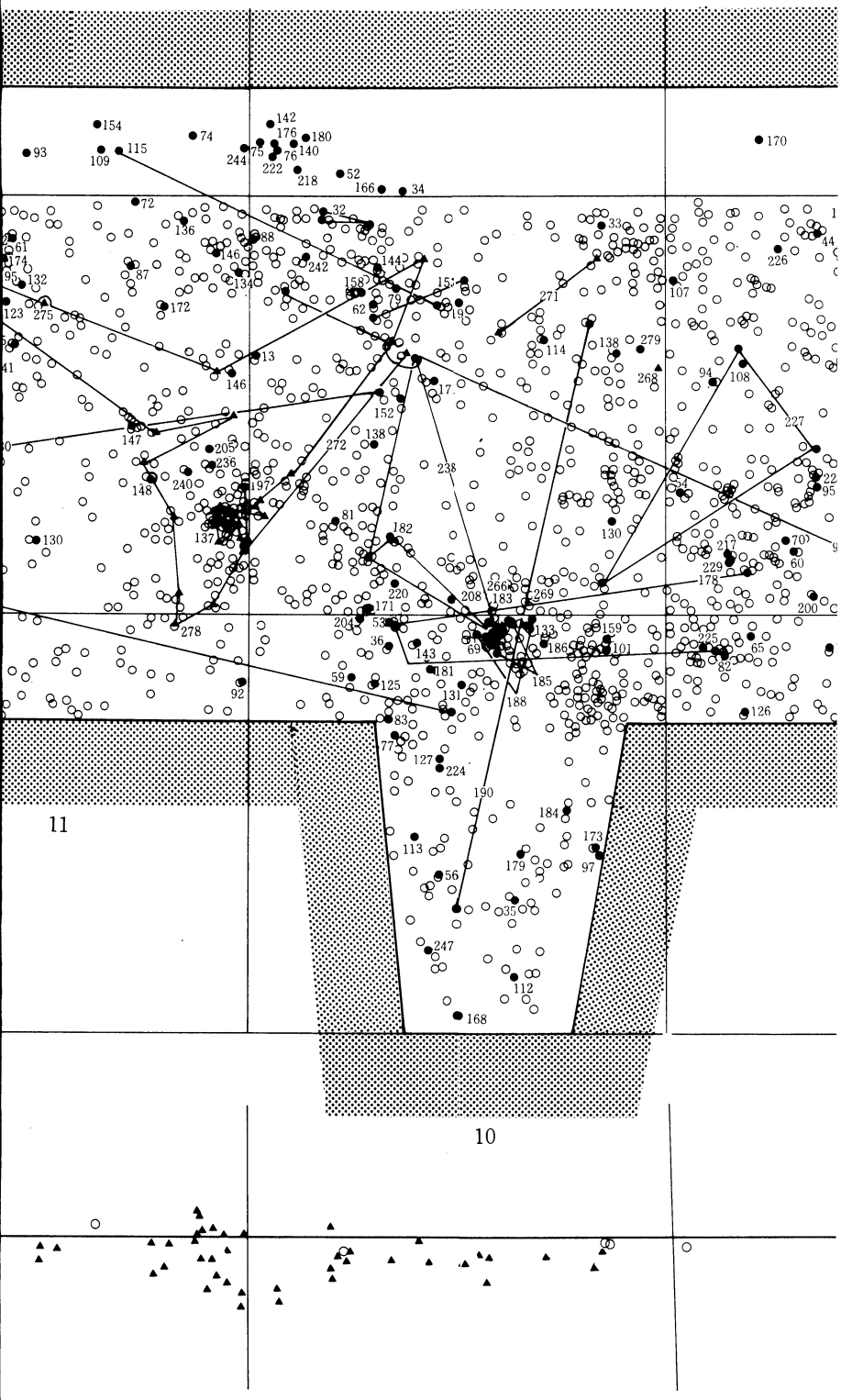
肥厚口縁部の全面に、縄文が施文されるものである。縄文の他には、口唇部と肥厚口縁下端に刻目が施されるものやどちらか一方に刻目が施文されるものなどがある。

g：肥厚口縁が無文のもの（56～58）

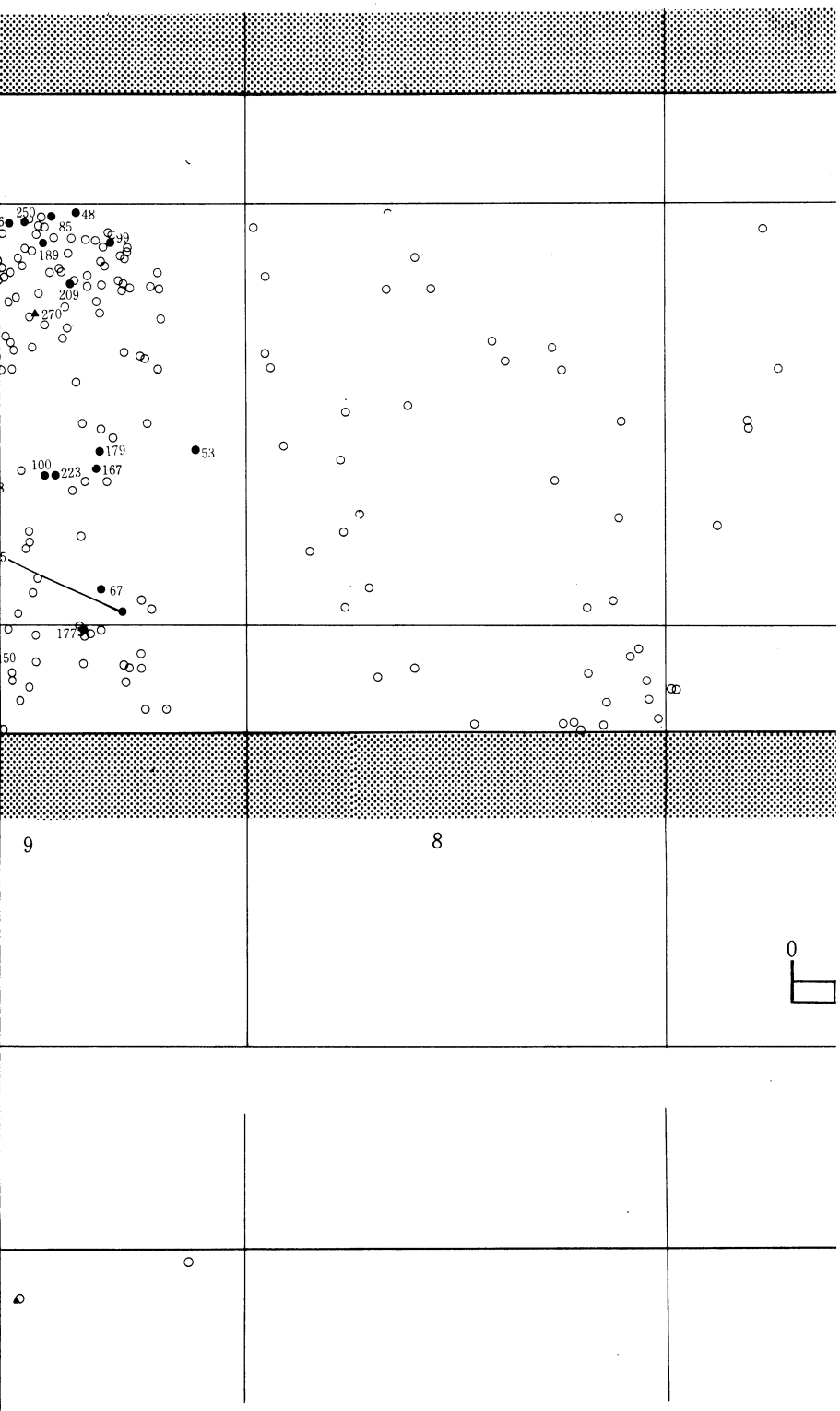
口縁部の上半が肥厚するだけで、紋様が付けられないものである。本遺跡出土のものには、僅かではあるが各器種や各器形に無文のものが含まれている。

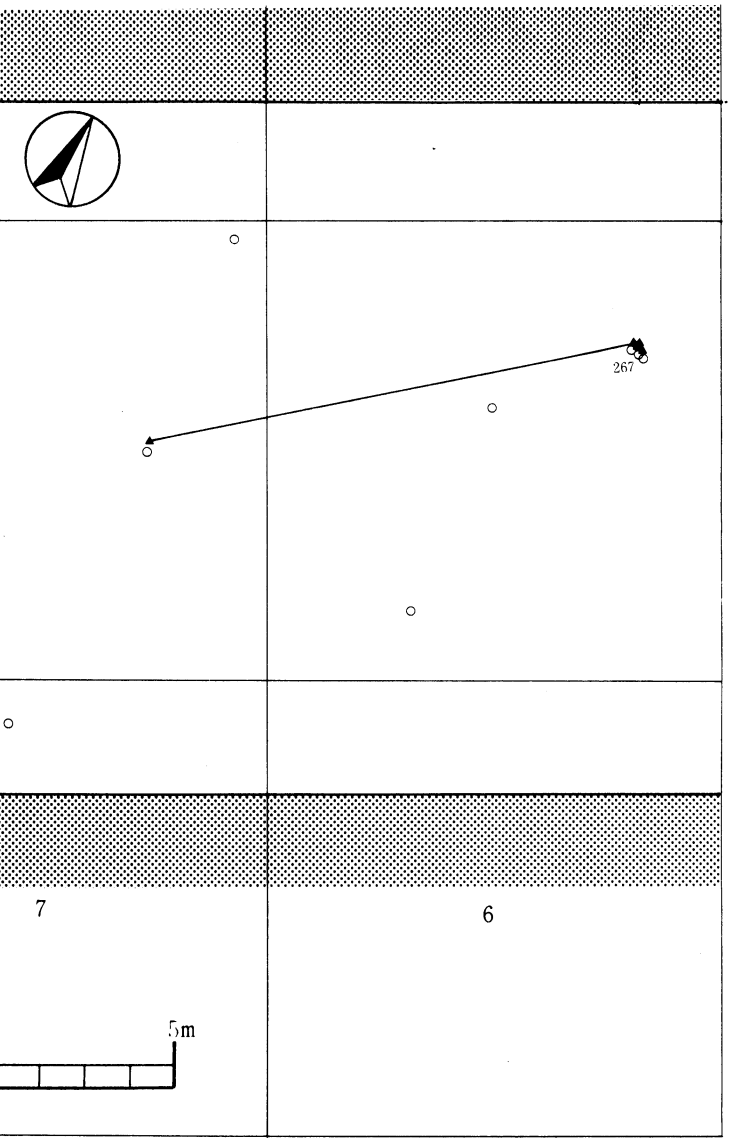

C
B
A
13
12



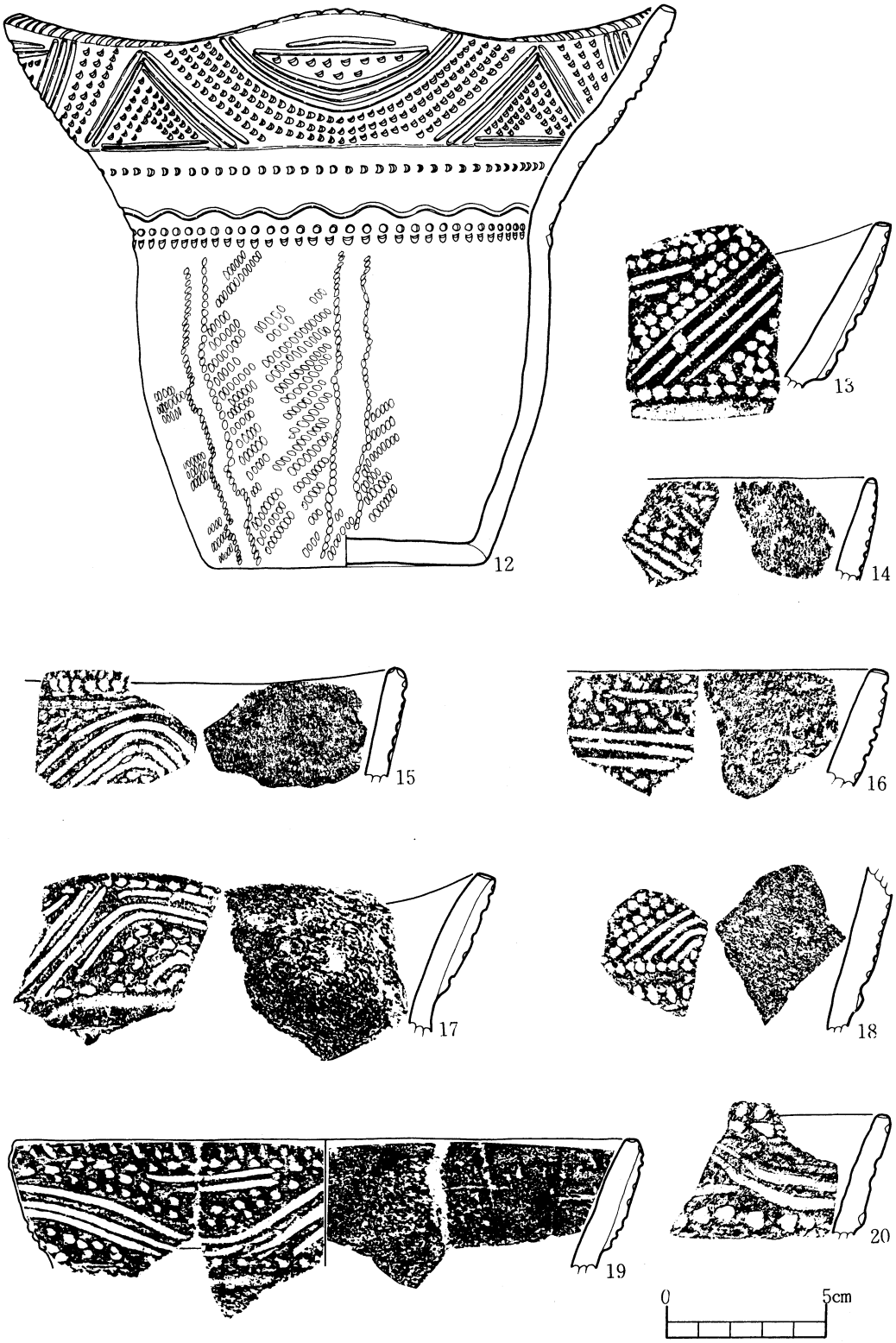


第17図　Ⅳ類土器出土分布図

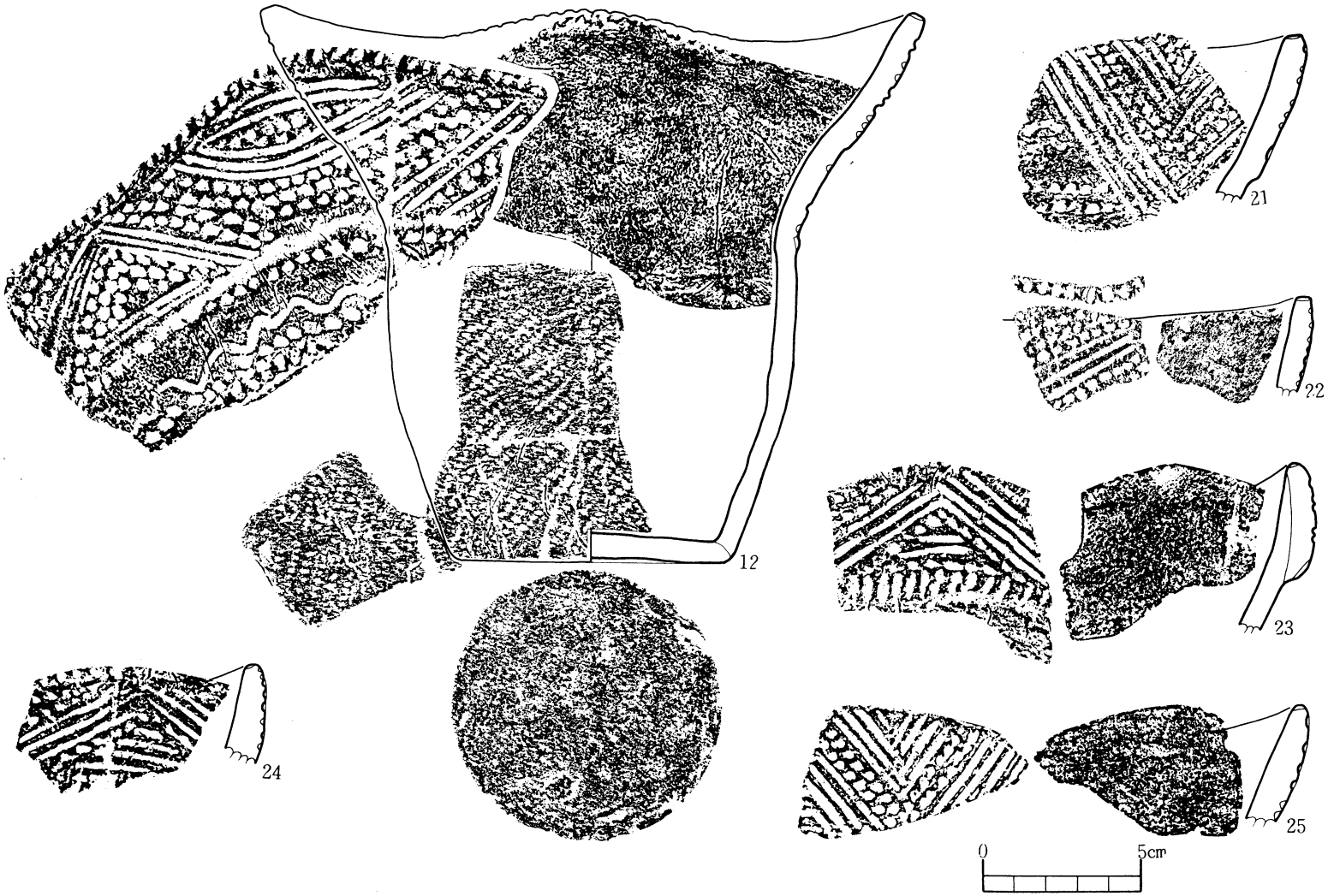

250
48
85
99
189
209
270
179
53
100
223
167
67
177
50
9
8
0



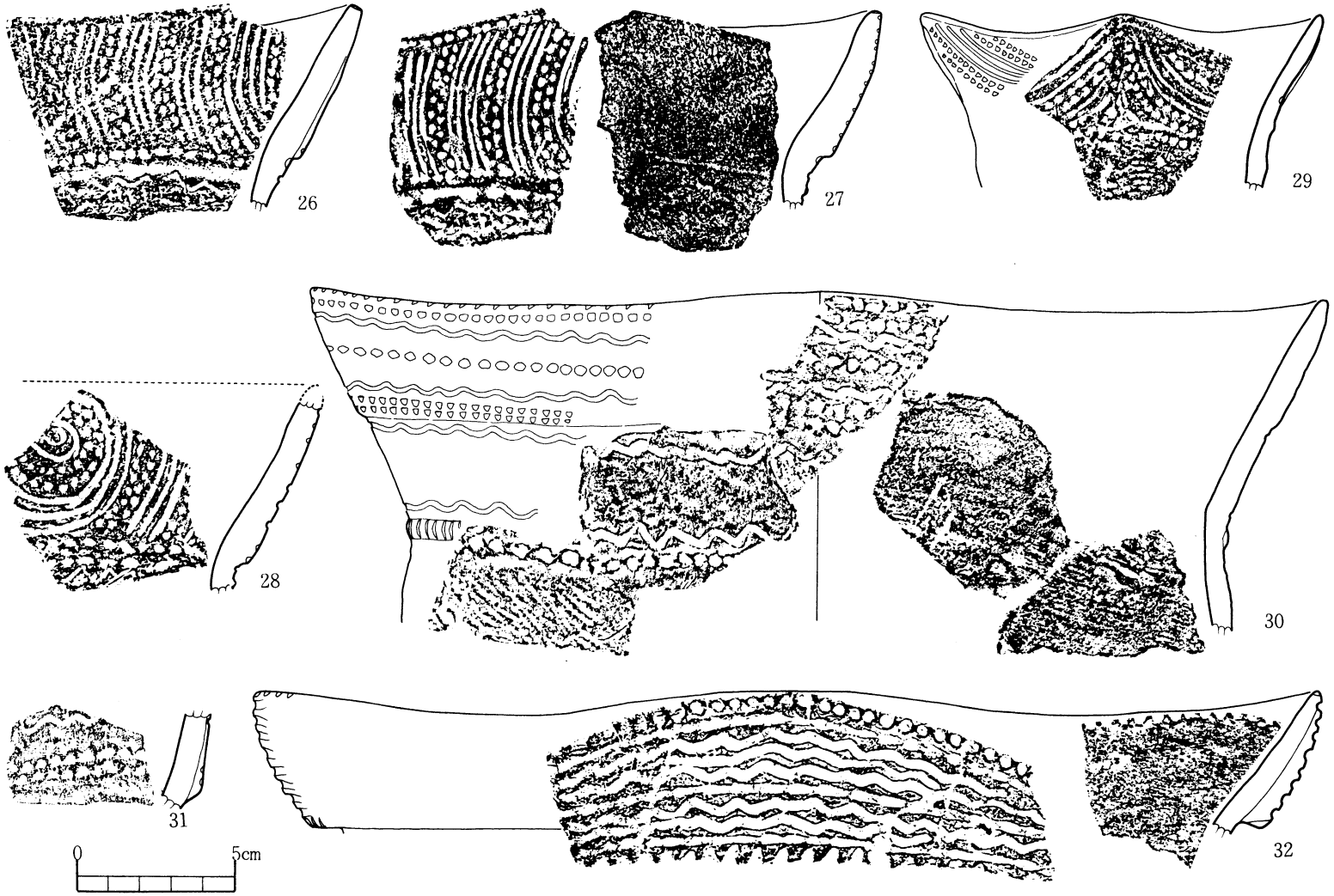
L =69.8 m



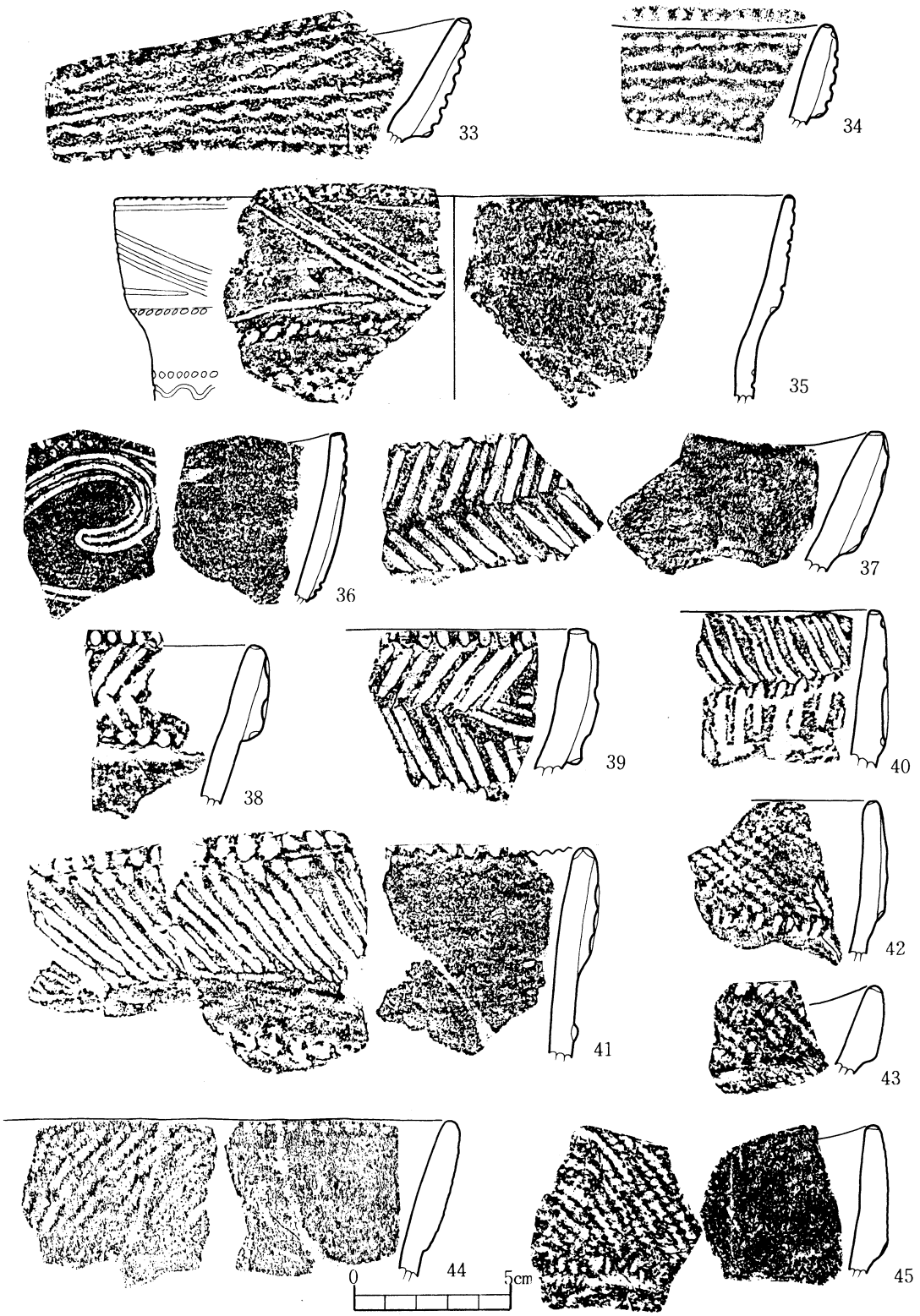
第18図　Ⅳ類土器実測図（1）



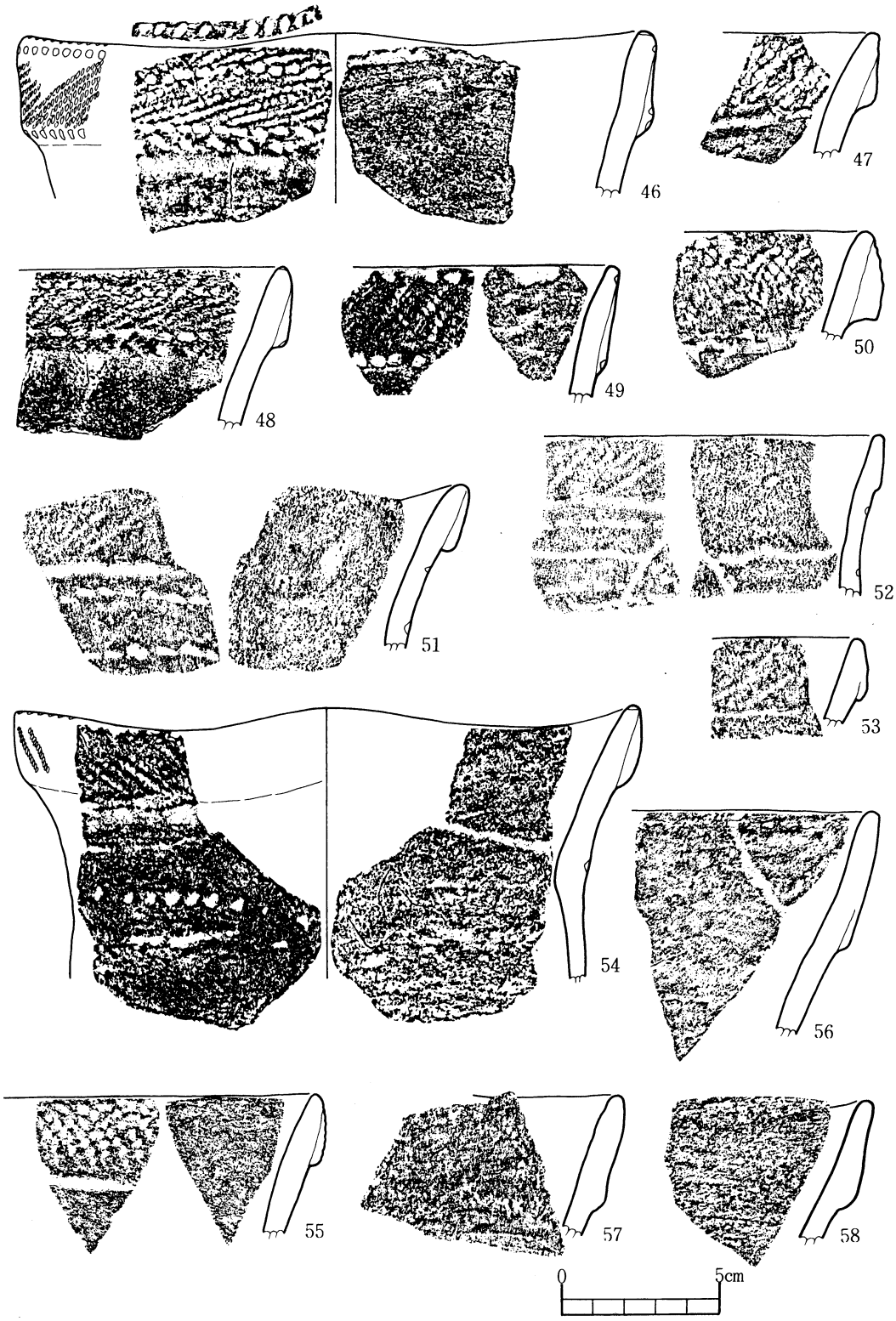
第19図　Ⅳ類土器実測図（2）



第20図　Ⅳ類土器実測図（3）



第21図　Ⅳ類土器実測図（4）



第22図　Ⅳ類土器実測図（5）

（ロ）幅狭肥厚口縁　（第23～27図－59～112）

大きく外反する口縁部が、幅狭で玉縁状に肥厚するタイプである。細片のため平縁状に作図したが、83等のように口縁の四隅が山形を呈した緩やかな波状口縁をつくるものも多い。一般的に大型の器形が多く、100のように緩やかな波状を呈するものが多い。玉縁状の肥厚部は狭いため、紋様も単純化される傾向にある。この肥厚部分の外面に施される紋様によって、a～f類別した。なおこの類別は、量的に少ないものがあり、個体差を示すだけのものもある。

a：凹線文で羽状文を描くほの（59～66）

肥厚口縁全体に短線で羽状文を描くものである。最も単純な紋様構成であるが、象徴的な紋様である。肥厚部は厚く、堅固である。口唇部には丁寧な刻目が施されるが、肥厚口縁下端にも施文されるものがある。41の肥厚口縁部直下には突帯文が巡らされ、その上には刻目が施される。このタイプは、幅広口縁（イ－e類）にも同施文があり、Ⅳ類の代表的な紋様の一つといえる。

b：凹線文で鋸歯文や斜線文を描くもの（67～79）

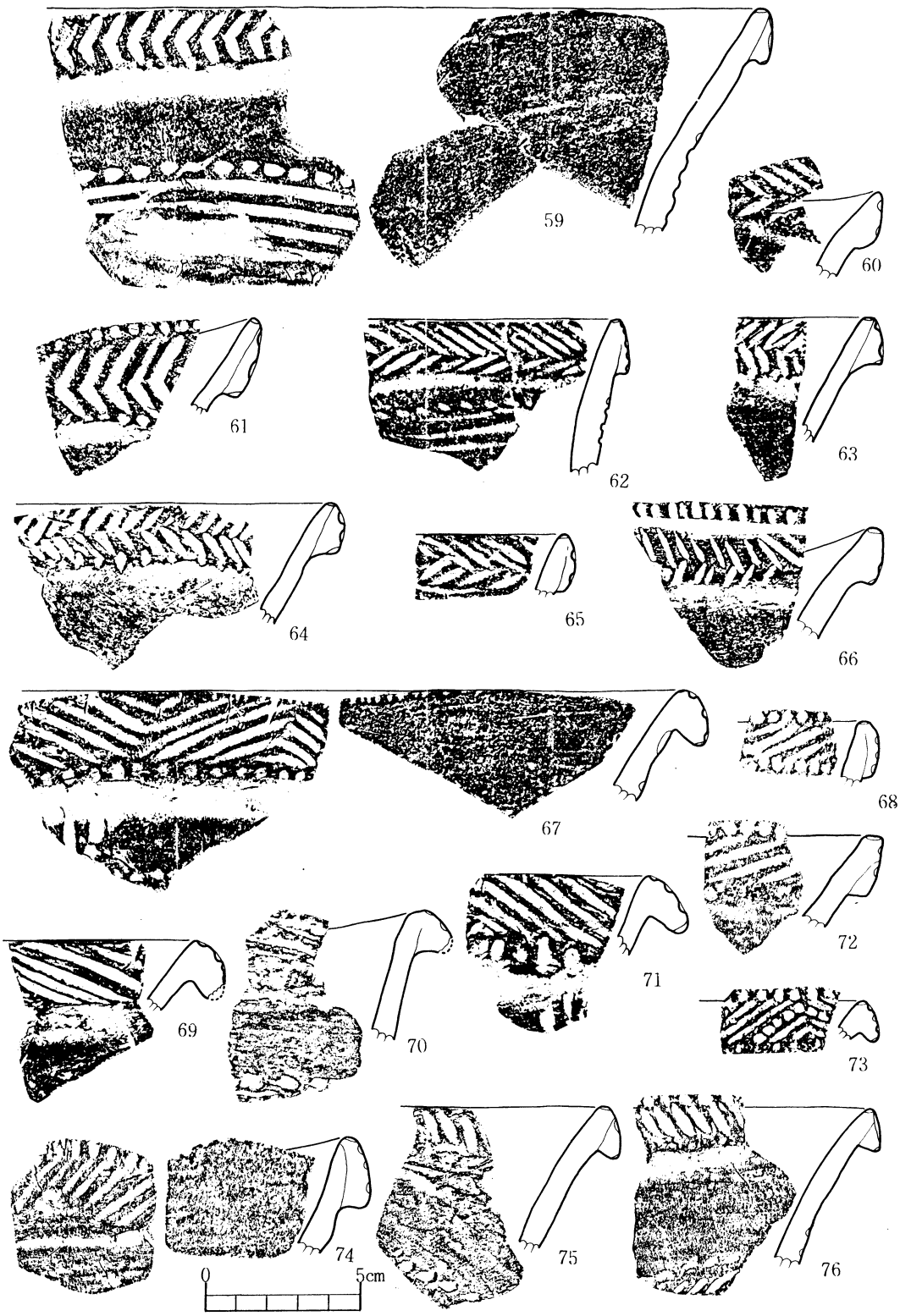
口縁肥厚部に大きく凹線文で鋸歯状の山形を描くもので、斜線文も含めた。肥厚口縁部下端には刻目が施されるものもある。73のように、鋸歯文の凹線文間に連続刺突文を施すものもある。イ－d類に凹線文帯で鋸歯文をつくるものがあるが、この類とは別であり、基本的には羽状文に含まれるであろう。

c：凹線文で平行線を描くもの（80～87）

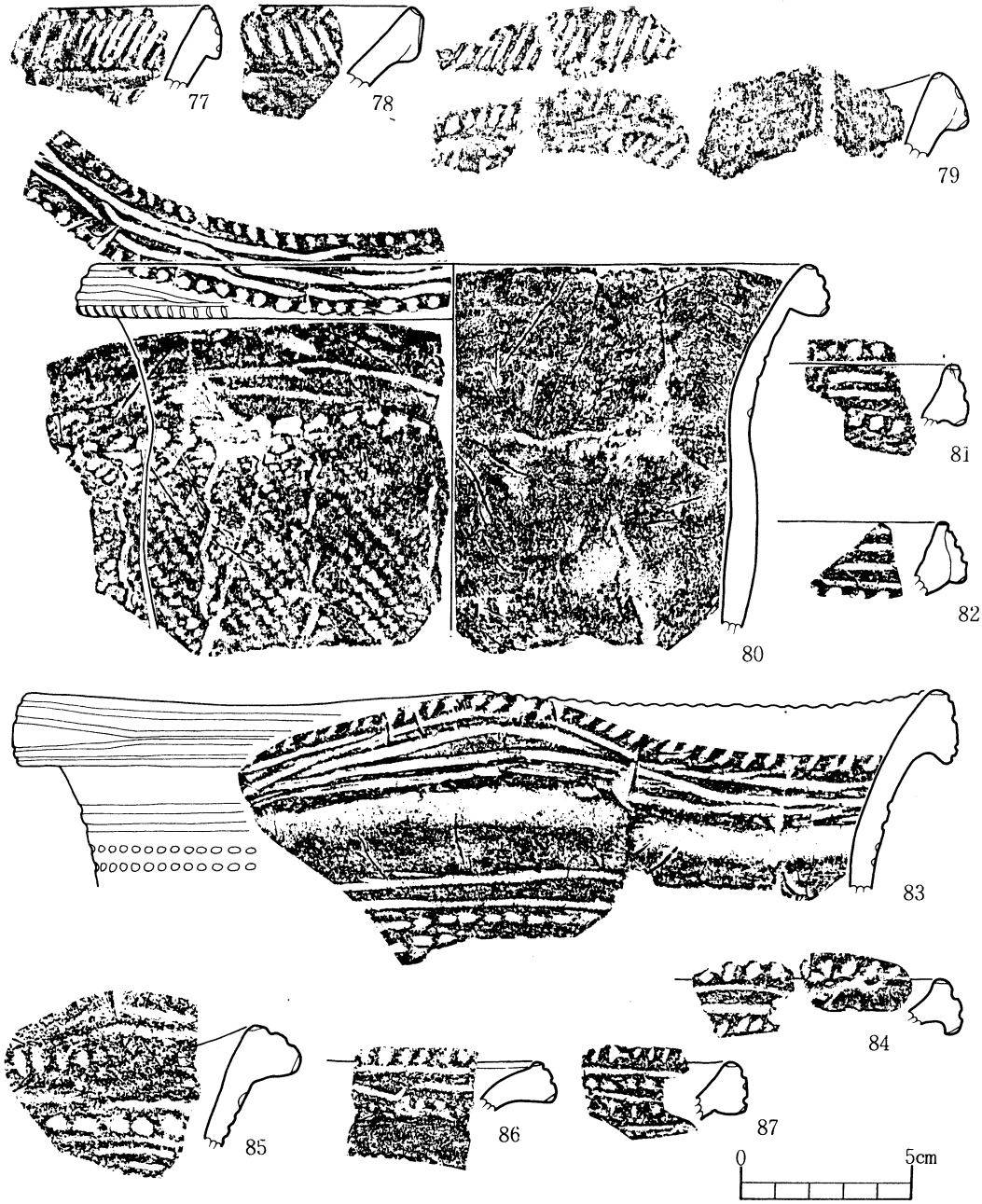
口縁肥厚部に平行線文を描くものである。肥厚口縁部下端には刻目が施されるものもある。波状の波頂部は、幅広になり凹線文間も広くして誇張する。80と83はこれに属する比較的大きい破片であるが胴部は僅かに張り、頸部で僅かに締まり、屈曲して口縁部は大きく外反する。口縁部は肉厚で幅狭い肥厚部となる。80は口径20.8cmを測る平縁口縁である。頸部から大きく外反した口縁部の肥厚部までの口辺部には、二条の凹線文が巡るだけで無文である。僅かに屈曲する頸部付近には、刺突文が巡る。胴部には一個の結節をもつ縄文が施される。縄文はＬＲで結節はＲでつくる。

d：円弧状の波状文を描くもの（88～91）

肥厚口縁部に押し引き状の凹線文で、丁寧な円弧状の波状文を描くものである。押し引き状の手法で波状の凹線文はより華麗さを増す。88は、肥厚部下の口辺部に押し引き状の同手法で二条の凹線文を上・下位に巡らせ、その間には波状文を描いている。



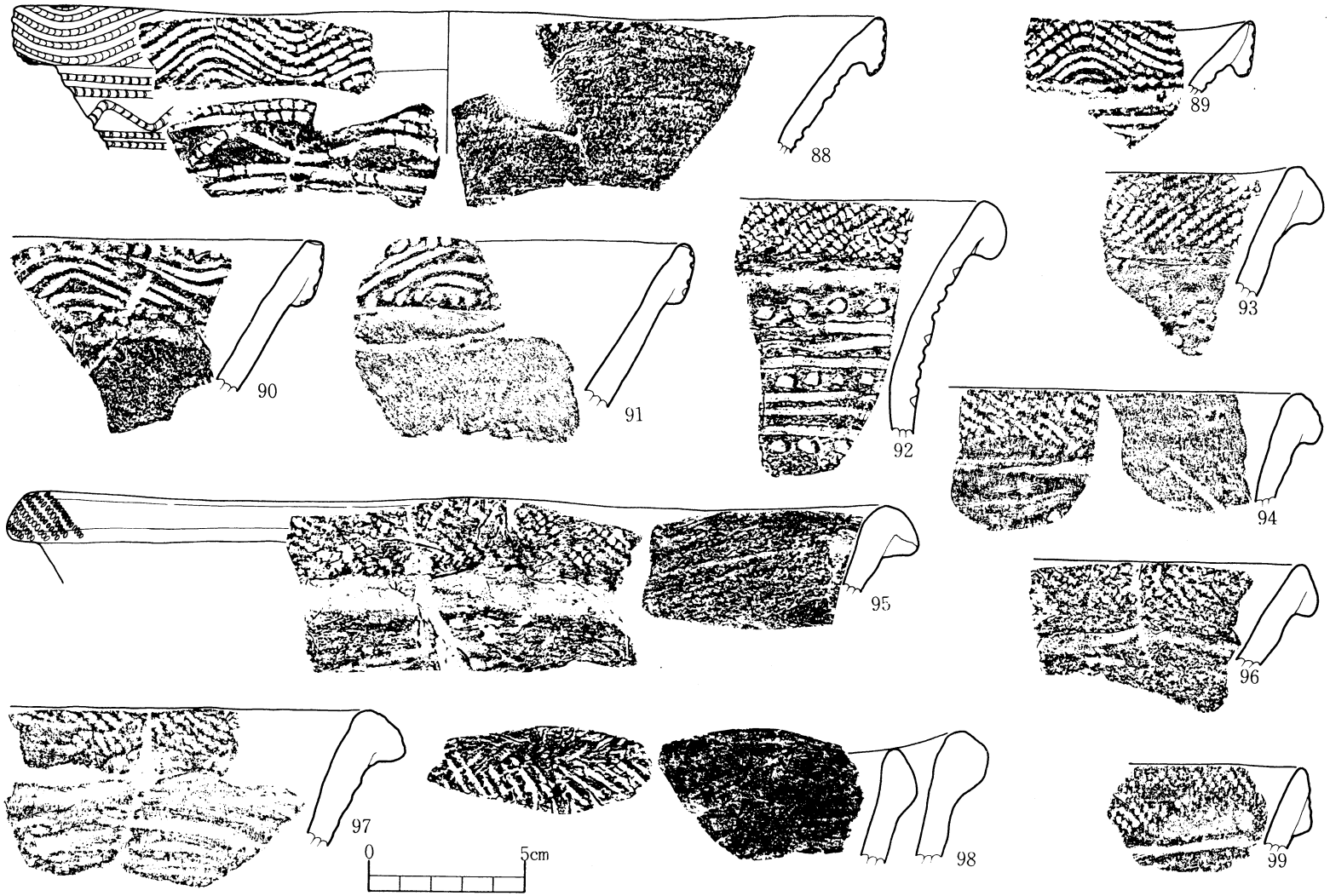
第23図　Ⅳ類土器実測図（6）



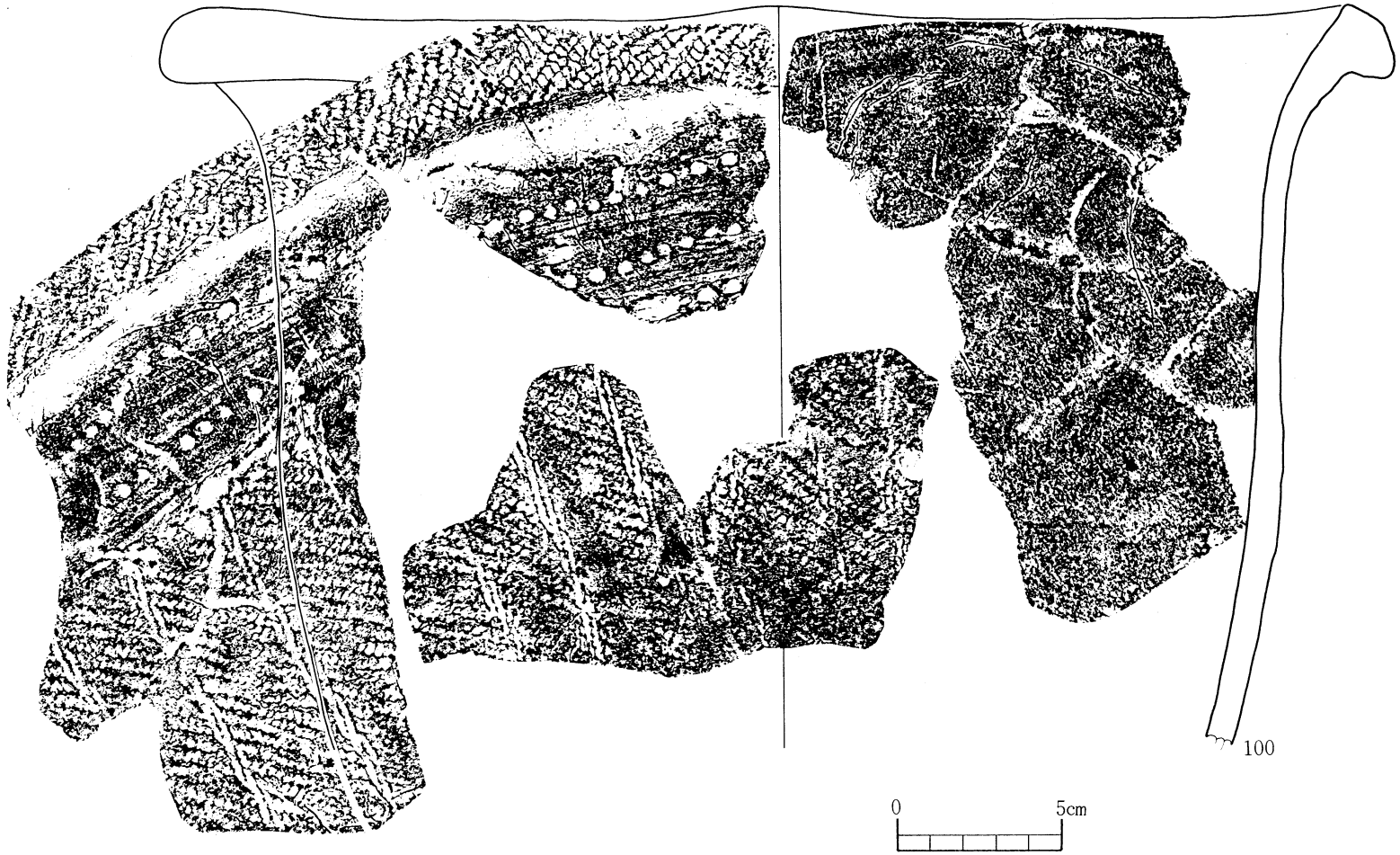
第24図　Ⅳ類土器実測図（7）

e：肥厚部に縄文を施文するもの（92～100）

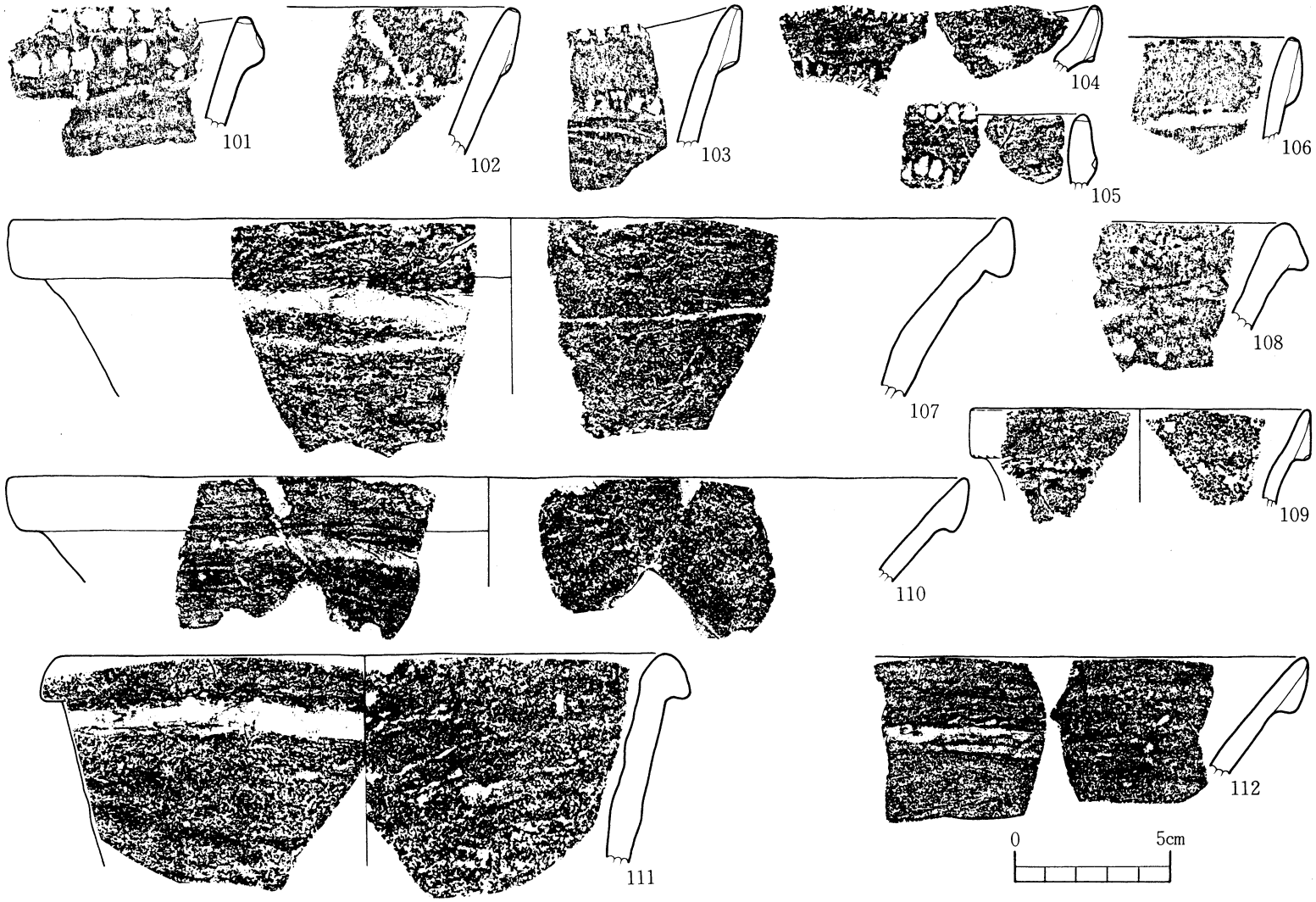
口縁肥厚部の全面に、縄文を施文するものである。この場合、口唇部や肥厚部下端には刻目は施されない。100は、胴部上半部が判明するものである。口径34.6cmを測る。口縁肥厚部は緩やかに波状を呈す。肥厚口縁部下から頸部付近には、刺突連点文が横位に3条程度巡る。



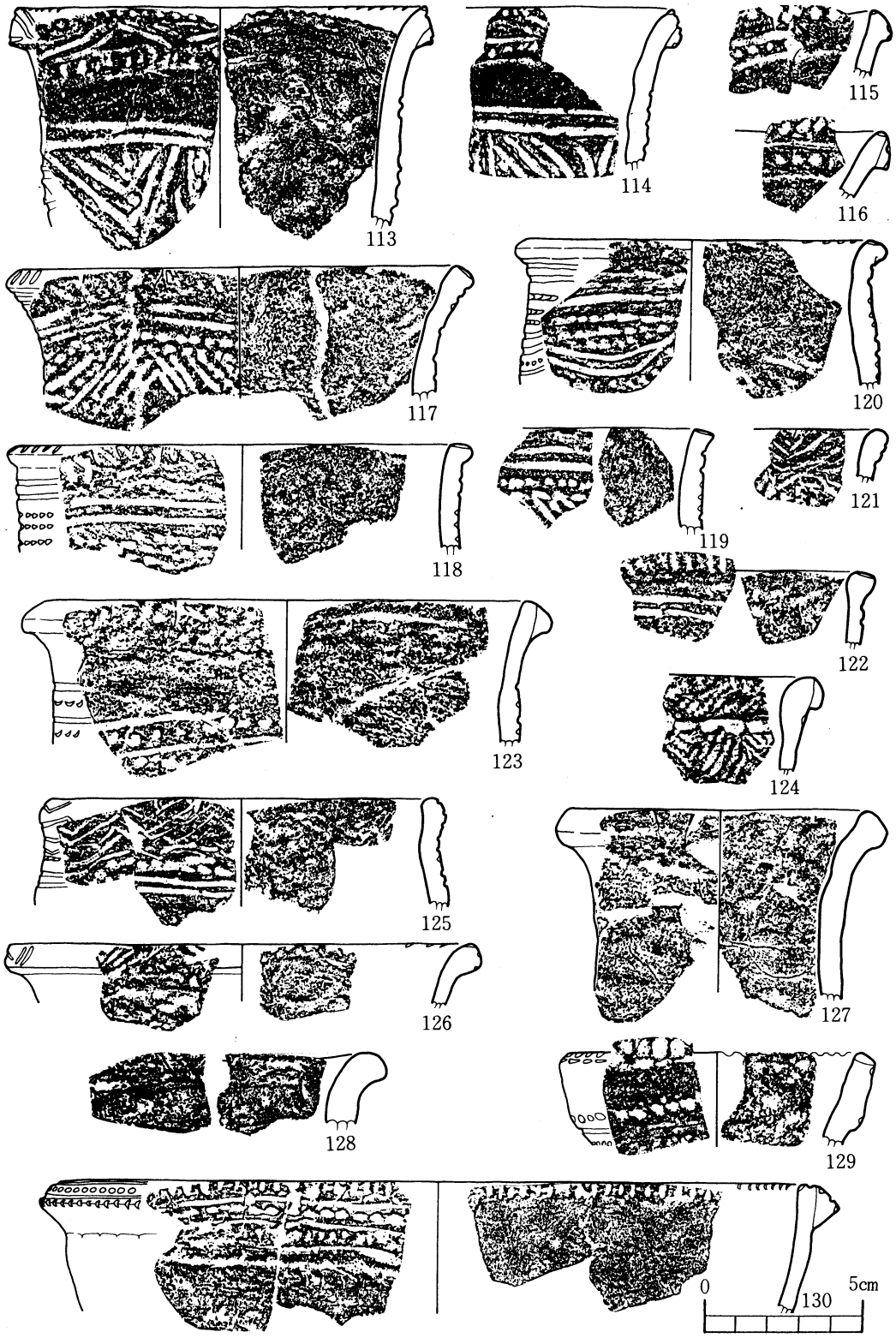
第25図　Ⅳ類土器実測図（8）



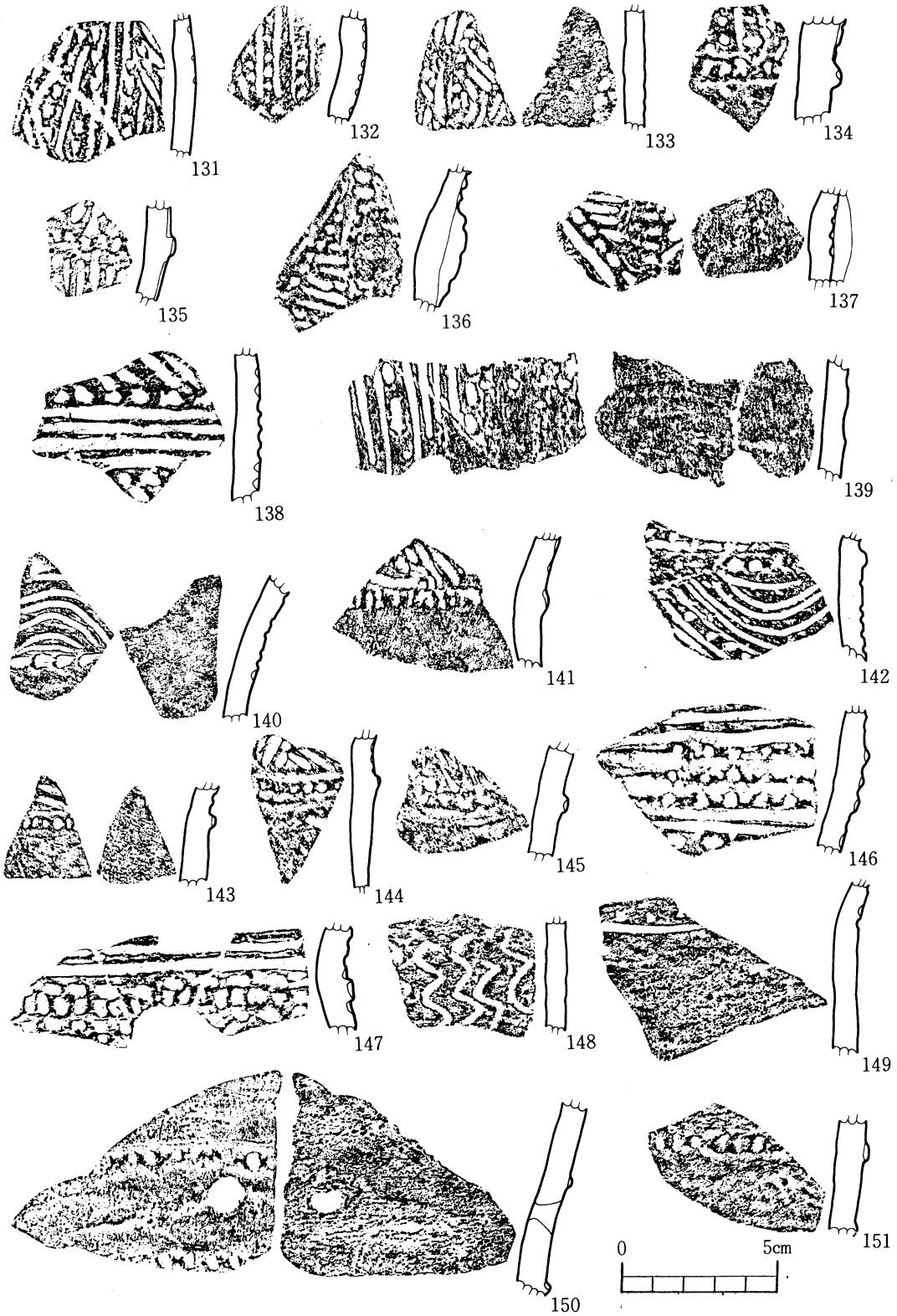
第26図　Ⅳ類土器実測図（9）



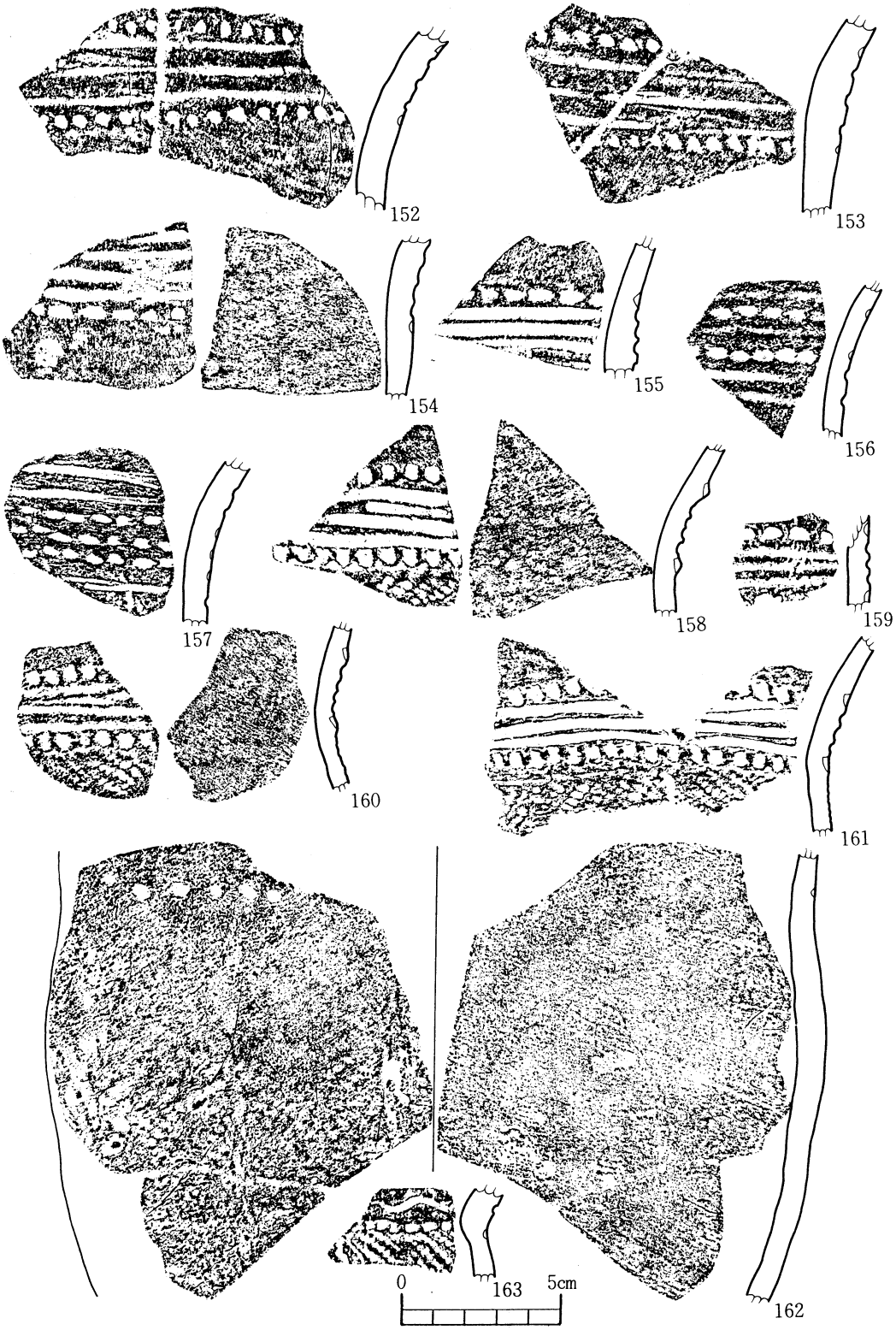
第27図　Ⅳ類土器実測図（10）



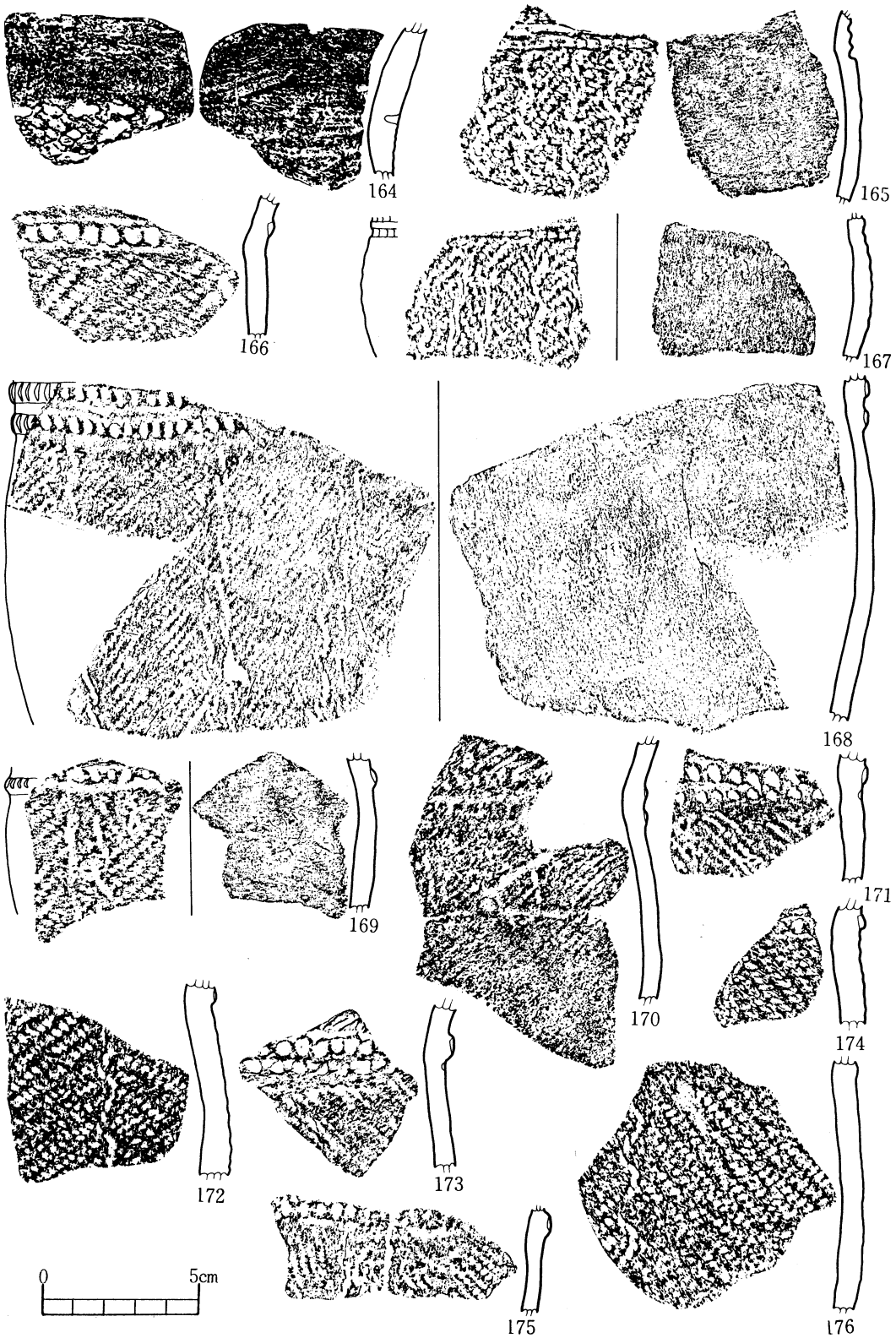
第28図　Ⅳ類土器実測図（11）



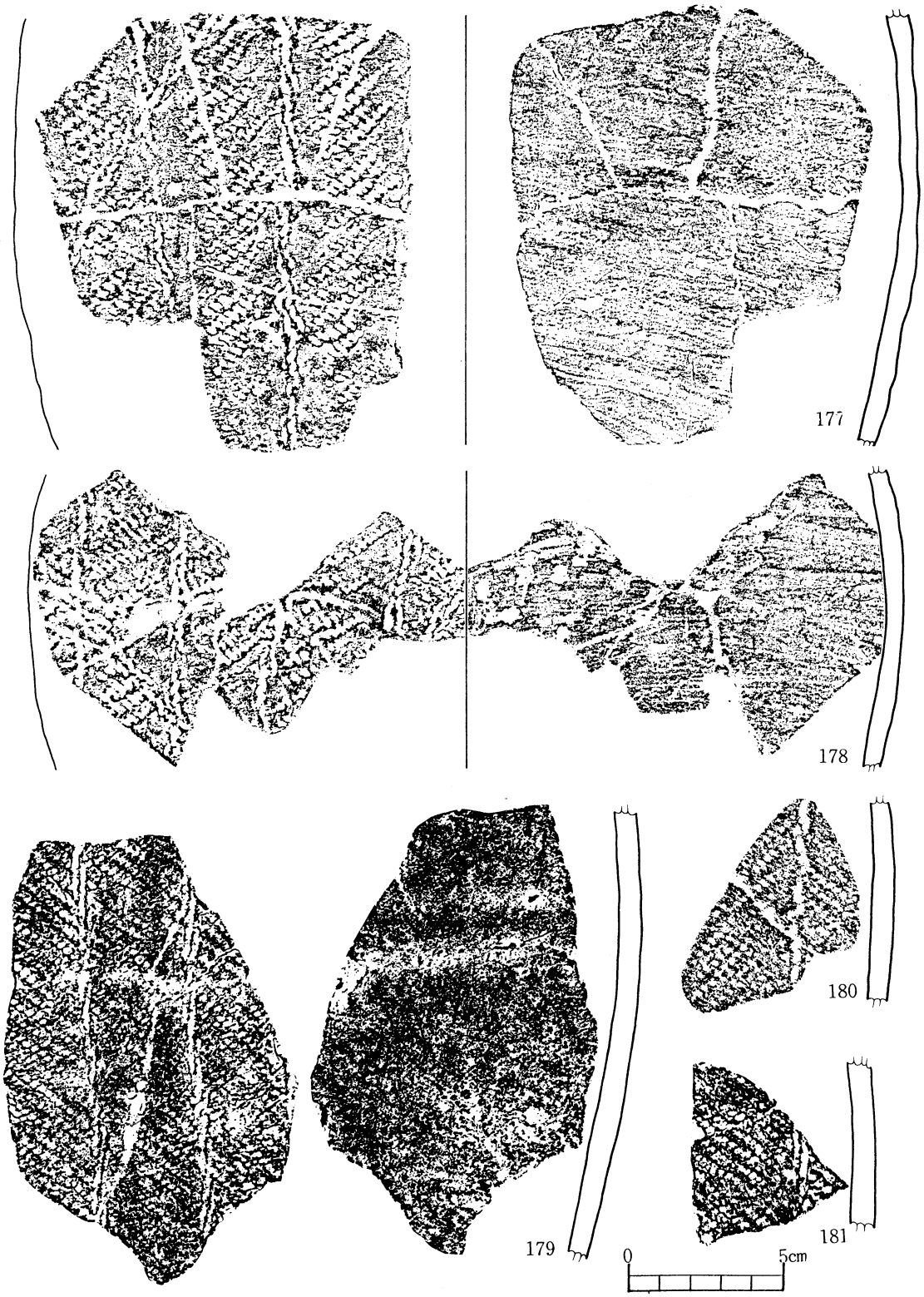
第29図　Ⅳ類土器実測図（12）



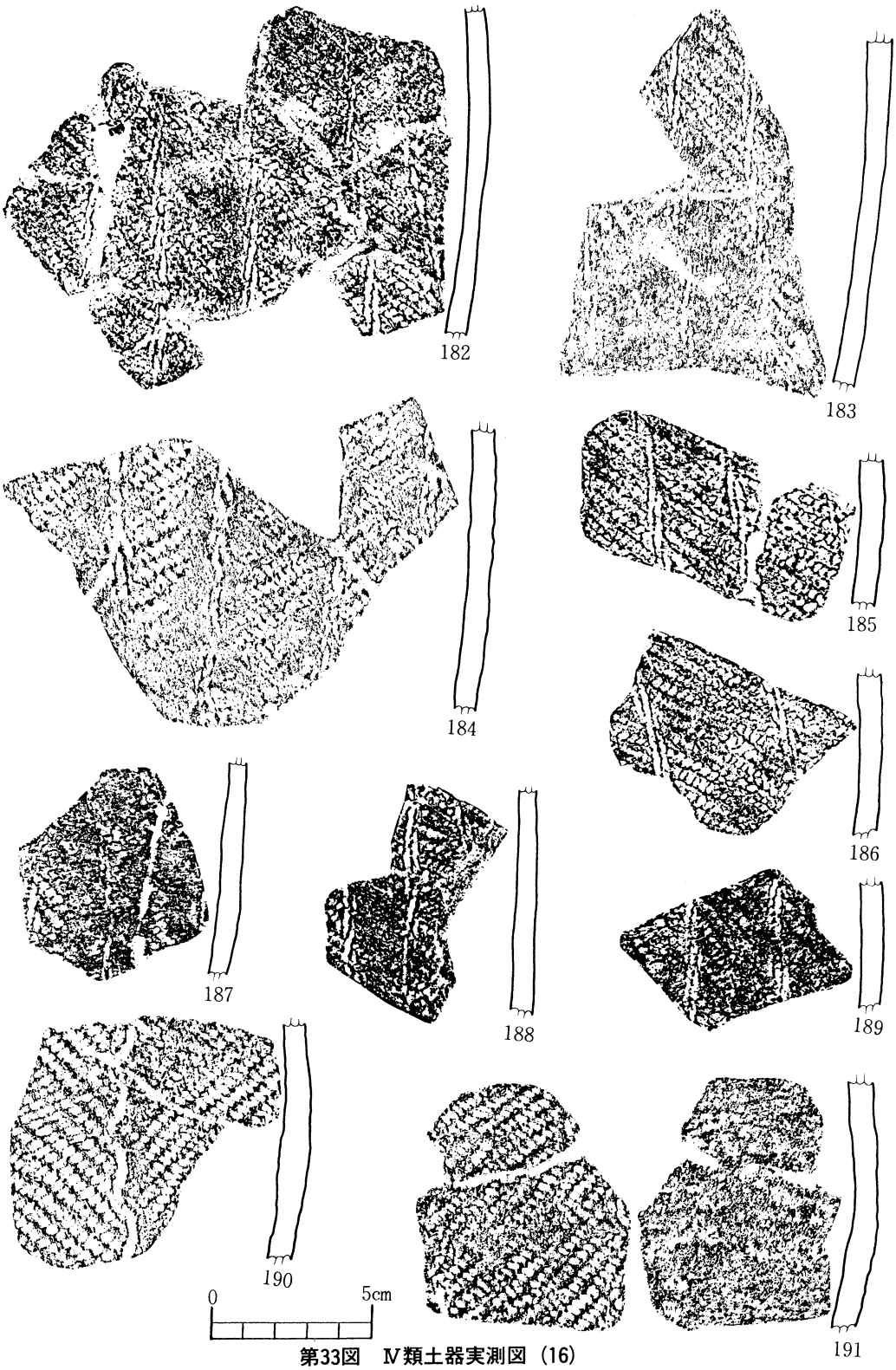
第30図　Ⅳ類土器実測図（13）



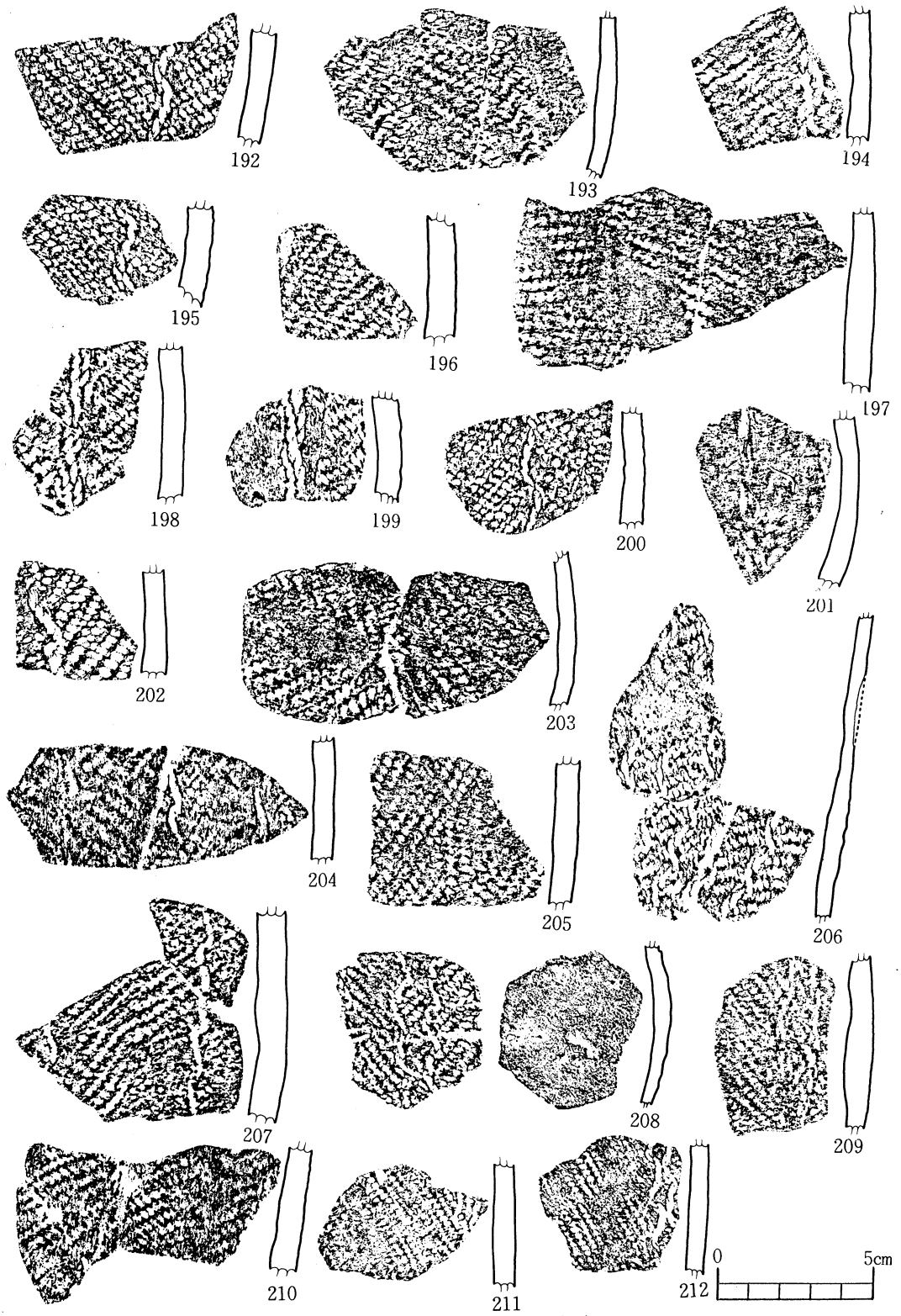
第31図　Ⅳ類土器実測図（14）



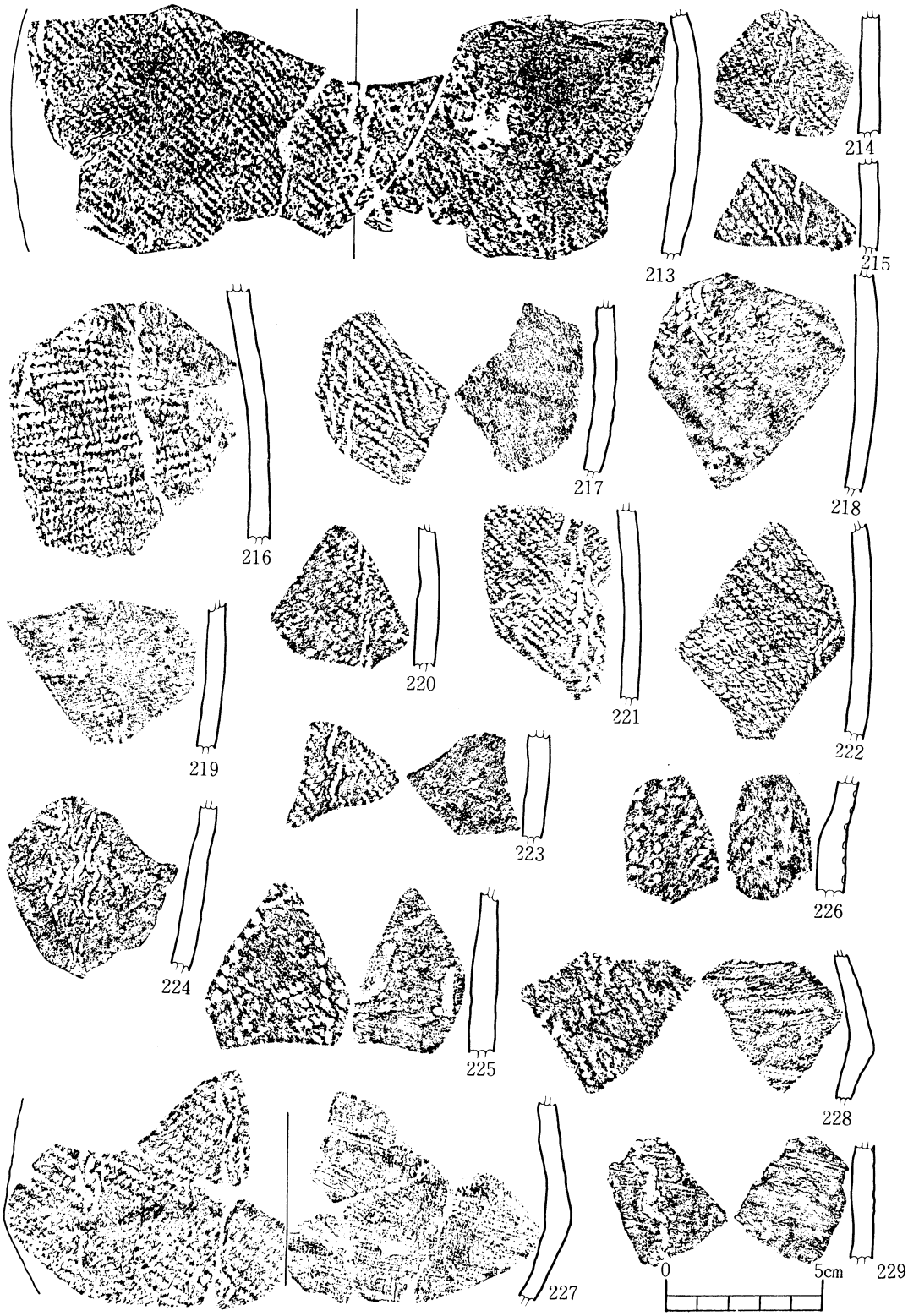
第32図　Ⅳ類土器実測図（15）



第33図　Ⅳ類土器実測図（16）



第34図　Ⅳ類土器実測図（17）



第35図　Ⅳ類土器実測図（18）

f：肥厚部が無文のもの　(101～112)

口縁部の上半が肥厚するだけで、紋様が付けられないものである。101～105は口唇部と肥厚部下端に刻目を施すもので、この類で取り扱った。本遺跡出土のものには、僅かではあるが各器種や各器形に無文のものが含まれている。

(ハ) その他　(第28図－113～130)

その他として、イの幅広肥厚口縁やロの幅狭肥厚口縁に属さないものを一括してここで取り扱う。全体に小型の器形で、ミニュチュア土器の形態でもある。113～116・120～123は、口縁部が肥厚するタイプでロ類に属すことも考えられるものである。紋様は凹線文と連点文で鋸歯状を構成する紋様である。胴部も口縁同様の紋様が操り返され、縄文は施されない。124は小型の肥厚口縁部であるが、頸部付近に刺突文を巡らせ肥厚部と胴部には唯一縄文が施文されている。117～122は口縁部は肥厚せずにそのまま外反する。紋様は、凹線文と連点文を操り返し施文する。125は口縁部を若干内湾気味に仕上げるものである。126～128は、口縁部は外反させ、口唇部は若干膨らませ丸くおさめる。129は小型の器形の肥厚口縁を呈する。口唇部と肥厚部下端に刻目が施される。130は、口縁外面に三角形の貼付突帯文を巡らせ、口唇部と突帯文の一辺を併せて口唇部としている。器形は鉢状になる。紋様は凹線文間に刺突文を施すもので、口唇部両端には刻目が施される。以上、これらは定形化した器形ではなく，特殊な器形を持つものとして捉えた。

② 頸部　(第29図～第31図－131～176)

胴部が僅かに内湾し、そこから緩やかに屈曲し外反して口縁部をつくる。この緩やかな屈曲部が頸部にあたる。しかし、100のように胴部からそのまま外反して屈曲部をつくらないものもある。口縁部片で頸部の状態が判明する資料は少ないが、12のように頸部に刺突連点文を巡らすものや30のように突帯文状に盛り上げ刻目を付けるものなどがある。

第29図～第31図は、頸部から胴部上半の部位である。第29図は、頸部付近の破片で特殊な紋様が確認されたものを取り上げた。134は突帯文を貼付したもの、136・137は頸部付近にコブ状の突帯を貼付する特殊なものである。これらの中には胴部破片も存在しており、胴部に結節縄文を施さない一群も存在している。第30図・第31図は、一般的な施文がみられるものである。130～176のように、刺突文の間隔を若干あけて施文するものと168のように連続して密に施文し、刺突によって突帯文状に隆起させるものとがある。この場合，ほとんどが胴部に結節縄文を施している。

③ 胴部　(第32図～第35図－177～229)

第32図～第35図は、胴部片である。胴部は、緩やかに膨らんだ胴張りが一般的である。しかし、227や228のように、胴部中央で稜をつくって屈曲する特殊なタイプもある。

胴部の紋様には、結節縄文が施される。結節は、一結と二結がある。縄文の撚りは、ＬＲは39片を数え、ＲＬは27片である。同一個体を考慮すればあまり両者の開きはみられない。そのほか173にＲだけの撚りが確認されている。結節を境に右左撚りが替わるものは10点存在している。また、結節の撚りは、ＬＲの撚りはＲで結び、ＲＬの撚りはＬで結ぶものである。

225と226は縄文の上から刺突文を施文する珍しいものである。さらに、229はＲの結節だけを縦位に転がすもので、僅か一片の出土である。

④　底部　（第36図～第38図－230～265）

第36図～第38図は，底部である。底径は10cm程度の大きさが一般的であるが、264等のように5cm程度の小さいものも存在する。底部の底面の形態は、大きく上げ底を呈するもの、僅かに上げ底を呈するもの、ほぼ平坦面を呈するもの等に分けられる。底部側面の形態は、ほぼ垂直に近く立ち上がるもの、外方に拡がって立ち上がるもの、大きく外方に拡がって立ち上がるもの等がある。第36図は、底部側面に紋様が施文された比較的残りの良好なものである。これらのほとんどは、縄文や結節縄文が施文されている。

底部と側面の接着の仕方には，ほとんど同じ手法が看取される。249のように、底部円盤の中央を上げ底状に持ち上げて凸面をつくり、円盤の端部（円盤の周縁）は斜めに整形し、この斜めの周縁に胴部下端の側面を接着させる方法である。そのため側面は、若干外方に立ち上がり膨らみをつくって胴部へ続く。なお、上げ底の底部だけではなく、246や259のような平底の場合でも同じ手法がみられる。

⑤　補修孔　（第29図－150）

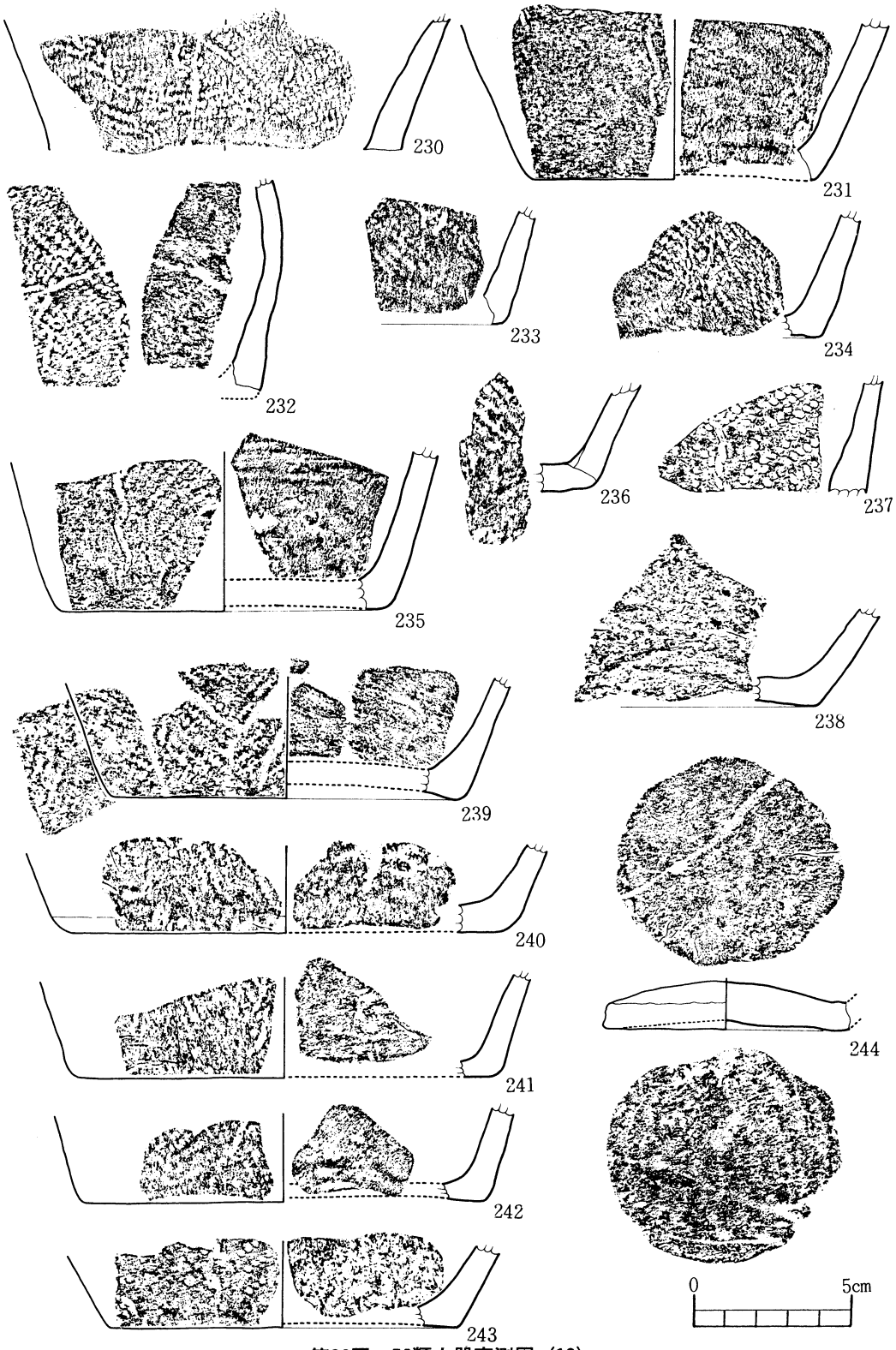
150は頸部の屈曲部の上位に穿孔した穴が存在する。外側の穴径は1.2mm程度を測り、内側は4mm程度と小さくなる。円穴は、外側からドリル状の器具で丁寧に穿孔されている。右側辺はシャープな縦割れが確認され、この割れ部分の補修孔と考えられる。

（2）壺形　（第39・40図－266～278）

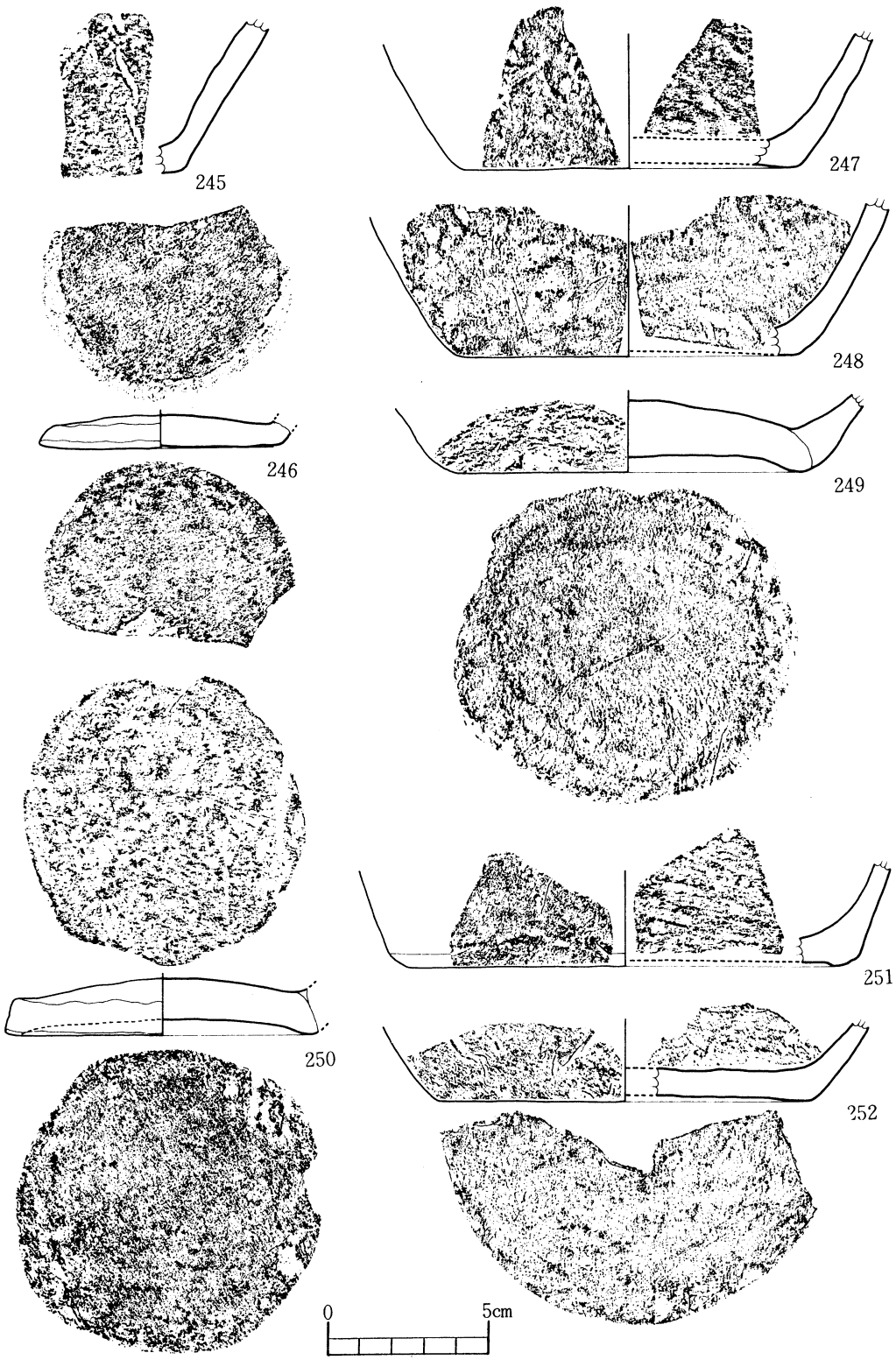
壺形は、細部には若干のバリェーションがみられるものの壺形として一括して促え、紋様上からａ・ｂに細別して説明する。ａ類は紋様の付いた有文で、ｂ類は紋様の付かない無文のものである。南九州の縄文時代の早期に該当する土器型式に、壺形土器の存在が近年明らかになりつつある。縄文土器の壺形土器という呼称の仕方には多くの問題があるが、一応ここでは、形態状から「壺形土器」として細分した。

ａ：有文（266～272）

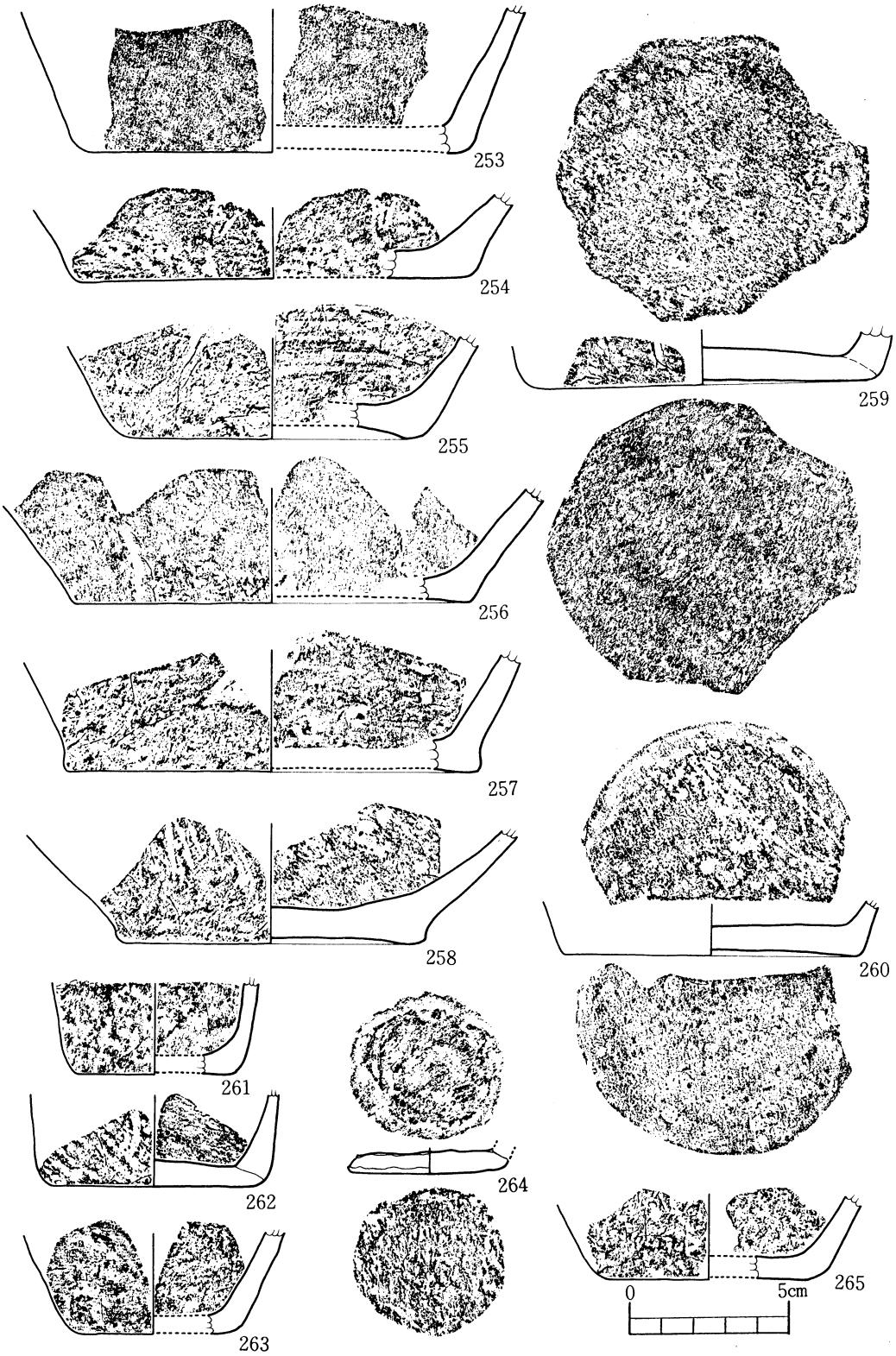
266～272は、ＡＢ９区からＡＢ11区の間に出土している。壺形の器形を呈し、有文のものである。器形状はほぼ類似するが、紋様の施文が異なる。器形は、口縁部は内傾し、口縁上端に



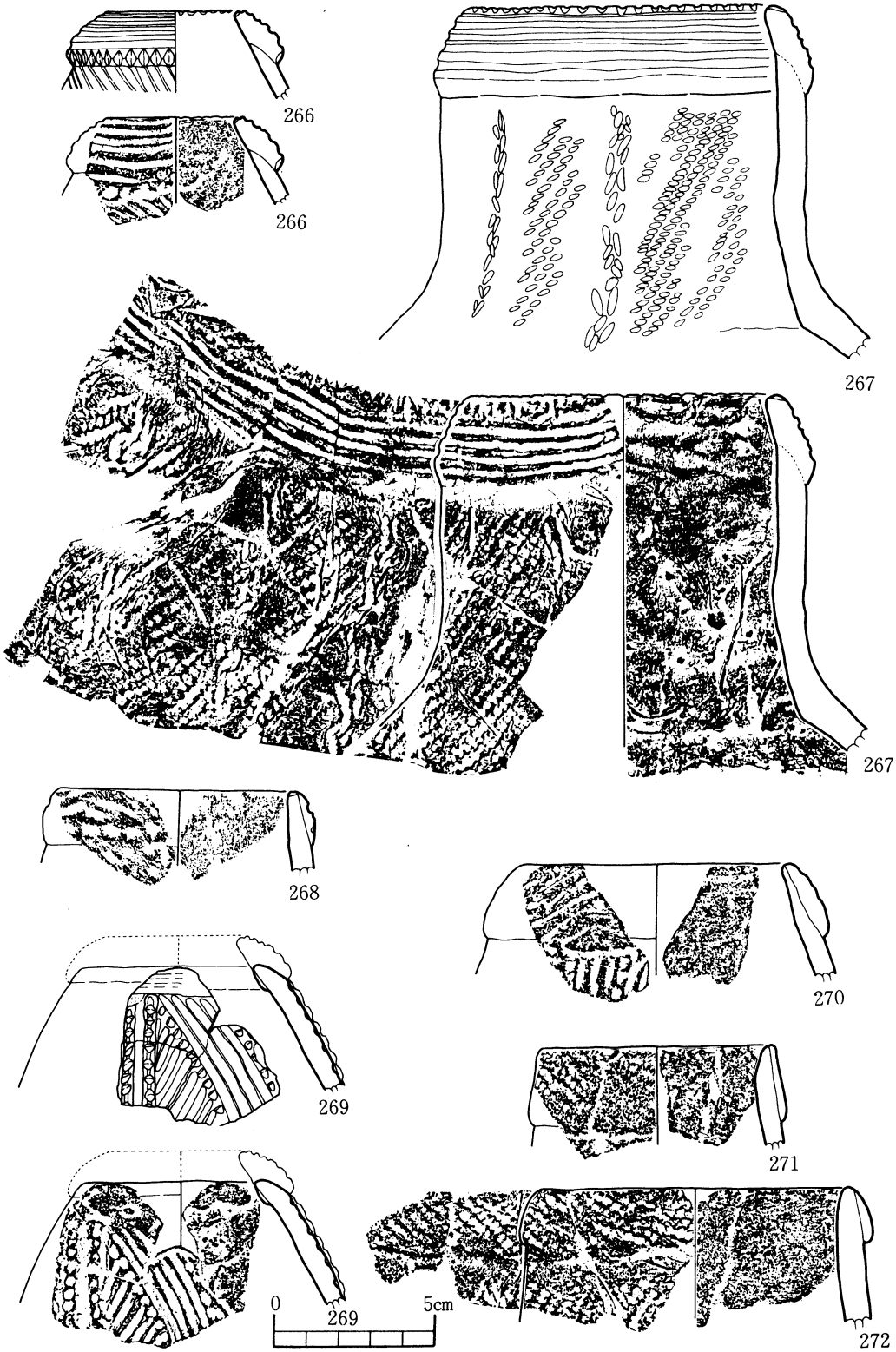
第36図　Ⅳ類土器実測図（19）



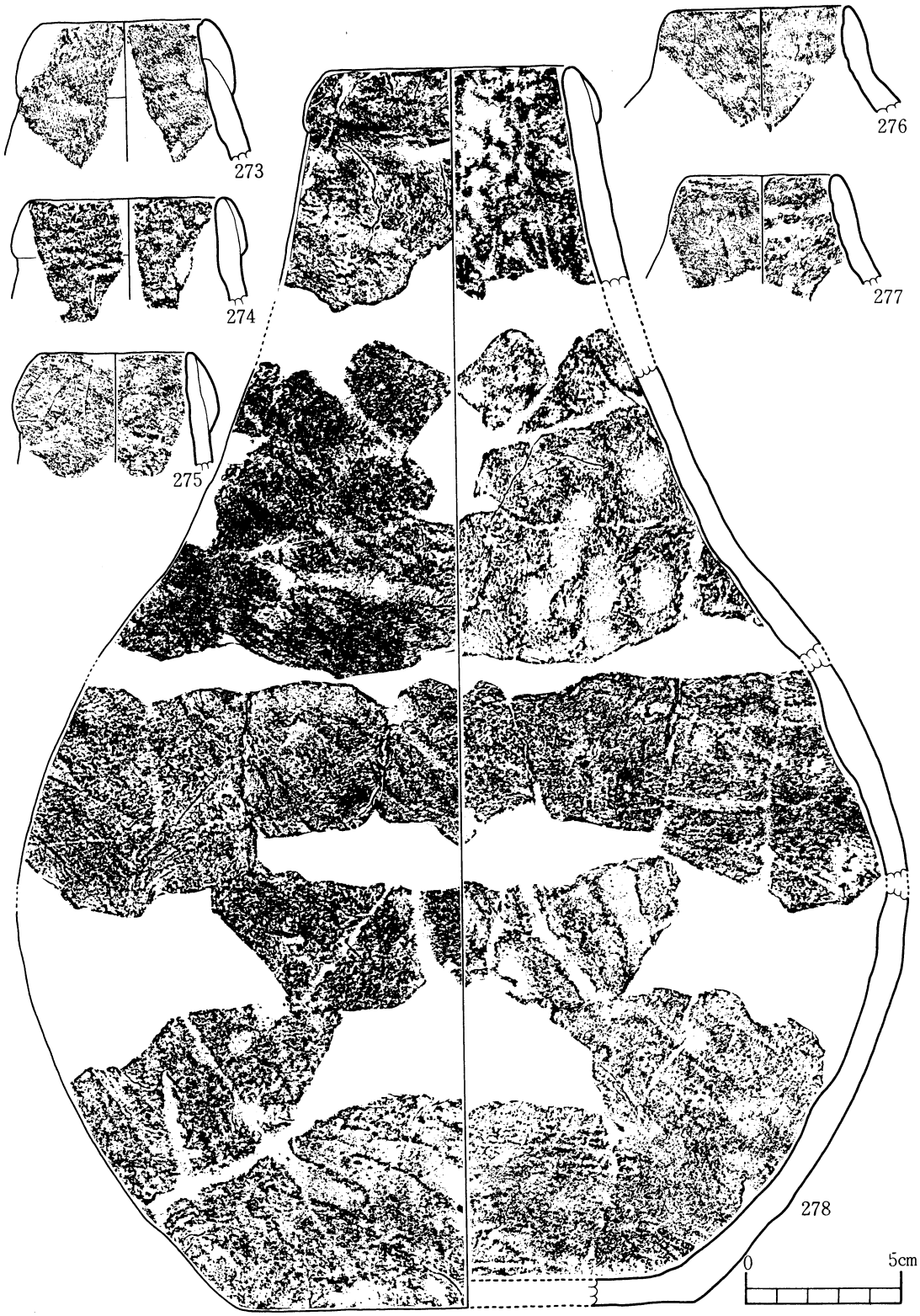
第37図　Ⅳ類土器実測図（20）



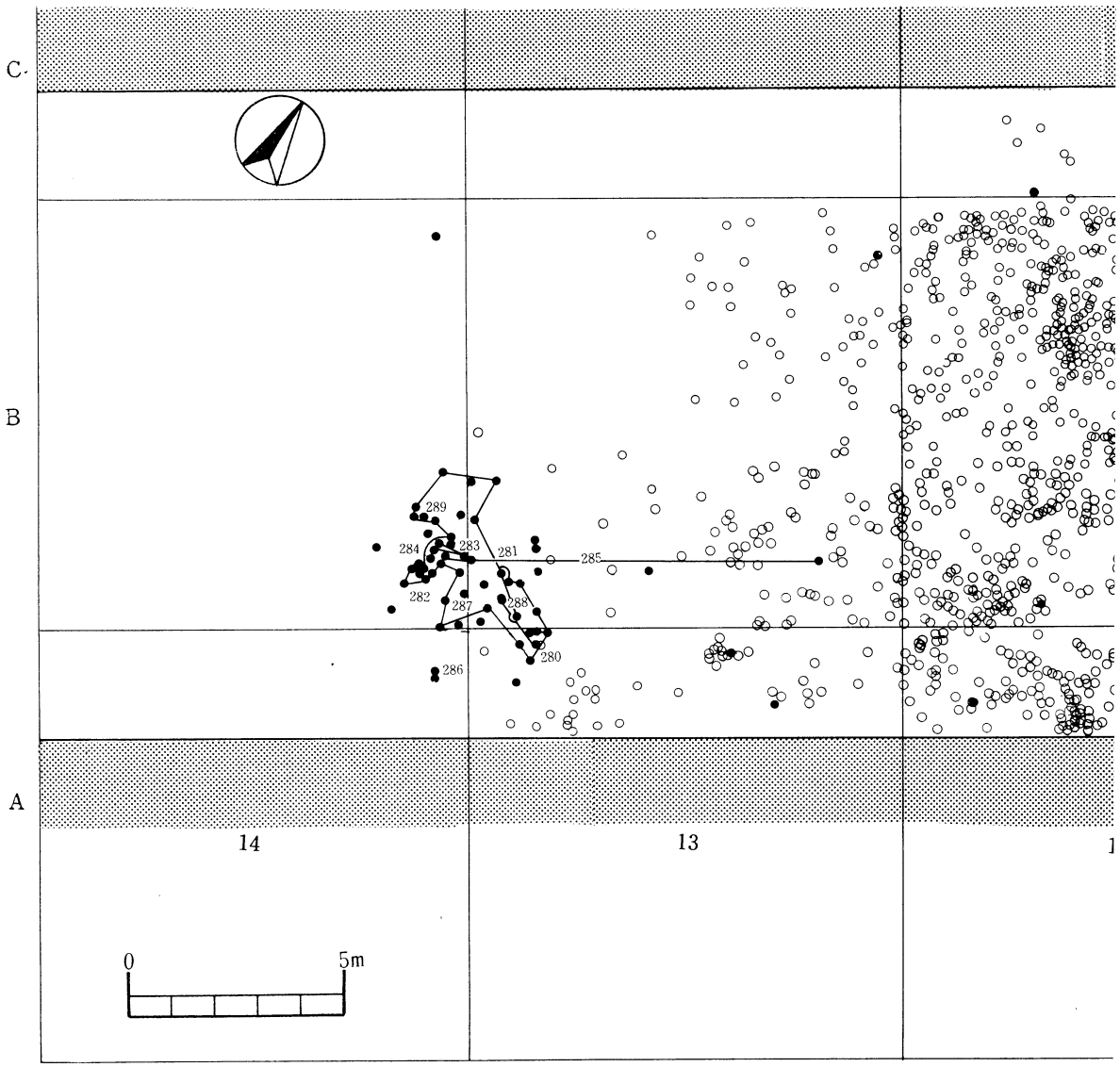
第38図　Ⅳ類土器実測図（21）

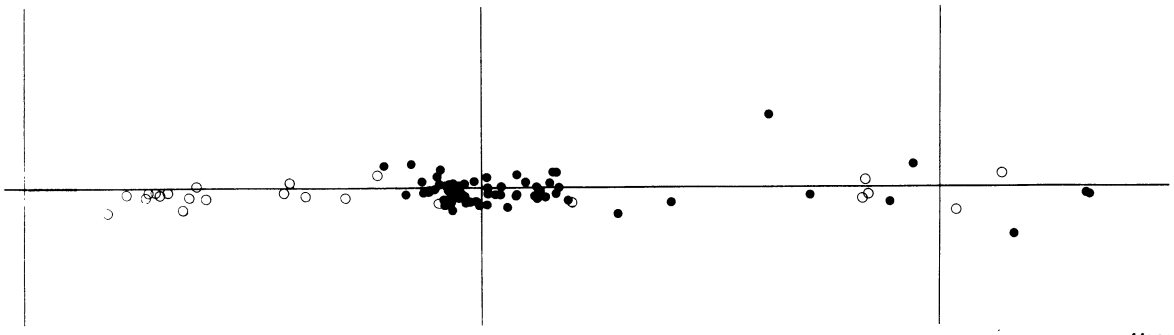


第39図　Ⅳ類土器実測図（22）



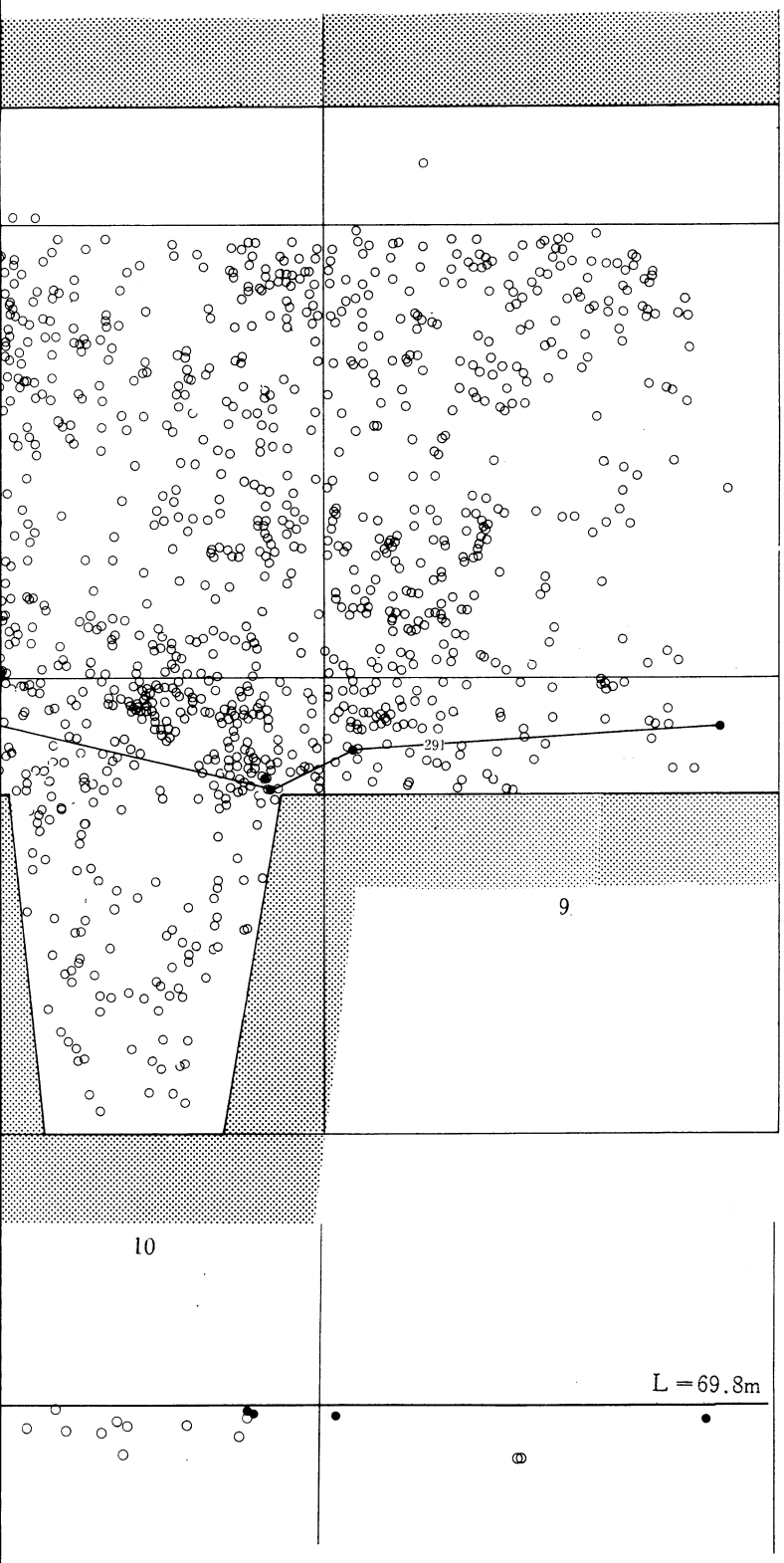
第40図　Ⅳ類土器実測図（23）





第41

図　Ⅴ類土器の分布と他類土器との比較


291
9
10
L＝69.8m

肥厚させた粘土帯を貼付して、さらにすぼまった形を呈するものである。

266・268～270は、同類の紋校構成がみられるものである。

266は、口縁上面の肥厚部分の口唇部に刻目を施し、肥厚部分には横位の凹線文を５条程度巡らせ紋様とする。肥厚部分の下端にも刻目が施される。肥厚部分より下位の部分には、斜位の凹線文が連続して施されている。口径は約４cmと小さい。

269は、口縁上面の肥厚部分が剝落しているもので、肥厚部分は輪積み状に積み足した状態が良く分かる。肥厚部分下の口縁部の紋様は、二条の粘土帯を縦位に貼付して、粘土帯の上には刻目を施す。粘土帯の側面には、両側に刺突文を施した凹線文帯を鋸歯状に構成して施文する。270は細片ではあるが、同様な紋様構成がみられる。

267は、頸部から口縁部を残す比較的大きな破片である。胴部から頸部では内湾し、頸部で屈曲して、直上して口縁部へいたる。口縁部上面では、粘土帯を輪積み状に積み足して、さらに狭まった肥厚口縁をつくる。口径は、9.5cmを測る。肥厚口縁の口唇部は丸くおさめ、上端に刻目を施す。肥厚口縁部には四条程度の凹線文を巡らす。肥厚口縁下には、結節縄文が施文される。縄文はＲＬで、結節はＬで結ぶ。内面はナデ整形の丁寧な仕上げで、焼成は良好で精緻である。271と272は、肥厚口縁を若干側面に輪積み貼付するものである。肥厚部分とその下位には、縄文を施文する。

ｂ：無文（273～278）

273～278は、ＡＢ11区からＡＢ13区の間に出土している。壺形の器形を呈し、無文のものである。器形状は、口縁の形に二通りがある。一つは有文と同様で、口縁部は内傾し、口縁上端に肥厚させた粘土帯を貼付して、さらに細まった形を呈するものである。他は、口縁部を内傾して丸く納めるだけで、粘土帯は貼付しないものである。

273～278は、有文同様肥厚口縁をつくるタイプである。肥厚口縁の貼付の仕方にも二通りがみられる。273は、口縁上端に輪積み状に積み足す手法である。274～278は口縁部側面に粘土帯を貼付して肥厚させるタイプである。278は、直接接合しない部分もあるが、同一個体と考えられるもので復元を試みたものである。器高約40cm、口径８cm、胴径約28cm、底径約15cmを測る。底部は幅広く、器高の３分の１の高さで最大となり約28cmを測る。そこから口縁部には大きく内傾し、口縁部は径約８cmと小さくなる。口縁外側には粘土帯を貼付し、肥厚口縁をつくる。口縁部周辺は、丁寧なナデ整形が行なわれる。器面全体は、ナデ整形が施されるが手捏ね状の凹凸が多い。

276・277は、口縁部に粘土帯を貼付しないものである。口縁部は内傾し、そのまま細まって丸くおさめる。口径は５cm～６cm程度を測り、器壁厚は６mm程度である。

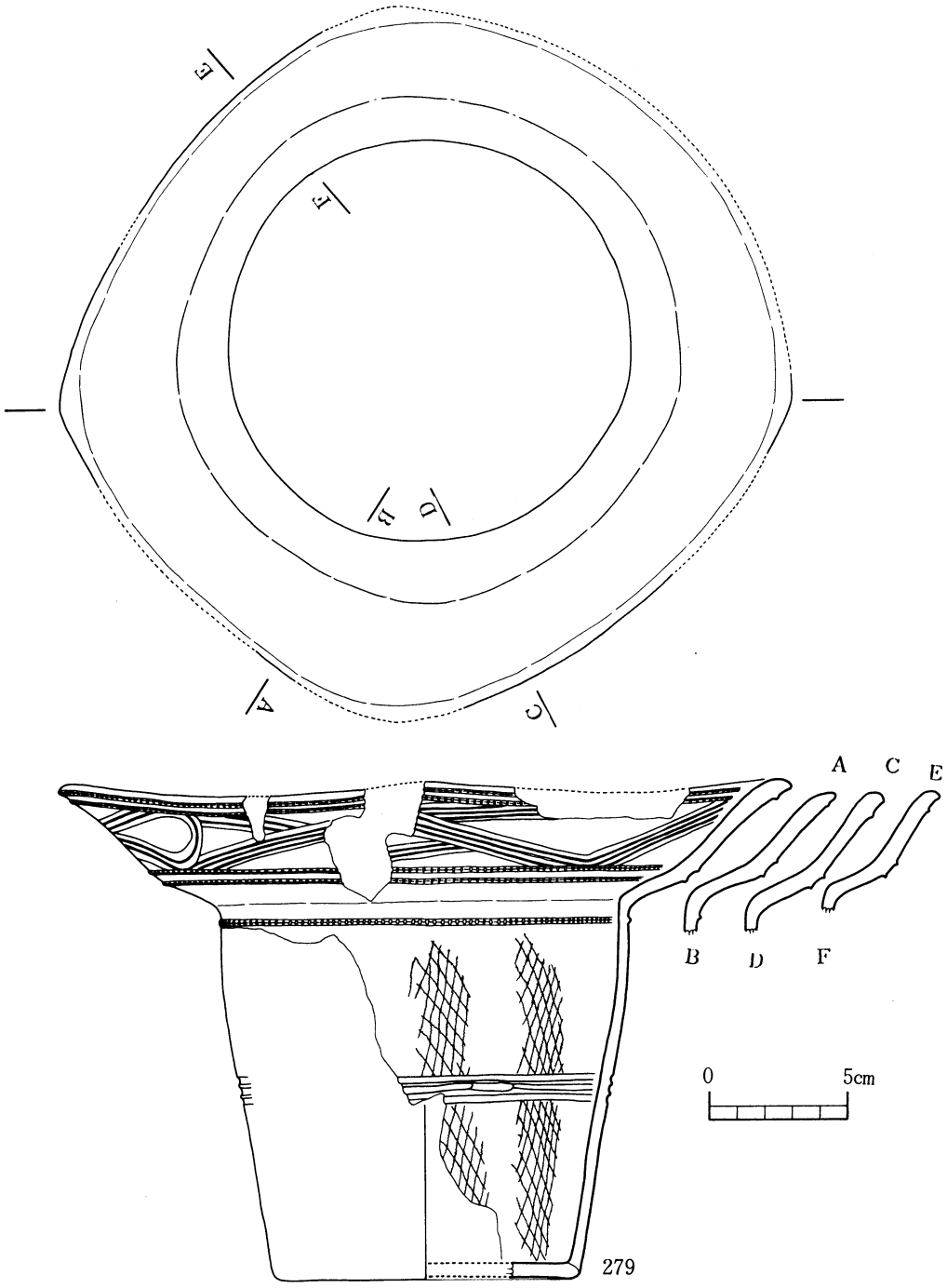
６．Ｖ類土器　（第42図－279～290）

Ｂ－14区を中心に出土したもので、完形に復元されるものである。Ｖ類の主体を占める279～

289は、一個体をなす破片である。290の一片だけは形態が異なり，別個体の破片である。口縁部は頸部から大きく外反し、二重口縁状に屈曲して波状口縁を呈する。波状口縁は四隅が山形に高くなり、上位からの平面形は方形を呈する。波状口縁の頂部での口径は、27cmを測る。頸部の直径は、約15cmを測る。胴部は底部からほぼ垂直に立ち上がり、円筒形を呈する。底部は直径11cmを測り、平底を呈する。底部の底面の厚さは5mm程度の薄い仕上げであるが、均整な仕上げと堅緻な焼きがみられる。胴部の器壁は、4mm～5mm程度と非常に薄い。口縁部の紋様は微隆突帯文と凹線文で飾る。口唇部外面直下と口縁下部の屈曲部には二条の、頸部には一条の微隆起突帯文を巡らせる。そして、二条の微隆起突帯文間には、四本を単位とした凹線文帯で幾何学文を描く。胴部は、格子の撚糸文帯を縦位に施文する。撚糸文は、R撚りの細い縄文を左から右に巻き、さらにそのうえを右から左に巻き返したものである。そして、胴部の中央部には三本の凹線文を撚糸文体の上から巡らせる。口縁部の紋様と併せ、華麗で特徴的な構図をつくる紋様帯である。

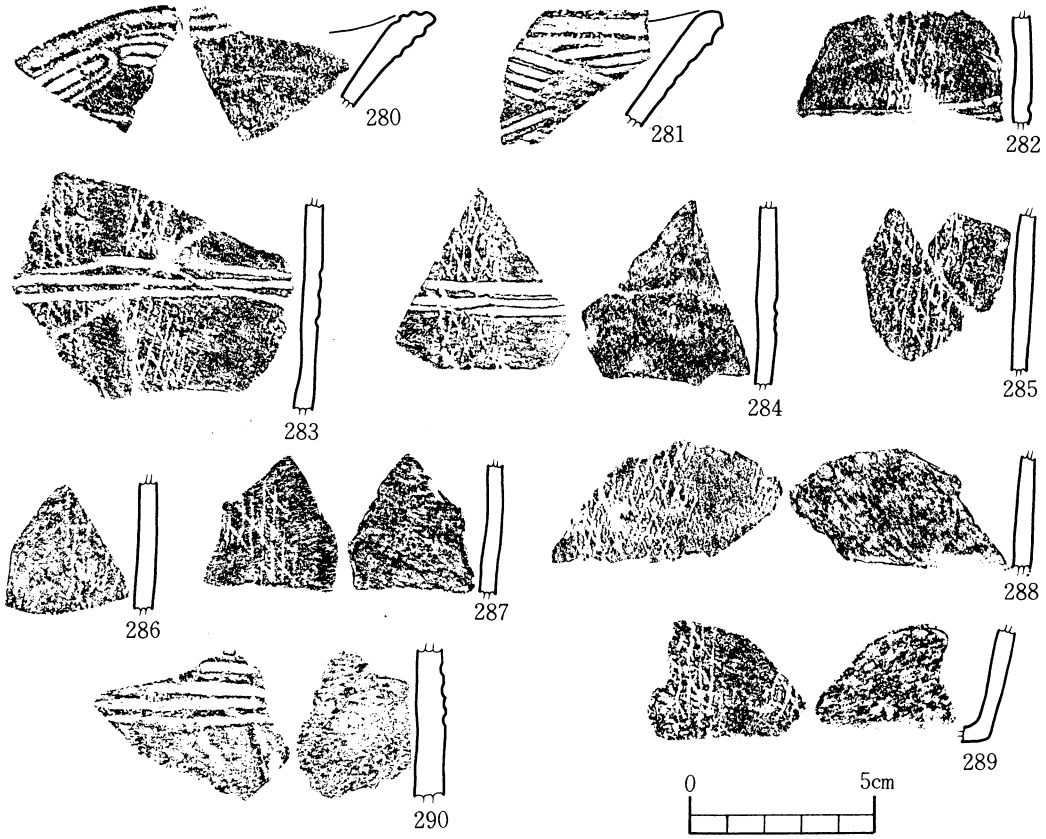
7．Ⅵ類土器　（第45図－291）

細片ではあるが、口縁部から胴部まで復元できる破片である。復元口径は、約26cmを測る。口縁部は大きく外反し、胴部は若干膨らみをもった円筒形を呈する。口縁部は、若干内湾気味に外反する。口唇部は僅かに斜めに尖り、この部分に刻目を施す。紋様は、頸部から口縁部外面は貝殻刺突連続文を横位に施し、胴部は条線文帯で飾る。条線文帯は、横位に施文されるが、一部屈曲する部分もみられ幾何学模様を描くことも考えられる。



第42図　Ⅴ類土器実測図（1）

第43図　Ｖ類土器実測図（２）



第44図　Ⅴ類土器実測図（3）

第45図　Ⅵ類土器実測図

（2）石器

Ⅹ層からは、打製石鏃（11点）、石匙（１点）、未詳品（２点）、磨製石斧（２点）、局部磨製石斧（９点）、扁平打製石斧（２点）、小型石斧（２点）、石片（３点）、磨石・敲石類（９点）、凹石（２点）、石皿（５点）、軽石製品（１点）、棒状敲石（40点）の総数89点の石器が出土している。以下、石器の製作と形態について記述する。

（a）打製石鏃　（第47図－292～302）

製作は、298と301以外はすべて、二次加工が表裏全面におよんでいる。298は、表裏に剝片素材の主要剝離面を大きく残し、その剝離方向は同方向である。厚さも薄く、二次加工も縁辺部にとどまるのみである。先端が平たく未製品の可能性もある。301は、節理面を大きく残す。

形態のうち、全体的な大きさから見れば、297・299のような小形のものから、302のような大形のものまで変異がある。威力を考えて使い分けがなされていたのであろうか。柄との装着部には、すべてえぐりがあり、293・294・296のように全長に対しえぐりの深いものから、300・301・302のようにえぐりの浅いものまで変異がある。301・302のように大形のものは、えぐりが浅い。

石材は、292、293、298～300が黒耀石で、294～297、301、302がホルンフェルスである。

（b）石匙　（第48図－303）

表面に原面を残す横長剝片を素材とし、二次加工は縁辺にとどまる。つまみ部分もつくり出された縦長形の形状をもつ。石材は、粗粒砂岩を使用している。

（c）未詳品　（第48図－304・305）

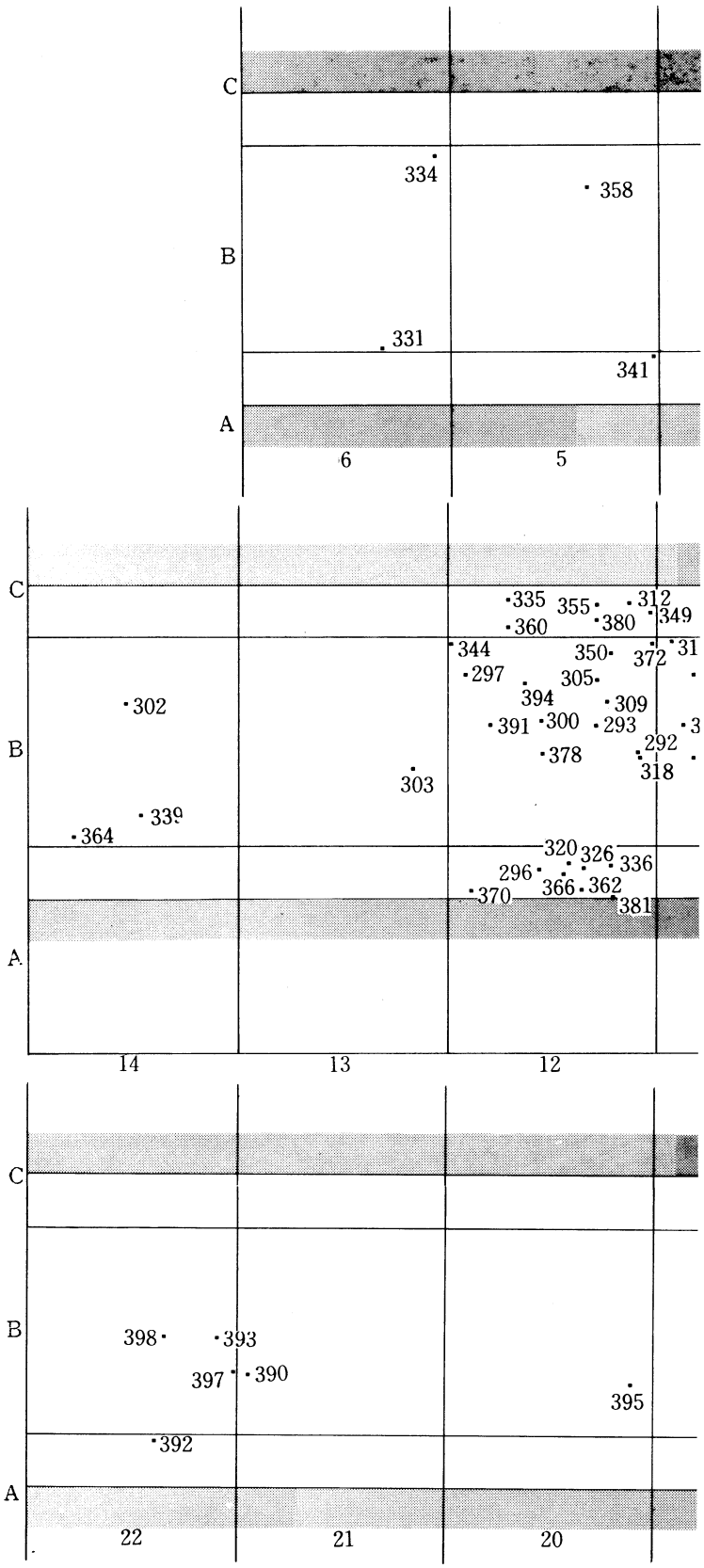
304は、表面に原面を残す剝片であり、二次加工も見られる。つまみ部分のつくり出された横長形の石匙とも思われるが、判然としない。

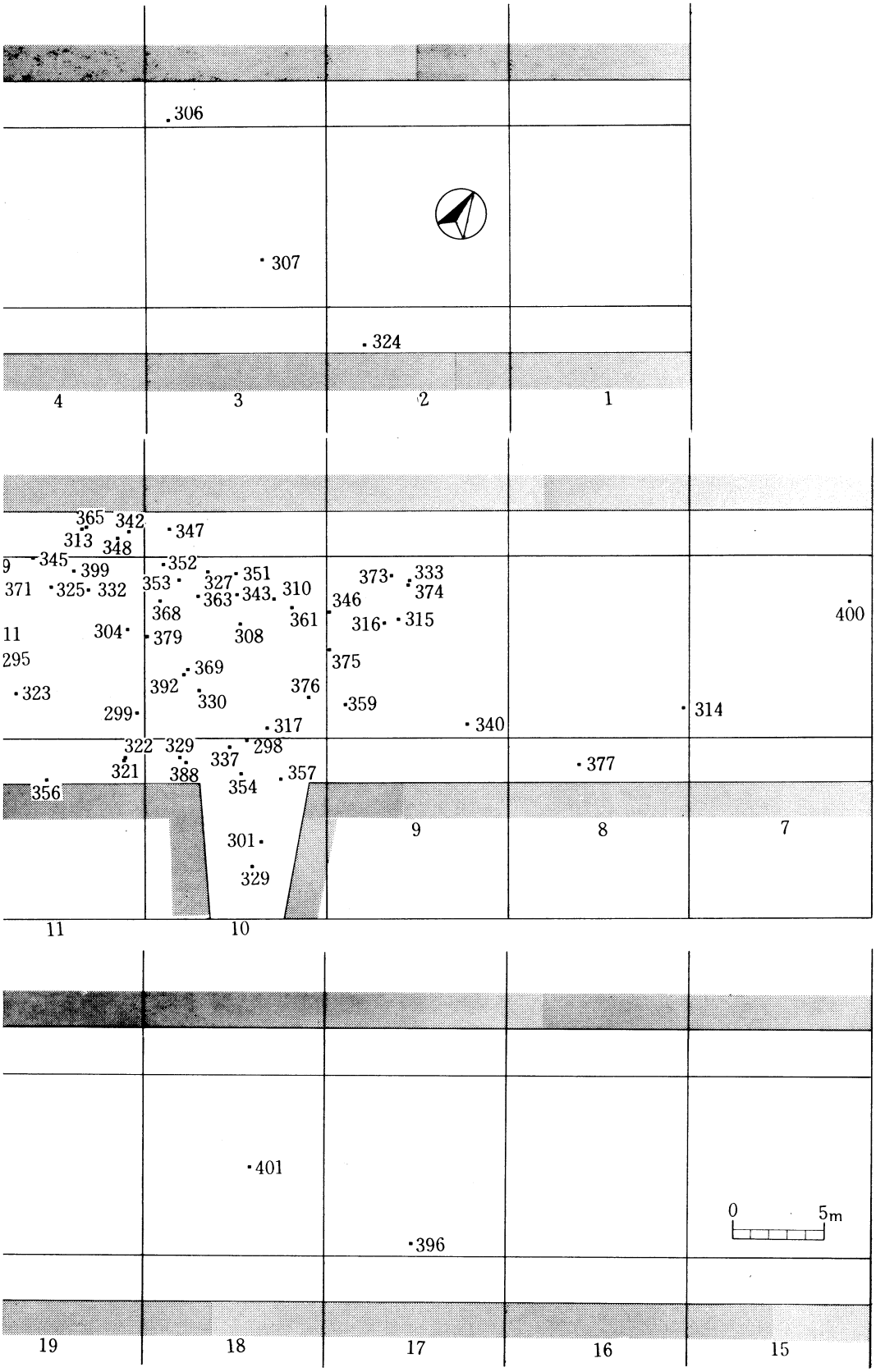
305は、二次加工が表裏面に入念に施されている。石鏃・石槍の類とも思われるが、出土完形品の中に同大同形のものは見当らない。

（d）磨製石斧　（第49～50図－306・307）

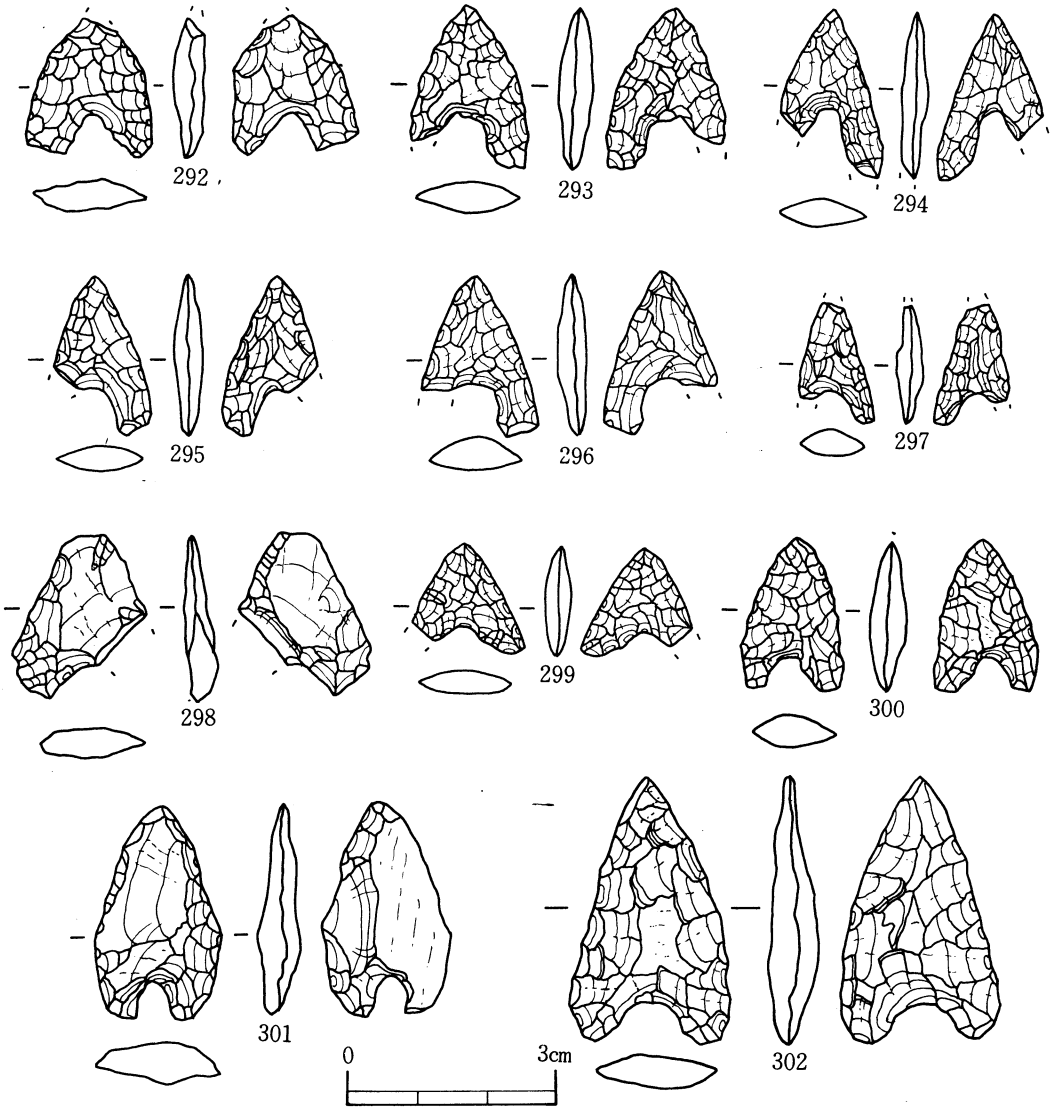
306は、全形が棒状で細長く、刃部は円刃となる。また、刃先の方から見ると刃部は、湾曲している。表面側では、上位に突出部が２ケ所作り出され、裏面は平坦に仕上げられており、柄との着装に適した形状となっている。全面に整形の際の敲打の痕跡を見せるが、一応、器面は滑らかになっている。刃部付近は入念な研磨がなされ、非常に滑らかになっている。石材は、ホルンフェルスである。

307は、全形が棒状をなし、刃部に近くなるにつれて、幅狭となっている。片刃をなす刃部


C
B
A
334
358
331
341
6
5
C
B
A
335
355
312
349
360
380
344
350
372
31
297
305
394
309
302
391
300
293
3
292
378
318
303
339
364
320
326
336
296
366
362
370
381
14
13
12
C
B
A
398
393
397
390
395
392
22
21
20



第46図　X類石器出土分布図



第47図　石器実測図（1）

の一面のみに縦位の線状痕も見られる。使用によるのであろうか。ただし、加工痕との識別は難しい。器面は、表裏共に滑らかになり、敲打痕は目立たない。側片および後端に敲打痕を残すものの、側片は摩耗しやや滑らかになっている。刃部付近は、入念に研磨され刃部が作り出されているが、裏面には剝離痕もとどめている。滑らかとなった器面には、線状痕もわずかに見られる。研磨加工の痕跡であろう。石材はホルンフェルスである。

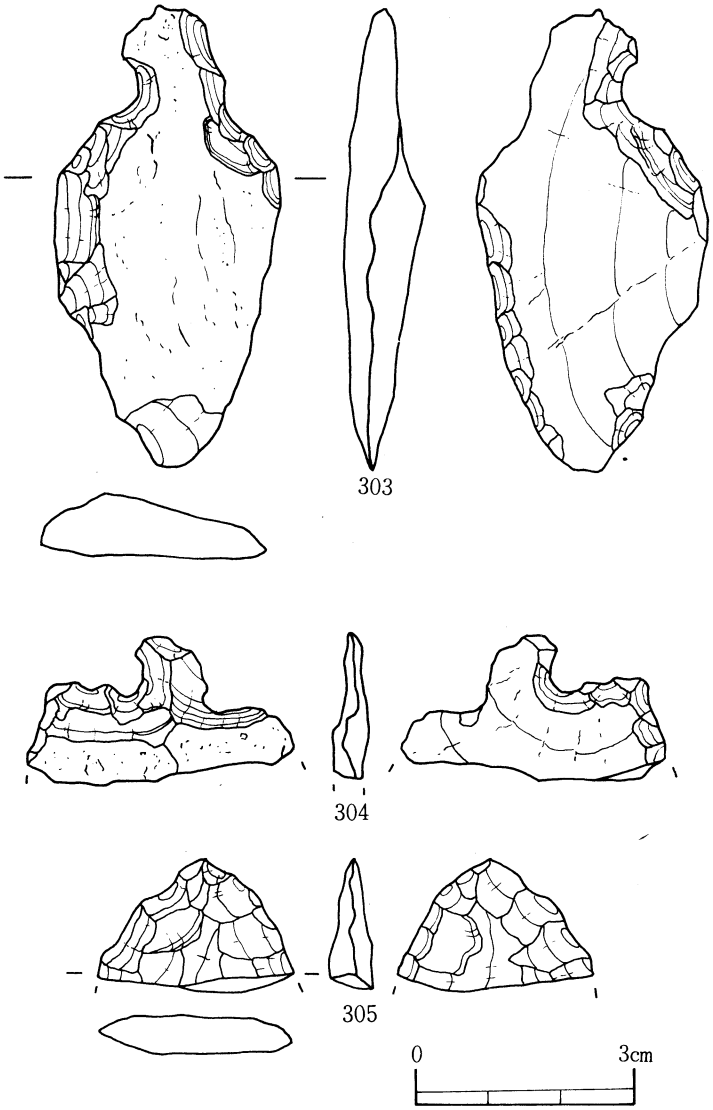
（e）局部磨製石斧

（第50～52図
－308～316）

これらは、器面が剝離面と滑らかな面とからなる石斧形状をなすもので、石質は、硬質の粘板岩とホルンフェルスである。

316は、滑らかな面を見出せないが、石質・形状から、ここに加えた。全形は、308～311が細長く、312～316は幅広となっており、どれも厚みを有する。308は、円刃をなす刃部に入念な研磨がなされている。309は、スクリーン・トーン部分が非常に滑らかになり、一部に敲打痕も残す。

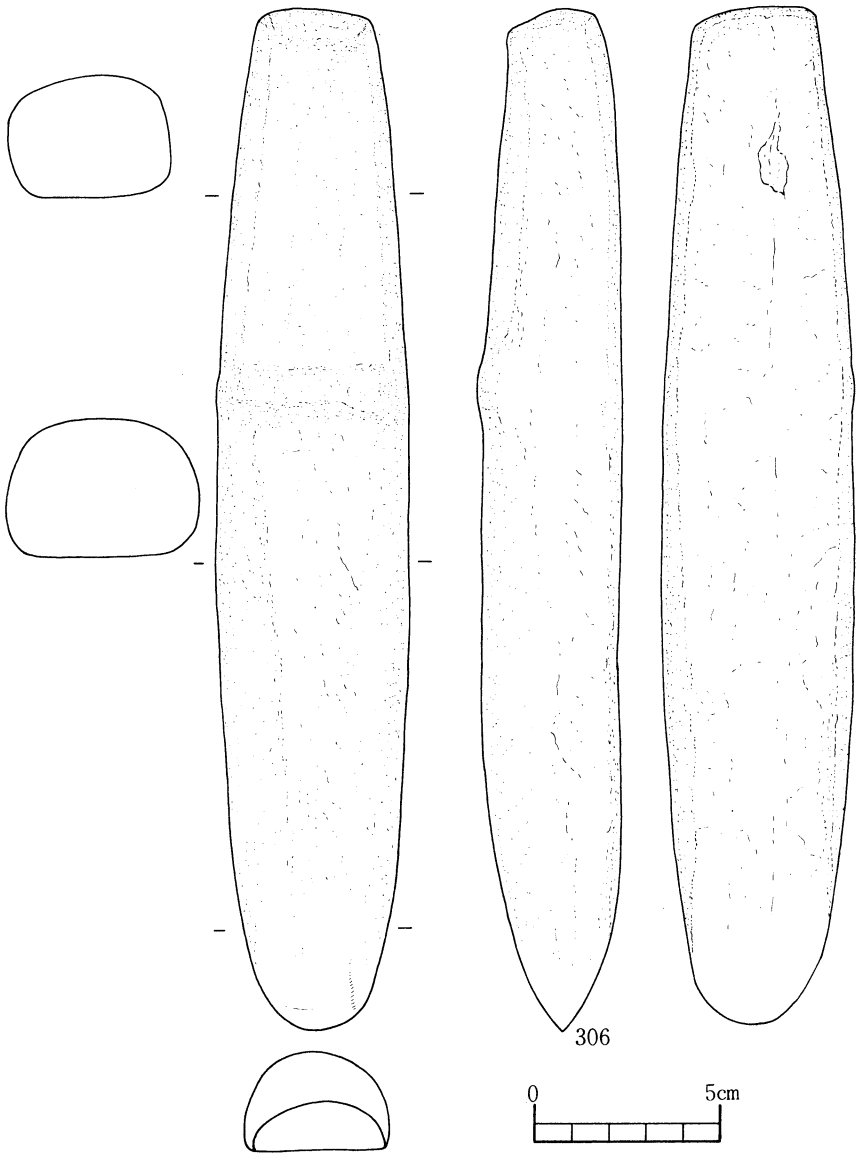
310は、滑らかな面に加工痕と思われる線状痕をわずかに見せる。312は、わずかに円みをもつ幅広の刃部に入念な研磨がなされている。313、314は、滑らかで平坦な面を側面から見ると石斧の刃部のような傾斜をなしている。石材は、308、310～312、314、315が粘板岩で、309、313、316はホルンフェルスである。



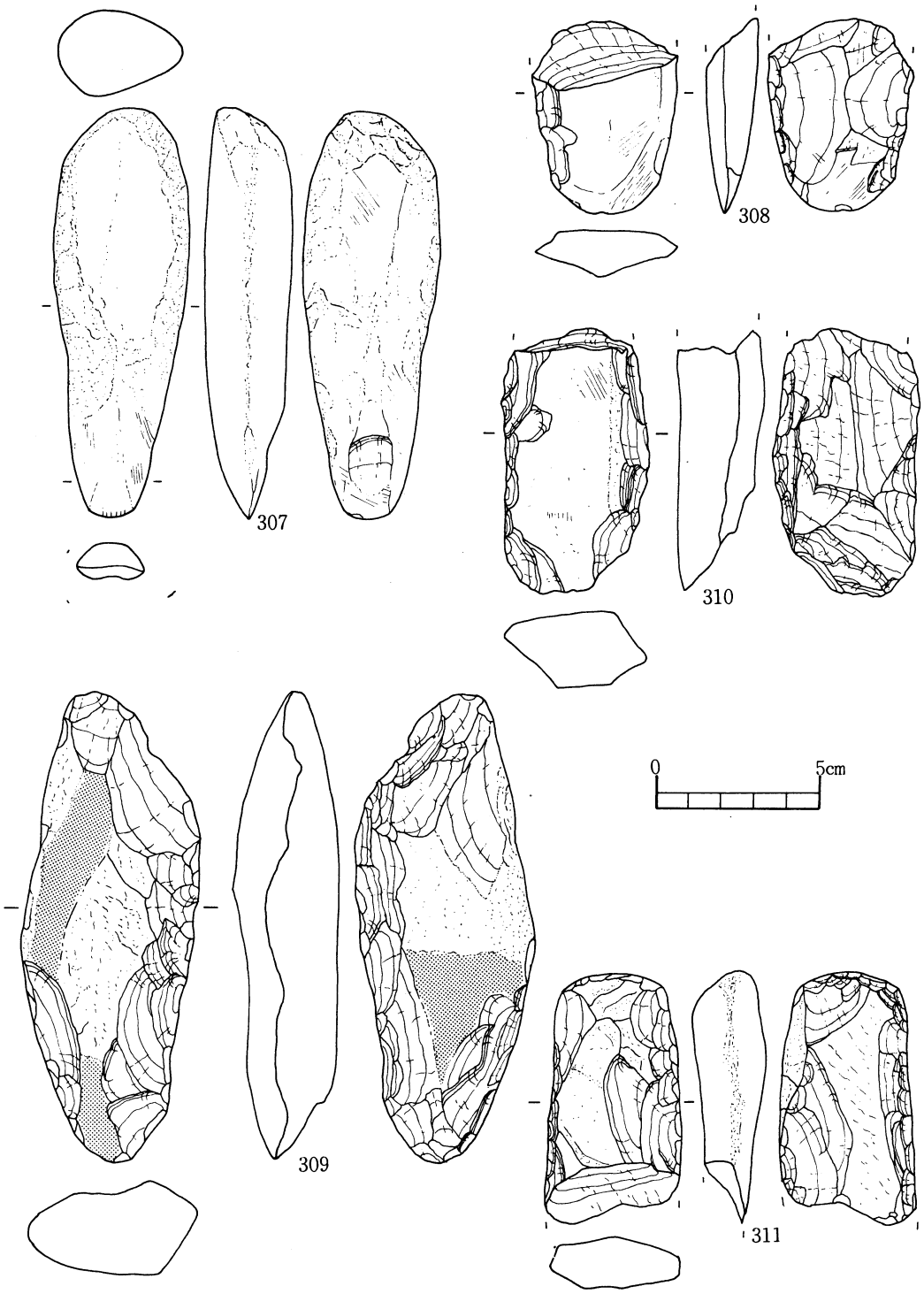
第48図　石器実測図（2）

（f）扁平打製石斧　（第52図－317・318）

器面が、剝離面からなる石斧形状をなすものである。石斧の未製品とも考えられるが、形状は扁平で、しかも石質が軟質であることから、扁平打製石斧に分類した。石材は、粘板岩である。



第49図　石器実測図（3）



第50図　石器実測図（4）

（g）小型扁平石斧

（第52図－319・320）

319は、入念な研磨がなされている。破損が著しいものの、刃部をわずかに残す。石材は、頁岩である。320は、剝離、摩耗が著しい。石材は、粘板岩である。

（h）石片

（第52図－321～323）

おそらく破損した磨製石器から生じた石片であろう。

（i）磨石・敲石

（第53～54図－324～333）

器面が滑らかな礫素材である。324～330は、側辺において、器面が粗い平坦面をもっている。

（j）凹石

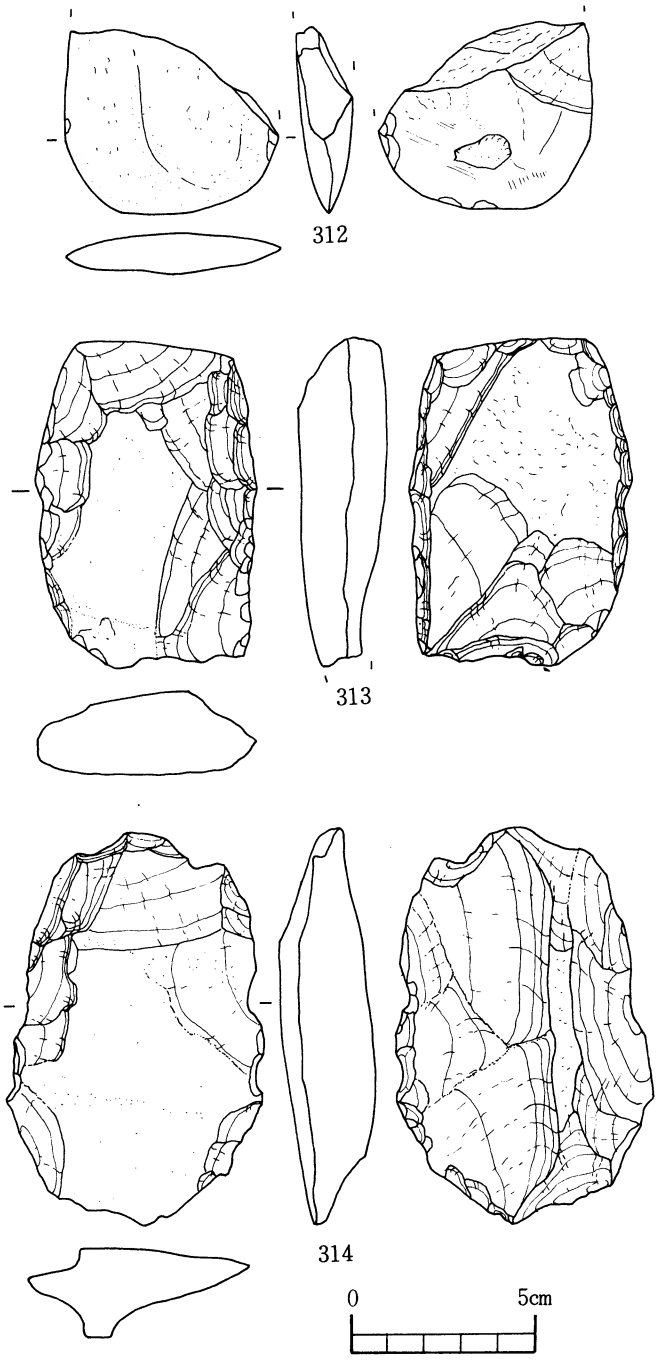
（第54図－334・335）

敲打によるくぼみをもつ。334は一端にも敲打痕をもち、335は側辺の一部が滑らかな平坦面となっている。

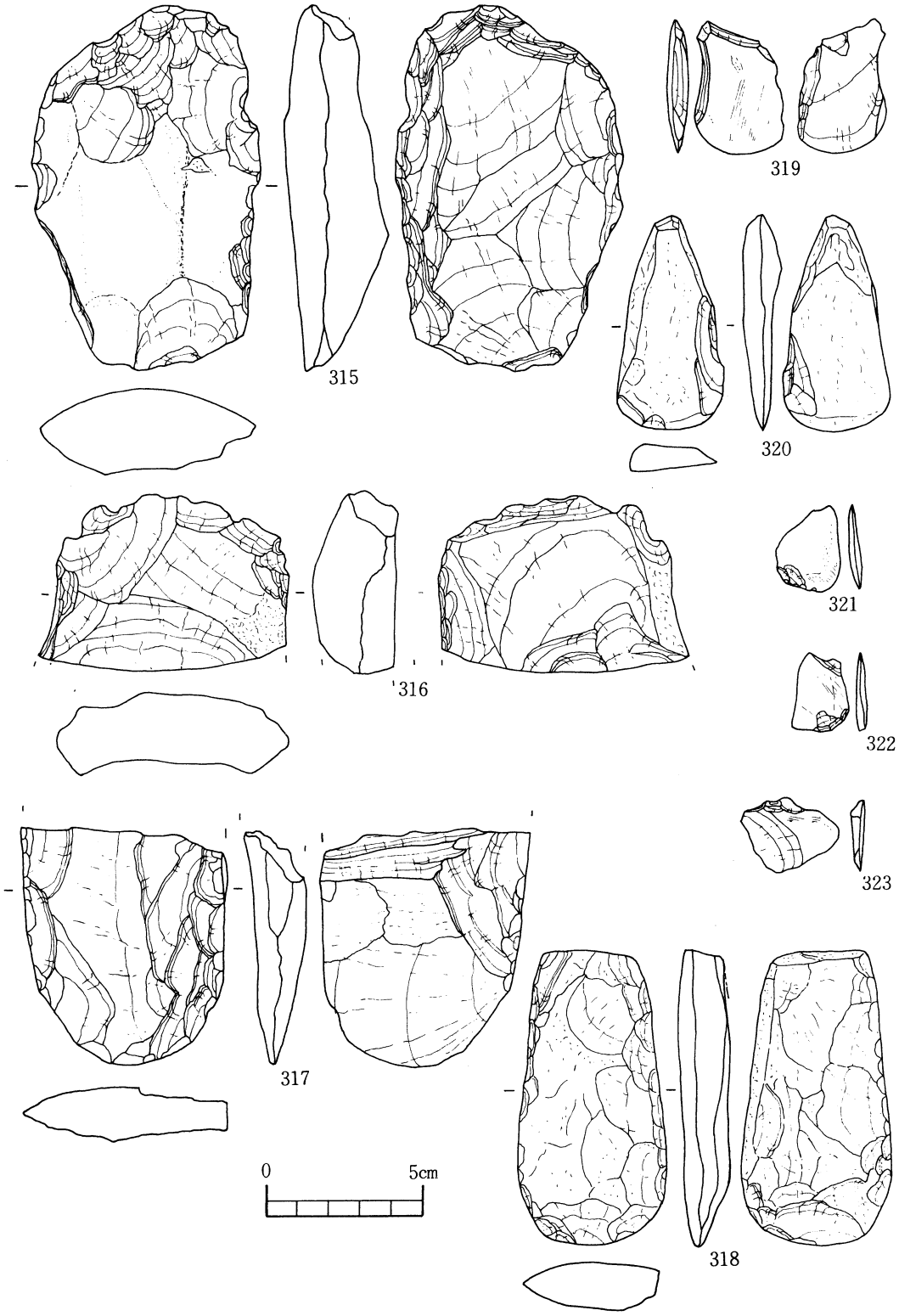
（k）石皿

（第55図－336～340）

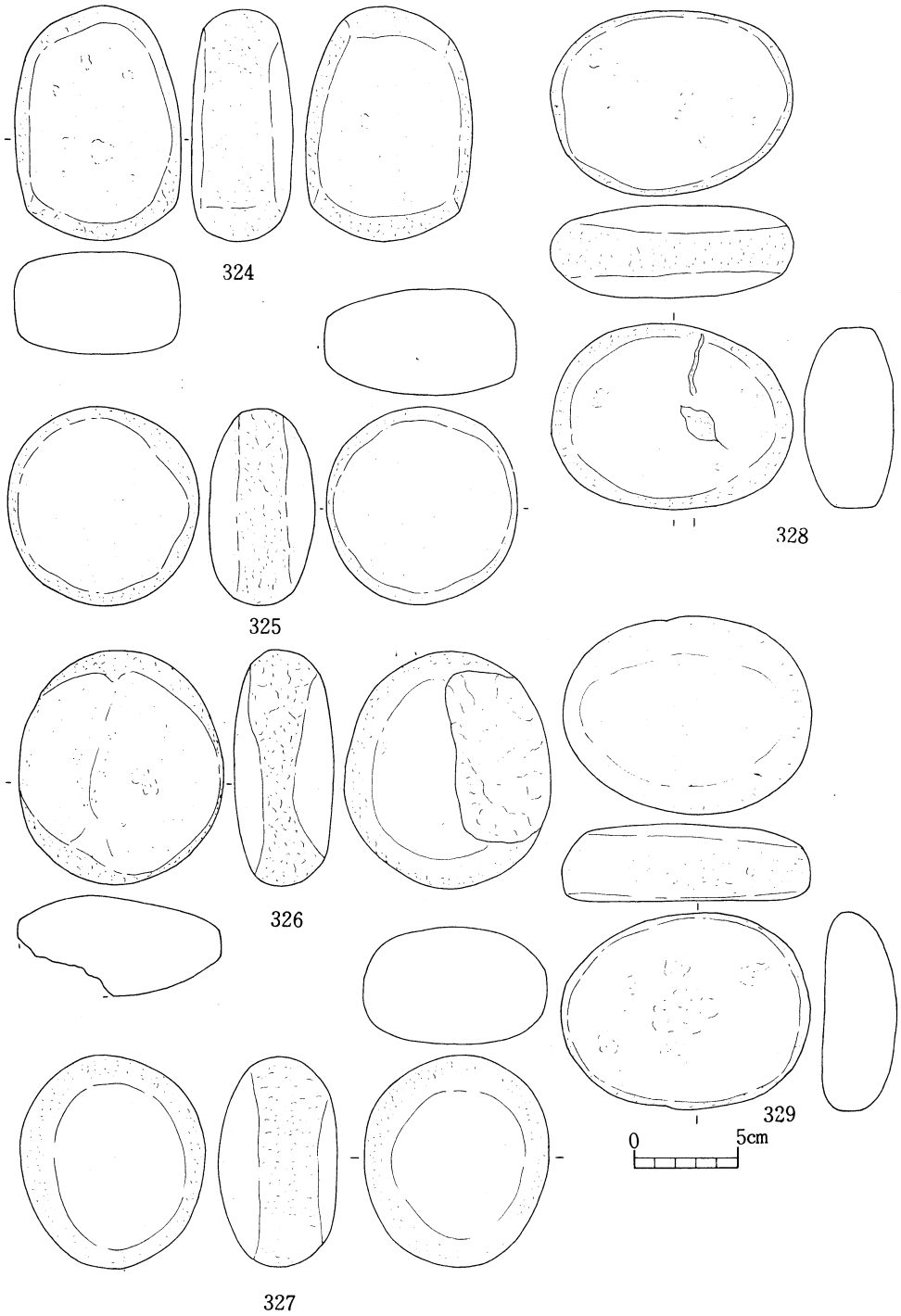
平坦面をもつ円礫素材による336、337と、扁平な角礫素材による338～340がある。スクリーン・トーン部分は、器面が非常に滑らかになっている。また、338は中央のくぼみが顕著であ



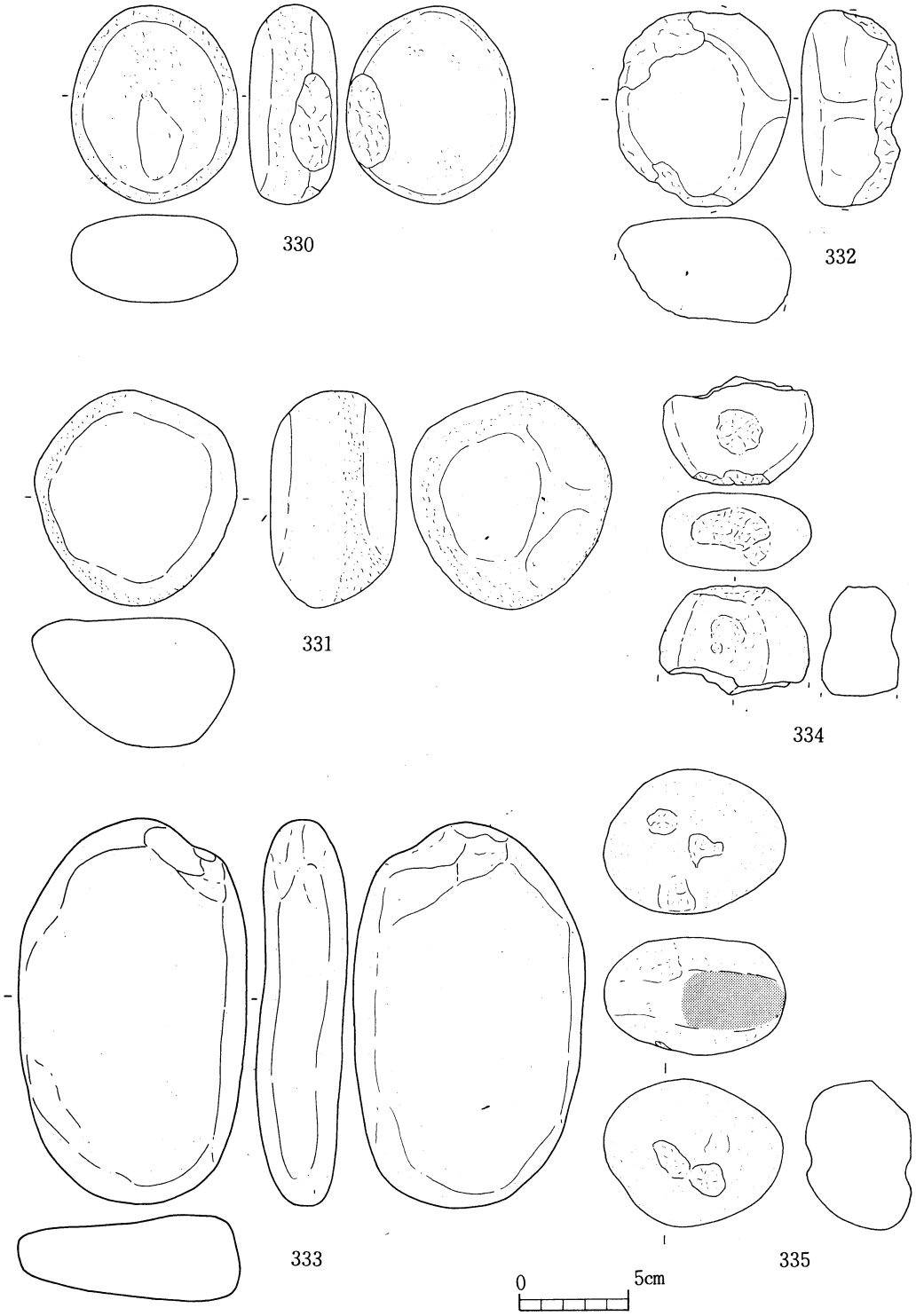
第51図　石器実測図（5）



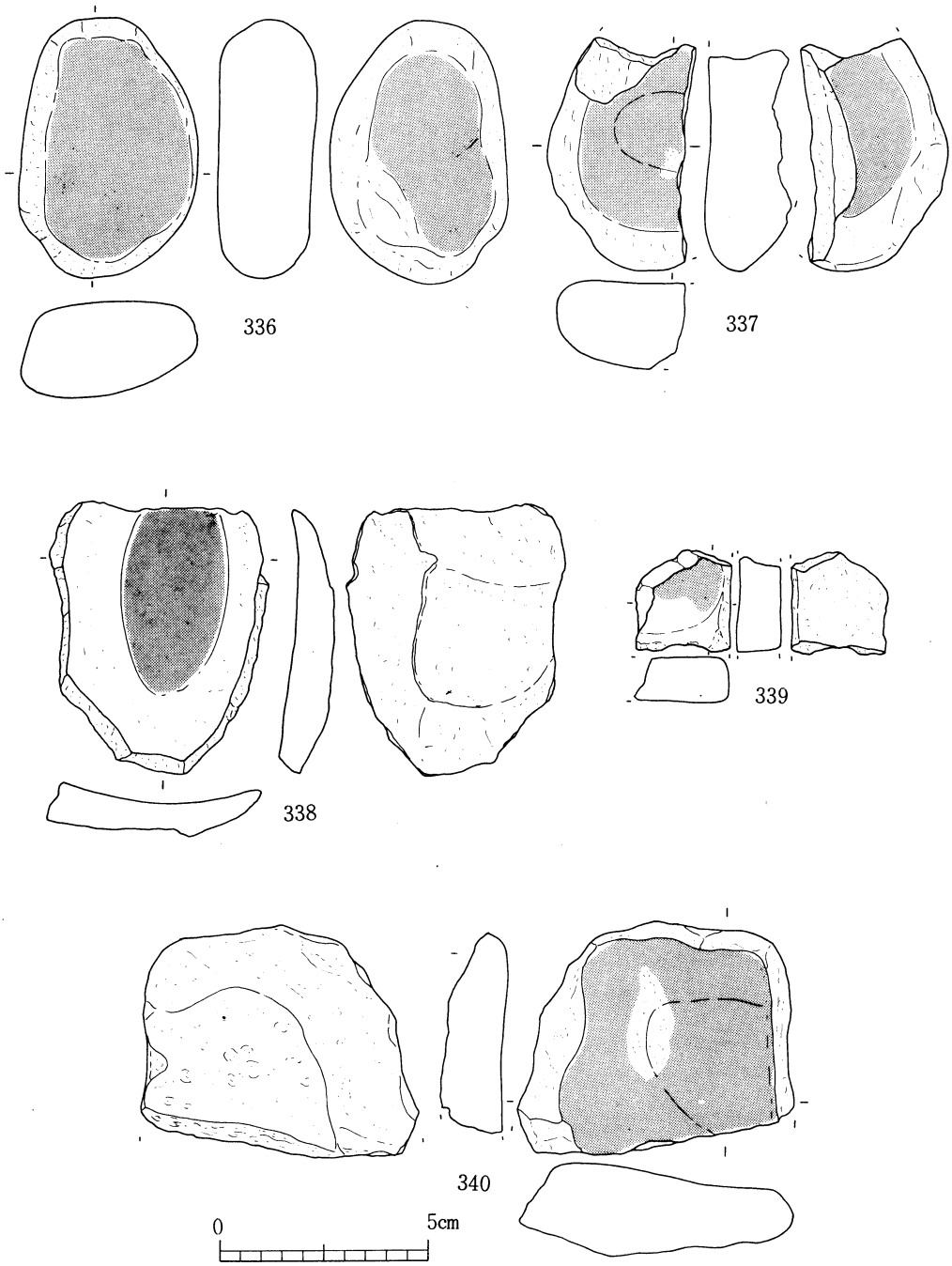
第52図　石器実測図（6）



第53図　石器実測図（7）



第54図　石器実測図（8）

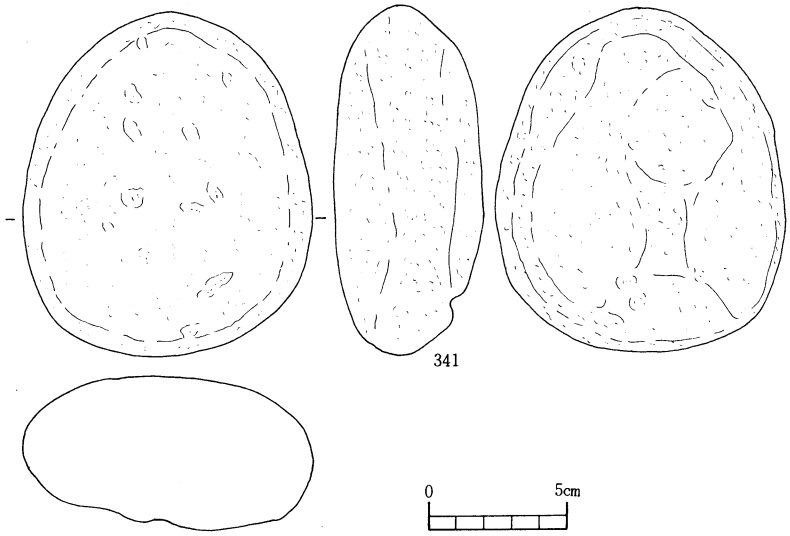


第55図　石器実測図（9）

る。

（I）軽石製品　（第56図－341）

確かな加工の痕跡は見当らないが、軽石製品の可能性をもつものとして一応取り上げたい。いびつな楕円形状を呈し、磨石・敲石類に似る。



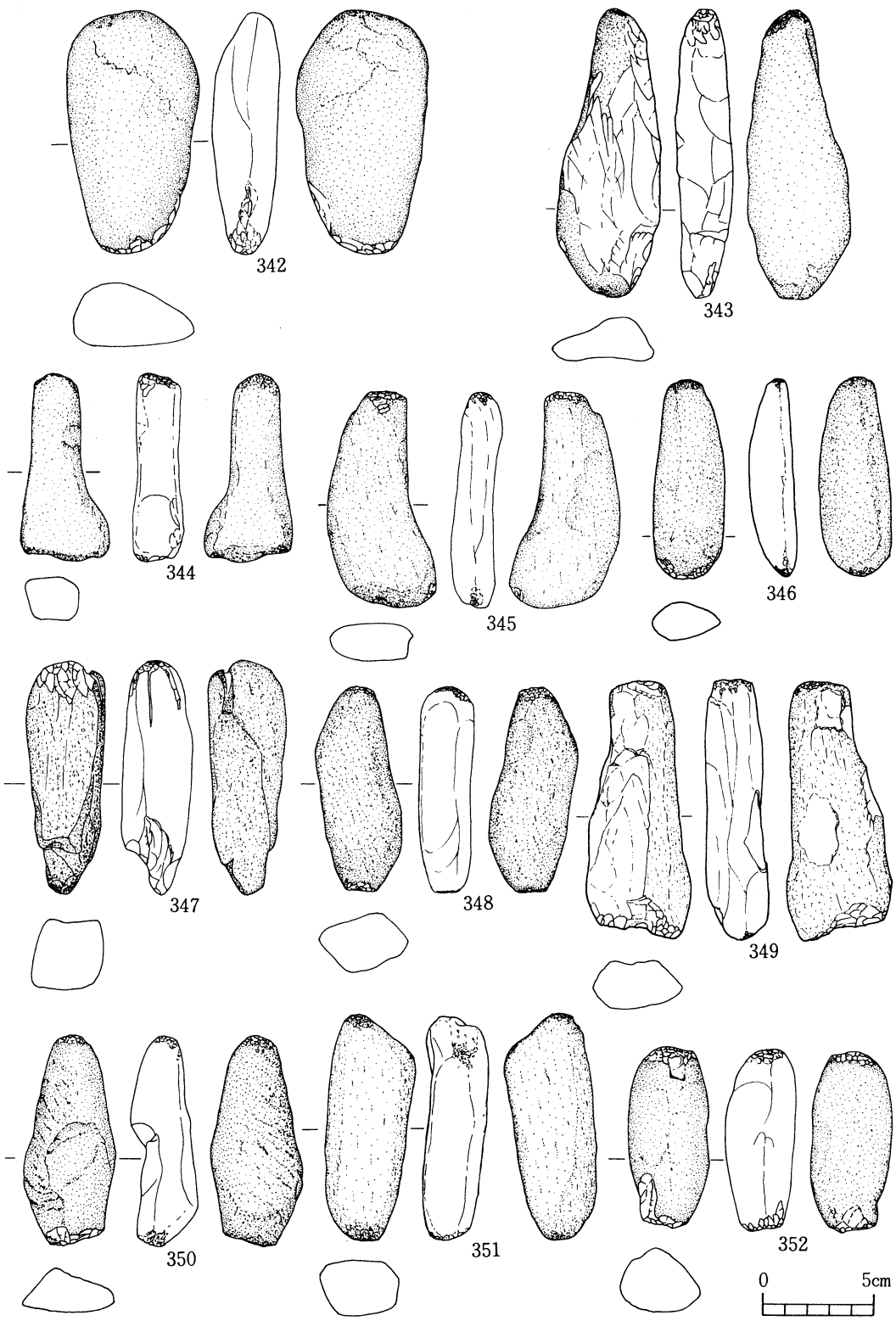
第56図　石器実測図（10）

（M）棒状敲石　（第57図～第61図－342～381）

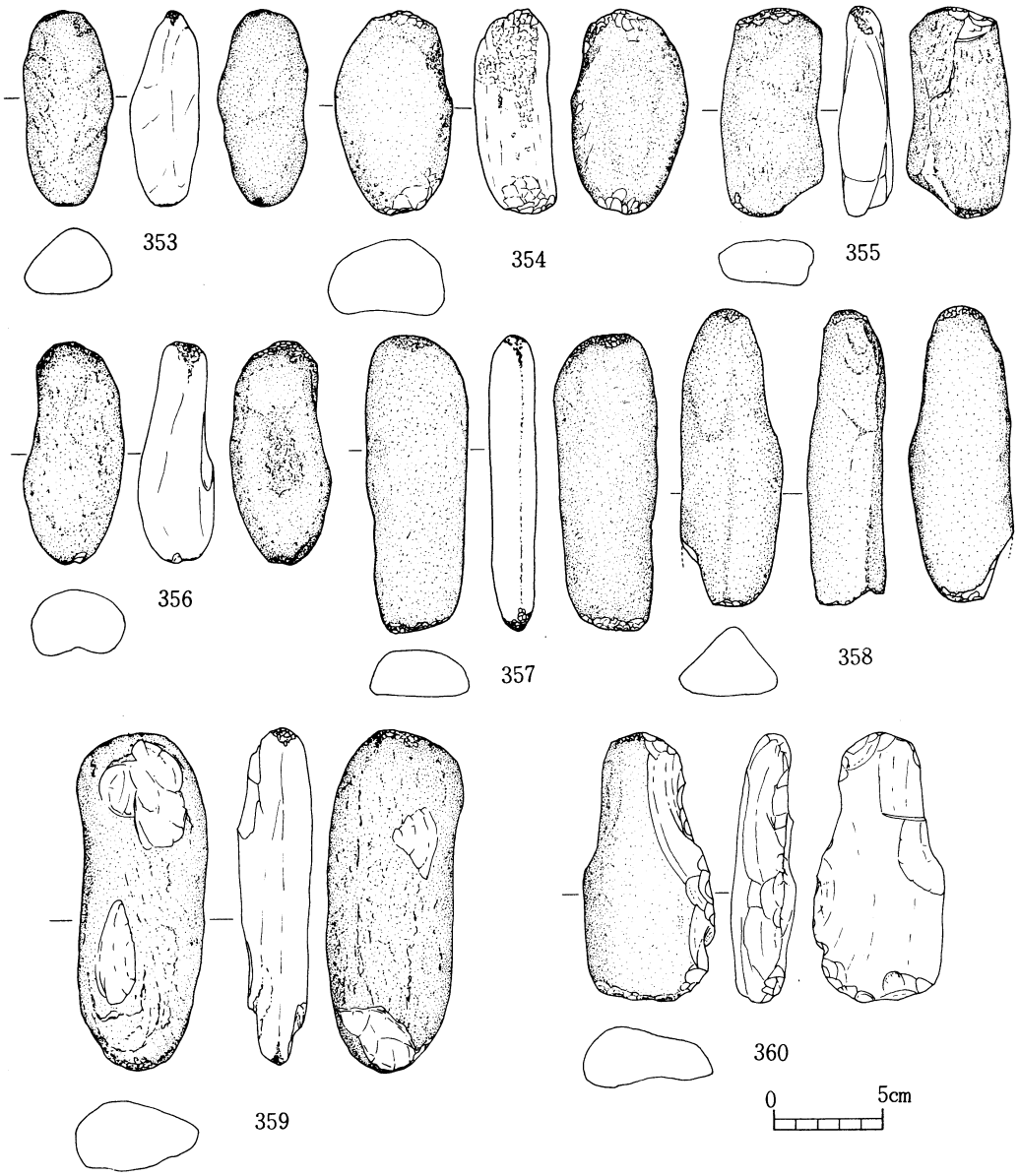
棒状の形態の敲石を一括して棒状敲石とした。全体で40点確認されたが、他の敲石の出土数と比較して著しくその数が多い。円形もしくは球形の敲石と比べて棒状敲石は、握り易さや着柄性の容易さ、さらには二次的な敲打器（例えばパンチ）としての利用が考えられる。このため、石器製作から植物加工等も含め、幅広い範囲の使用方が推測されるものである。なお、石材は354は砂岩であるが、他はすべてホルンフェルスである。

形態の分類は、使用痕の形状を中心に使用部位等でおこなった。

Ⅰ類＝敲打による「つぶれ」の使用痕を残すもの
　　a：長軸の一端に使用痕を有するもの
　　b：長軸の両端に使用痕を有するもの
Ⅱ類＝剝離状の「われ」の使用痕を残すもの
　　a：長軸の一端に使用痕を有するもの
　　b：長軸の両端に使用痕を有するもの
Ⅲ類＝「つぶれ」「われ」の使用痕を一端にそれぞれ残すもの
Ⅳ類＝その他



第57図　石器実測図（11）



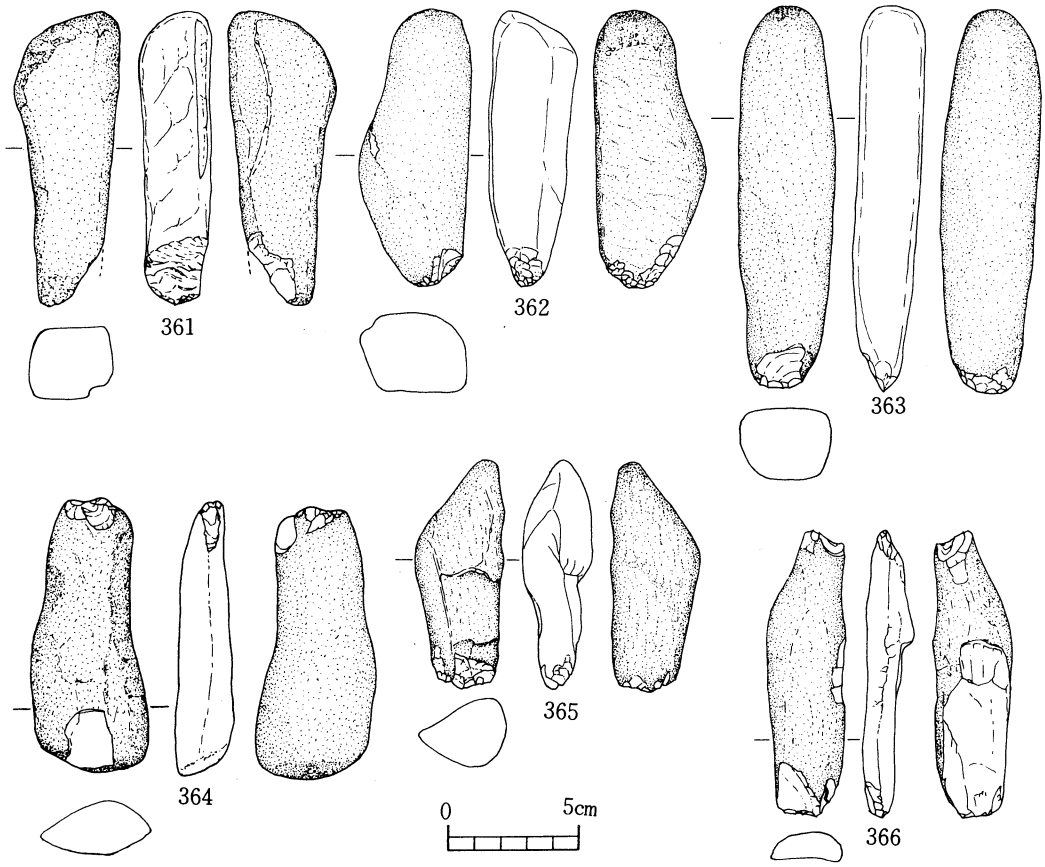
第58図　石器実測図（12）

Ⅰａ類　（第57図－342～345）

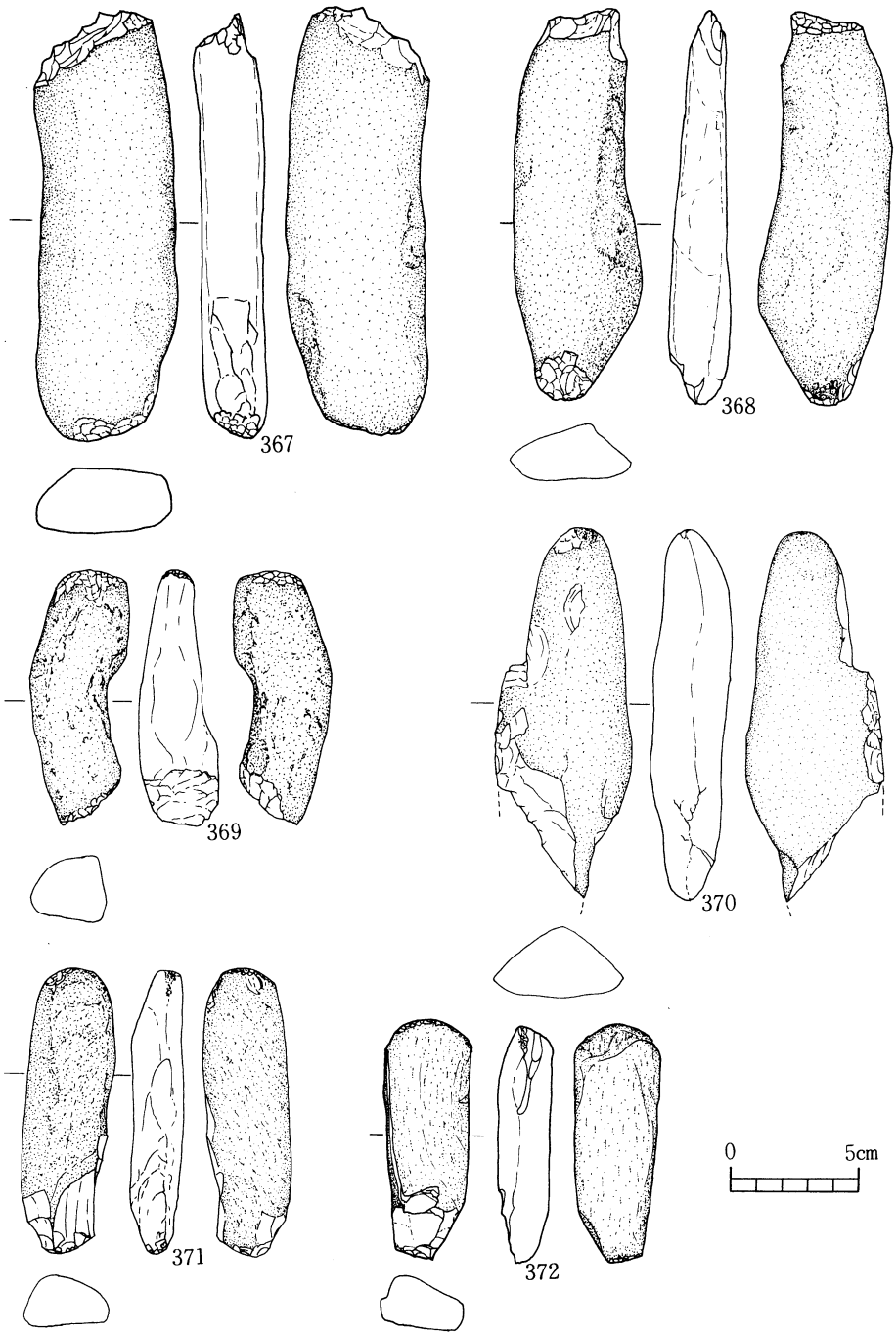
比較的扁平な自然礫を利用しており、長軸の尖った方に使用痕がみられる。342、344は、最も特徴的な激しい使用痕が認められる。343は、両端が尖る傾向にあり、表面に剥離がみられるが直接敲打によるものとは言い難い。

Ⅰｂ類　（第57図・第58図－346～360）

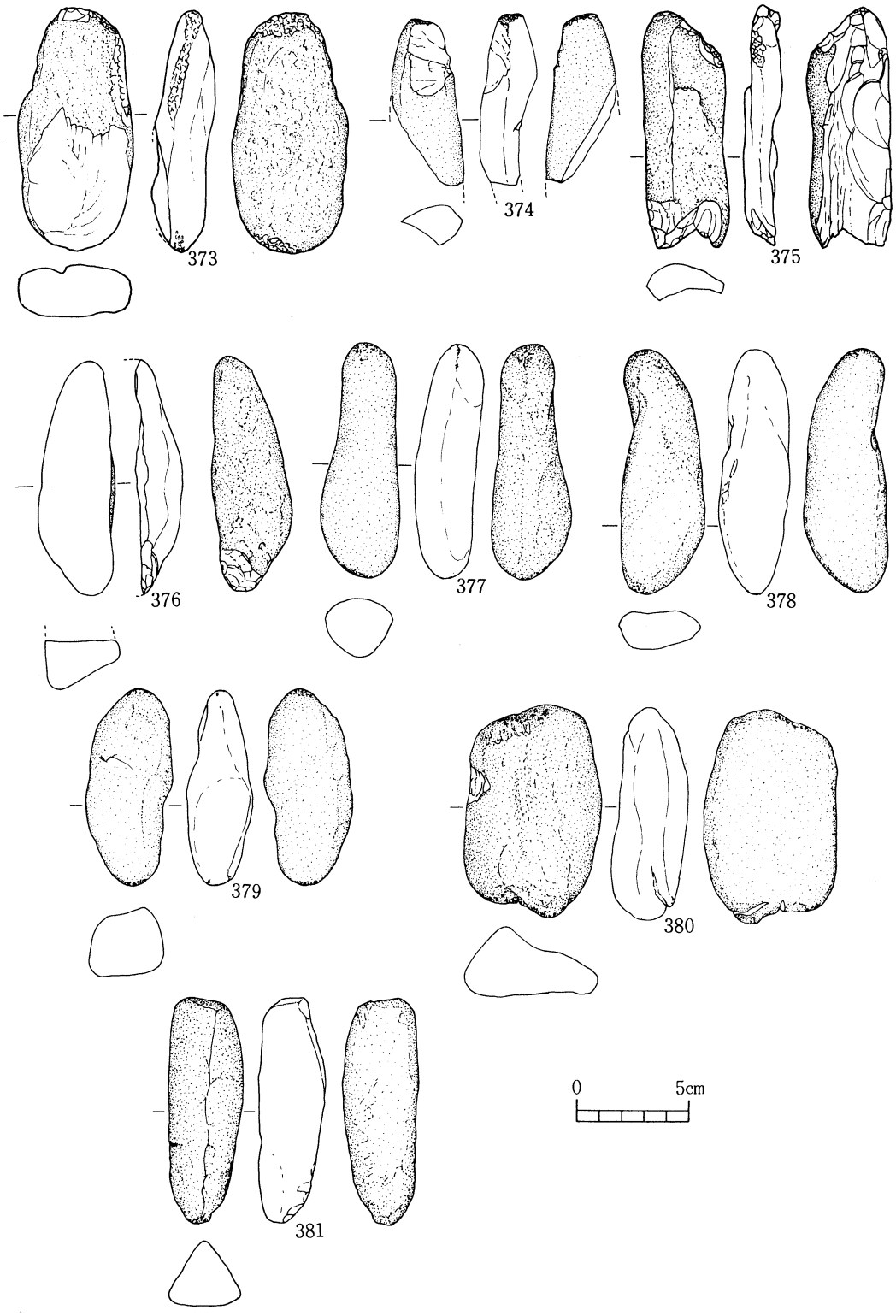
全体の中で15点で37.5％を占め、最もその数が多い。348・352～354・356は、両端部にそれぞれ同等の敲打痕を有するものである。354は、ここで取り上げた棒状敲石の中では最も円形に形をなし、側面の一部にも敲打痕を認め、唯一砂岩製である。352は一部剥離状の「われ」もみられるが、敲打痕が中心であり、度重なる敲打の結果、石材の亀裂によるものもしくは過度の衝撃を伴う敲打のためと考えられる。347・349・350・355～360は両端の使用の度合いが異なるものである。360は唯一剥片を利用した敲石である。側面に整形剥離を有するが長軸両端には明らかに敲打痕をもつものである。346・351は、わずかに使用痕を残すものである。



第59図　石器実測図（13）



第60図　石器実測図（14）



第61図　石器実測図（15）

Ⅱａ類　(第59図－361～365)

棒状の自然礫の尖部に「われ」状の剝離を有するものである。363は尖部に交互剝離状の使用痕がみられる。364の「われ」は、石質劣化による石材の敲打によって生じた可能性もある。

Ⅱｂ類　(第59図－366)

扁平な自然礫を用い、両端に剝離状の「われ」を有する。連続的な弱い敲打によるものではなく、強い衝撃が窺われる。

Ⅲ類　(第60図－367～372)

一端に「われ」面を残し、一端に敲打痕を有するものである。367は大型の棒状敲石で、長さ17cm、重さ444gを測り最大である。使用痕も顕著であり、強い衝撃による痕跡と考えられる。368は一見Ⅱｂ類のようであるが敲打による石材の劣化のための剝離が観察される。

Ⅳａ類　(第61図－373～376)

激しい衝撃等によって破損した同類の敲石の欠損品である。Ⅱ類・Ⅲ類に近い分類に属すると考えられるが、全体形が不明なためⅣａ類とする。

Ⅳｂ類　(第61図－377～381)

ここに取り上げた4点には、明確な使用痕は認められないが、同類の棒状敲石の可能性もあると考えられるため対象とした。

第３節　Ｖ層の調査

（1）Ｖ層の概要

Ｖ層は、Ａ～Ｃ、６～８区に集中して出土遺物がみられた。特に、Ｂ６区の西側では、口縁部と底部を欠損してはいるが、完形に近い状態の胴部（387）が逆さで置かれたと考えられる状態で検出された。出土遺物は、Ⅵ層（アカホヤ火山灰の二次堆積層で縄文時代前～後期該当の層）の上面に位置するＶ層（茶褐色土層）から出土している。出土遺物は量的には少ないが、薄い包含層は形成されており、近辺にＶ層該当の遺跡の中心が存在する可能性が強い。なお、Ｖ層は、縄文時代晩期に該当する。

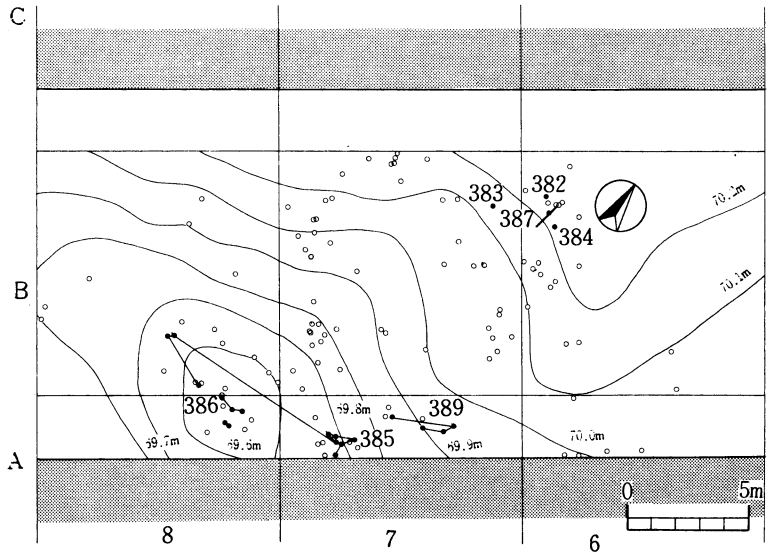
（2）出土遺物

遺物は総数117点の出土がみられ、土器と石器に分かれる。

１．土器　（第64図－382～389）

382～386は、口縁部片である。口縁部片は、深鉢と浅鉢の器形に分かれる。382・383は深鉢の口縁部片である。頸部で外反し、屈曲して口縁部をつくる。口唇部は薄くなり、丸くおさめる。器内外面は、丁寧なヘラ磨きの整形が施される。382は、口径19cmを測る。

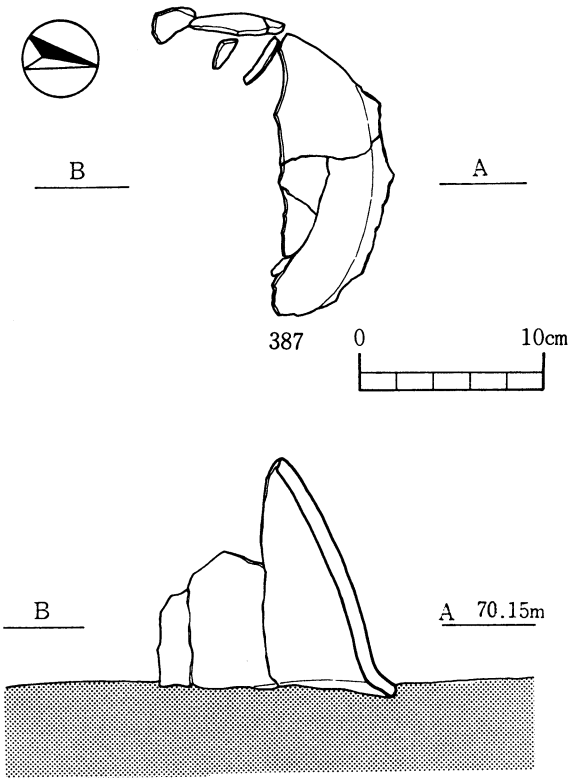
384～386は、浅鉢の口縁部である。胴部は屈曲して稜をつくり、内湾して直上から大きく外反して口縁部にいたる。口縁部は若干肥厚してその部分に凹線文を巡らすタイプである。いずれも破片の復元口径であるが、384は口径40cm、385と386は口径45cmを測る大型のものである。器内外面は、丁寧なヘラ磨き整形が施される。387は、胴部から頸部付近で、原位置の状態で出土したものである。口縁部の方を下にした逆さの状態で出土しているが、口縁端部と底



第62図　Ｖ層出土遺物分布図

部は欠損している。胴部は胴張りで、頸部は締まり屈曲する。胴部最大径は17cm、頸部の屈曲部は15.5cmを測る比較的小型のものである。

388と389は、胴部から底部破片である。388は底径は9cm、389は10cmを測る。388は、ほんの僅か上げ底状を呈する平底である。底部側端は垂直に仕上げ、その上から外反して胴部へ立ち上がる。389も同様であるが、より大きく外反する。いずれも、丁寧なヘラ磨き整形が施される。

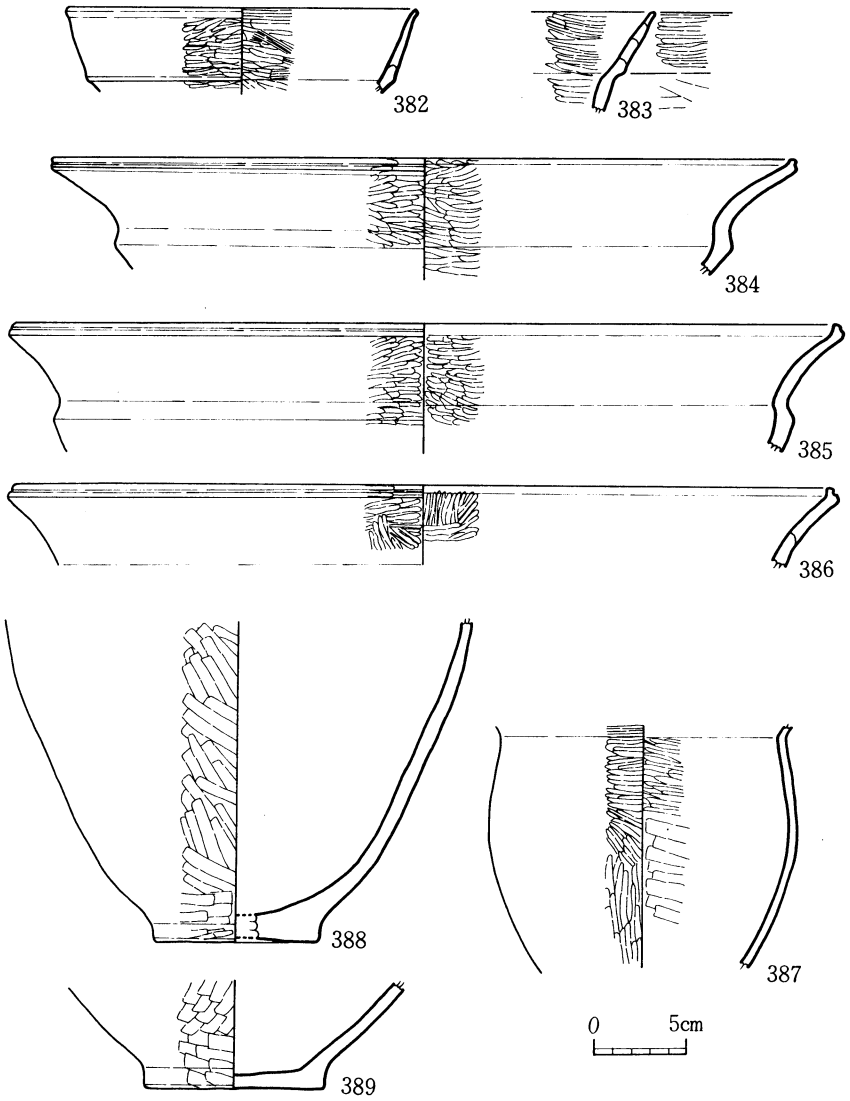


第63図　V層土器（387）出土状態

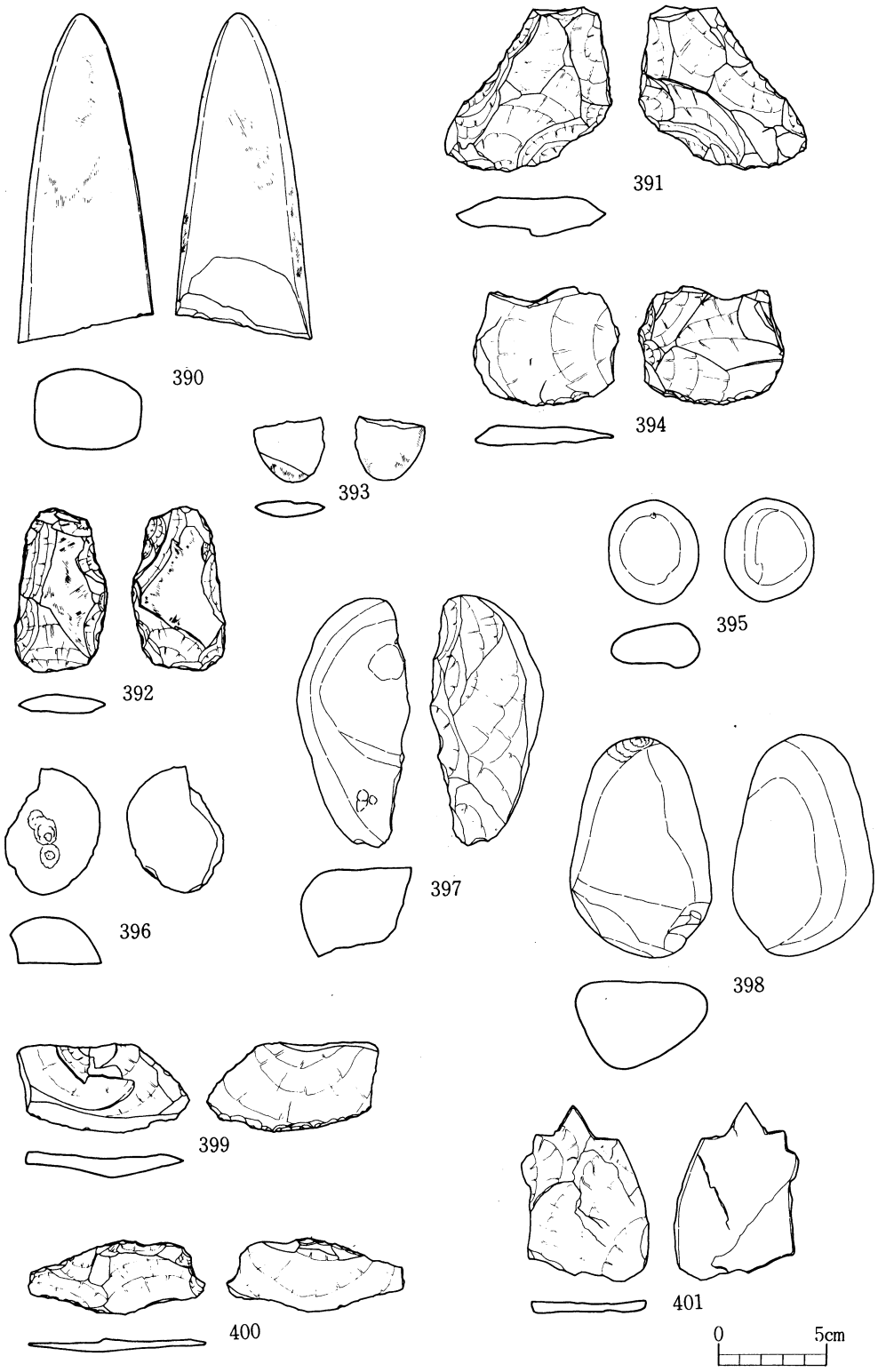
2．石器　（第65図－390～401）

石器は、12点出土している。

390は、刃部が折れた磨製石斧である。表面は丁寧に磨かれ、乳棒状の形態をもつ。391～394は打製石斧の一部と考えられるものである。丁寧な交互剥離がみられる。395～398は、磨石である。また、一部には敲打痕も確認され、敲石としても使用されている。395と396は小形の自然礫が使用され、397と398は扁平な比較的大形の自然礫が使用されている。391～401は、剥片である。



第64図　土器実測図



第65図　石器実測図

第1表　遺跡出土遺物一覧表

番号	類別	標高	区・層	器種	部位	法量(径・高・厚)cm	胎土	調整	焼成	色調	備考
1	Ⅰ	69.66 他	B－14 Ⅹ	深鉢	口縁部	口径 17.8	長石・石英	ナデ	堅緻	茶褐色	器壁厚 0.9～1.2
2	〃	69.725他	〃 〃	〃	〃	器壁厚 0.95～1.1	〃	〃	〃	黄茶褐色	
3	〃	69.715他	〃 〃	〃	〃	〃 1.0～1.2	〃	〃	〃	茶褐色	
4	〃	69.73 他	〃 〃	〃	〃	〃 0.9	〃	〃	〃	〃	
5	〃	69.775	〃 〃	〃	胴部	〃 0.9	〃	〃	〃	〃	
6	〃	69.77	〃 〃	〃	底部付近	〃 0.8～1.25	長石・石英	内－ナデ ケズリ	堅緻	茶褐色	
7	〃	69.74 他	〃 〃	〃	底部	底経 11.6	〃	〃	〃	〃	
8	〃	69.755	〃 〃	〃	底部付近	器壁厚 0.9～1.35	〃	〃	〃	〃	
9	Ⅱ	69.74	B－13 〃	〃	胴部	〃 1.15～1.3	〃	外－条痕 内－ナデ	〃	茶褐色	
10	〃	69.69	〃 〃	〃	〃	〃 0.85～0.9	〃	〃	〃	〃	
11	Ⅲ	69.46	A－13 〃	〃	〃	〃 0.9～1.0	長石・石英 金雲母	内－ナデ	〃	暗茶褐色	
12	Ⅳ	69.33 他	C－12 〃	〃	復元	復元口経21.3復元高17.5	〃	〃	〃	茶褐色	器壁厚 0.7～0.9
13	〃	69.505	B－10 〃	〃	口縁部	器壁厚 0.7～1.2	長石・石英	〃	〃	〃	
14	〃	69.7	B－13 〃	〃	〃	〃 0.3～0.8	〃	〃	〃	〃	
15	〃	表層	〃 〃	〃	〃	〃 0.6～0.7	長石・石英 雲母	ナデ	良好	茶褐色	
16	〃	69.2	B－9 〃	〃	〃	〃 1.0～1.1	長石・石英(多)	〃	〃	〃	
17	〃	69.42	A－9 〃	〃	〃	〃 0.7～1.1	長石・石英 雲母	〃	〃	褐色	
18	〃	69.76	B－12 〃	〃	胴部	〃 0.6～1.0	〃	〃	〃	黄褐色	
19	〃	69.51 他	B－10 〃	〃	口縁部	口径 19.2	〃	〃	〃	茶褐色	器壁厚 0.7～1.0
20	〃	69.58	B－9 〃	〃	〃	器壁厚 0.7～1.0	長石・石英	〃	〃	〃	
21	〃	69.52	C－11 〃	〃	〃	〃 0.9～1.1	〃	〃	〃	〃	
22	〃	69.69	B－11 〃	〃	〃	〃 0.7～0.8	長石・石英 雲母	〃	〃	〃	
23	〃	69.475	C－12 〃	〃	〃	〃 0.8～1.3	長石・石英	〃	良	〃	
24	〃	69.46 他	〃 〃	〃	〃	〃 0.9～1.2	〃	〃	良好	〃	
25	〃	69.815	B－12 〃	〃	〃	〃 0.9～1.0	〃	〃	〃	〃	
26	〃	69.725	〃 〃	〃	〃	〃 0.7～1.2	〃	〃	〃	〃	
27	〃	69.76	〃 〃	〃	〃	〃 0.6～1.2	〃	〃	〃	赤褐色	
28	〃	69.72	〃 〃	〃	口縁部付近	〃 0.8～1.2	〃	〃	〃	茶褐色	
29	〃	69.485	〃 〃	〃	口縁部	〃 0.7～0.8	〃	〃	普通	〃	
30	〃	69.71 他	B－11 〃	〃	〃	口径 30.0	〃	〃	良好	〃	器壁厚 0.7～1.0
31	〃	69.51	C－11 〃	〃	胴部	器壁厚 0.9～1.1	〃	〃	〃	〃	
32	〃	69.14 他	B－10 〃	〃	口縁部	口径 33.4	〃	〃	〃	暗褐色	器壁厚 0.7～1.4
33	〃	69.49	〃 〃	〃	〃	器壁厚 0.7～1.4	〃	〃	〃	〃	
34	〃	69.525	C－10 〃	〃	〃	〃 0.7～1.1	〃	〃	良	〃	
35	〃	69.46 他	A－10 〃	〃	〃	口径 21.5	〃	〃	〃	茶褐色	器壁厚 0.6～0.8
36	〃	69.57	〃 〃	〃	〃	〃 13.2	〃	〃	良好	〃	〃 0.4～0.9
37	〃	69.795	C－6 〃	〃	〃	器壁厚 0.9～1.4	長石・石英(多)	〃	〃	黄褐色	
38	〃	69.73 他	B－13 〃	〃	〃	〃 0.6～1.3	長石・石英 雲母	〃	〃	茶褐色	
39	〃	69.735	B－12 〃	〃	〃	〃 0.8～1.4	長石・石英	〃	〃	黄褐色	
40	〃	69.515他	A－13 〃	〃	〃	〃 0.6～1.0	〃	〃	〃	赤褐色	
41	〃	69.575他	B－12 〃	〃	〃	口径 32.0	〃	〃	良好	〃	器壁厚 0.7～1.1
42	〃	69.54	C－12 〃	〃	〃	器壁厚 0.7～1.0	長石	〃	〃	黄褐色	

第2表　遺跡出土遺物一覧表

番号	類別	標高	区・層	器種	部位	法量(径・高・厚)cm	胎土	調整	焼成	色調	備考
43	Ⅳ	69.44	B－12 Ⅹ	深鉢	口縁部	器壁厚 0.8～1.2	長石・石英(多)	ナデ	良好	黄褐色	
44	〃	69.25 他	B－9 〃	〃	〃	〃 0.6～1.2	長石・石英	〃	良	褐色	
45	〃	69.73	B－12 〃	〃	〃	〃 0.6～1.0	〃	〃	良好	黄茶褐色	
46	〃	69.67	B－11 〃	〃	〃	口径 19.9	〃	〃	〃	黄褐色	器壁厚 0.8～1.3
47	〃	69.62	B－12 〃	〃	〃	器壁厚 0.9～1.5	〃	〃	〃	茶褐色	
48	〃	69.14	B－9 〃	〃	〃	〃 0.7～1.1	〃	〃	普通	〃	
49	〃	69.71	B－11 〃	〃	〃	口径 11.5	〃	〃	良好	黄褐色	器壁厚 0.8～1.1
50	〃	69.625	C－12 〃	〃	〃	器壁厚 0.7～1.5	〃	〃	〃	茶褐色	
51	〃	69.25	B－9 〃	〃	〃	〃 0.6～1.2	〃	〃	〃	〃	
52	〃	69.425	C－10 〃	〃	〃	〃 0.5～0.8	〃	〃	〃	黄褐色	
53	〃	68.98	B－9 〃	〃	〃	〃 0.7～1.0	〃	〃	〃	〃	
54	〃	69.59 他	〃 〃	〃	〃	口径 19.6	〃	〃	〃	茶褐色	器壁厚 0.6～1.3
55	〃	69.59	C－11 〃	〃	〃	器壁厚 0.7～1.2	〃	〃	〃	黄褐色	
56	〃	69.665他	A－10 〃	〃	〃	〃 0.7～1.2	〃	〃	〃	暗褐色	
57	〃	69.445	C－12 〃	〃	〃	〃 0.7～1.0	〃	〃	〃	暗茶褐色	
58	〃	69.425	〃 〃	〃	〃	〃 0.7～1.1	〃	〃	〃	〃	
59	〃	69.61	A－10 〃	〃	〃	〃 0.7～1.2	〃	〃	〃	茶褐色	
60	〃	69.63	B－9 〃	〃	〃	〃 0.8～1.2	〃	〃	〃	〃	
61	〃	69.64	B－11 〃	〃	〃	〃 0.6～1.2	長石・石英 雲母	〃 〃	〃	赤褐色	
62	〃	69.58 他	A－10 〃	〃	〃	〃 0.8～1.1	長石・石英	〃 〃	〃	黄褐色	
63	〃	69.705	A－11 〃	〃	〃	〃 0.5～1.3	長石・石英 雲母	〃 〃	〃	褐色	
64	〃	69.45	B－12 〃	〃	〃	〃 0.5～1.2	〃	〃 〃	〃	暗褐色	
65	〃	69.74	A－9 〃	〃	〃	〃 0.8～1.3	長石・石英	〃	良好	黄褐色	
66	〃	69.68	B－12 〃	〃	〃	〃 0.8～1.3	〃	〃	〃	茶褐色	
67	〃	69.2 他	B－9 〃	〃	〃	口径 47.4	〃	〃	〃	〃	器壁厚 0.8～1.9
68	〃	69.865	B－13 〃	〃	〃	器壁厚 0.8～1.1	〃	〃	〃	〃	
69	〃	69.74	A－10 〃	〃	〃	〃 0.7～1.8	〃	〃	〃	〃	
70	〃	69.425他	B－9 〃	〃	〃	〃 0.7～1.7	長石・石英 雲母	〃	〃	灰褐色	
71	〃	69.29	〃 〃	〃	〃	〃 0.7～1.9	長石・石英	〃	普通	暗褐色	
72	〃	69.64	B－11 〃	〃	〃	〃 0.7～1.2	〃	〃	良好	黄褐色	
73	〃	69.775	B－12 〃	〃	〃	〃 0.6～1.4	〃	〃	〃	〃	
74	〃	69.5	C－11 〃	〃	〃	〃 0.9～1.5	〃	〃	〃	茶褐色	
75	〃	69.325	C－10 〃	〃	〃	〃 0.7～1.5	長石・石英 雲母	〃	〃	〃	
76	〃	69.315	〃 〃	〃	〃	〃 0.8～1.4	〃	〃	〃	〃	
77	〃	69.57	A－10 〃	〃	〃	〃 0.7～1.1	長石・石英	〃	〃	〃	
78	〃	69.485	A－12 〃	〃	〃	〃 1.0～1.1	〃	〃	〃	〃	
79	〃	69.56 他	B－10 〃	〃	〃	〃 0.8～1.5	〃	〃	〃	〃	
80	〃	69.36	A－12 〃	〃	〃	口径 20.8	〃	〃	〃	〃	
81	〃	69.58	B－10 〃	〃	〃	器壁厚 0.7～1.3	〃	〃	普通	黄褐色	
82	〃	69.515	A－9 〃	〃	〃	〃 1.4	〃	〃	良	〃	
83	〃	69.55 他	A－10 〃	〃	〃	口径 27.0	〃	〃	良好	黄～暗褐色	器壁厚 0.6～1.7
84	〃	69.735	A－13 〃	〃	〃	器壁厚 0.5～1.4	〃	〃	〃	茶褐色	

第3表　遺跡出土遺物一覧表

番号	類別	標高	区・層	器種	部位	法量(径・高・厚)cm	胎土	調整	焼成	色調	備考
85	Ⅳ	69.115	B－9　X	深鉢	口縁部	器壁厚　0.8～1.8	長石・石英(多)	ナデ	良好	茶褐色	
86	〃	69.725	B－13　〃	〃	〃	〃　0.7～1.5	長石・石英	〃	良	〃	
87	〃	69.585	B－11　〃	〃	〃	〃　0.6～1.6	長石	〃	良好	褐色	
88	〃	69.685他	B－10　〃	〃	〃	口径　27.2	長石・石英	〃	〃	黄褐色	器壁厚 0.7～0.4
89	〃	69.755	B－12　〃	〃	〃	器壁厚　0.5～1.3	〃	〃	〃	赤褐色	
90	〃	69.445	C－11　〃	〃	〃	〃　0.7～1.2	長石・石英 雲母	〃	〃	茶褐色	
91	〃	69.5	〃　〃	〃	〃	〃　0.9～1.2	〃	〃	良	〃	
92	〃	69.64	A－11　〃	〃	〃	口径　35.6	長石・石英	〃	良好	〃	器壁厚 0.8～1.3
93	〃	69.61	C－11　〃	〃	〃	器壁厚　0.8～2.0	〃	丁寧な ナデ	〃	褐色	
94	〃	69.565	B－9　〃	〃	〃	〃　0.7～1.4	〃	ナデ	〃	黄褐色	
95	〃	69.42 他	B－10　〃	〃	〃	口径　27.1	〃	ナデ ケズリ	普通	茶褐色	器壁厚 0.8～2.0
96	〃	69.355	B－9　〃	〃	〃	器壁厚　0.8～1.4	〃	ナデ	良	〃	
97	〃	69.455他	A－10　〃	〃	〃	口径　16.8	〃	〃	良好	〃	器壁厚 0.9～1.6
98	〃	69.745	B－12　〃	〃	〃	〃　31.0	〃	〃	良	〃	〃 0.8～1.8
99	〃	69.225	B－9　〃	〃	〃	器壁厚　0.6～1.3	〃	〃	普通	〃	
100	〃	69.63 他	B－10　〃	〃	復元	口径　34.6	〃	〃	〃	〃	
101	〃	69.67	A－10　〃	〃	口縁部	器壁厚　0.7～1.2	長石・石英 雲母	ナデ	良好	茶褐色	
102	〃	69.595	B－11　〃	〃	〃	〃　0.8～1.1	長石・石英	〃	普通	黄褐色	
103	〃	69.82	B－12　〃	〃	〃	〃　0.6～1.1	〃	丁寧な ナデ	良好	灰褐色	
104	〃	69.785	〃　〃	〃	〃	〃　0.5～0.9	〃	研磨 (ナデ)	〃	黄褐色	
105	〃	69.95	B－11　〃	〃	〃	〃　0.7～1.0	〃	ナデ	〃	褐色	
106	〃	69.81	B－13　〃	〃	〃	〃　0.7～1.1	〃	ナデ	〃	黄褐色	
107	〃	69.425他	B－9　〃	〃	〃	口径　31.8	石英	〃	〃	茶褐色	器壁厚 0.8～1.0
108	〃	69.045	〃　〃	〃	〃	器壁厚　0.8～1.8	長石・石英	不明	普通	〃	
109	〃	69.415	C－11　〃	〃	〃	口径　10.8	〃	ナデ	〃	暗褐色	器壁厚 0.5～1.0
110	〃	69.71 他	B－12　〃	〃	〃	〃　30.4	〃	〃	〃	茶褐色	器壁厚 0.7
111	〃	69.85 他	C－13　〃	〃	〃	〃　19.4	角閃石 石英	〃	〃	暗褐色	器壁厚 0.8～1.0
112	〃	69.55	A－10　〃	〃	〃	器壁厚　0.7～1.2	長石・石英	〃	〃	茶褐色	
113	〃	69.645	〃　〃	〃	〃	〃　0.6～1.1	〃	〃	良好	〃	
114	〃	69.68	B－10　〃	〃	〃	口径　17.8	〃	〃	〃	〃	器壁厚 0.5～1.0
115	〃	69.74	〃　〃	〃	〃	〃　13.0	〃	ナデ	普通	黄褐色	〃 0.5～1.0
116	〃	69.685	B－13　〃	〃	〃	器壁厚　0.5～1.0	〃	〃	〃	〃	
117	〃	69.66	A－12　〃	〃	〃	口径　13.8	〃	〃	〃	〃	器壁厚 0.7～1.0
118	〃	69.645	〃　〃	〃	〃	〃　13.8	〃	〃	〃	〃	〃 0.6～1.0
119	〃	69.59	A－13　〃	〃	〃	器壁厚　0.6～0.7	〃	〃	良好	灰褐色	
120	〃	69.545	〃　〃	〃	〃	口径　11.2	〃	〃	普通	黄褐色	器壁厚 0.6～1.0
121	〃	69.595	B－10　〃	〃	〃	器壁厚　0.6～0.9	長石・石英 雲母	〃	〃	〃	
122	〃	69.545	A－12　〃	〃	〃	口径　12.3	長石	〃	〃	〃	器壁厚 0.5～0.9
123	〃	69.675	B－11　〃	〃	〃	〃　15.2	長石・石英	〃	〃	〃	〃 0.7～1.2
124	〃	69.525	C－12　〃	〃	〃	器壁厚　0.6～1.2	〃	〃	良好	赤褐色	
125	〃	69.64 他	B－10　〃	小型 深鉢	〃	口径　12.0	〃	〃	〃	〃	器壁厚 0.6～1.0
126	〃	69.65	A－9　〃	深鉢	〃	〃　14.6	長石	〃	普通	褐色	〃 0.5～1.0

第4表　遺跡出土遺物一覧表

番号	類別	標高	区・層	器種	部位	法量(径・高・厚)cm	胎土	調整	焼成	色調	備考
127	Ⅳ	69.49	A－10 Ⅹ	深鉢	口縁部	口径 9.4	長石・石英	ナデ	普通	茶褐色	器壁厚 0.7～1.2
128	〃	69.78	〃 〃	〃	〃	〃 12.7	〃	〃	良好	〃	〃 0.8～1.1
129	〃	69.62	B－13 〃	〃	〃	〃 6.1	〃	〃	〃	赤褐色	〃 0.7～0.9
130	〃	69.78 他	B－10 〃	〃	〃	〃〃 23.1	長石・石英(多)	〃	〃	茶褐色	〃 0.5～1.5
131	〃	69.66 他	A－10 〃	〃	胴部	器壁厚 0.6	長石・石英	〃	〃	〃	
132	〃	69.55	B－11 〃	〃	〃	〃 0.8～0.9	〃	〃	〃	黄褐色	
133	〃	69.7	A－10 〃	〃	〃	〃 0.7	長石・石英 雲母	〃	〃	茶褐色	
134	〃	69.375	B－11 〃	〃	〃	〃 0.9～1.4	長石・石英	〃	〃	黄褐色	
135	〃	69.655	A－12 〃	〃	〃	〃 0.7～1.1	〃	〃	〃	茶褐色	
136	〃	69.43	B－11 〃	〃	〃	〃 0.7～1.5	長石・石英 雲母	〃	〃	〃	
137	〃	69.865	〃 〃	〃	〃	〃 0.7～1.4	〃	〃	〃	〃	
138	〃	69.75	B－10 〃	〃	〃	〃 0.8	〃	〃	〃	〃	
139	〃	69.715	B－11 〃	〃	〃	〃 0.7～1.1	長石・石英	〃	〃	黄褐色	
140	〃	69.305	C－10 〃	〃	〃	〃 0.8～0.9	長石・石英 雲母	〃	〃	茶褐色	
141	〃	69.955	B－12 あぜ 〃	〃	〃	〃 0.8～1.2	長石・石英	〃	〃	〃	
142	〃	69.33 他	C－10 〃	〃	〃	〃 0.8～1.1	長石・石英 雲母	〃	〃	〃	
143	〃	69.575	A－10 〃	〃	〃	〃 0.7～0.9	〃	〃	〃	〃	
144	〃	69.63	B－10 〃	〃	〃	〃 0.6～0.9	〃	〃	〃	〃	
145	〃	69.59	〃 〃	〃	〃	〃 0.9～1.2	長石・石英	〃	〃	黄褐色	
146	〃	69.56	B－11 〃	〃	〃	〃 0.8～1.1	長石・石英 雲母	〃	〃	暗茶褐色	
147	〃	69.805他	〃 〃	〃	口縁部	〃 0.8～1.2	長石・石英	〃	〃	暗褐色	
148	〃	69.69	〃 〃	〃	胴部	〃 0.6～0.7	〃	〃	〃	茶褐色	
149	〃	69.485	B－12 〃	〃	口縁部付近	〃 0.7～0.8	〃	〃	良	黄褐色	
150	〃	69.52	A－9 〃	〃	胴部	〃 0.9～1.2	〃	〃	良好	暗褐色	
151	〃	69.55	C－7 〃	〃	〃	〃 0.9～1.1	〃	〃	〃	灰褐色	
152	〃	69.745他	B－10 〃	〃	〃	〃 0.9～1.1	〃	〃	〃	黄茶褐色	
153	〃	69.505他	〃 〃	〃	〃	〃 0.95～1.25	〃	〃	〃	茶褐色	
154	〃	69.41	C－11 〃	〃	〃	〃 0.7～1.0	長石・石英 雲母	〃	〃	赤褐色	
155	〃	69.61	B－11 〃	〃	〃	〃 0.6～1.1	〃	〃	〃	茶褐色	
156	〃	69.17	B－9 〃	〃	〃	〃 0.7	長石・石英	〃	良	黄茶褐色	
157	〃	69.53	B－11 〃	〃	〃	〃 0.7～0.8	〃	〃	普通	黄褐色	
158	〃	69.245	B－10 〃	〃	口縁部付近	〃 0.7～0.9	〃	〃	良好	暗褐色	
159	〃	69.71	A－10 〃	〃	胴部	〃 0.7～0.8	長石・石英 雲母	〃	〃	暗茶褐色	
160	〃	69.345	B－10 〃	〃	〃	〃 0.6～0.8	長石・石英	〃	〃	暗褐色	
161	〃	69.08 他	〃 〃	〃	〃	〃 0.6～0.9	〃	〃	〃	黄褐色	RL LR) 節
162	〃	69.63 他	A－13 〃	〃	〃	〃 0.6～0.9	〃	〃	〃	暗～黄褐色	RL 節L
163	〃	69.65	B－12 〃	〃	〃	〃 0.7～1.0	〃	〃	〃	茶褐色	LR
164	〃	69.715	〃 〃	〃	〃	〃 0.7～1.0	〃	〃	〃	〃	RL
165	〃	69.81	〃 〃	〃	〃	〃 0.4～0.5	〃	〃	〃	〃	RL 節L
166	〃	69.42	C－10 〃	〃	〃	〃 0.6～0.8	〃	〃	普通	黒褐色	〃
167	〃	69.45	B－9 〃	〃	〃	〃 0.6	〃	ナデ ケズリ	〃	茶褐色	〃
168	〃	69.505他	A－10 〃	〃	〃	〃 0.4～0.9	長石(多) 石英・雲母	〃	〃	〃	〃

第5表　遺跡出土遺物一覧表

番号	類別	標高	区・層	器種	部位	法量(径・高・厚)cm	胎土	調整	焼成	色調	備考
169	Ⅳ	69.715	B−13 Ⅹ	深鉢	胴部	器壁層 0.7	長石・雲母	ナデ	良好	黄褐色	RL 節L
170	〃	69.275	C−9 〃	〃	〃	〃 0.6〜0.9	長石・石英 雲母	〃	良	茶褐色	〃
171	〃	69.605	B−10 〃	〃	〃	〃 0.6〜1.0	長石・石英	〃	良好	〃	LR
172	〃	69.555	B−11 〃	〃	〃	〃 0.9〜1.0	長石・石英 雲母	〃	〃	〃	LR RL) 節R
173	〃	69.6	A−10 〃	〃	〃	〃 0.6〜1.0	〃	〃	〃	〃	R
174	〃	69.47	B−11 〃	〃	〃	〃 0.8〜1.1	長石・石英	〃	〃	〃	LR 節R
175	〃	69.76 他	B−12 〃	〃	〃	〃 0.5〜0.8	〃	〃	良	〃	LR
176	〃	69.32	C−10 〃	〃	〃	〃 0.7〜0.8	長石・石英 雲母	〃	良好	暗茶褐色	LR RL) 節R
177	〃	69.59 他	A−9 〃	〃	〃	〃 0.6〜0.8	長石・石英	ケズリ	〃	黄茶褐色	RL 節L
178	〃	69.605他	A−10 〃	〃	〃	〃 0.7〜0.8	〃	ナデ ケズリ	〃	茶褐色	〃
179	〃	69.55	〃 〃	〃	〃	〃 0.6〜0.8	〃	ナデ	〃	赤黄褐色	LR 節R
180	〃	69.37	C−10 〃	〃	〃	〃 0.6〜0.8	〃	〃	良	茶褐色	RL LR) 節L
181	〃	69.52	A−10 〃	〃	〃	〃 0.8	〃	〃	良好	〃	LR 節R
182	〃	69.64 他	B−10 〃	〃	〃	〃 0.7〜0.8	長石・石英(多)	内面ケズリ	〃	赤褐色	〃
183	〃	69.64 他	A−10 〃	〃	〃	〃 0.6〜0.9	長石・石英	ナデ	〃	茶褐色	〃
184	〃	69.54 他	〃 〃	〃	〃	〃 0.7〜0.8	〃	〃〃	〃	〃	RL 節L
185	〃	69.6他	〃 〃	〃	〃	〃 0.7〜1.0	〃	〃〃	〃	〃	LR 節R
186	〃	69.725	〃 〃	〃	〃	〃 0.7〜0.8	〃	〃	〃	〃	LR 節R
187	〃	69.645	〃 〃	〃	〃	〃 0.6〜0.8	〃	〃	〃	〃	〃
188	〃	69.66 他	〃 〃	〃	〃	〃 0.7	〃	〃	〃	〃	〃
189	〃	69.09	B−9 〃	〃	〃	〃 0.7〜0.8	〃	〃	〃	〃	〃
190	〃	69.615他	A−10 〃	〃	〃	〃 0.8〜0.9	長石・石英 雲母	ナデ ケズリ	〃	〃	RL LR) 節R
191	〃	69.595他	B−11 〃	〃	〃	〃 0.9〜1.0	〃	ナデ	〃	〃	LR
192	〃	69.46	〃 〃	〃	〃	〃 0.8〜0.9	〃	〃	〃	〃	LR RL) 節R
193	〃	69.545他	B−13 〃	〃	〃	〃 0.4〜0.6	〃	〃	〃	暗褐色	RL LR) 片
194	〃	69.57	B−12 〃	〃	〃	〃 0.7〜0.8	長石・石英	〃	〃	茶褐色	RL 節L
195	〃	69.725	B−11 〃	〃	〃	〃 0.8〜0.9	長石・石英 雲母	〃	〃	赤褐色	LR 節R
196	〃	69.37	〃 〃	〃	〃	〃 0.9	〃	〃	〃	茶褐色	RL 節?
197	〃	69.69 他	B−11 〃	〃	〃	〃 0.7〜0.9	〃	〃	〃	〃	LR
198	〃	69.946他	B−12 〃	〃	〃	〃 0.7〜0.8	〃	〃	〃	〃	RL 節L
199	〃	69.77	B−13 〃	〃	〃	〃 0.8〜0.9	〃	〃	〃	黒褐色	〃
200	〃	69.71	B−9 〃	〃	〃	〃 0.7	長石・石英	内面ケズリ	良好	茶褐色	RL LR) 節R
201	〃	69.715	A−12 〃	〃	〃	〃 0.6〜0.8	〃	ナデ	〃	〃	LR 節R
202	〃	69.46	B−11 〃	〃	〃	〃 0.7〜0.9	長石・石英 雲母	〃	〃	〃	LR RL) 節R
203	〃	70.2 9他	A−12 〃	〃	〃	〃 0.5〜0.6	〃	〃	〃	暗褐色	LR RL)節なし
204	〃	69.47 他	B−9 〃	〃	〃	〃 0.8	長石・石英	〃	良	茶褐色	RL 節L
205	〃	69.6	B−11 〃	〃	〃	〃 0.7〜0.9	〃	〃	良好	〃	LR
206	〃	69.62 他	A−10 〃	〃	〃	〃 0.5〜0.7	〃	〃	〃	〃	RL 節L
207	〃	69.93 他	B−12 〃	〃	〃	〃 0.9〜1.0	〃	〃	〃	〃	〃
208	〃	69.68	B−10 〃	〃	〃	〃 0.4〜0.6	長石	〃	〃	〃	〃
209	〃	69.095	B−9 〃	〃	〃	〃 0.6〜0.9	長石・石英	〃	普通	赤黄褐色	LR 節R
210	〃	69.735他	B−13 〃	〃	〃	〃 0.7〜0.8	〃	〃	良好	黄褐色	RL 節L

第6表　遺跡出土遺物一覧表

番号	類別	標高	区・層	品種	部位	法量(径・高・厚)cm	胎土	調整	焼成	色調	備考
211	Ⅳ	69.6	B－12 Ⅹ	深鉢	胴部	器壁厚 0.6～0.7	長石・石英	ナデ	良好	茶褐色	LR 節R
212	〃	69.551	〃 〃	〃	〃	〃 0.6～0.7	〃	〃	〃	〃	〃
213	〃	69.695他	B－11 〃	〃	〃	〃 0.6～0.8	〃	〃	〃	〃	〃
214	〃	69.77	B－14 〃	〃	〃	〃 0.5～0.8	〃	〃	〃	〃	〃
215	〃	69.8	B－12 あぜ 〃	〃	〃	〃 0.6～0.7	〃	〃	〃	〃	〃
216	〃	69.845	B－12 〃	〃	〃	〃 0.6～0.7	〃	〃	〃	〃	〃
217	〃	69.56	B－9 〃	〃	〃	〃 0.5～0.7	〃	〃	〃	〃	〃
218	〃	69.285	C－10 〃	〃	〃	〃 0.5～0.8	〃	〃	〃	〃	RL 節L
219	〃	69.175	B－13 〃	〃	〃	〃 0.6～0.7	〃	〃	〃	〃	LR 〃R
220	〃	69.66	B－10 〃	〃	〃	〃 0.6～0.8		〃	〃	〃	〃
221	〃	69.515	B－12 〃	〃	〃	〃 0.6～0.7	長石・石英	〃	〃	〃	〃
222	〃	69.35	C－10 〃	〃	〃	〃 0.6～0.7	〃	〃	良	〃	〃
223	〃	69.14	B－9 〃	〃	〃	〃 0.7～0.8	〃	〃	良好	〃	〃
224	〃	69.555	A－10 〃	〃	〃	〃 0.6	〃	〃	〃	黄褐色	〃
225	〃	69.705	A－9 〃	〃	〃	〃 0.8～1.0	〃	〃	〃	〃	RL
226	〃	69.285	B－9 〃	〃	〃	〃 0.7～1.1	〃	〃	〃	〃	〃
227	〃	69.36 他	B－9 〃	〃	〃	〃 0.5～0.8	〃	ナデ ケズリ	〃	茶褐色	LR 節R
228	〃	69.375	〃 〃	〃	〃	〃 0.4～0.9	長石	条痕仕上げ	〃	〃	〃
229	〃	69.78	〃 〃	〃	〃	〃 0.6～0.8	長石・石英	ナデ	良好	赤褐色	節L
230	〃	69.535他	B－10 〃	〃	底部	底径 11.0	〃	〃	〃	茶褐色	器壁厚0.6～1.4 LR 節R
231	〃	69.665	B－12 〃	〃	〃	〃 9.0	〃	〃	〃	〃	RL 節L
232	〃	70.04 他	B－12 あぜ 〃	〃	底部付近	器壁厚 0.7～1.0	〃	〃	〃	〃	RL LR) 節R
233	〃	69.675	B－12 〃	〃	底部	〃 0.9	〃	〃	〃	黄褐色	LR 〃R
234	〃	69.665	〃 〃	〃	底部	〃 0.6～1.1	〃	〃	〃	茶褐色	〃
235	〃	69.805	B－13 〃	〃	〃	底径 10.0	〃	〃	〃	黄茶褐色	RL 節L
236	〃	69.56	B－11 〃	〃	〃	器壁厚 0.9	〃	〃	〃	茶褐色	LR
237	〃	69.605	B－12 〃	〃	底部付近	〃 0.6～1.2	〃	〃	〃	〃	(LR(?) RL 節R
238	〃	69.55	B－10 〃	〃	底部	底径 16.3	〃	〃	〃	〃	器壁厚 0.8
239	〃	69.785	B－12 〃	〃	〃	〃 11.0	〃	〃	〃	〃	LR 節L
240	〃	69.74	B－11 〃	〃	〃	〃 14.0	〃	〃	〃	赤褐色	LR 節R
241	〃	69.455	A－13 〃	〃	〃	〃 13.5	〃	〃	〃	黄褐色	RL 節R
242	〃	69.49	B－10 〃	〃	〃	〃 12.6	〃	〃	〃	茶褐色	器壁厚0.7～0.8 RL 節L
243	〃	69.885	A－13 〃	〃	〃	〃 11.0	長石・石英 雲母	〃	〃	茶褐色	RL 節L
244	〃	69.29	C－10 〃	〃	〃	〃 7.5	長石・石英	〃	〃	〃	器壁厚 0.7～1.2
245	〃	69.865	B－12 〃	〃	底部付近	器壁厚 0.8～0.9	〃	〃	〃	黄褐色	
246	〃	69.68	B－12 〃	〃	底部	底経 7.5	長石・石英 雲母	〃	〃	茶褐色	器壁厚 0.7～1.1
247	〃	69.505	A－10 〃	〃	〃	〃 10.5	長石・石英	〃	〃	〃	〃 0.9～1.3
248	〃	69.79	B－12 〃	〃	〃	〃 10.5	〃	〃	〃	〃	
249	〃	69.035	B－3 〃	〃	〃	〃 10.5	〃	〃	〃	〃	器壁厚 1.1～1.8
250	〃	69.065	B－9 〃	〃	〃	〃 9.5	〃	〃	〃	〃	
251	〃	69.985	B－13 あぜ 〃	〃	〃	〃 13.5	〃	〃	〃	〃	
252	〃	69.655他	B－12 〃	〃	〃	〃 11.5	〃	〃	〃	茶褐色	

第7表　遺跡出土遺物一覧表

番号	類別	標高	区・層	品種	部位	法量(径・高・厚)cm	胎土	調整	焼成	色調	備考
253	Ⅳ	69.685	B－12 Ⅹ	深鉢	底部	底径 12	長石・石英	ナデ	良好	茶褐色	
254	〃	69.765	A－10 〃	〃	〃	〃 12.5	〃	〃	〃	〃	
255	〃	69.775	B－12 〃	〃	〃	〃 9	〃	〃	〃	〃	
256	〃	69.73 他	〃 〃	〃	〃	〃 12	〃	〃	〃	〃	
257	〃	69.7	A－11 〃	〃	〃	〃 12.5	〃	〃	〃	黄茶褐色	
258	〃	70.425	B－13 〃	〃	〃	〃 9	〃	〃	〃	茶褐色	器壁厚 0.9～1.7
259	〃	69.835	B－13 〃	〃	〃	〃 10.5	〃	〃	〃	〃	
260	〃	69.68	B－10 〃	〃	〃	〃 9	〃	〃	〃	〃	
261	〃	69.61	A－12 〃	〃	〃	〃 5	〃	〃	〃	〃	
262	〃	69.66 他	B－11 〃	〃	〃	〃 6.5	〃	〃	〃	〃	器壁厚 0.6～0.9
263	〃	69.555	C－12 〃	〃	〃	〃 5	〃	〃	〃	赤茶褐色	
264	〃	69.975	B－13 〃	〃	〃	〃 4.8	〃	〃	〃	赤褐色	器壁厚 0.7
265	〃	69.62	B－10 〃	〃	〃	〃 6.5	〃	〃	〃	茶褐色	
266	〃	69.65	A－10 〃	壺	口縁部	口径 4.2	長石・石英 雲母	〃	〃	〃	器壁厚 0.5～0.9
267	〃	69.345他	B－6 〃	〃	〃	〃 9.3	長石・石英	〃	〃	〃	〃 0.8～1.2
268	〃	69.63	B－10 〃	〃	〃	〃 7.3	〃	〃	〃	黄褐色	〃 0.7～0.9
269	〃	69.65 他	A－10 〃	〃	〃	〃 4.2	長石・石英 雲母	〃	〃	茶褐色	〃 0.7～1.0
270	〃	69.255	B－9 〃	〃	口縁部	〃 8.2	〃	〃	〃	〃	〃 0.7～1.0
271	〃	69.52 他	B－10 〃	〃	〃	〃 7.0	長石・石英	〃	〃	黄褐色	〃 0.7～1.0
272	〃	69.725他	B－11 〃	〃	〃	〃 9.6	〃	〃	〃	〃	〃 0.8～1.1
273	〃	69.635	B－12 〃	〃	〃	〃 5.4	〃	〃	〃	茶褐色	〃 0.7～1.0
274	〃	69.855	B－13 〃	〃	〃	〃 6.1	〃	〃	〃	〃	〃 0.6～1.0
275	〃	69.795	B－11 〃	〃	〃	〃 4.8	長石・石英 雲母	〃	〃	黄褐色	〃 0.6～0.9
276	〃	69.88	B－12 〃	〃	〃	〃 5.7	長石・石英	〃	〃	〃	〃 0.5～0.8
277	〃	69.63	A－12 〃	〃	〃	〃 4.8	〃	〃	〃	〃	〃 0.6～0.7
278	〃	69.88 他	B－11 〃	〃	復元	口径 8.0復元高40.0	〃	ナデ	〃	〃	〃 0.6～1.0
279	Ⅴ	69.62 他	B－14 〃	深鉢	〃	〃 25.6 〃 18.2	〃	〃	〃	茶褐色	〃 0.4～0.6
280	〃	69.75	A－13 〃	〃	口縁部	口径 31.0	〃	〃	〃	〃	〃 0.5～0.7
281	〃	69.9	B－13 〃	〃	〃	〃 32.5	〃	〃	〃	〃	〃 0.5～0.7
282	〃	69.785他	B－14 〃	〃	胴部	器壁厚 0.4～0.5	〃	〃	〃	〃	
283	〃	69.835他	B－14 〃	〃	〃	〃 0.4～0.5	〃	〃	〃	〃	
284	〃	69.675他	B－14 〃	〃	〃	〃 0.5	〃	〃	〃	〃	
285	〃	69.68	B－13 〃	〃	〃	〃 0.4～0.5	〃	〃	〃	〃	
286	〃	69.73	B－14 〃	〃	〃	〃 0.5	〃	〃	〃	〃	
287	〃	69.69	〃 〃	〃	〃	〃 0.4	〃	〃	〃	〃	
288	〃	69.735他	B－13 〃	〃	〃	〃 0.5	〃	〃	〃	〃	
289	〃	69.94	B－14 〃		底部	底径 10.2	〃	〃	〃	〃	
290	〃	69.67	C－11 〃		胴部	器壁厚 0.7～0.8	〃	〃	〃	〃	
291	Ⅵ	69.635他	A－10 〃		口縁部	口径 26.0	〃	〃	〃	黒褐色	器壁厚 0.6～0.7
382	晩期	70.365	B－6 Ⅵ	深鉢	〃	〃 19.0	〃	〃	〃	〃	〃 0.4～0.8
383	〃	70.2	B－7 〃	〃	〃	器壁厚 0.4～0.8	〃	〃	〃	〃	
384	〃	70.3	B－6 〃	浅鉢	〃	口径 40	〃	〃	〃	〃	器壁厚 0.6～1.2

第8表　遺跡出土遺物一覧表

番号	類別	標高	区・層	器種	部位	法量(往・高・厚)cm	胎土	調整	焼成	色調	備考
385	晩期	69.735他	A－7　Ⅲ下	浅鉢	口縁部	口　径　45.0	長石・石英	ヘラ磨き	良好	黒　褐　色	器壁厚 0.6～1.1
386	〃	69.545他	A－8　Ⅲ下	〃	〃	〃　〃	〃	〃	〃	〃	〃 0.7～0.8
387	〃	70.31 他	B－6　Ⅲ下	深鉢	胴部～頸部付近	器壁厚　0.5	〃	〃	〃	〃	
388	〃	70.155他	A－19Ⅳ上	〃	底　部	底　径　9.0	〃	〃	〃	〃	
389	〃	70.03 他	A－7　Ⅲ下	〃	〃	〃　10.0	〃	〃	〃	〃	

第9表　出土石器一覧表

番号	器種	出土区	層	標高	石材	最大長 cm	最大幅 cm	重さ g	備考
292	石　鏃	B－12	Ⅹ	69.73	黒　曜　石	2.0	1.7	1.28	
293	〃	〃	〃	69.79	〃	2.4	1.7	1. 3	
294	〃	B－10	〃	69.575	ホルンフェルス泥質	2.3	1.5	0.74	
295	〃	B－11	〃	69.86	〃	2.3	1.3	0.81	
296	〃	A－12	〃	69.63	〃	2.2	.1 6	1.14	
297	〃	B－12	〃	69.35	〃	2.5	1.4	1.29	
298	〃	A－10	〃	69.625	黒　曜　石	2.3	2.0	1.45	
299	〃	B－11	〃	69.55	〃	.1 5	1.6	0.6	
300	〃	B－12	〃	69.97	〃	2.4	1.2	1.22	
301	〃	A－10	〃	69.53	ホルンフェルス泥質	3.1	1.8	2.32	
302	〃	B－14	〃	69.98	〃	3.9	2.3	4.9	
303	石　匙	B－13	〃	69.78	粗　粒　砂　岩	6.4	3.0	15.4	
304	未　詳　品	B－11	〃	70.035	ホルンフェルス泥質	3.7	2.0	2.32	未　詳　品
305	〃	B－12	〃	69.74	〃	1.8	2.8	2.5	
306	磨　製　石　斧	C－3	〃	69.315	ホルンフェルス	27.8	5.2	868	
307	〃	B－3	〃	68.92	〃	12.6	4.3	178	
308	局部磨製石斧	B－10	〃	69.76	粘　板　岩	5.9	4.5	38.1	
309	〃	B－12	〃	69.595	ホルンフェルス	14.4	5.5	265	
310	〃	B－10	〃	69.67	粘　板　岩	8.2	4.3	125.0	
311	〃	B－11	〃	69.645	〃	7.8	3.9	82.7	
312	〃	C－12	〃	69.475	〃	5.0	4.1	48.6	
313	〃	C－11	〃	69.455	ホルンフェルス	13.5	6.1	172.0	
314	〃	B－8	〃	68.62	粘　板　岩	10.8	6.0	150.0	
315	〃	B－9	〃	69.26	〃	11.8	6.9	280.0	
316	〃	〃	〃	69.32	ホルスフェルス	5.8	8.0	160.0	
317	扁平打製石斧	B－10	〃	69.635	粘　板　岩	7.6	6.0	115.7	
318	〃	B－12	〃	69.665	〃	9.5	4.4	96.5	
319	小形扁平石斧	B－11	〃	69.745	頁　岩	4.4	2.9	3.27	
320	〃	A－12	〃	69.615	粘　板　岩	6.9	3.4	25.7	
321	石　片	A－11	〃	69.75	頁　岩	2.2	2.7	2.01	
322	〃	〃	〃	69.765	〃	1.8	2.5	1.75	
323	〃	B－11	〃	69.75	〃	3.2	2.3	3.16	
324	磨石十敲石	A－2	〃	68.73	安　山　岩	11.4	8.2	710	
325	〃	B－11	〃	69.62	〃	14.7	14.3	675	

第10表　出土石器一覧表

番号	器種	出土区	層	標高	石材	最大長 cm	最大幅 cm	重さ g	備考
326	磨石+敲石	A−12	Ⅹ	69.69	安山岩	11.6	10.0	743.0	
327	〃	B−10	〃	69.5	砂岩	20.4	19.0	780.0	
328	〃	A−10	〃	69.63	安山岩	11.9	9.0	627.0	
329	〃	〃	〃	69.585	〃	12.1	9.7	710.0	
330	〃	B−10	〃	69.55	〃	9.2	7.8	395.0	
331	〃	B−6	〃	69.445	巨晶花崗岩	10.0	9.5	718.0	
332	〃	B−11	〃	69.605	花崗岩	9.0	8.0	425.0	
333	〃	B−9	〃	68.545	ホルンフェルス	17.7	10.6	1,235.0	
334	凹石	B−6	〃	69.485	安山岩	7.0	5.0	158.0	
335	〃	C−12	〃	69.555	ホルンフェルス	8.4	6.8	354.0	
336	石皿	A−12	〃	69.625	花崗岩	24.8	17.0	6,050.0	
337	〃	A−10	〃	69.69	〃	22.3	13.9	3,500.0	
338	〃	〃	〃	69.57	〃	25.6	20.4	3,450.0	
339	〃	B−14	〃	69.71	〃	9.3	8 3.	450.0	
340	〃	B−10	〃	69.29	〃	26.4	22.0	5,100.0	
341	軽石製品	A−5	〃	69.61	軽石	12.5	10.5	177.0	
342	棒状敲石	C−11	〃	69.33	ホルンフェルス	11.2	5.9	269.0	Ⅰa類
343	〃	B−10	〃	69.715	〃	13.1	4.6	170.0	〃
344	〃	B−12	〃	69.83	〃	9.4	4.0	99.7	〃
345	〃	B−11	〃	69.58	〃	9.7	4.5	131.0	〃
346	〃	B−9	〃	69.535	〃	10.0	3.2	79.1	Ⅰb
347	〃	C−10	〃	69.31	〃	10.6	3.5	152.0	〃
348	〃	C−11	〃	69.35	〃	9.3	3.5	142.0	〃
349	〃	C−13	〃	69.84	〃	11.7	4.6	217.0	〃
350	〃	B−12	〃	69.45	〃	9.6	4.0	121.0	〃
351	〃	B−10	〃	69.525	〃	10.2	3.7	180.0	〃
352	〃	〃	〃	69.41	〃	8.2	3.6	132.0	〃
353	〃	〃	〃	69.425	〃	9.0	4.0	155.0	〃
354	〃	A−10	〃	69.6	〃	9.4	5.4	264.0	〃
355	〃	C−12	〃	69.38	〃	9.7	4.4	163.0	〃
356	〃	A−11	〃	69.595	〃	10.3	4.4	195.0	〃
357	〃	A−10	〃	69.64	〃	13.6	4.6	258.0	〃
358	〃	B−5	〃	69.55	〃	13.8	4.8	278.0	〃
359	〃	B−9	〃	69.645	〃	15.7	5.7	477.0	〃
360	〃	C−12	〃	69.565	〃	12.5	6.0	233.0	〃
361	〃	B−10	〃	69.655	〃	11.3	4.1	164.0	Ⅱa類
362	〃	A−12	〃	69.64	〃	10.6	4.2	197.0	〃
363	〃	B−10	〃	69.5	〃	14.8	3.7	240.0	〃
364	〃	B−14	〃	69.755	〃	10.5	4.4	142.0	〃
365	〃	C−11	〃	69.45	〃	8.8	3.4	80.9	〃
366	〃	A−12	〃	69.795	〃	11.0	3.0	71.0	Ⅱb類
367	〃	A−1	〃	69.0 5	〃	16.8	5.25	444.0	Ⅲ類

表11表　出土石器一覧表

番号	器種	出土区	層	標高	石材	最大長	最大幅	重さ	備考
368	敲石	B－10	Ⅹ	69.445	ホルンフェルス	15.4	5.0	234	Ⅲ類
369	〃	〃	〃	69.61	〃	9.9	3.5	146.0	〃
370	〃	A－12	〃	69.48	〃	14.5	5.4	238.0	〃
371	〃	B－11	〃	69.715	〃	11.2	3.4	111.8	〃
372	〃	B－12	〃	69.46	〃	9.3	3.4	86.4	〃
373	〃	B－9	〃	69.21	〃	10.9	5.1	151.0	Ⅳa類
374	〃	〃	〃	69.08	〃	7.7	2.8	47. 2	〃
375	〃	〃	〃	69.54	〃	10.8	3.7	82.5	〃
376	〃	B－10	〃	69.715	〃	10.6	3.5	117.3	Ⅳb類
377	〃	A－8	〃	68.965	〃	10.4	4.3	76.1	〃
378	〃	B－12	〃	69.78	〃	11.0	3.7	147.0	〃
379	〃	B－10	〃	69.545	〃	8.8	3.8	110.3	〃
380	〃	C－12	〃	69.355	〃	9.5	6.0	188.0	〃
381	〃	A－12	〃	69.62	〃	10.2	3.4	124.0	〃
390	磨製石斧	B－21	〃	70.175	〃	14.4	6.15	460.0	〃
391	打製石斧	B－12	〃	69.84	頁岩	7.7	7.5	114.9	〃
392	〃	A－22	Ⅵ	71.32	粘板岩	7.5	4.3	42.76	〃
393	〃	B－22	〃	〃	ホルンフェルス	2.8	3.25	8.37	〃
394	〃	B－12	Ⅹ	70.37	頁岩	5.2	6.5	44.64	〃
395	磨石	B－20	Ⅵ	70.39	ホルンフェルス	4.8	4.1	58.95	〃
396	〃	B－17	〃	70.595	〃	5.8	4.25	60.38	〃
397	〃	B－22	〃	70.185	〃	11.3	5.15	295.0	〃
398	〃	〃	〃	70.56	〃	10.1	6.57	350.0	〃
399	スクレイパー	B－11	Ⅹ	70.37	粘板岩	3.8	7.6	31.54	〃
400		B－7	〃	70.215	半花崗岩	8.15	3.4	13.91	〃
401		B－18	Ⅵ	70.535	〃	7.85	5.3	38.0	〃

第 Ⅲ 章　弥生時代の調査

第１節　調査の概要

弥生時代の調査は、確認調査の結果をもとに上層の戦跡遺構や近世遺構の発掘調査終了後に行なったが、道路建設工事の進行と年度毎の発掘調査の進捗状況との関係から各区の調査行程は若干異なっている。

調査区域は、道路用地の24m のうち当面開通の南側片車線の12m が対象となっている。つまり、北側の12m は緑地帯として保護されるため、今回の調査区域からは除外している。しかし、Ｃ19区～Ｃ21区にかけては、遺構の一部が緑地帯に拡がって検出されたため、その遺構の性格を明らかにするために拡張して調査を実施した。その結果、弥生時代の遺構の新知見や集落の構成を知る新資料を得た。

第２節　Ⅲ層の調査

１．遺　構

（１）遺構の概要

前畑遺跡の弥生時代は、Ⅲ層中に包含層が形成され、その下層に薄い黄褐色のⅣ層が確認される位置で遺構が検出された。遺物包含層及び遺構は、ＡＢ16区～ＡＢ25区の間に及んでいる。遺構は、竪穴住居址３基、掘立柱建物跡８棟、円形周溝１基、溝状遺構３基（但し、建物に付随するものが２基）検出された。

住居址は、Ｂ７区（１号）、ＢＣ19区（２号）、Ｂ20区（３号）に所在し、いずれも方形の平面プランを呈するものである。１号及び２号住居址は、住居址内の床面に炭化木が多量に出土しており焼失家屋と考えられる。

掘立柱建物跡は、二通りのタイプがみられる。一つのタイプは１号～３号建物で、梁間が３間のものである。３号は、現水路建設時に破壊されているため全形は知り得ない。１号及び２号建物跡は、北側側辺の片側に溝が付く。いずれも２号及び３号住居址の西～北側近くのＢＣ20区付近に位置し、住居址との関係が注目される。

二つ目のタイプは、梁間が１間のものである。４号建物は、１間×１間のタイプである。５号建物は用地外に延びるが、１間×２間の建物の可能性が強い。６号～８号建物は、１間×２間の同一タイプのものである。外側の４本柱の掘り方は大きくて深く、主柱に想定される。中柱は小さく浅い。いずれも住居址群から西南側に離れたＡＢ21区～24区に検出された。

さらに、Ａ20区の拡張区において、２号及び３号建物跡と切り合って円形周溝遺構が検出さ

れた。この切り合いで円形周溝と建物跡との時期差は明確であり、構築順が明らかとなる。

遺物は遺構を中心に出土し、総数約4,360点と多い。

（2）竪穴住居址

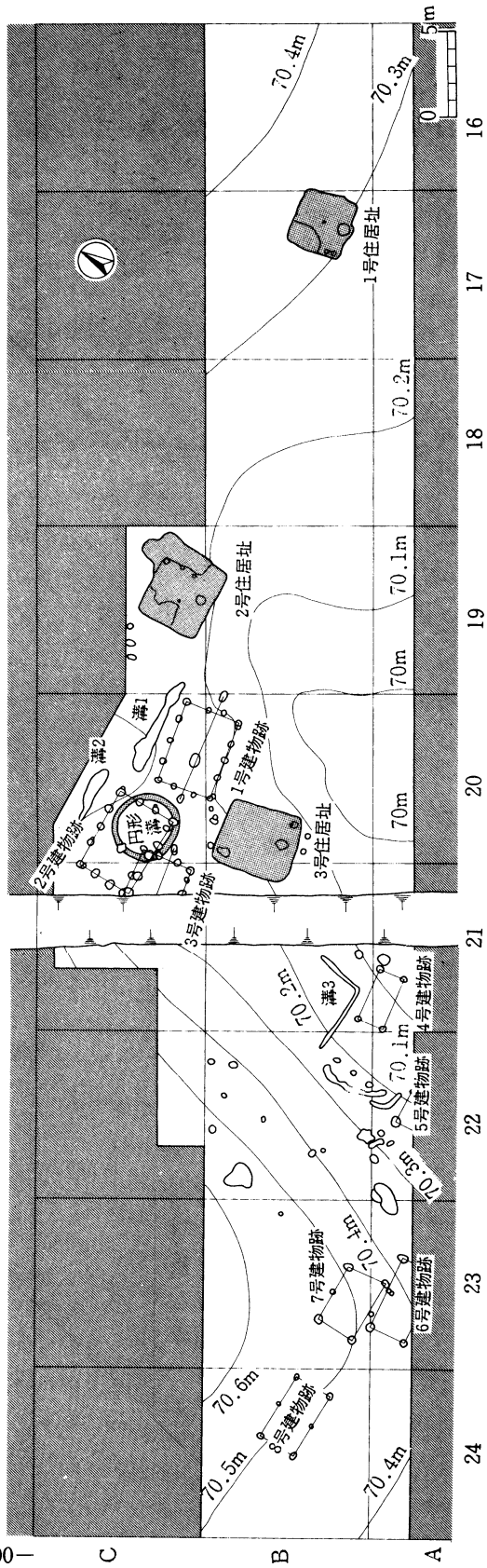
竪穴住居址は、B７区（１号）、BC19区（２号）、B20区（３号）に３基検出された。いずれも方形の平面プランを呈するものである。１号及び２号住居址は、住居址内に炭化木が多量に検出された。

１）１号住居址　（第67～70図）

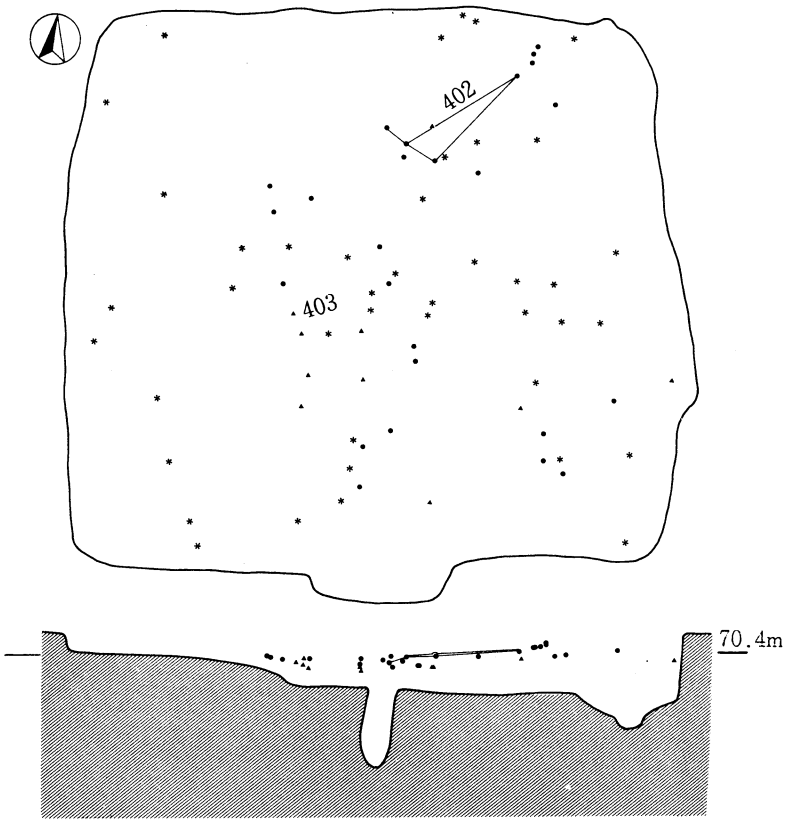
１号住居址は、B７区に検出された。わずかに東西に長い方形プランを呈する住居址で、検出面での平面規模は、略東西3.6ｍ×略南北3.26ｍを測る。床面は、約40cmの深さを測る。

住居址のほぼ中央には、18cm×15cmの柱穴が１個検出された。柱穴の直上には二本の炭化木が直立した状態で存在した。柱穴内は、この炭化木の延長下面に柱木の痕跡が確認される（第68図）。柱痕跡は、約42cmの深さまで到達している。住居址内の炭化木は、この中央の柱穴に向かって放射状に検出されており、１号住居址は上屋構造が一本柱の可能性が強い。

住居址内の西側辺の北隅には、幅1.4ｍで長さ2.25mのベッド状遺構を備えている。ベッド状遺構は、中央に突き出た角部が若干崩壊しているが、床面より22cm高い壇になっている。住居址内の南側辺の中央部には、径70cm程度で床面より深さ20cmの円形の凹んだピットが検出された。このピットと接する南側辺は、わずかに張り出している。形状から入口の施設が想定される。このピットの西側でベッド状遺構の南側付近には、焼土痕跡と浅いピットが存在する。



第66図　Ⅲ層遺構配置図



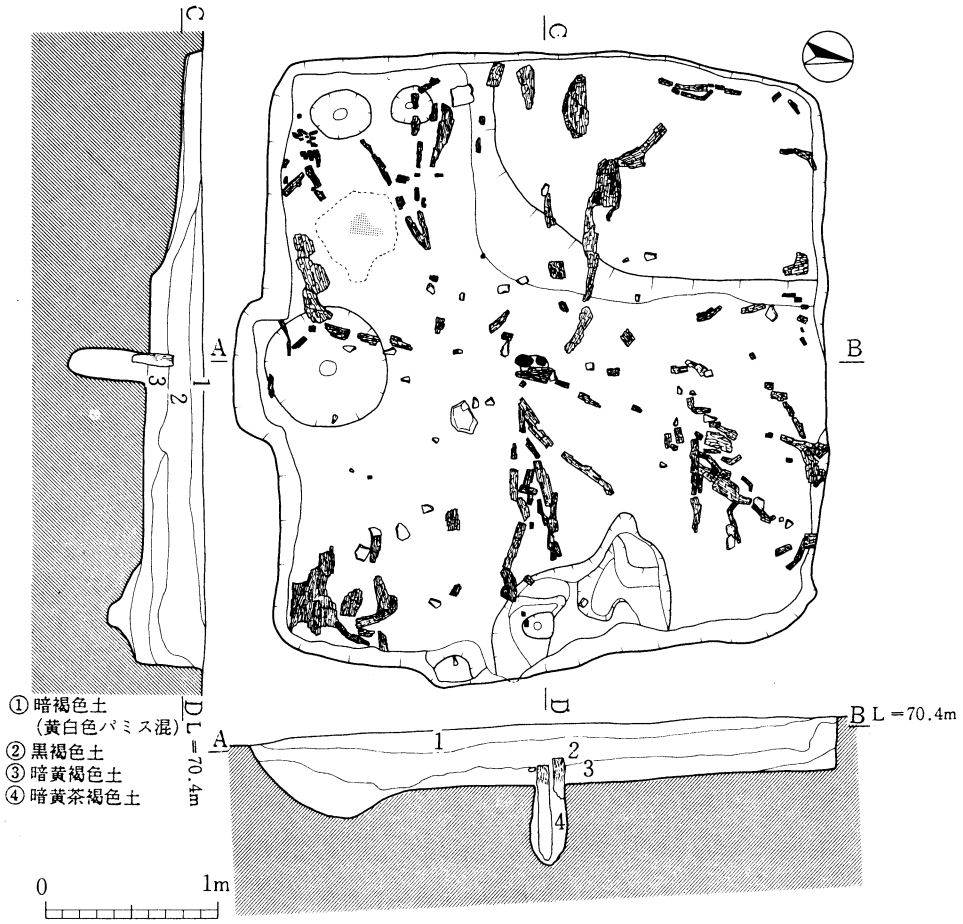
第67図　1号住居址遺物分布図

さらに、東側辺に接して、幅50cm、長さ100cmの不定形なピットが検出されたが、用途は不明である。

住居址内からは、総数35点の遺物が出土している。しかし、土器片はいずれも細片で形態の明らかなものは少ない。402は、唯一実測できた壺形土器の底部片である。また、住居址2号の中心に出土した、完形に復元される甕形土器（417）に接合する細片が二片出土している。この417の甕形土器は在地系とは著しく形態が異なり、移入土器であることが想定される。在地系土器との関係や住居址間での接合関係を含めて、極めて注目される資料である。403は、粒子の滑らかな石質で中央がやや凹んではいるが、平坦で滑らかな面をもつ砥石状の石器である。

2）　2号住居址　（第71～76図）

2号住居址は、B19区にわずかにかかる状態でC19区を中心に検出された。わずかに東西に長い方形プランを呈する住居址である。検出面での平面規模は、略東西4.6m×略南北3.75m



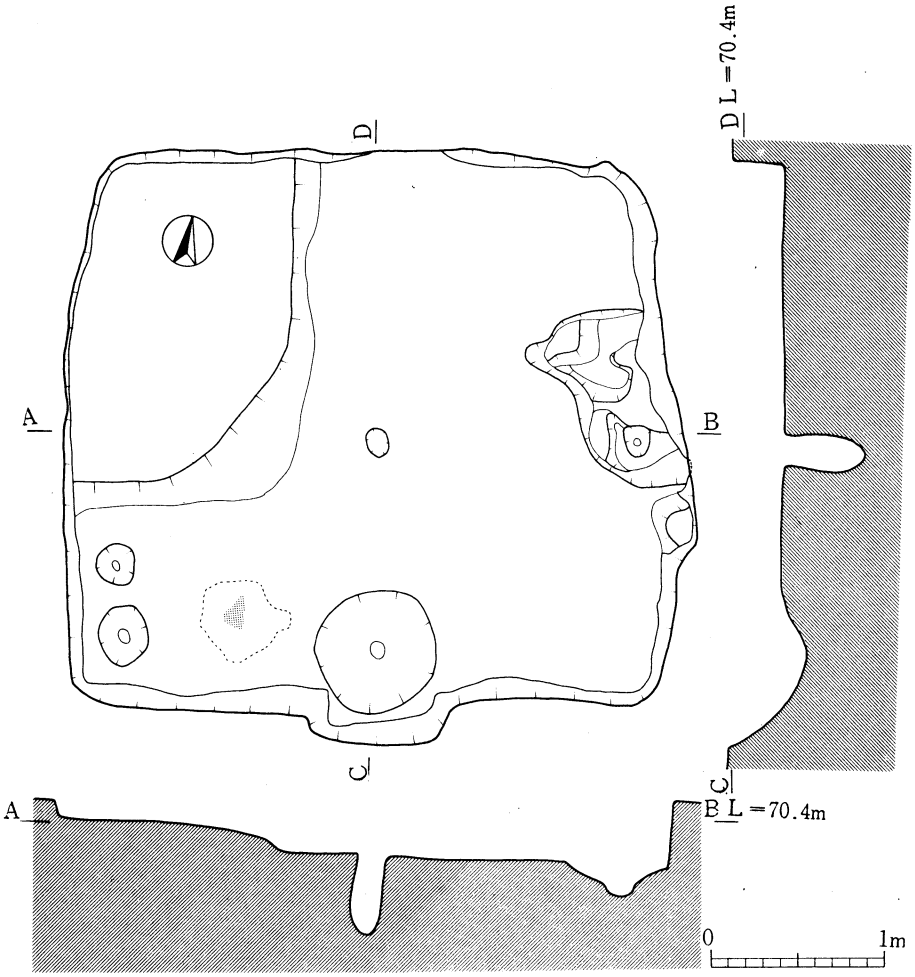
第68図　1号住居址遺物出土状況図

を測る。床面は、約50cmの深さを測る。北側辺の東寄りに、1m程度の張り出し部をもつ。

住居址のほぼ中央に、径15cm～20cmで深さ35cmの小規模な小さい二本の柱穴が検出された。その両脇、すなわち西側辺及び東側辺の北寄りに、ベッド状遺構を備えている。西側辺のベッド状遺構は幅1.30m×長さ1.60mを測り、東側辺のベッド状遺構は幅1.15m×長さ2.00mを測る。東側辺のベッド状遺構は床面より23cm高い壇をつくり、西側のものは11cmとやや低い。

床面のほぼ中央には炭化木が集中して検出された。主柱と考えられる二本の柱穴の中央の南寄りに、15cm～20cm程度の焼土が確認された。また南側辺寄りの中央部に径30cmの円形ピットが位置し、ピット外側の側辺寄りに長さ34cmを測る台石状の河原石（418）が出土した。

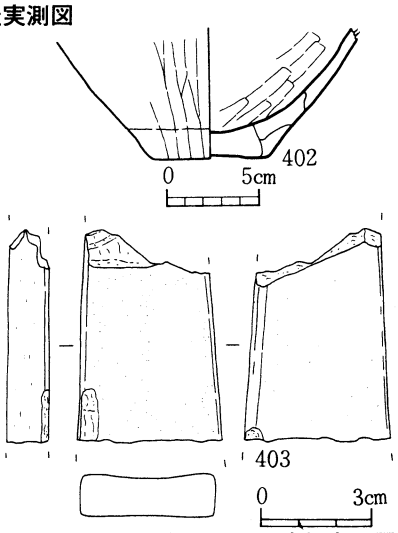
住居址内からは、総数242点の遺物が出土している。土器は、甕形・壺形土器などの破片がある。甕形土器は、口縁部は逆L字状に外反し、胴部にはシャープな二条の突帯文を巡らすタイプ（404）と、く字に外反して数条の突帯文を巡らすタイプ（405）とがある。甕形土器の底部は、裾部が若干拡がり、底面が充実した脚台をもつタイプで底部の中央はわずかに上がる。



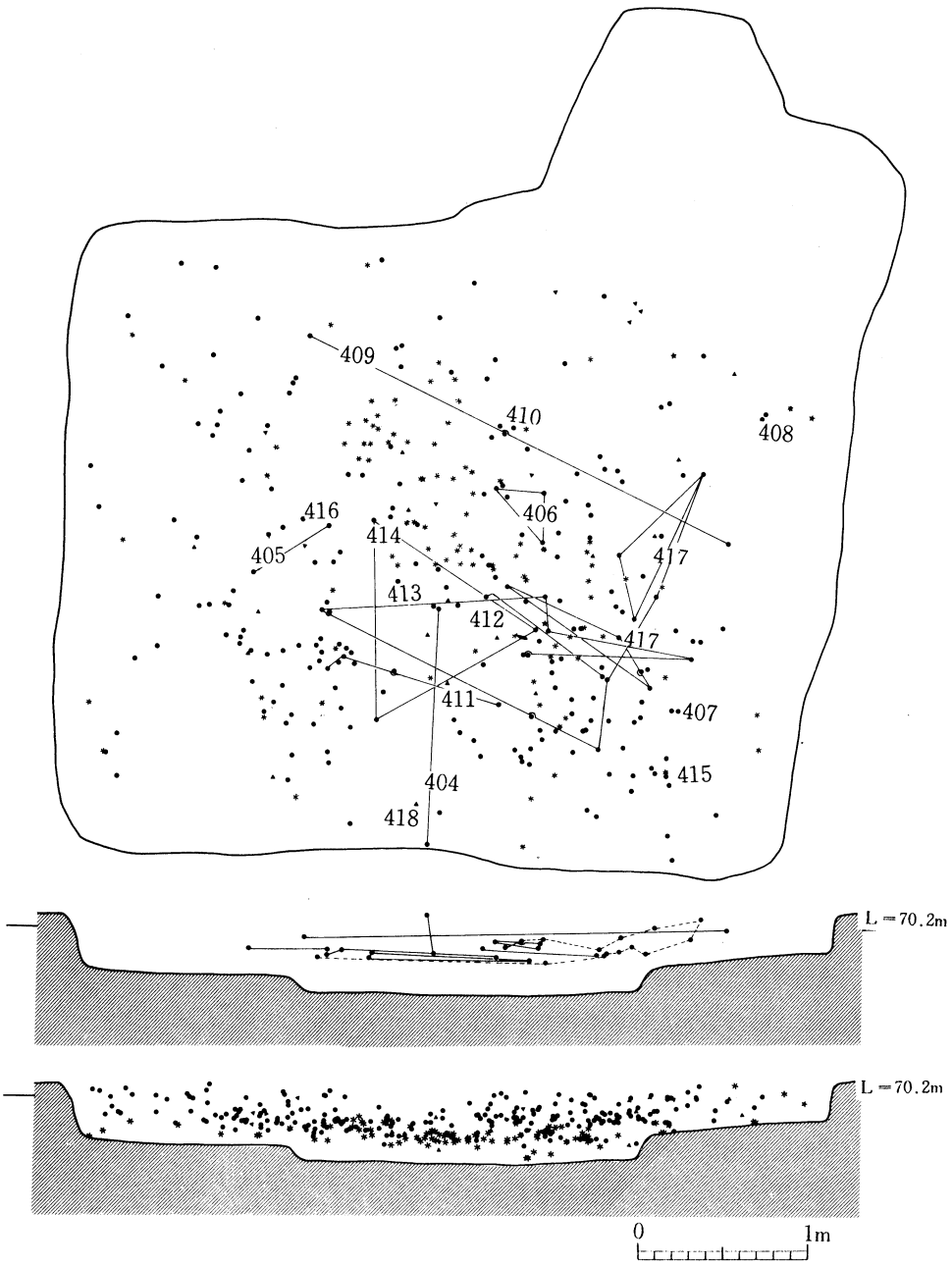
第69図　1号住居址実測図

底部裾部は、面取りが行なわれその上に凹線文状の凹みが施される。411は壺形土器の頸部で、412は底部片である。414は突帯文を巡らさない甕形土器である。415は、鉢形土器のラッパ状の脚部であろろう。416は円盤状の裾拡がりの脚部で、端部には三角突帯文を巡らす珍しいタイプの脚部である。417は、甕形土器の完形に復元されるものである。口縁部は大きく外反し、丸みをもっておさめる。胴部は膨らみをもち、底部は平底である。器外面は粗い刷毛目状の条痕仕上げで、胴部上半から頸部にかけては煤の付着が多い。

418は平坦面を持った大型の石器で、平坦面は滑

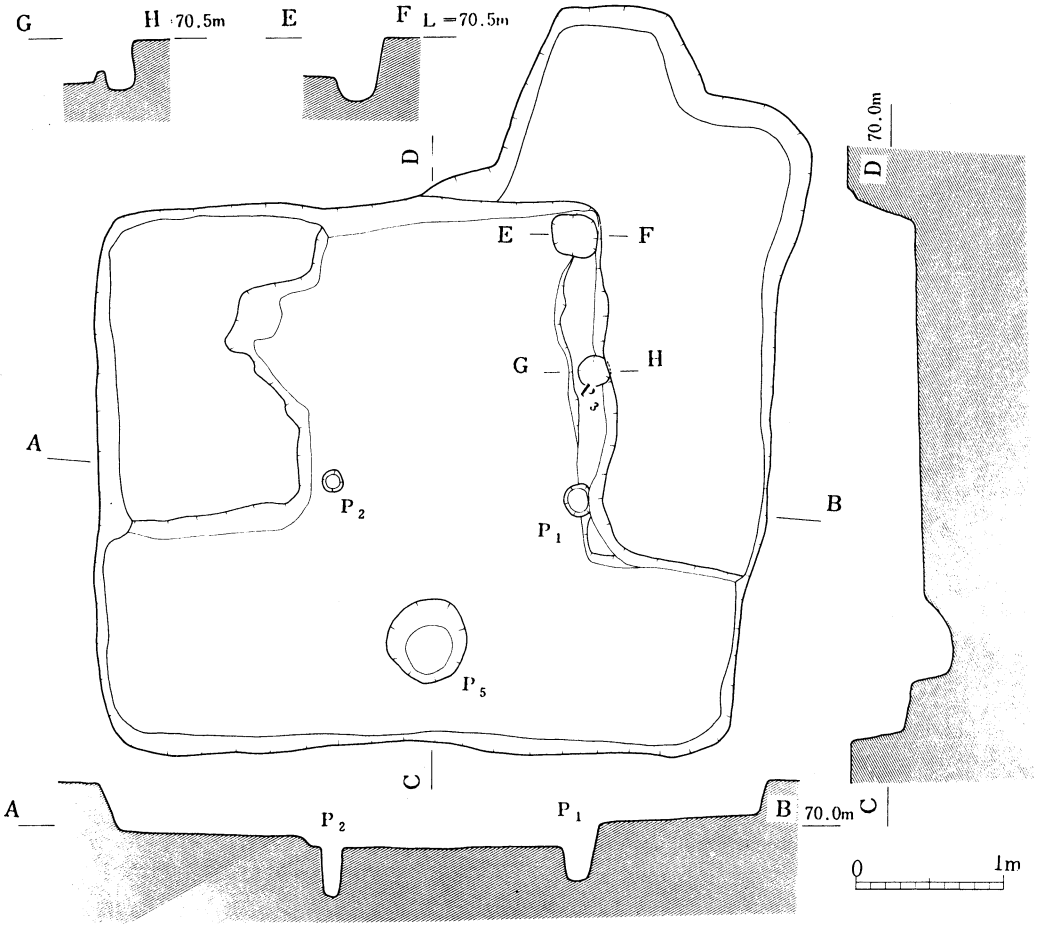


第70図　1号住居址出土遺物実測図



第71図　2号住居址遺物分布図

第72図　2号住居址遺物出土状況図

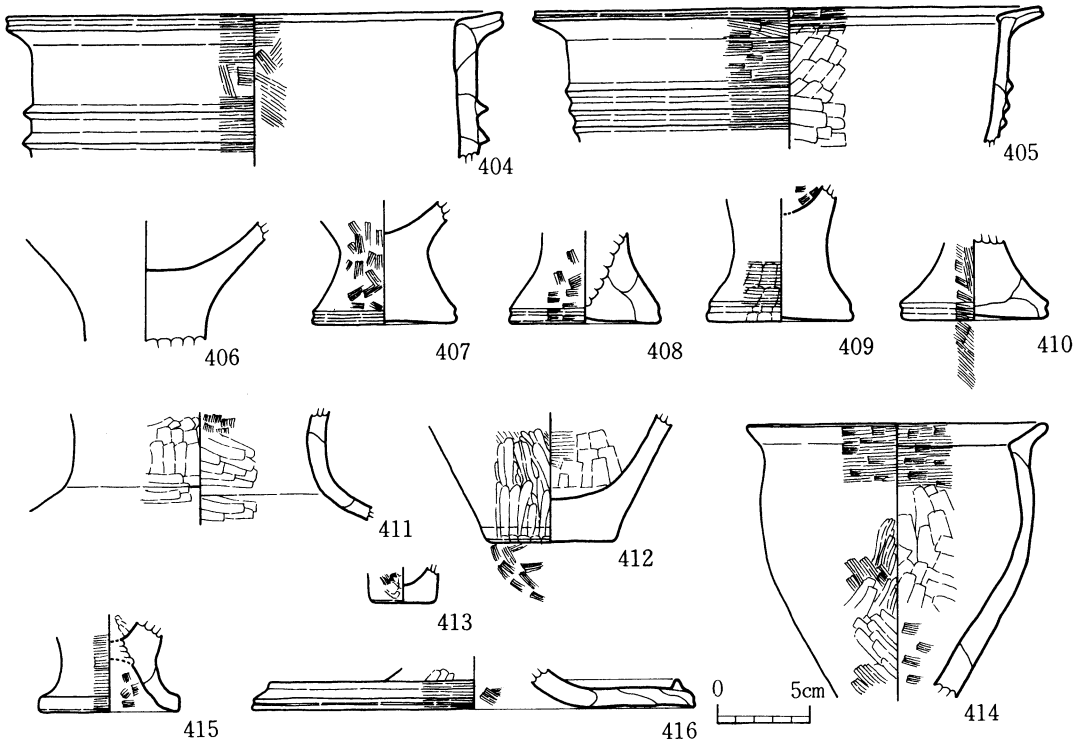


第73図　2号住居址実測図

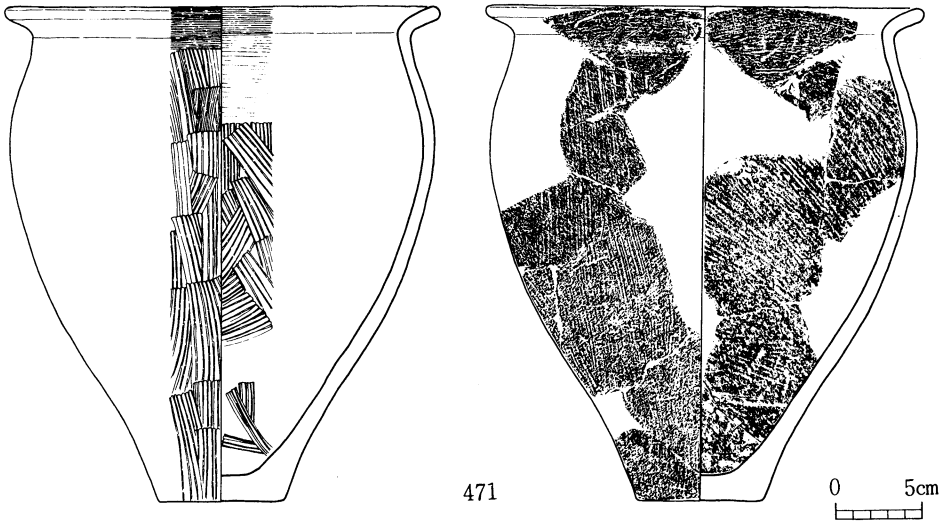
らか（スクリーン・トーン部分）となり、一部に敲打痕もみられる。石皿あるいは台石的な使用が考えられる台石である。

2）　3号住居址　（第77～79図）

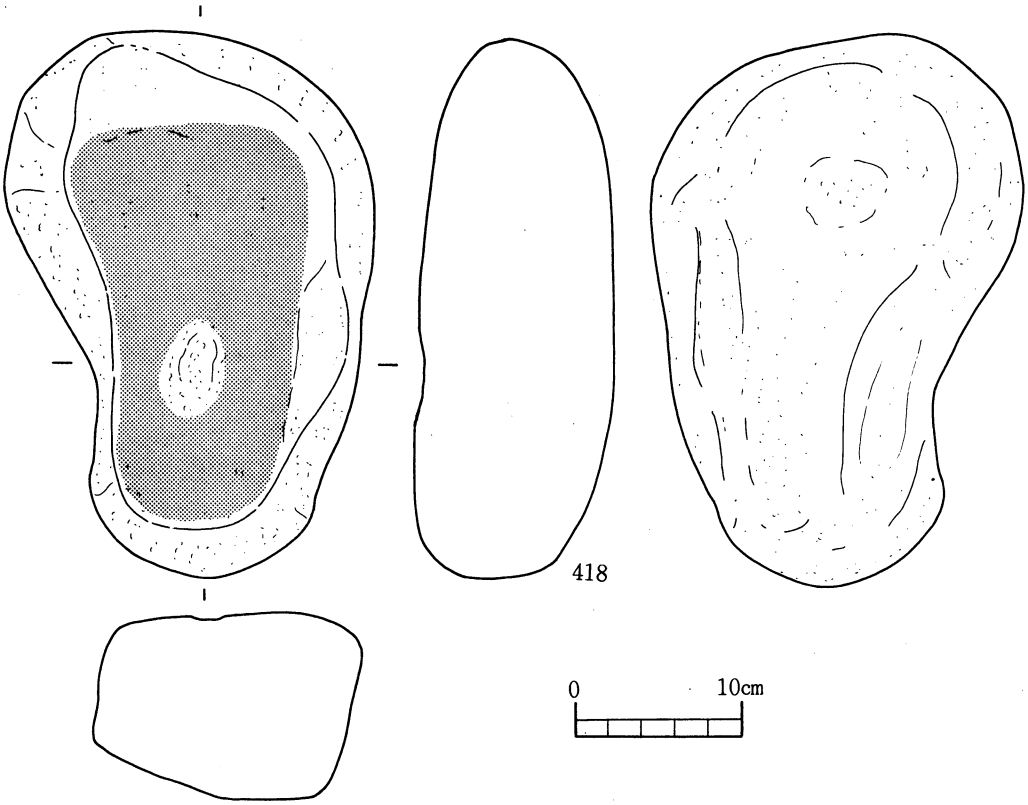
2号住居址は、B21区に張り出す状態でB20区を中心に検出された。南北に長い方形プランを呈する住居址である。検出面の平面規模は、略東西3.8m×略南北4.6mを測る。床面は、約25cmと浅く、上面が相当削平されたことが考えられる。住居址内のほぼ中央には、85cm×50cmの楕円形の焼土が確認された。その北側辺寄りに、50cm×70cm程度の楕円形で深さ50cmのピットが存在し、その他には北西隅と南東隅に浅いピットが存在するのみである。しかし、住居



第74図　2号住居址出土遺物実測図（1）



第75図　2号住居址出土遺物実測図（2）

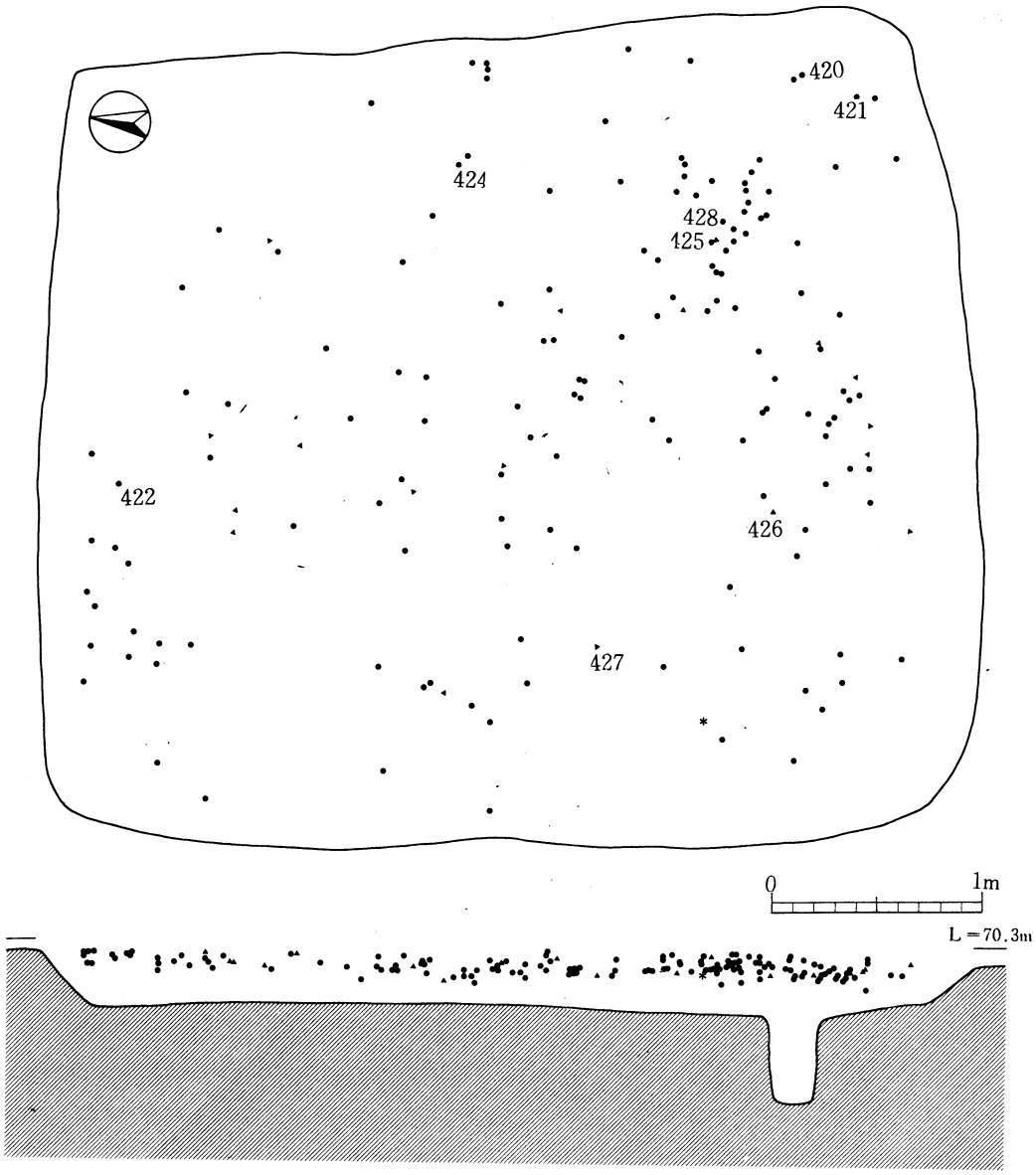


第76図　2号住居址出土遺物実測図（3）

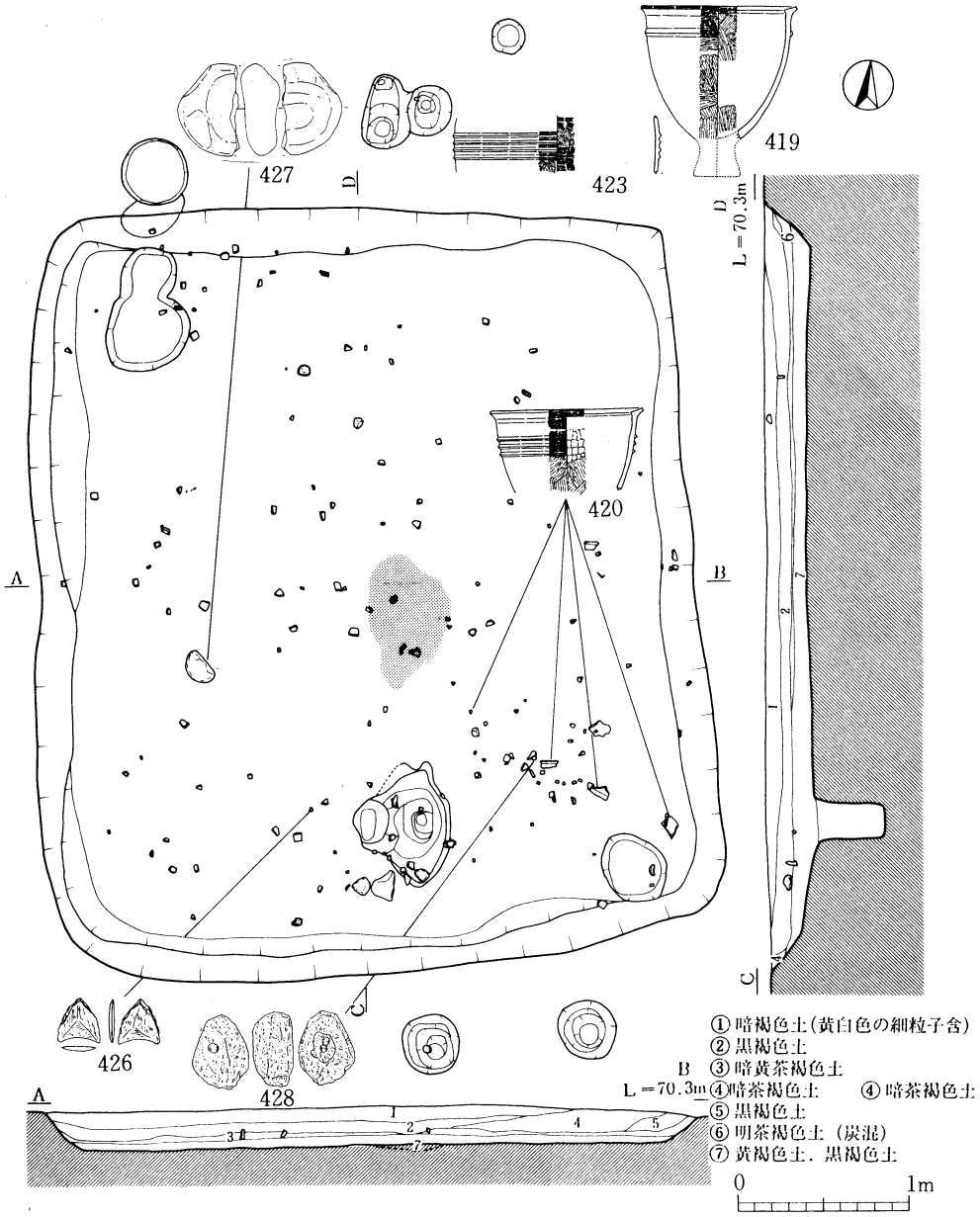
址の外側に住居址と関連すると考えられる柱穴が確認されている。P_1、P_2はいずれも住居址長辺の中央延長上に位置し、棟持ち柱的性格の柱穴と考えられる。

住居址内からは、総数151点の遺物が出土している。土器は、甕形・壺形土器などの破片がある。甕形土器は、く字に外反して一条から数条の突帯文を巡らすタイプであるが、口縁の外反部の内面が張り出すという特徴がみられる。また、422のような短い外反部をもつものもある。424は壺形土器の口縁部で、425は底部と考えられる。

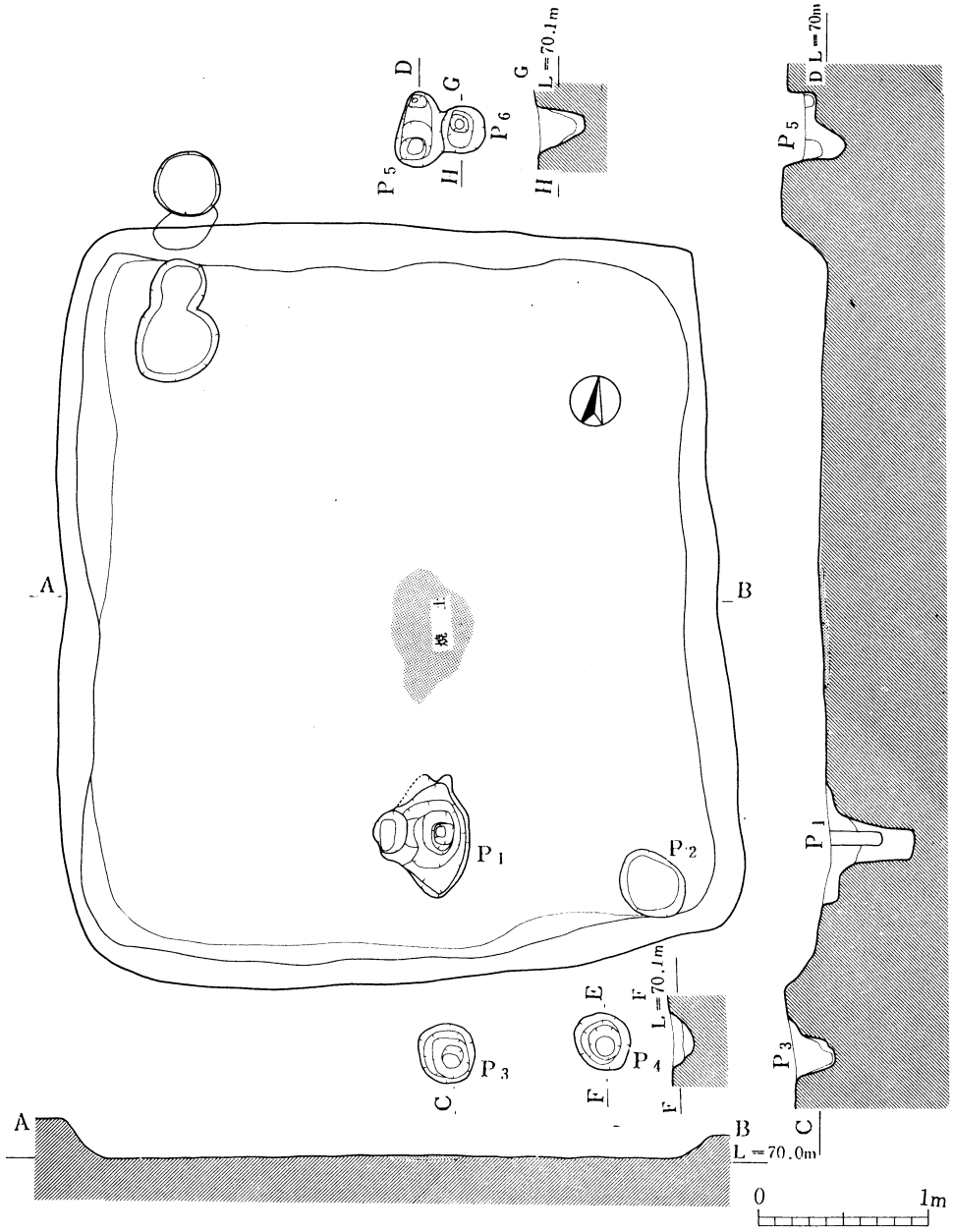
出土石器426は磨製石鏃である。入念に研磨されたえぐりの浅い三角形状を呈する。縁辺に剝落がみられる。427は中央のくぼんだ大型の石器で、表裏に敲打痕がみられる。石皿的な使用が考えられる台石である。428は軽石製品で深いくぼみをもつものである。くぼみは三ケ所ある。



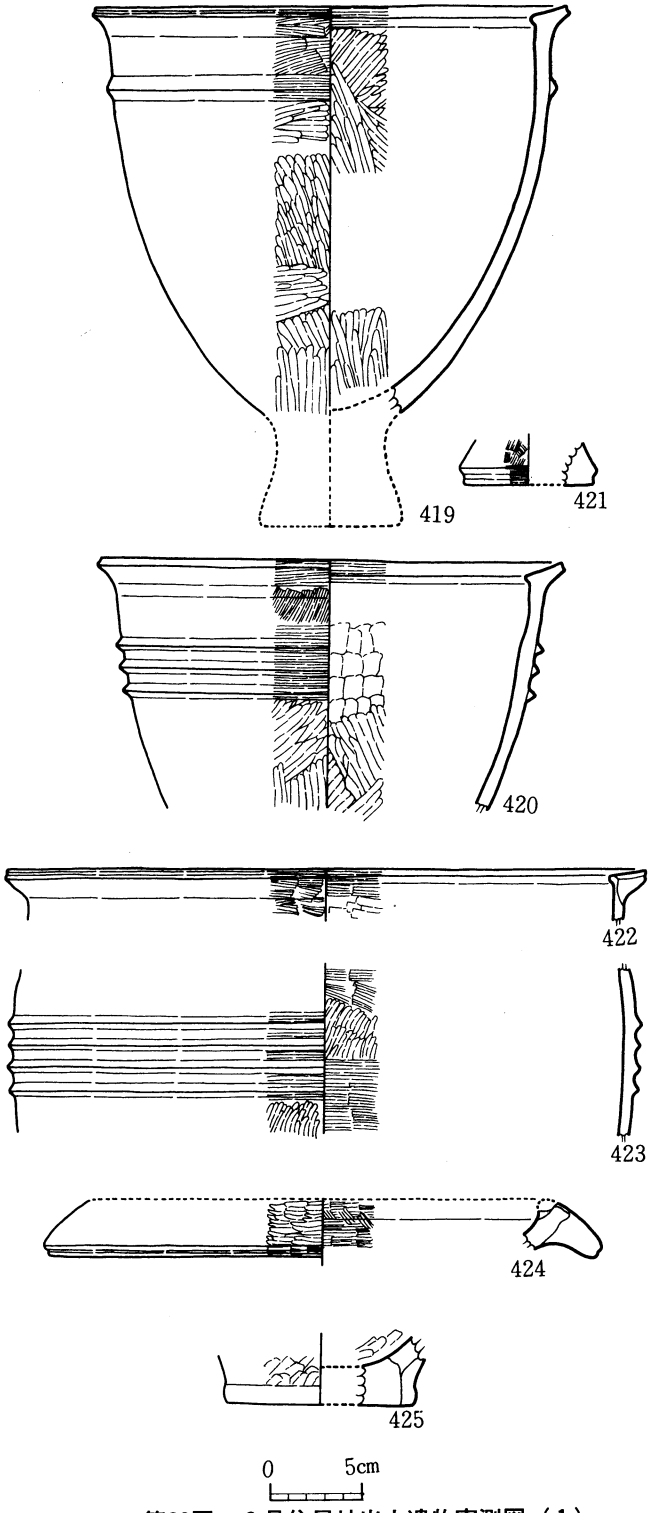
第77図　3号住居址遺物分布図



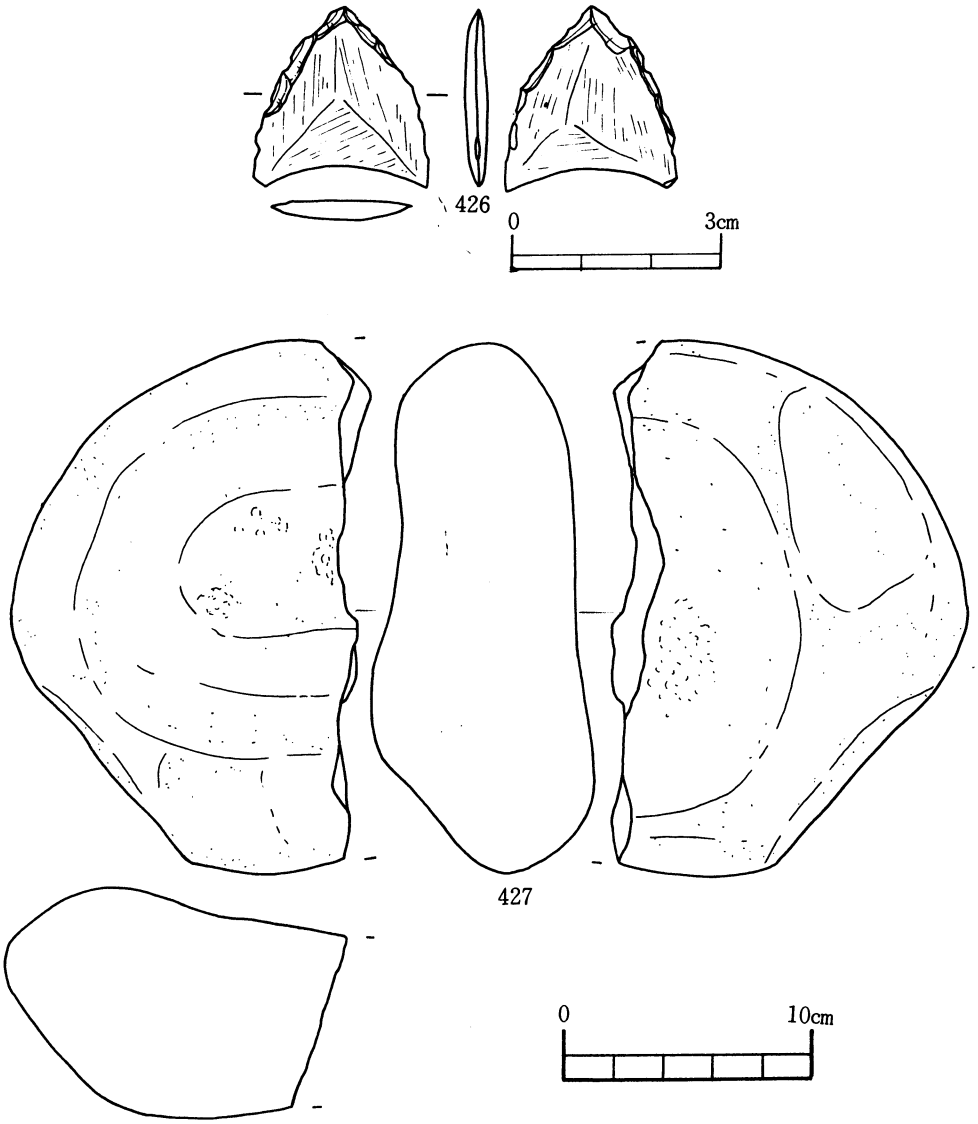
第78図　3号住居址遺物出土状況図



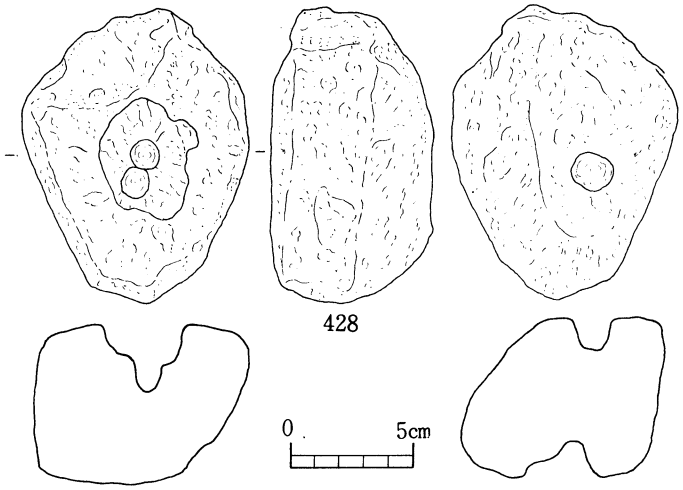
第79図　3号住居址実測図



第80図　3号住居址出土遺物実測図（1）



第81図　3号住居址出土遺物実測図（2）



第82図　3号住居址出土遺物実測図（3）

（3）掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は、幅12mという狭い調査区にもかかわらず総数8棟が発見された。8棟の内訳は、3間×4間のタイプが3棟、1間×1間が1棟、1間×2間が4棟である。さらに、3間×4間のタイプには、棟持ち柱を持つものと持たないものに分かれる。建物跡は、いずれも弥生時代の包含層のⅢ層下面で検出されたが、4号建物跡～8号建物跡付近はⅢ層包含層とともに若干の削平を受けていることが考えられる。

1）1号掘立柱建物跡　（第83～85図）

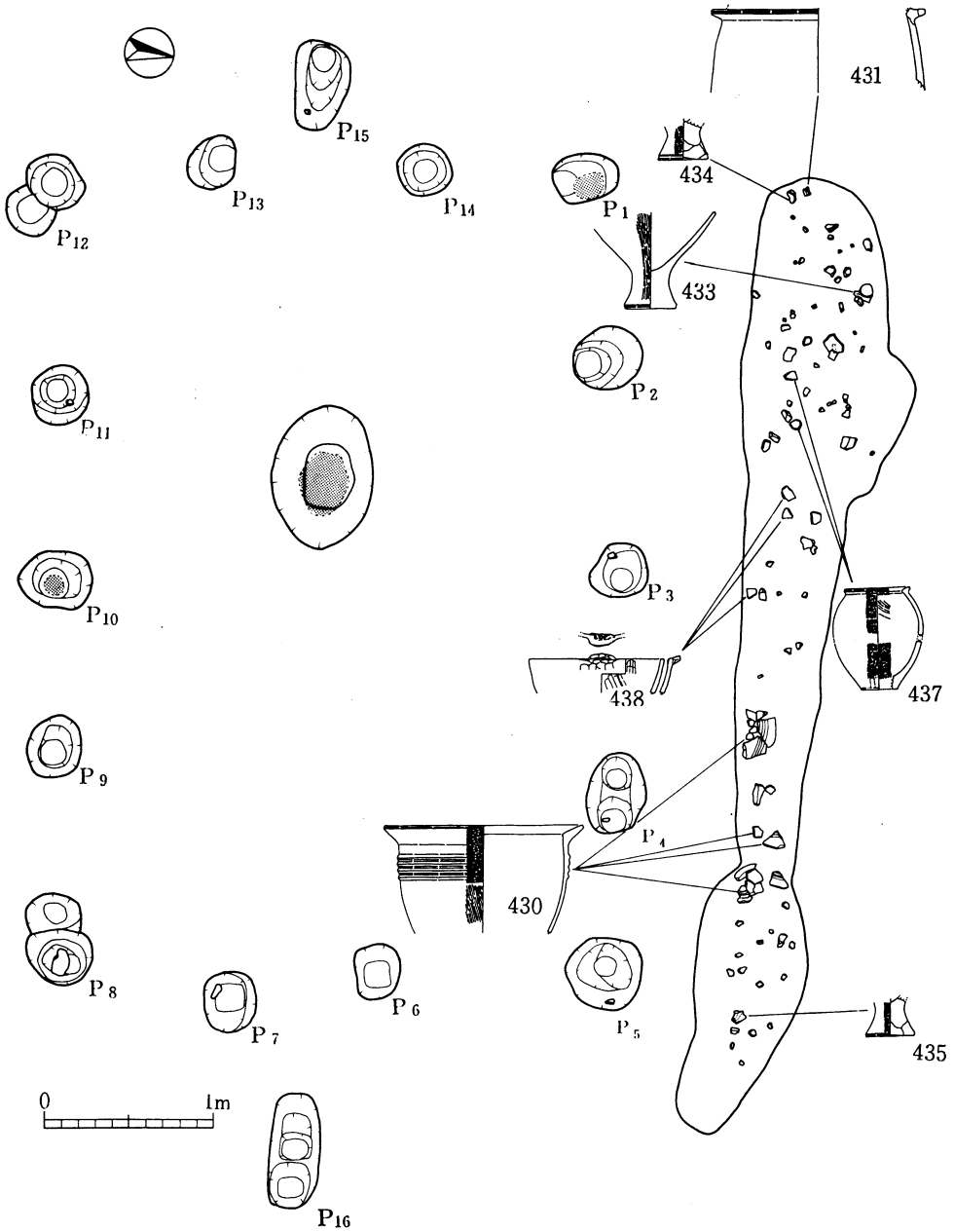
1号掘立柱建物跡は、B20区とC20区の境に検出された。2号竪穴住居址の西側に位置し、3号竪穴住居址の北東側に接近する位置にある。

掘立柱建物跡は3間×4間の建物規模で、主軸をN－78°－Eの略東西方向にとる。掘立柱建物跡の形態は、略東西の梁間側に棟持ち柱を備えるタイプで、建物内の床面には炉跡状の焼土が確認され、北側の桁行間の外側には溝状の落ち込み部分が検出されるものである。

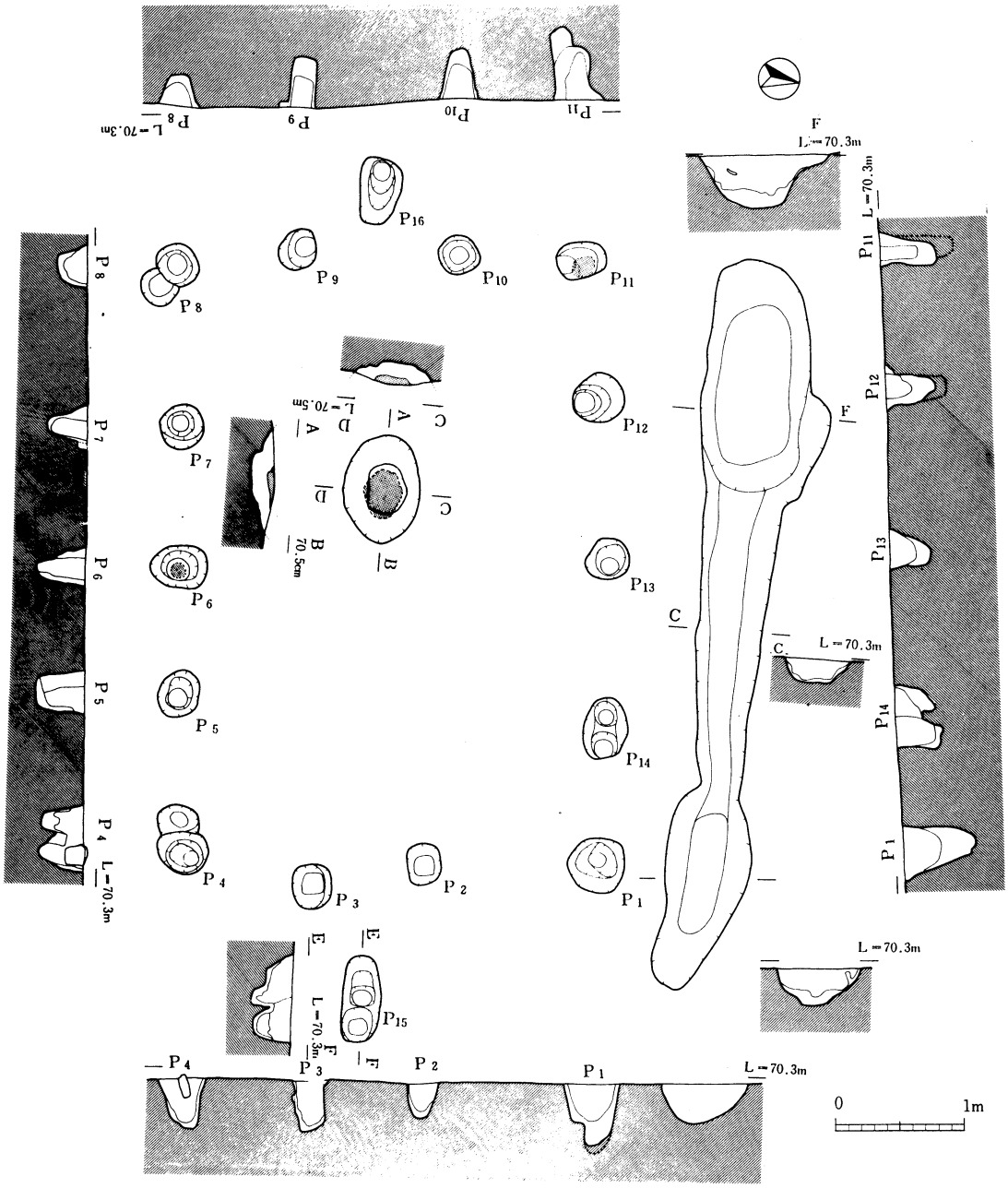
各柱穴は径35cm～50cm程度の比較的大きな掘り方がみられ、柱痕跡が確認されるものも存在する。特に、棟持ち柱のP_{15}とP_{16}は、柱穴の掘り方は梁間方向に拡った楕円形を呈し、柱痕跡は外側に寄った位置に検出されている。

柱穴位置での建物規模は、次の通りである。

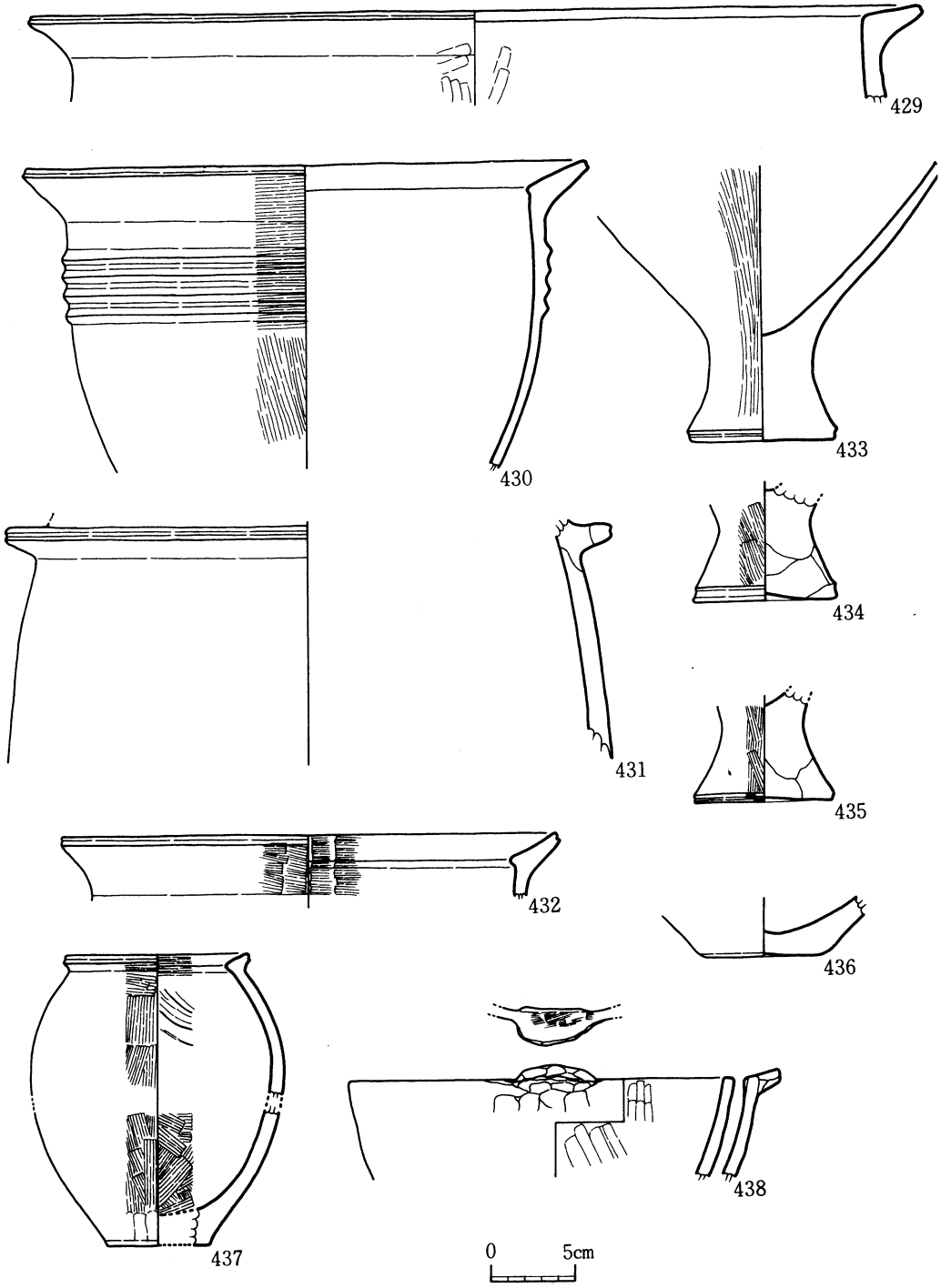
西側の梁間間（P_1-P_{12}）は324cmで、東側の梁間間（P_5-P_8）は329とほぼ等距離を測る。北側の桁行間（P_1-P_5）は471で、南側の桁行間（$P_{12}-P_8$）は470cmと全く等距離を測るもので、柱穴の均整な配置がおこなわれた建物跡である。しかし、各柱穴の



第83図　1号掘立柱建物跡遺物出土状況図



第84図　1号掘立柱建物跡実測図



第85図　1号掘立柱建物跡出土遺物実測図